

オリパラ基本推進調査（全国ホストタウン交流活動調査）

ホストタウン交流活動調査報告書

株式会社 時事通信社

令和2年3月31日

調査の概要

1. 調査の背景・目的

内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局（以下「主管事務局」という。）は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向けて、スポーツ立国やグローバル化の推進、地域の経済活性化、観光振興等に資する観点から、参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る地方公共団体を「ホストタウン」として全国各地に広げている。

ホストタウンは、スポーツの振興、教育文化の向上及び共生社会の実現など様々な分野でレガシー創出につなげることが目的であり、復興オリンピック・パラリンピック、食文化の発信、子どもたちの国際感覚の向上、ユニバーサルデザインの推進など、各分野で特徴的な活動が展開されている。

2019年10月末時点において、392件、464の地方自治体がホストタウンに登録されており、47都道府県すべてに1以上のホストタウンが存在している。また、復興ありがとうホストタウン、共生社会ホストタウン、先導的共生社会ホストタウンといったホストタウンの種類が存在し、交流のタイプとしても事前合宿を行うもの、事後交流を行うもの、両方を行うものと様々である。さらに、ホストタウンでは、それぞれの有する資源や相手国・地域、受け入れるスポーツ等によって様々な取組が実施されている。

これらの取組は、世界的なスポーツイベントを通じた地域活性化の取組として、2020年以降も、有用な参考事例として活用されるべきものである。しかしながら、ここまで全国に広がった取組を主管事務局にて把握することは難しい状況にある。

このため、本調査では、全国のホストタウンの活動を詳細に調査し、これらを活用しやすい観点でとりまとめ、国内外において活用できるようにする。

2. 実施内容

本調査の実施にあたり、全国のホストタウンから、地域バランスや取組内容のバラエティのバランスに配慮し、主管事務局との調整の上、特徴ある取組を実施するホストタウンを80程度抽出した。

取組内容のバラエティのバランスをとるため、復興ありがとうホストタウン・共生社会ホストタウン・先導的共生社会ホストタウンに関する調査も含み、事前合宿型・事後交流型・双方型などの実施種別や、教育・文化・食文化・経済・観光等の特徴的な取組のテーマにも留意した。さらに地域環境として、都市型、農村型、離島型などのタイプも考慮した。

具体的には、調査対象ホストタウンへ調査申し込みを行い、イベント開催時等のタイミングを捉え、電話調査または現地調査を行った。写真撮影等も適宜行い、ホストタウン活動に参加する者（市民、子ども、中高生・大学生等）やホストタウン自治体関係者、相手国・地域の関係者等のインタビューも適宜行った。

報告は、以下の項目をまとめるとともに、調査によって得られた情報の詳細を記載した。

- 調査ホストタウン名
- 関係イベント開催日
- 相手国・地域

※複数を相手としている場合、当該交流に関係のあるものののみ記載

- 関係イベント参加者
- 関係競技

※相手国・地域とのスポーツ交流に関わるものののみ記載

- 調査場所
- 調査日

なお、本報告書の記載内容は、調査日時点の情報である。

目 次

ページ

【北海道】

（士別市）

国立台湾師範大学ウエイトリフティング部の合宿受け入れ	1
「GAP 食材を使ったおもてなしコンテスト」への参加	3
台湾ウエイトリフティング選手をアスリートメニューでおもてなし	6

（登別市）

市民向けに国際理解講座を開催	9
オリンピック・パラリンピックの食育授業	12
食育授業「考えよう！明日の体づくり」	15

【青森県】

（三沢市）

パラスポーツ体験イベントを開催	18
小学校でユニバーサルマナー教室	21
小学校で「シッティングバレーボール」教室	23

【岩手県】

（久慈市）

リトアニア・クライペダ市との交流を PR	26
市長がリトアニア大使館を訪問	29
リトアニアに親善使節団を派遣	32

(宮古市)

在ナミビア大使と宮古市内の中学生が交流	35
駐日ナミビア大使夫妻らが宮古市訪問	38
「ナミビア料理講習会」親子 20 組が参加	41

【宮城県】

(仙台市・多賀城市)

キューバの「鳥人」ミレーヤ・ルイスさんトークショー	44
ミレーヤ・ルイスさんのバレーボールクリニック	47

(仙台市)

市民主体で考える「イタリア大好き！」プロジェクト	50

(東松島市)

デンマークへの関心高める活動多彩に	53
市民参加のスポーツイベントでボッチャ体験	56
オリンピックふれあい交流会を開催	59

(気仙沼市)

小中学校 12 校で給食にインドネシア料理	63
インドネシアの小学校とインターネットで交流	66
市民と技能実習生が互いの国の料理を手作り	69

【秋田県】

ページ

(秋田県・大館市・仙北市・美郷町)

北都銀行バドミントン部、タイで現地チームと合同合宿	72
タイのバドミントンチームが美郷町で強化合宿	75
タイのボッチャチーム、大館市で事前キャンプ	78

【山形県】

(鶴岡市)

「ボールゲームフェスタ」開催を計画	81
「あすチャレ Academy!」開催を計画	84
パラリンピアン杉内周作さんが講演	87

(村山市)

ブルガリア新体操チーム「ROSE CAMP」を実施へ	90
ブルガリア新体操チームのキャンプが切手に	93
新年祝賀会で「東京五輪音頭 2020」披露	96

【福島県】

(いわき市)

視覚障害のある女子柔道選手が母校で講演	99
いわき FC パークでパラスポーツ体験イベント	102
ホストタウン相手国サモアと多彩な交流	105

(大玉村)

「オリンピックデー・フェスタ」開催	107
世界 12 カ国の子どもと県内児童がタグラグビーで交流	111
「おおたま夏まつり」でペルーとの交流事業	114

【茨城県】

(行方市)

モンゴルのウエイトリフティング選手らが事前キャンプ	117
モンゴルのウエイトリフティング選手ら老人ホームなど訪問	120
モンゴルのウエイトリフティング選手ら 2000 人と親交	123

(つくば市)

つくば市役所でデイカウンター除幕式	126
スイストライアスロンチームが公開練習	129
スイス陸上女子リレーチームが事前合宿	133

(境町)

アルゼンチン女子ハンドボールチームが事前合宿	136
ホストタウン相手国アルゼンチン 茨城県庁で紹介	139
町民祭でホストタウン相手国を紹介	142

【栃木県】

ページ

（栃木県・栃木市・小山市・矢板市・さくら市）

ハンガリーの競歩選手が児童と交流	145
ハンガリー新体操チームがフェアリージャパンと公開練習	148
ハンガリーの新体操選手らが児童と交流	151

【群馬県】

（高崎市）

中学生らが新体操 W 杯に合わせウズベキスタン訪問	154
ポーランドの民族合唱舞踊団が中学校を訪問	157
ウズベキスタン文化芸術訪問団が来訪	160

（甘楽町）

ニカラグアなどの研修員が園児と交流	164
講演会「きっと好きになるニカラグア」を開催	167
成田で立ち往生の U18 ニカラグアチームを支援	170

（前橋市）

ベラルーシ・トランポリンチームとの交流会開催	173
南スーダンの選手と前橋の児童が交流	176
南スーダン選手団、小学校を訪問	179
南スーダンと前橋を結びつけた古川教授が選手を激励	183

(上野村)

ブータン農業研修生との交流会	186
生き方学び、村の価値再発見を	189
木材資源のエネルギー活用に協力	192

【埼玉県】

(鶴ヶ島市)

ミャンマーの柔道学生、鶴ヶ島市役所など訪問	195
ハンドボール男子日本代表キャプテンが講演	198
ミャンマーの陸上・柔道選手団が事前キャンプ	202

(埼玉県・上尾市・伊奈町)

小学校で車いすバスケットボール体験・講話	206
柔道オーストラリアが強化合宿	209
オーストラリア柔道代表選手団、伊奈町長を表敬訪問	212

(三郷市)

小学校で駐日ギリシャ大使夫人が講演	214
みさとシティハーフマラソン会場にギリシャブース特設	217
中学校でギリシャ語講座	220

(埼玉県・新座市)

「ブラジルホストタウン講演会」を開催	223
中学生がブラジルで開催のスポーツイベントに参加	227
柔道メダリスト山口香さん講師に人権問題講演会	230

【千葉県】

ページ

（山武市）

小学校給食にスリランカ料理	233
スリランカの行政官らが訪問、異文化体験通じ交流	236
スリランカからスポーツ研修生らを招へい	239

（佐倉市・成田市・印西市）

米国選手・コーチ招き陸上クリニック	243
米国空軍太平洋音楽隊員がサックス四重奏披露	246

（成田市）

「アイルランドを知る」講演会開催	249

【東京都】

（調布市）

「スクラムフェス」でサウジアラビアを PR	252
「サウジアラビア文化展」を開催	255
市民向け「アラビア語講座」を開催	258

（江戸川区）

オランダのパラアスリート招き「Game Changer プロジェクト」	261
オランダのパラ・メダリスト候補らが訪問	265
「共生社会」テーマに区職員研修会	269

(目黒区)

「目黒シティラン」ゲストランナーにケニア出身選手	272
中学生向けランニング教室をケニア人留学生が指導	275
ホストタウン相手国・ケニアをパネルで紹介	278

(豊島区)

池袋でセントルシアを知るセミナー&料理教室	281
バングラデシュ人とクリケット体験&親善試合	285
小学校で「セントルシア」を知る授業	288

(武蔵野市)

ルーマニアから市民団が来訪	291
ルーマニアの市民団、吉祥寺で自国紹介	294
滞在制作していたルーマニア人作家の作品を展示	297

(板橋区)

元日本代表・落合真理さんがバレーボール教室	300
イタリアバレーボールチーム応援 PR 展示	303
伊バレーボールチーム応援ボランティア養成講座	306

【神奈川県】

(神奈川県・小田原市・箱根町・大磯町)

エリトリア・ミャンマーの留学生が園児と交流	309
事前キャンプ誘致推進で市町村連携	312
星槎グループ、ホストタウン交流事業を積極推進	315

(茅ヶ崎市)

「北マケドニアを知ろう」を開催	318
北マケドニア臨時代理大使 が来訪	322
ホストタウン周知でピンバッチ製作	325

(横浜市)

保土ヶ谷公会堂でブルガリア民族音楽演奏	329
英コベントリー市のヤングアンバサダーと交流	332
ボツワナと横浜・都筑の小学生が絵で交流	335

【新潟県】

(十日町市)

「クロアチアカップ・サッカーフェス」開催	339
各種イベントでクロアチアを PR	342
クロアチアの柔道・空手・テコンドー選手団来訪	345

(新潟市)

ロシア・沿海地方空手道連盟訪問団が市長を表敬	348
ロシア・沿海地方空手道連盟訪問団と意見交流	351
小学校で空手交流	354

【石川県】

ページ

(石川県・小松市)

ニュージーランド・トランポリンチームと交流会	357
通訳ボランティア対象にスキルアップ講座	360
オリパラ給食のレシピ公開	363

【福井県】

(福井市)

PR イベント「スロベニア・ウィーク」開催	366
ホストタウン交流事業広報に注力	369
スロベニアのタウンフレーム切手制作	371

【山梨県】

(甲州市)

元水泳選手・萩原智子さんが「小学生水泳教室」	374
陸上教室で中学生をオリンピックが指導	377
「ハンドボールクリニック」に 70 人参加	381

【長野県】

(松川町)

コスタリカを知る講演会を開催	384
アテネ五輪出場・室伏由佳さんが講演	388
「コスタリカへお手紙を送ろう！」を実施	391

(長野市)

「デンマーク親善フェア」開催	394
デンマーク競泳選手と児童が交流	397
デンマーク競泳ナショナルチームによる水泳教室	400

【岐阜県】

(羽島市)

スリランカに陸上指導者派遣	403
ホストタウン相手国・スリランカ応援の機運醸成	407
スリランカの五輪組織委事務局長が来訪	410

【静岡県】

(浜松市)

「浜松アスリートフェスティバル」に北澤豪さんら	413
ブラジルのオリパラ選手団が事前交流合宿	416
ホストタウンとしての取り組みを巡回展示で紹介	420

(静岡市)

台北でポスター展、静岡の児童生徒が制作	423
台湾陸上代表チームが強化合宿	427
陸上競技を行う高校生を相互受け入れ	431

(島田市)

シンガポール卓球チームが事前合宿	434
シンガポール卓球チームが中学生と交流	437
シンガポール卓球チームが中高生に技術指導	440

【愛知県】

(稲沢市)

全小中学校で「ギリシャ給食デー」	443
ギリシャの舞踊団が公演	446
シンポジウム「稲沢とオリンピアと聖火リレー」開催	449

【三重県】

(四日市市)

カナダ代表女子体操チームが来訪	452
全公立小学校で「カナダ給食の日」	455
カナダ体操チーム応援缶バッジ製作	458

【滋賀県】

(滋賀県・彦根市)

スペイン ハンドボール女子代表が技術指導	461
「スペイン・ホストタウン展」を開催	464
カウントダウンイベント「しが★スポフェス」開催	467

【京都府】

ページ

（京丹後市）

オーストラリア文化演奏会を開催	470
トップセールスでスペイン代表の事前合宿を誘致	473
「スペイン文化講演会」を開催	476

【大阪府】

（池田市）

「パラスポーツフェスタ」開催	479
ロシア大使館付属学校に通う子どもたちと交流	482
「スポーツフェスタ（インドア）」開催	485

（箕面市）

「オリ・パラふれあいイベント 2019」開催	488
ニュージーランド柔道チームと交流イベント	491
「オリ・パラふれあいイベント 2020」は中止に	494

（泉佐野市）

ウガンダ・モンゴルの選手らが市長を表敬訪問	497
「泉州国際マラソン」レセプションにウガンダ選手ら	500
マラソン出場のモンゴル人選手らが園児と交流	503

【兵庫県】

ページ

(神戸市)

ネパールパラリンピック水泳代表チーム、小学校を訪問	507
ネパール パラリンピック水泳代表チームが公開練習	511
ネパール パラ水泳代表チーム、子どもたちと交流	514

【奈良県】

(奈良市・奈良県)

ビーチバレー佐伯美香さん、中学校でオリンピック教室	518
オーストラリア発祥のゲーム「コトロゲ」開催	522
なでしこ「伊賀 FC くノ一」招き少女サッカー教室	526

【和歌山県】

(和歌山県・和歌山市)

カナダのパラ競泳チームが合宿練習	529
児童がカナダ競泳チームの選手に向け手紙	533
オーストラリアの選手にはがき	536

【鳥取県】

ページ

(鳥取県・鳥取市)

ジャマイカの駐日大使が高校生らと交流	539
ジャマイカ陸上競技連盟訪問団が来訪	543
世界リレー・ジャマイカをパブリックビューイングで応援	546

【島根県】

(奥出雲町)

インドのキャンプ誘致を目指しホッケー場などを整備	549
キャンプ誘致委員会がインドを訪問	552
国際交流員がインド文化を紹介するイベントを企画	555

【岡山県】

(岡山市)

ロンドン五輪メダリスト・山口舞さんが講演	558
市内 12 店が限定「ブルガリアパフェ」提供	562
ブルガリア女子レスリングチームが強化キャンプ	566

(赤磐市)

ホストタウン事業 PR で応援グッズ製作	570
ニュージーランド女子ホッケーチームを市民が歓待	574
女子ホッケー、ニュージーランドと日本が親善試合	578

【広島県】

ページ

(福山市・尾道市・府中市・神石高原町)

「府中学びフェスタ」会場にパラグアイブース	581
パラグアイ出身のギタリストがコンサート	584
「福山バラ祭」にオリパラブース	587

【山口県】

(下松市)

ベトナム バドミントン女子代表候補が強化合宿	590
バドミントン日本人トップ選手が強化合宿	593
大学とタッグ組みホストタウン企画	596

(岩国市)

米国との交流事業多彩に	599
3 カ国フェンシング女子選手合同練習が中止に	603
米代表女子ソフトボールチームが事前合宿	606

【徳島県】

(徳島県・那珂町)

ドイツ柔道代表チームが事前キャンプ	610

(徳島県)

「徳島ホストタウン特使」創設	613
カンボジア・ネパールの合同強化キャンプ	616

【香川県】

(高松市)

少年野球教室を開催	619
パラサイクリング体験会を開催	623
元五輪選手・池谷幸雄さん講師に親子体操教室	626

(土庄町)

マルタ大使が講演会	629
マルタ大使が児童生徒と交流	632
マルタ大使が観光スポットを視察	635

【愛媛県】

(愛媛県・松山市・砥部町)

マレーシアバドミントン・シニア代表チームが合宿	638
マレーシア代表選手に「食のおもてなし」	642

(愛媛県・松山市・砥部町、愛媛県・松山市・新居浜市・伊予市)

マレーシア・モザンビーク事前合宿	646

【高知県】

ページ

（高知県・宿毛市）

長距離コースで自転車イベント	650
オランダ人招き異文化交流授業	653
ツアー、写真でオランダ応援	657

【福岡県】

（田川市）

ホストタウン相手国のドイツ文化を紹介	660
ドイツとの交流踏まえバリアフリー推進	663
ドイツとベラルーシの車いすフェンシング代表が合同合宿	667

（北九州市）

英・車いすラグビー選手が事前キャンプ	670
トランポリンのコロンビア代表選手ら事前キャンプ	673
テコンドーの強豪・タイ代表チームが事前キャンプ	676

（福津市・古賀市）

ルーマニア柔道チームが事前キャンプ	679
「スポーツフェスタ」に金メダリスト谷本歩実さんら	683
ルーマニアを紹介する市民向け講座	687

【佐賀県】

ページ

(佐賀県・佐賀市・嬉野市)

「ニュージーランドフェア」を開催	690
音楽イベントに オランダのアーティスト招く	693
(佐賀県)	
「フィンランドウィーク」で伝統文化など体験	696

【長崎県】

(長崎県・長崎市・佐世保市・島原市・諫早市・大村市・壱岐市・雲仙市・南島原市・川棚町)

ベトナム陸上チームのキャンプを誘致	700
ベトナム陸上チームがトレーニングキャンプ	703
キャンプ中のベトナム陸上選手らが日本文化を体験	706

【熊本県】

(熊本県)

インドネシア バドミントン協会関係者が来訪	709
バドミントン・ジュニア選手をインドネシアに派遣	712
「国際スポーツイベントイヤーズ」でおもてなし機運	715

【大分県】

(宇佐市)

元在モンゴル大使、ありのままのモンゴルを紹介	718
モンゴル代表チームの強化キャンプ中止	722
柳ヶ浦高校、モンゴルとの交流深める	725

【宮崎県】

ページ

（日向市）

サンドーム日向でソフトボール教室	729
お倉ヶ浜海岸で「日向ビーチスポーツフェス」	733
トーゴと「ダンス DE 国際交流」	736

【鹿児島県】

（鹿屋市）

女子バレーボール・迫田さおりさんが講演	739
女子バレー・タイ戦パブリックビューイング	742
タイのテレビ番組で鹿屋市の魅力を紹介	745

（三島村）

ジャンベが縁でホストタウン登録	749
駐ギニア大使、三島村を訪問	751
ホストタウンサミットでのジャンベパフォーマンス中止	754

【沖縄県】

（沖縄市）

「一流アスリートから学ぼう」開催	756
「東京五輪まであと1年」応援イベント開催	759
「パラスポーツ体験会」を開催	762

ホストタウン交流活動調査報告

国立台湾師範大学ウエイトリフティング部の合宿受け入れ

地元選手らとの交流、日本文化体験等を実施

【調査ホストタウン】

北海道 士別市

【イベント開催日】

2017/7/30

【相手国・地域】 台湾

【イベント参加者】

地元高校のウエイトリフティング部、市ウエイトリフティング少年団の選手ら約30人

【競技】

ウエイトリフティング

【調査場所】

士別市内

【調査日】

2020/01/28

【補足情報】

士別市は、ホストタウン交流活動の一環として、2017年 7月 29日から 8日間にわたり、国立台湾師範大学ウエイトリフティング部の合宿（選手 4人、コーチ 1人）を受け入れるとともに、地元選手との交流を行った。なお、国立台湾師範大学はウエイトリフティング競技での強豪校として知られ、当時の同校ウエイトリフティング部には、オリンピック代表に確実視されている選手もいた。

士別市では市を挙げてウエイトリフティング競技の振興を進めており、市内にある県立高校のウエイトリフティング部のほか、小中学生を対象にしたウエイトリフティング少年団の活動を通じて、選手の育成にも力を入れている。また、ウエイトリフティング競技を通じて台湾との交流があったことから、2016年のホストタウン登録に当たっては、相手国を台湾として登録した。

国立台湾師範大学士別合宿では、地元高校のウエイトリフティング部、市ウエイトリフティング少年団との合同練習や交流会が行われたほか、日本の伝統文化（茶道、弓道）の体験、そば打ち体験などを近隣自治体の協力も得て実施した。さらに、市内で行われた歓迎レセプションでは、東京オリンピック・パラリンピックの食材調達基準として注目されている GAP 認証を得ている地元産食材によるメニューを提供し、好評を得た。



「GAP 食材を使ったおもてなしコンテスト」への参加

士別市のプロ料理人と北海道美幌高等学校の生徒がチーム結成

【調査ホストタウン】

北海道 士別市

【イベント開催日】

2019/11/20

【相手国・地

域】台湾

【イベント参加者】

【競技】

ウェイトリフティング

【調査場所】

士別市内

【調査日】

2020/01/28

【補足情報】

士別市は 2019 年 11 月、北海道美幌高等学校生産環境科学科（網走郡美幌町）と協力し、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局が主催する「GAP 食材を使ったおもてなしコンテスト」に参加した。このコンテストは、2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けて、ホストタウンを訪問する各国・地域の選手等に対し日本のおもてなしの心を発信するのが目的で、全国から 40 チームが参加した。20 年 3 月に入賞者が発表され、士別市チームは大臣賞・事務局長賞こそ逃したものの、コンテストの過程で開発されたメニューをホストタウン相手国・地域の選手団等のおもてなしに活用する。

GAP は「Good Agricultural Practices（農業生産工程管理）」の略称で、農業において、食品安全、環境保全、労働安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理の取組のこと。士別市と美幌高校のある美幌町は直線距離で 140 キロ以上離れているが、両市町に日本甜菜製糖の工場が立地していることから、地域間の交流があった。コンテストに向けたメニュー開発では、同校生産環境科学科の生徒が士別市内のプロ料理人のアドバイスを受ける形でプロジェクトが進み、ホストタウン相手国・地域の台湾の人々が好む味付けを研究しつつ、地元産の GAP 食材を使ったメニューを探求した。また、食材と味だけでなく、アスリートに提供するための「機能」にもこだわった。

その結果、ラム肉を使ったサンドイッチ「トマトが主役の Hokkaido まるごとサンド」を開発した。味付けは醤油ベースに甘みと辛みを加え、台湾でも日本でも好まれることを目指し、北見工業大学の台湾人留学生に何度も試食をしてもらってレシピを改良した。また、夏に旬を迎える美幌高校産トマトをメインに、士別市アスパラと北海道産玉ねぎを使用。美幌町と士別市に製糖工場のある日本甜菜製のオリゴ糖でさっぱりとした甘みを付け、美幌町特産の「豚醬まるまんま」を隠し味としてコクとうま味を加えた。また、サンドイッチの生地はパンではなく、中華まんと同じ素材とし、美幌町産の小麦粉「きたほなみ」を使用した。

食品としての機能面も考え、ウエイトリフティング選手に提供することを前提に、筋肉を作るたんぱく質だけでなく、日々の練習に耐えられる身体のため他の栄養素もバランス良く取り入れ、なおかつ手軽に食べられることを目指した。中華まんの生地にする事で、日本の食材を使用しながらも台湾の人になじみのある味を提供できるようにした。

士別市は、2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けた合宿等で台湾の人々が北海道を訪れる機会をとらえ、今回のコンテストに出品したメニューを含め、GAP 素材を使った食事を提供することを予定している。



台湾ウエイトリフティング選手をアスリートメニュー でおもてなし

高雄市立鼓山高級中学・同市体育会ウエイトリフティング委員会の合宿受け入れ

【調査ホストタウン】

北海道 士別市

【イベント開催日】

2018/2/23

【相手国・地

域】台湾

【イベント参加者】

高雄市立鼓山高級中学ウエイトリフティング部と同市体育会ウエイトリフティング委員会の選手・コーチ 20 人

【競技】

ウエイトリフティング

【調査場所】

士別市内

【調査日】

2020/01/28

【補足情報】

士別市は 2018 年 2 月 23 日から同 27 日の日程で、台湾の高雄市立鼓山高級中学ウエイトリフティング部と同市体育会ウエイトリフティング委員会の選手団の合宿を受け入れた。台湾選手団 は、市内のウエイトリフティング少年団や地元高校ウエイトリフティング部との合同練習などで交流を深める一方、士別市側はGAP 食材を使ったアスリート向けメニューを選手団に提供 し、「食」を通じた交流を展開した。同市は 16 年 1 月、台湾を相手とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録している。

台湾の高級中学は日本の高等学校に相当する学校で、高雄市立鼓山高級中学ウエイトリフティング部は台湾のウエイトリフティング高校選手権で団体 5 連覇を果たした強豪校として知られる。この合宿には、台湾高校チャンピオンを含む選手 4 人と校長、コーチら指導者 4 人が参加した。高雄市ウエイトリフティング委員会は自治体単位の競技団体で、委員会幹部 8 人と選手 4 人が合宿に参加した。その中には、2016 年のリオデジャネイロオリンピック代表で 17 年の台湾チャンピオンである潘建宏選手もいた。

台湾選手団は、士別市総合体育館で公開練習を行ったほか、士別市ウエイトリフティング少年団、士別東高校の生徒らとの交流事業にも参加した。また、幌加内町でのそば打ち体験、士別市内での茶道体験などを通じ、日本文化に親しむ機会を得た。

この合宿に際し、士別市はスキージャンプ選手などのサポート実績を持つ公認スポーツ栄養士の蜂谷愛氏を招へいし、選手団に提供するアスリート向けメニューの監修等の栄養指導を受けた。提供した料理は、GAP（Good Agriculture Practices＝優良農業生産工程管理＝認証）を取得した農業者の生産した食材を中心にするとともに、地元の給食センターの栄養士や宿舍の調理担当者と連携し、食生活改善推進員が考案したメニューも取り入れた。

合宿終了後に行った選手らへのアンケート調査では、「グローバル GAP 認証を受けた低農薬で安全安心な士別産の食材をどう思うか」の質問には 93%が「人に薦めたい」と回答。また、「今回はスポーツ栄養の専門家の指導による食事を提

供したが、この取組についてどう思うか」との問いには、「必要」、「あると安心する」という回答が 94%を占めるなど、おおむね高評価を得ることができた。



市民向けに国際理解講座を開催

ホストタウン交流活動への理解促進

【調査ホストタウン】

北海道 登別市

【イベント開催日】

2019/11/22

【相手国・地

域】 デンマーク

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

登別市民会館

【調査日】

2019/11/22

【補足情報】

登別市民会館で 2019 年 11 月 22 日午後 6 時から、同市主催の「国際理解講座」が開かれ、同市職員をはじめ、市内に住む学生から高齢者まで幅広い年齢層の人々が参加した。同市は 2017 年 12 月、東京オリンピック・パラリンピックに向けたデンマークのホストタウンに登録された。国際理解講座は、これまでも市民の国際理解を深めることを目的に行われてきたが、同日の講座はホストタウン活動に対する市民の認識を深めることも目的の一つだった。

冒頭、小笠原登別市長が、今回の講座はデンマーク王国についてさらに理解を深めるために開いていることを説明。「2020 年は登別市が市政執行 50 周年を迎え、白老町ではウポポイ（民族共生象徴空間）がオープン予定の年で、さまざまな行事が重なる年だからこそ、国際理解を深めることが大切」と話した。

その後、オリンピック・パラリンピック等経済界協議会の幹事企業である富士通の社員・山口さんから、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、企業としてバリアフリーを目指した製品開発について取り組んでいることなどの説明があった。

続いて北海道大学の高橋助教が登壇。自身の経験を基にしたデンマーク領でもあるグリーンランドにおける、デンマークとの歴史的な問題や社会的構造、食文化についての講座を行った。

受講生の一人は「以前、デンマークとの交流事業でデンマークに派遣された経験がある。そのときはホストファミリーとの暮らしで、デンマーク人の暮らしや考え方について知った。講座を受けて、デンマークの歴史やグリーンランドの問題など、デンマークのことをより深く知ることができた。もっと日本と交流してほしいし、自分自身もデンマーク人ともっとコミュニケーションを図りたい」と話していた。

開催の経緯について、登別市総務部企画調整グループ総括主幹の服部さんは「国際理解講座は室蘭工業大生や日本語学院に来た留学生などと共に行ってきた。今回は、来年のオリンピック・パラリンピックの関係で、企業がホストタウンの取組に参加しているので協力を仰いだ。登別市はデンマークと交流があるので、デンマークに関する講演を実施してほしいと企業に依頼したのがきっかけ」と話した。

オリンピック・パラリンピックの食育授業

「市立幌別小学校児童 80 人を対象に

【調査ホストタウン】

北海道 登別市

【イベント開催日】

2019/12/14

【相手国・地

域】 デンマーク

【イベント参加者】

5～6 年の児童約 80 人

【競技】

【調査場所】

登別市立幌別小学校

【調査日】

2019/12/14

【補足情報】

登別市立幌別小学校 5～6 年の児童約 80 人を対象に 2019 年 12 月 14 日、明治北日本支社札幌オフィスが主催となり、「オリンピック・パラリンピックの食育授業」を行った。30 分間、栄養素についての授業を行った後、牛乳でレモンラッシーを作った。登別市は 17 年 12 月、東京オリンピック・パラリンピックに向け、デンマークのホストタウンに登録されている。

初めに行われた栄養素に関する授業は、筋肉、骨、成長など身体作りに関する内容。児童からは、「一日に必要なカルシウム量や男女でカルシウムの摂取量が違うことなどを学べて面白かった」「オリンピック・パラリンピック出場者の朝食のことをクイズ形式で出題してくれた点が面白かった」などの感想が聞かれた。

その後行われた「レモンラッシー作り体験」では、児童らが実際に牛乳にレモン果汁を入れ、ラッシーが出来上がる工程を体験した。児童らは「ラッシーが身近なもので作れるとは思わなかったので、家でも作りたい」という意見が多く出た。その後、牛乳にレモン果汁を入れるとなぜラッシーになるのかを説明。牛乳に酸味のあるものを入れるとなぜドロドロになるのか、冒頭の栄養素に関する学習授業の内容を基に説明した。

登別市企画調整グループの角井さんは、今回のイベント開催の経緯について、「デンマークのホストタウン認定をいただいてから、オリンピック・パラリンピックのゴールドパートナーである明治に声掛けを行った。昨年度事業として一般市民向けに講座を開いたが、これからを担う世代に授業を行うため開催に至った」と話す。20 年度に向けて、さまざまな PR 活動を検討中であることも明かした。

明治北日本支社札幌オフィス企画管理部コミュニケーション課課長平川浩司さんは、イベントについて、「出前授業という形をとって小中高や特別支援学校で講座を開いている。自治体と協力した形での出前授業は各地で行った。来年のオリンピック・パラリンピック本番に向けて現在調整中だが、さまざまな活動を検討中」と話す。



食育授業「考えよう！明日の体づくり」

アスリートの食事例もクイズを交えて紹介

【調査ホストタウン】

北海道 登別市

【イベント開催日】

2019/11/19

【相手国・地域】

デンマーク

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

登別市立幌別中学校

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

登別市立幌別中学校 2、3 年生の生徒約 120 人を対象に 2019 年 11 月 19 日、明治北日本支社札幌オフィスが主催となり、東京オリンピック・パラリンピックに向けた食育授業「考えよう！明日の体づくり」が行われた。30 分間、栄養素についての授業を行った後、1 年生 40 人を対象にカカオをテーマに国際理解を深めるための講座「希望のチョコレート」を実施した。

初めに行われた栄養素に関する学習授業「考えよう！明日の体づくり」は、筋肉、骨、成長など身体作りに関する内容。講座開始前に、筑波大学が監修した「ミルクで元気体操」を映像と音に合わせて行った。その後、アスリートの食事例などクイズを交えて紹介。授業を受けた生徒からは「成長期には体づくりのために、大人以上に栄養が必要だということが理解できた」「部活動後に意識して牛乳を飲むようにしたい」などの感想が聞かれた。

その後、1 年生を対象に行われた「希望のチョコレート」では、カカオ産出国であるガーナを題材に国際理解や国際協力について学習。カカオの栽培から船で出荷されるまでの工程はほぼ手作業で、長い時間と人手が必要なことが説明された。これらの課題に対し、何ができるのかをテーマに 5～6 人でグループワークを実施。各グループからは「学校を建てる」「井戸を掘る」「医師を派遣する」などの意見が出された。

登別市役所企画調整グループの角井さんは、今回のイベント開催の経緯について、「オリンピック・パラリンピックのゴールドパートナーである明治と登別市のホストタウン拠点校である幌別中学校に協力を頂き、東京オリンピック・パラリンピックに向けた機運醸成のために開催した。新学習指導要領でもグループワークなどのアクティブラーニングは重要視されている中、今回実施できたことは大きな成果と考えている。20 年度についても、引き続きこうした機会を作っていきたい」と意気込みを見せる。

明治北日本支社札幌オフィス企画管理部の平川浩司さんは、イベントについて、「企業 PR ではなく、社会貢献としてこうした講座を実施している。年々希望する学校が増えてきているということは、取り組みが広く認められてきていると

実感している。20年度以降も引き続き社会貢献として、市町村などと協力し食育の推進、国際理解の推進に寄与していきたい」と話す。



パラスポーツ体験イベントを開催

お笑いコンビ「ロッチ」も登場

【調査ホストタウン】

青森県 三沢市

【イベント開催日】

2019/12/7

【相手国・地

域】カナダ

【イベント参加者】

来場者約 300 人、小中学生の親子連れが多かった

【競技】

【調査場所】

三沢市国際交流スポーツセンター

【調査日】

2019/12/07

【補足情報】

パラスポーツ体験イベント「i enjoy! パラスポーツパーク in 三沢」が 2019 年 12 月 7 日、三沢市国際交流スポーツセンターで開かれた。

車いすラグビーカナダチームのホストタウン・共生社会ホストタウンとなっている三沢市で同イベントが開催されるのは、三沢市国際交流スポーツセンターのオープニングイベントとして行われた 17 年に続き 2 回目。

第 1 部のスペシャルトークショー前半にはお笑いコンビ「ロッチ」が出演。客席に小学生女子バレー部員が多数来場していたことから、即興でバレーにちなんだコントを披露し会場を沸かせた。後半には車いすラグビー日本代表の島川慎一さんと今井友明さん、パラ・パワーリフティングで東京 2020 パラリンピック出場を目指す山本恵理さん、車いすバスケットボール前日本代表の根木慎志さんもトークに加わった。トークイベントでは各種目の魅力を選手が PR したり、選手の立場からうれしい応援の仕方や東京2020パラリンピックへの意気込みを話したりした。島川選手と今井選手は今夏に事前キャンプを三沢市で行ったことから、三沢市国際交流スポーツセンターがバリアフリーに対応していることや青森の豊富な食材の魅力についても話した。

第 2 部のパラスポーツ体験では、市民と共にロッチの 2 人もパラスポーツを体験。根木選手との車いすバスケットボール対決も行われた。会場には車いすラグビー、車いすバスケットボール、レーサー（陸上競技用車いす）、ボッチャ、パラ・パワーリフティング、車いすタイムトライアルの用具が用意され家族連れらがインストラクターの指導を受けながら競技に親しんだ。

三沢市政策部政策調整課オリンピック・パラリンピック推進室の飯田優那主査は「パラスポーツを身近に感じてもらおうと、各小学校で出前授業を行うなどの取り組みも行っている。今日のパラスポーツ体験でもまったく知らないスポーツをやってみるといよりは、知っている・やったことがあるスポーツという認識の児童も多く、手応えを感じている」と話した。



小学校でユニバーサルマナー教室

自分とは違う誰かのことを思いやるには？

【調査ホストタウン】

青森県 三沢市

【イベント開催日】

2019/11/22

【相手国・地

域】 カナダ

【イベント参加者】

講師：原口淳氏（株式会社ミライロ）、参加者：三沢市立おおぞら小学校 2・3 年生 27 人

【競技】

【調査場所】

三沢市立おおぞら小学校

【調査日】

2019/11/22

【補足情報】

三沢市立おおぞら小学校（青森県三沢市）で 2019 年 11 月 22 日、2・3 年生 27 人を対象にユニバーサルマナー教室が開かれた。同市は、積極的にユニバーサルデザインの街づくりと心のバリアフリーに取り組んできた実績が認められ、同年 8 月に「先導的共生社会ホストタウン」に認定された。

ユニバーサルマナーとは、自分とは違う誰かのことを思いやり、適切な理解のもと、行動するマナーのこと。2020 年東京五輪・パラリンピックにおけるカナダのホストタウンとして、車いすラグビーの代表選手らを受け入れている同市では、心のバリアフリーに関する取り組みとして 2017 年から小中学校でユニバーサルマナー教室を実施している。

教室は全盲の視覚障害がある原口淳さんを講師に迎え行われた。原口さんが、普段の生活やブラインドサッカーに取り組んでいる様子を紹介し、障害者でもできることや健常者との違いを説明した。また、参加した小学生もグループワーク形式で人と人との違いをそれぞれが考え、理解を深めた。原口さんは「ハード面をすぐに変えるのは難しいが、ソフト面は皆の気持ちで変えることができる。目の前にいる人に『お手伝いできることはありますか?』と一声掛けることが大事」と締めくくった。

教室の児童から「困っている人がいたら、助けてあげられるような人になっていきたい」「自分ができることはあるか、考えてみようと思った」などの感想が聞かれた。

市の政策部政策調整課オリンピック・パラリンピック推進室の担当者は「ユニバーサルマナー教室は 2017 年からこれまでに延べ 10 校で実施し、本年度は 4 校で実施した。学校からの引き合いも多く手応えを感じている」と話す。

小学校で「シッティングバレーボール」教室

パラリンピアンが講話、 試合体験も

【調査ホストタウン】

青森県 三沢市

【イベント開催日】

2019/12/4

【相手国・地

域】 カナダ

【イベント参加者】

6年生児童 80 人

【競技】

【調査場所】

三沢市立木崎野小学校

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

座った姿勢で行うバレーボール「シッティングバレーボール」の体験教室が2019年12月4日、三沢市立木崎野小学校で開かれた。同市は、ユニバーサルタウンを目指す政策を進めており、17年12月には東京オリンピック・パラリンピックの「共生社会ホストタウン」に登録、カナダを相手国として車いすラグビーの合宿を受け入れているほか、市を挙げての機運醸成に向け、トップアスリートを迎えたスポーツ交流事業を展開している。

木崎野小学校では以前よりバレーボールが盛んなこともあり、17年からパラアスリートの坂本朋子さんを講師に迎えシッティングバレーボール体験教室を行っている。坂本さんは子どものころに病気で足が不自由になったが、大人になってからスキーを始め練習を積み、長野冬季パラリンピックにスキー競技で出場。北京パラリンピックではシッティングバレーボール競技で出場し8位入賞した。

体験教室では「あおもりアスリートネットワーク」に所属する坂本さんを講師に、シッティングバレーボールの体験・講話を実施。競技体験では、坂本さんが所属するシッティングバレーボールチームから3人の選手も加わり、教室をサポートした。

体験パートでは児童がグループを作り、座りながら移動する練習に始まり、ボールのトス・レシーブの練習を行った後、2つのコートを使い試合形式でシッティングバレーボールを体験した。障害者・健常者、男女関係なく参加でき、動きに制限があるからこそ力を合わせなければならない競技に、児童は大いに楽しむ様子が見られた。

競技体験後の講話では、健常者と障害者を分けることよりも、「同じ人間は誰一人いない、私はたまたま足が不自由だっただけで、みんなそれぞれ違いがあつてそれが人間なんだ」と伝え、パワーあふれる坂本さんの講話に児童は感銘を受けた様子だった。

体験教室の後、児童からは「他のパラスポーツも機会があったら積極的に取り組んでいきたい」「アメリカでは障害者のことを『フィジカルチャレンジャー』『メンタルチャレンジャー』と言うことを知り、すてきだなと思った」「障害者も健常者も同じスポーツを楽しめるのはすてきだなと思った。東京パラリンピックにも一層興味を持った」などの感想が聞かれた。



リトアニア・クライペダ市との交流を PR

盛岡市でのイベントにブースを出展

【調査ホストタウン】

岩手県 久慈市

【イベント開催日】

2019/3/16

【相手国・地

域】 リトアニア

【イベント参加者】

いわてスポーツフェスティバル、いわてスポーツフェスタ 2020 の来場者約 62000 人

【競技】

【調査場所】

久慈市内

【調査日】

2020/02/12

【補足情報】

久慈市は 2019 年 3 月と 7 月に盛岡市で開催されたスポーツフェスティバルで、「復興ありがとうホストタウン」の PR ブースを出展し、久慈市とリトアニア・クライペダ市との交流についてアピールした。久慈市は同年 3 月 5 日、東日本大震災の被災 3 県を対象にした「復興ありがとうホストタウン」に登録、震災の際に手厚い支援の手を差し伸べてくれたクライペダ市との交流をさらに深めるとともに、交流と復興プロセスに関する情報発信を進めている。

PR ブースの出展はまず、3 月 16、17 の両日に盛岡市のイオンモール盛岡で開かれた「いわてスポーツフェスティバル」で実施した。このイベントは、被災 3 県にとって「復興オリパラ」に位置付けられる東京オリンピック・パラリンピックに向けた機運醸成を図るのが目的で、岩手県が主催し、久慈市を含む県内 8 市 3 町 1 村が出展した。来場者は約 5 万 3000 人に及んだ。

久慈市のブースでは、ともに琥珀（こはく）の産地という縁から 1989 年に姉妹提携を結んだクライペダ市との 30 年にわたる関係のほか、久慈市が「空気投げ」で知られる講道館柔道の三船久蔵十段の出身地であることから、リトアニアの柔道界と交流の歴史を紹介するパネルを掲示した。また、久慈市が国内での普及に力を入れているリトアニアワインや琥珀絵など同国の特産品も紹介。多くの来場者が足を止めて展示に見入っていた。

さらに、7 月 27、28 の両日、同じ盛岡市のイオンモール盛岡で行われた「いわてスポーツフェスタ Go for 2020」にもブースを出展した。今回は、展示品だけでなく、砂利を入れた容器の中から琥珀片を探し出す「琥珀探し体験」のコーナーも設け、幼児や小学生の親子連れが参加した。このイベントは県の主催で、久慈市を含む県内 8 市 3 町 1 村が出展し、それぞれ「復興ありがとうホストタウン」相手国の紹介や交流事業の発信、スポーツ体験などを実施した。来場者は約 9000 人に達した。



市長がリトアニア大使館を訪問

「復興ありがとうホストタウン」で協力体制を確認

【調査ホストタウン】

岩手県 久慈市

【イベント開催日】

2019/4/18

【相手国・地

域】リトアニア

【イベント参加者】

遠藤穰一久慈市長ほか市職員 4 人、岩手県担当者 1 人、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局担当者 2 人

【競技】

【調査場所】

久慈市内

【調査日】

2020/02/12

【補足情報】

久慈市の遠藤穰一市長は 2019 年 4 月 18 日、東京・港区の駐日リトアニア大使館を訪ね、ゲディミナス・バルブオリス特命全権大使と面会した。同市が 3 月 5 日、東日本大震災の被災 3 県を対象にした「復興ありがとうホストタウン」に登録されたことを受け、今後の協力体制を確認することが目的だった。バルブオリス大使は遠藤市長に「もちろん協力する。（1989 年に始まった）久慈市との交流が 30 年と言わず、100 年続くことを願う」と答え、さらに交流を深めていくことで合意した。

久慈市は国内で唯一の琥珀（こはく）生産地であることから、世界的に琥珀の産地として有名なバルト海沿岸の都市と友好を結びたいと考え、1988 年に当時のソ連駐日大使に姉妹提携都市の紹介を依頼した。その結果、当時はソ連の一部だったリトアニア共和国のクライペダ市の名が挙がり、89 年に姉妹都市提携を締結し、使節団の交換などの交流を始めた。両市の交流は、ソ連が崩壊してリトアニアが独立し、久慈市が合併で新体制となっても変わらず続いた。

2011 年 3 月の東日本大震災で、久慈市は津波の直撃を受けて大きな被害を出した。クライペダ市は震災被害を知ると、すぐに市民から募金を集めて久慈市に届けた。また、クライペダ市内の小中学校等で、子どもたちが折り鶴を飾って震災犠牲者の鎮魂や復興を願う「千羽鶴キャンペーン」が行われたほか、クライペダ市民で結成された訪問団が久慈市民を激励するなど、物心両面から手厚い支援の手を差し伸べてくれた。

そうした経緯もあって、久慈市は「復興ありがとうホストタウン」の相手国にリトアニアを選ぶとともに、市長が在日リトアニア大使館を訪ね、公式な形での協力体制の構築について合意することになった。久慈市の担当者は、「震災復興の過程で、リトアニアの人たちからの励ましが、大きな力になった。東京オリンピック・パラリンピックでは久慈市がリトアニアを支える役割を負えるように努める」としている。



リトアニアに親善使節団を派遣

一般市民 20 人を含む 32 人でクライペダ市と友好を深める

【調査ホストタウン】

岩手県 久慈市

【イベント開催日】

2019/5/26

【相手国・地

域】 リトアニア

【イベント参加者】

使節団 32 人

【競技】

【調査場所】

久慈市内

【調査日】

2020/02/12

【補足情報】

久慈市は 2019 年 5 月 26 日から 6 月 3 日まで、遠藤穰一市長を団長とする親善使節団をリトアニア共和国クライペダ市に派遣した。両市の姉妹提携が締結から 30 年を迎えた節目に計画されたが、同年 3 月、久慈市がリトアニアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックの「復興ありがとうホストタウン」に登録されたこともあり、使節団はクライペダ市で開催された「オリンピックデー」に参加するなどして、両市のさらなる友好を誓った。

使節団は、遠藤市長、中平浩志市議会議長ら 32 人で構成。うち 20 人は一般市民から参加を募った。市民からの参加者は、過去にクライペダ市から久慈市に派遣された使節団のホストファミリーとなった人も含まれていた。

使節団は 5 月 27 日にリトアニア共和国の首都ヴィリニウスに到着すると、山崎史郎・駐リトアニア特命全権大使を表敬訪問した。その後、同日中にカウナス市に移動し、杉原千畝記念館を視察した後、同日夜にはクライペダ市に入った。クライペダ市は、バルト海に面した港町で、リトアニア最古の都市ともいわれる。人口はおよそ 20 万人で、水産業、食品加工、パルプ工業が経済の中心だが、久慈市と同様に琥珀（こはく）の産地として知られている。

使節団は 5 月 29 日、クライペダ市役所を訪問し、市議会の議場でクライペダ市議会議員や市民も交えた交流式典が行われた。同日夜には夕食会が開かれ、かつて久慈市を訪問したクライペダ市民も招かれ、ホストファミリーとして接遇した使節団の人々と旧交を温めた。

5 月 30 日には、クライペダ城跡で文化交流を実施。書道と茶道の体験コーナーが設けられ、久慈市使節団の人々が訪れたクライペダ市民に手ほどきをした。5 月 31 日にはクライペダ市スポーツセンターで柔道交流が行われ、使節団に同行していた久慈市柔道協会のメンバーがクライペダ市の柔道愛好家らを指導した。

6月1日には、クライペダ市内で開かれた「オリンピックデー」に使節団のメンバーも参加し、東京オリンピック・パラリンピックに向け、両市の協力体制を確認した。遠藤市長は帰国後、「今回の訪問で両市の絆はさらに固くなった。（復興ホストタウンの事業など）さまざまな面で協力をしていきたい」と語った。



在ナミビア大使と宮古市内の中学生が交流

ホストタウン相手国の実情、外交官の仕事を理解

【調査ホストタウン】

岩手県 宮古市

【イベント開催日】

2019/12/12

【相手国・地

域】 ナミビア

【イベント参加者】

宮古第一中学校、津軽石中学校、田老第一中学校、新里中学校から生徒 156 人

【競技】

【調査場所】

宮古市役所市民交流センター 2 階 多目的ホール

【調査日】

2019/12/12

【補足情報】

在ナミビア共和国日本大使館の原田秀明全権大使と宮古市内の中学生との交流会が2019年12月12日に行われ、中学生たちは外交という仕事やナミビア共和国について理解を深めた。

交流会は宮古市と市教育委員会が主催。同市は今年開催したラグビーW杯でのナミビアの公認キャンプ地となったことをきっかけに、東京オリンピック・パラリンピックでのホストタウンとしても登録。山本正徳市長は、台風19号の影響を受けた際にラグビーのナミビア代表選手が市民を勇気づけてくれたことについて感謝を述べ、「今度はわれわれがナミビアの選手を応援したい。そのためにも中学生の皆さんにはナミビアがどんな国か知るとともに、国際社会の中でどのように交流していくかを学び、今後に生かしてほしい」と話した。

交流会には、宮古第一中学校、津軽石中学校、田老第一中学校、新里中学校から生徒156人が参加。原田大使は外務省や外交官が行う仕事と大使の役割について、日本と世界の平和のための政策、地球社会のための政策、豊かな世界に向けた政策、お互いの理解を深めるための政策、海外にいる日本人のための政策の5つの切り口を用いて紹介した。「地球社会のための政策」ではナミビアでの例を挙げ、「ナミビアでは学校の教室が足りていないため、日本が無償資金協力し教室を増築する支援をした」と説明した。

ナミビアについては、現地で撮影した風景や食事、植物などの写真を使って紹介。観光名所であるナミブ砂漠の写真を使い、国名がこの砂漠にちなんで付けられたことを説明したほか、ナミビアでよく食べられている「モパネワーム」という虫の写真では、「現地ではとてもポピュラーな食べ物だが、私は少し苦手」と話し、笑いを誘った。

質疑応答では、中学生らから「オリンピックで活躍が期待されるスポーツは」「大使としてナミビアとどう関わっていきたいか」など積極的な質問が寄せられた。原田大使は「オリンピックでは女子マラソンや自転車競技の活躍が期待されている」「いろいろな形で2国間の関係を拡大していけるように関わりたい」などと答えた。「中学生に伝えたいことは」という質問には

「世界各国との友好関係を築いていかなければ日本の将来はない。留学生や海外勤務希望者、外務省応募者の数も減っていると聞くので、親善を進めていくためにも興味を持って海外へ目を向けてほしい」と呼び掛けた。

参加した生徒は「話を聞いて大使の仕事が本当に大変なことが分かった。ナミビアの選手の中には日本に来たことがない人も多いと思うので、しっかりサポートしてあげたい」と感想を話し、原田大使も「皆さんとの交流を胸に、日本とナミビアとの交流を強固なものにしていきたい」と応えた。



駐日ナミビア大使夫妻らが宮古市訪問

震災遺構視察、「学ぶ防災」体験 市民と交流も

【調査ホストタウン】

岩手県 宮古市

【イベント開催日】

2019/4/15

【相手国・地

域】ナミビア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

たろう観光ホテル、浄土ヶ浜パークホテル、宮古市役所、津軽石川河川敷（さけ稚魚壮行会）

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

ナミビア共和国のモーベン・マスソ・ルスウェニョ在日全権大使夫妻と大使館職員が 2019 年 4 月 15、16 日の 2 日間、宮古市を訪れ市内を視察した。宮古市は、同年秋のラグビー・ワールドカップでナミビア共和国の公認キャンプ地に決定しており、それをきっかけにこの訪問が実現した。

大使らは初日、震災遺構の「たろう観光ホテル」を視察。東日本大震災で甚大な被害を受けた田老地区の現状や当時の状況を、災禍の記録や後世への教訓として伝え、参加者の防災意識を高めることを目的に実施している「学ぶ防災」を体験した。ルスウェニョ大使は田老地区の被災状況を学び、命を守る大切さを後世へとつなぐ「学ぶ防災」の取り組みに感銘を受けた様子だった。

その後、「浄土ヶ浜パークホテル」で行われた歓迎レセプションに参加。レセプションには、ナミビア出身で現在は宮古市に住む佐々木フレデリカさんも招かれ、宮古とナミビアの交流を深めた。レセプションでは宮古市からの記念品として、ルスウェニョ大使へ「黒森神楽の獅子頭」、夫人には「うに染めのストール」を贈呈したほか、夫妻は獅子頭に頭をかんでもらう「身固め」を受け、一年の健康を祈願。アトラクションでは箏（こと）によるナミビア国家の演奏が披露され、大使は喜びの表情を見せた。大使が参加者へ気さくな対応を見せる場面もあり、市民らと気軽に交流する様子が見られた。

翌 16 日は宮古市役所を訪れ、山本正徳市長を表敬した。ルスウェニョ大使は「学ぶ防災」を体験した感想や歓迎レセプションへの感謝を述べた。大使が日本に着任した後、最初に訪問を受けたのが山本市長だったことから、大使は「とても印象深かった」と話すとともに、「宮古に来て良かった、帰りたくない」と笑いを交えながら宮古訪問の楽しさを伝えた。

夫妻は津軽石川河川敷で行われた「さけ稚魚壮行会」にも参加。市内小中学校の児童・生徒、保育所・幼稚園の園児らと共に、サケの稚魚を川へと放流した。夫妻は興味を持って積極的に体験し、子どもたちとの交流を楽しみ、ルスウェニョ大使は「ナミビアのラグビーチームと共に宮古にまた戻ってきたい」とあいさつした。

大使夫妻の訪問後の 19 年 6 月、宮古市はナミビア共和国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。



「ナミビア料理講習会」 親子 20 組が参加

料理作りを通してホストタウン相手国の理解深める

【調査ホストタウン】

岩手県 宮古市

【イベント開催日】

2019/7/7

【相手国・地

域】 ナミビア

【イベント参加者】

小学生の親子 10 組 20 人

【競技】

【調査場所】

フラットピアみやこ

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

宮古市国際交流協会が主催する「ナミビア料理講習会」が 2019 年 7 月 7 日、市内の男女共生推進センター「フラットピアみやこ」で開催された。

宮古市はラグビー・ワールドカップにおけるナミビア共和国代表チームの事前キャンプ地であるとともに、東京オリンピック・パラリンピックでは同国のホストタウンに登録されている。料理講習会は、ナミビアを広く市民に知ってもらうきっかけ作りとして企画された。

講師を務めたのは、ナミビア出身で宮古市在住の佐々木フレデリカさん。フレデリカさんは日本人と結婚し、20 年以上宮古市で暮らしている。講習会には小学生の親子 10 組 20 人が参加し、ナミビア料理作りに挑戦した。料理の前にフレデリカさんがナミビアの国や料理などについて紹介したほか、市のラグビー・ワールドカップ推進室の職員がワールドカップについて話し、参加者はナミビアやラグビーについて理解を深めた。

講習会で作った料理は「パップ」「ブルボス」「シュニッツェル」「ベイクドビーンズサラダ」の 4 品。「パップ」は南アフリカの国々で食べられている主食の一種で、トウモロコシの粉を水で溶いて作る。「ブルボス」はカレーソーセージ、「シュニッツェル」は薄く伸ばした豚肉にパン粉を付け、バターと少量の油で揚げたナミビア風のカツレツ。「ベイクドビーンズサラダ」は豆とピーマンやパプリカを使ったサラダとなっている。

参加者らはフレデリカさんの指導を受けて、楽しみながらナミビア料理作りを体験し、出来上がった料理に舌鼓を打った。参加した小学生は「学校でタグラグビーも体験し、ワールドカップが楽しみ。今日作ったメニュー以外の料理も教えてほしい」と話していた。



キューバの「鳥人」ミレーヤ・ルイスさんトークショー

五輪 3 連覇の黄金期振り返り、「強い気持ち」の大切さ訴える

【調査ホストタウン】

宮城県 仙台市・多賀城市

【イベント開催日】

2019/12/14

【相手国・地

域】 キューバ

【イベント参加者】

生徒約 200 人

【競技】

女子バレーボール

【調査場所】

仙台育英学園高校宮城野校舎 ゼルコバホール

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

女子バレーボールの元キューバ代表、ミレーヤ・ルイスさんによるトークショーが 2019 年 12 月 14 日、仙台市宮城野区の仙台育英学園高校宮城野校舎で開かれた。同校の生徒を中心に約 200 人がルイスさんの話に耳を傾けた。仙台市は多賀城市と連携し、キューバを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに 19 年 8 月に登録された。

今回のトークショーを行ったルイスさんは、1983 年に 15 歳でキューバ代表入り。身長 175 センチとバレーボール選手としては小柄ながら、「鳥人」と称される驚異のジャンプ力とパワーを生かした強烈なスパイクを武器に中心選手として活躍した。91 年のワールドカップ（W 杯）優勝から 3 回の五輪を含む主要国際大会 8 連覇を遂げ、キューバ・バレー黄金期の立役者となった。現在 52 歳で、国際バレーボール連盟（FIVB）副会長を務める。

トークショーではスクリーンに現役時代の VTR を流し、ルイスさんが当時を振り返った。86 年に第 1 子を出産し 21 日後には世界選手権のコートに立ったこと、初めて世界一になった 89 年 W 杯の感動、そして中でも鮮明に記憶しているのが五輪初出場の 92 年バルセロナ大会。「選手村の美しさに言い表せない感覚を味わい、金メダルで終わることができた。夢が実現した瞬間だった」と回想する。

当時のキューバの強さの秘密を聞かれ、「キューバ人はみんな血液にスポーツ愛が流れている」と表現したルイスさん。「国も尽力し、素晴らしい指導者が選手の良いところを引き出してくれた。一番教えてもらったのが共存と和の精神、そして代表選手としての気持ち。その指導のおかげで全ての大会でタイトルが取れた」と話す。

集まった生徒たちに向けて、「日本人は世界の子どもたちよりも優れている点がある。それはスポーツをやる上で欠かせない規律を守ること。後は、目標を決めたら絶対にやるんだという強い気持ちを持ってほしい」とメッセージを送った。

「苦しさや挫折を乗り越えるにはどうすればいいか？」という質問に対して、強い気持ちを持つことを重ねて強調。「絶対に世界一になるという目標、国民が金メダルを待っているという思いが私を奮い立たせてくれた。泣くこともあったが、一日休んだらメダルが取れなくなるかもしれないという思いで、周りの人たちのために立ち上がった」と真剣な表情で伝えた。

海外バレーファンの 20 代女性は栃木県から参加。「現役時代のプレーを見ることはできなかったが、キューバにとって本当に偉大な存在だったことが分かった」と興奮した様子で話した。東京五輪出場がかなわなかったキューバ代表チームの現状について質問し、「身長やテクニックなど素晴らしい条件を備えている若い世代がいる」とルイスさんから回答を得て、「4 年後に強いキューバが見られそうだ」と期待を膨らませていた。



ミレーヤ・ルイスさんのバレーボールクリニック

キューバ黄金期の基礎を作った練習メニューに中高生が挑戦

【調査ホストタウン】

宮城県 仙台市・多賀城市

【イベント開催日】

2019/12/15

【相手国・地

域】 キューバ

【イベント参加者】

女子バレーボール部員計 68 人

【競技】

女子バレーボール

【調査場所】

仙台育英学園高校多賀城校舎 グローリーホール

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

女子バレーボールの元キューバ代表、ミレーヤ・ルイスさんによる「バレーボールクリニック」が 2019 年 12 月 15 日、多賀城市の仙台育英学園高校多賀城校舎で行われた。同校のほか聖和学園高校・多賀城市立第二中学校・多賀城市立東豊中学校の女子バレーボール部員、計 68 人が参加した。

ルイスさんは「私が五輪でいくつも金メダルを取ることができたのには、日本で準備をしたことが大きく関わっている。今日は日本の『家族』の皆さんとバレーボールができて大変うれしい」とあいさつ。多賀城市教育局の麻生川敦局長が「オリンピックから直接指導を受けることができる貴重な機会。未来のオリンピックとなる可能性を秘めた若い皆さんの大きな刺激となり、学びの機会となることを願っている」と呼び掛け、クリニックはスタートした。

ルイスさんの夫で元キューバスports大臣のウンベルト・ロドリゲスさんが、ルイスさんやキューバのバレーボールについて映像を交えて紹介。その後、ルイスさんが現役時代に行っていたウオーミングアップから、レシーブやスパイクの練習など約 3 時間にわたり汗を流した。ルイスさんは全体を見回しながら指導し、個人や監督に直接アドバイスする姿も見られた。

イベントを終えて、「皆さんに行ってもらったトレーニングは 3 回金メダルを取ったキューバ代表の練習のコピーなので、とても難しかったと思う。それでも皆さんやる気を持って勇敢に取り組んでくれて、その姿を見てうれしくなった」とルイスさん。「バレーボール選手に大切なことは、規律とやる気。今日見ていて、スポーツ選手として非常にいい条件を備えている選手たちがいた。これからもトレーニングを続けて、やる気を失わずに、バレーボールを楽しんでほしい」と伝えた。

東豊中学校女子バレーボール部主将の残間栄美さん（2 年）は「元オリンピック選手の練習を初めてやってみて、すごく自分のためになった。レシーブの時の足の出し方など、これまで知らなかったことも分かった。教わったことを忘れずに、これからの練習につなげていきたい」と話した。

仙台育英学園高校女子バレーボール部主将の菊地麗奈さん（2年）は「最初はみんな緊張していたが、楽しく教えていただいたので、だんだんとリラックスして楽しくできた。ウォーミングアップなど普段何気なくやっていることにも全部意味があって、試合につながっていることを教わった」と振り返る。前日のトークショーに続いての参加で、「プレーだけではなく気持ちの面や取り組む姿勢を教わったので、チームみんなでそれを忘れないように練習していきたい」と笑顔を見せた。



市民主体で考える「イタリア大好き！」プロジェクト

イタリア代表の応援とおもてなしの機運醸成へ

【調査ホストタウン】

宮城県 仙台市

【イベント開催日】

2020/1/13

【相手国・地

域】 イタリア

【イベント参加者】

高校生から年配まで幅広い世代の約 30 人

【競技】

【調査場所】

市民活動サポートセンター シアタールーム

【調査日】

2020/01/13

【補足情報】

仙台市や市スポーツ振興事業団、仙台日伊協会などで構成する仙台・イタリア交流事業 2019 実行委員会が仙台市イタリア応援プロジェクト「Amo ITALIA！」を発足し、2020 年 1 月 13 日に オープニングワークショップを開いた。会場は仙台市青葉区の市民活動サポートセンター。仙台市は 16 年 1 月、イタリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

仙台市は 2002 FIFA ワールドカップでの事前合宿実施の縁などからイタリアのホストタウンに名乗りを上げた。ホストタウン関連事業としては、イタリア文化を紹介するイベントの開催、代表チームの招待や市選抜チームの派遣による交流、事前合宿受け入れなどの取り組みを行ってきた。

東京オリンピック・パラリンピックでは、ソフトボールやシッティングバレー、車いすテニスなど複数の競技の事前合宿地に決定している。そのことを受けて今回、イタリア代表を応援し、おもてなしの機運を盛り上げていく企画を市民主体で考えてもらおうとプロジェクトを立ち上げた。「Amo ITALIA！」は「イタリア大好き」を意味する。

参加したのは高校生から年配まで幅広い世代の約 30 人で、その動機もさまざま。「おもてなしをしてイタリアの方に仙台を好きになってもらいたい」（40 代女性、主婦）、「国際交流に興味があり、仙台の人がイタリアを好きになって応援したいと思ってくれたらうれしい」（20 代女性、大学生）、「スポーツボランティアを行っており、海外の方にどんな貢献ができるか知りたい」（80 代男性、無職）、「イタリアの食品を輸入する仕事に就いており、職業柄できることがあったらと思った」（30 代男性、会社員）、「国際文化を研究しており、異文化交流を实践したい」（20 代男性、中国人留学生）。

参加者は 10 のグループに分かれ、ファシリテーターによる進行の下、グループワークを行った。ワールドカフェ形式で意見を交換しながらアイデアを企画にまとめていき、紙に記入。集まった企画を、「音楽」「食のイベント」「SNS・PR」「レシピ開発」「七夕」「イタリア フェア」「言葉でおもてなし」「バル仙台」の 8 つのテーマに分類して貼り出した。テーマごとにチームを作り、チーム

内で企画の検討を進めたところでこの日は終了。およそ 3 時間にわたるワークショップを通してすっかり打ち解け合った参加者らは終了後も会場に残り、にぎやかにアイデアを出し合っていた。

今後、チームごとに打ち合わせを重ね、進捗（しんちよく）報告や情報共有ミーティングをしながら 7 月中旬までの実施を目的に企画を形にしていく。提案された企画に対して、実行委員会ではそれぞれ 10 万円程度を助成。ウェブサイトや市政だよりによる広報、プロジェクトのロゴマークを使ったノベルティーグッズの提供、公共交通機関へのポスター掲出なども予定している。



デンマークへの関心高める活動多彩に

各所にデンマーク国旗 東松島とのつながり継続深化へ

【調査ホストタウン】

宮城県 東松島市

【イベント開催日】

【相手国・地

域】デンマーク

【イベント参加者】

東松島夏まつり＝延べ約 650 人、MIYAGI ホストタウンフェスティバル＝延べ 1200 人、ひがしまつしま市民文化祭＝延べ 1540 人、ひがしまつしま食べメッセ＝1430 人

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/17

【補足情報】

デンマーク王国の「復興『ありがとう』ホストタウン」になっている東松島市は、東京オリンピック・パラリンピックに向けてデンマークへの関心と応援の機運を高めようと 2019 年度、PR 活動を展開した。

東日本大震災直後、メルビン駐日大使（当時）が寄付を届けたことをきっかけに生まれたデンマークとのつながり。17 年 11 月に「復興『ありがとう』ホストタウン」に登録されてからは、デンマークへの表敬訪問、産業文化交流、市報による周知のほか、18 年度は学生交流としてデンマークから中学生を招き、市内の中学生とホームステイや市内産業の共同見学を行った。

19 年度は五輪・パラリンピックに向けて PR 活動に力を入れた。予算や集客の面から、単体でのイベント開催ではなく市民が多く集まるイベントにデンマーク交流ブースを出展する形を取った。

8 月 24 日の「東松島夏まつり」では JR 矢本駅前の自治体ブースの一角にブースを展開。缶バッジのワークショップ、ミサンガのワークショップ、フェースシール体験、パネル展示を用意し、延べ 650 人を集めた。

同日と翌 25 日には、利府町のイオンモール利府で開かれた「MIYAGI ホストタウンフェスティバル in 利府」にブース出展。同様のワークショップのほか、一般社団法人「東の食の会」によるプロジェクト「せかいむすび」の一環で、デンマーク王室献上米の東松島産無農薬ササニシキ、特産品の皇室献上のり、デンマーク産チーズを使ったおむすびを無料配布。配布開始から列は途切れず、1 時間程度で用意した 200 個を配り切った。ブースには 2 日間で延べ 1200 人が訪れた。

市コミュニティーセンターで開かれたイベント「ひがしまつしま市民文化祭」（10 月 27 日）、「ひがしまつしま食べメッセ」（12 月 1 日）にも出展し、延べ人数でそれぞれ 1540 人、1430 人を集めた。オリジナルシールやリストバンドなど、新たなグッズも増やしている。

一連の出展を振り返り、市教育委員会教育部生涯学習課スポーツ振興班兼東京オリンピック・パラリンピック推進室の菅原久義主査は「子どもたちの反応はとても良く、楽しんでくれている」と話す。配布物を目当てに来た人も、並んでいる間にパネルに目を通し、デンマークとの関係について職員に質問することもあった。「知ってもらふ最初の入り口としてはうまくいった。この一年、市民の方がデンマークの国旗を目にする機会は増やせたのでは」と一定の成果を感じている。

20 年度も取り組みを続け、文化交流や学生交流、代表選手や大使を招くことも検討・調整している。「五輪が終わっても関係性が終わるということはない。つながりを継続し深めていくために、可能な範囲で何ができるか考えながら取り組んでいきたい」と意気込む。



市民参加のスポーツイベントでボッチャ体験

パラスポーツの普及目指し、いずれは市内で大会開催も

【調査ホストタウン】

宮城県 東松島市

【イベント開催日】

【相手国・地

域】 デンマーク

【イベント参加者】

「宮城ヘルシーふるさとスポーツ祭」石巻地区大会＝約 15 人、リフレッシュフェスティバル＝約 50 人（缶バッチワークショップ＝100 人）、オリンピックふれあい交流会＝約 30 人

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/17

【補足情報】

東松島市は 2019 年度、パラリンピック正式種目「ボッチャ」に触れる機会を市民に提供する取り組みを始めた。スポーツイベントで体験会を開いたほか、出張体験教室も開き、競技の認知度向上を図った。

市は、パラスポーツの普及とパラリンピックへの関心を高めることを目的に、市民が触れやすい・体験しやすい競技としてボッチャに着目。類似する競技「ペタンク」の普及事業や大会が市内で行われていることも背景にあった。オリンピック・パラリンピック等経済界協議会が仙台市内で開いた企業対抗ボッチャ大会に職員が視察を兼ねて参加し、競技としての面白さや大会の盛り上がりを経験。市教育委員会教育部生涯学習課スポーツ振興班兼東京オリンピック・パラリンピック推進室の菅原久義主査は「若い人たちも楽しんでプレーしていたのが印象的だった」と話す。

9 月 8 日には、地域スポーツ・生涯スポーツの振興を目的に県内 7 つの地域ごとに行われている「宮城ヘルシーふるさとスポーツ祭」の石巻地区大会で、東松島市民体育館に体験コーナーを用意した。全体の開会式後に参加者は各競技の会場に移動するため集客にやや苦勞したが、競技を終えた人たちに声を掛け 15 人ほどに体験してもらった。

10 月 14 日、世代間交流のスポーツイベント「リフレッシュフェスティバル」で、大曲地区体育館の体験プログラムの一つとして、ブラインドサッカー、バドミントンと合わせてボッチャを用意した。本来のジャックボール（目標球）ではなく、枠に入ればクリアとするなど、子どもでも体験しやすいようにアレンジしたルールで約 50 人が楽しんだ。会場の一角では、日本コカ・コーラによる聖火リレートーチの展示・記念撮影イベントもあった。市のデンマーク応援ブースも開設し、缶バッジのワークショップに 100 人が参加した。

ボッチャ体験は 11 月 30 日の「オリンピックふれあい交流会」でも行った。参加した市内の高齢者の健康づくりサークルから依頼があり、出前体験教室を実施。30 人ほどが体験した。

19年度はイベントの一つのコンテンツとして試験的に取り入れた形だったが、これまでの成果や反省点を踏まえて 20年度も継続していく予定。どの層に向けて、どのような形で普及活動を行っていくかを検討している。担当者間では「いずれ大会も開催したい」と話をしているという。



オリンピックふれあい交流会を開催

男子バレーボール元日本代表、中高生らを直接指導

【調査ホストタウン】

宮城県 東松島市

【イベント開催日】

2019/11/30

【相手国・地

域】 デンマーク

【イベント参加者】

中高校生を中心に延べ約 100 人

【競技】

【調査場所】

東松島市民体育館

【調査日】

2020/02/17

【補足情報】

「オリンピックふれあい交流会」が 2019 年 11 月 30 日、東松島市の市民体育館で開かれた。バルセロナ五輪に出場した男子バレーボール元日本代表の大竹秀之さんが、中高校生を中心に延べ約 100 人を指導した。

市東京オリンピック・パラリンピック推進室が、日本電気社員で一般社団法人「東松島みらいとし機構（HOPE）」の土井幾子さんに機運醸成の取り組みについて相談。NEC ブルーロケッツでプレーし、現在は NEC オリパラ推進本部エキスパートの大竹さんを講師に招いてのイベントが実現した。

バレーボールの指導は午前・午後の 2 回に分けて行った。午前は矢本第一中学校、矢本第二中学校、成瀬未来中学校のバレーボール部員 65 人、午後は石巻西高校のバレーボール部員や一般など 36 人が参加。大竹さんのほか、NEC 元選手の楊成太さん、竹内実さんが、ボールを使ったトレーニングやレシーブやパスの基本などを指導した。中学生には大竹さんが講演や質疑応答も行い、自宅でもできること、現役時代に気を付けていたこと、バレーボールをやっていて良かったことなどを伝えた。

参加した中高生らは楽しみながらも真剣に打ち込み、日頃の練習やトレーニングに生かせるものを吸収した様子だった。大竹さんが日本代表で活躍する姿をリアルタイムで見ていた母親らの反応も大きかったという。

会場にはデンマーク交流ブース、ボッチャ体験コーナーを用意した。顔認証技術を使った NEC の「笑顔パワーゲーム」ブース、日本コカ・コーラ提供のオリンピックパネル展示も展開。クリニックを終えた中学生らが体験を楽しんだり記念写真を収めたりしていた。

オリンピックとの交流による五輪への機運醸成、ボッチャ体験を通じたパラスポーツの普及やパラリンピックへの関心喚起、「復興『ありがとう』ホストタウ

ン」相手国デンマークの PR と、東京五輪・パラリンピックに向けた市の取り組みを一堂に集めた形のイベントとなった。

「五輪は一つのきっかけで、その先に何を残すかが大事なところ」と市教育委員会教育部生涯学習課スポーツ振興班兼東京オリンピック・パラリンピック推進室の菅原久義主査は話す。

「（ワールドカップで人気が高まった）ラグビーのように、どこでムーブメントが起きるか分からない。その入り口になるような取り組みを今後も行っていきたい」と意欲を見せた。

ギリシャで採火された聖火が特別輸送機「TOKYO 2020 号」で航空自衛隊松島基地に到着した 20 年 3 月 20 日、東松島市は「スポーツ健康都市」を宣言した。東京五輪のレガシーを未来へ残す決意を示した。





小中学校 12 校で給食にインドネシア料理

唐桑中では技能実習生ら迎え交流、笑顔で相互理解深める

【調査ホストタウン】

宮城県 気仙沼市

【イベント開催日】

2020/1/24

【相手国・地

域】インドネシ

ア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

気仙沼市立唐桑中学校 3 年 2 組

【調査日】

2020/01/24

【補足情報】

インドネシアの「復興『ありがとう』ホストタウン」となっている気仙沼市の小中学校 12 校で 2020 年 1 月、インドネシア料理が学校給食として提供された。1 月 24 日には唐桑中学校を菅原茂市長と市内のインドネシア料理店「Warung Mahal（ワルン マハール）」の小出悟店長、市内の企業で働くインドネシア人技能実習生 3 人が訪問した。

食を通じた国際交流の場となった 3 年 2 組の教室は、生徒たちが手作りの装飾やインドネシア語のメッセージを掲出し歓迎ムードを演出。4 時間目の授業が終わるとテキパキと机を並べて配膳し、「Selamat datang di SMP Karakuwa（唐桑中学校へようこそ）」と声を合わせてゲストを迎え入れた。

インドネシアの民族衣装を着て参加した菅原市長は、気仙沼の漁船でインドネシア人が多く働いていること、震災後にユドヨノ大統領（当時）が気仙沼を訪れ被災者を激励したこと、約 1 億 6,000 万円の寄付を受けたこと、そうした経緯から復興「ありがとう」ホストタウンに手を挙げたことなどを生徒たちに説明した。「私たちはいろいろな国の方々と関わり合いながら暮らしている。これからもっと広く、深くなっていくということを頭の中に入れながら、今日は給食を食べてほしい」と呼び掛けた。

この日用意された献立は、焼きそばに似た麺料理「ミーゴレン」、甘辛いたれの焼き鳥「サテ（アヤム）」、豆腐やピーナツが入った温野菜サラダ「ガドガド」、揚げたバナナの菓子「ピサンゴレン」の 4 種類。栄養教諭が店を訪れて小出店長からレシピを教わり、生徒たちが食べやすい味付けにアレンジした。「拒絶されてしまったのは元も子もないので、生徒たちがおいしいと感じる味で、なおかつインドネシアの雰囲気が出せるように心掛けた」と栄養教諭。助言した小出店長は「学校給食でできる範囲で、よく工夫して再現していると思う」と感心していた。

インドネシアの国土や文化、食についての説明を聞きながら、技能実習生と一緒に給食を食べた生徒たち。最初は緊張した様子だったが、味の感想を聞いたり、互いの国の言葉を教え合ったりと、笑顔で交流を深めていた。実習生は「味

はおいしいが、インドネシアの味とはちょっと違う。調味料が違う感じがする」、生徒たちは「ちょっと甘くておいしい」「初めて食べたけど気に入った」などと話していた。

担任教諭は「生徒たちは義務教育が終わると自分で進路選択をし、その中で海外の人と関わる機会も増えてくる。そうした自分の将来に向けて、このような機会は大切。人との関わりを通して学びを増やして欲しい」と期待を込める。



インドネシアの小学校とインターネットで交流

6000 キロ離れた場所の友達と親睦深め合唱で心一つに

【調査ホストタウン】

宮城県 気仙沼市

【イベント開催日】

2020/2/5

【相手国・地

域】インドネシ

ア

【イベント参加者】

気仙沼小学校 5 年生 59 人、アチェ第 32 小学校 62 人

【競技】

【調査場所】

気仙沼市立気仙沼小学校 かなえホール

【調査日】

2020/02/05

【補足情報】

気仙沼市立気仙沼小学校とインドネシア・アチェの小学校をインターネットでつないだ交流が 2020 年 2 月 5 日に行われた。両校の 5 年生児童が、ビデオチャット（テレビ電話）を使った対話を通して互いの国への理解を深めた。

国境や民族を超えて人々が対話できる双方向メディアを提供する NPO 法人「地球対話ラボ」が協力し、準備を進めてきた。気仙沼小学校の児童は事前に総合学習でインドネシアとアチェの場所、あいさつ、文化、街の様子、食べ物などについて学んだほか、一人一人手作りのティッシュケースに自己紹介のカードを入れてアチェに送付。学校や地域のことを紹介する動画も交換し合い、約 6000 キロ離れた場所で暮らす友達との画面越しの初対面をわくわくしながら迎えた。

スクリーンにアチェの小学校の映像が映し出されると歓声が上がり、互いに「Selamat siang（こんにちは）」と元気にあいさつ。アチェの児童はティッシュケースに同封されていた自己紹介のカードを見せて、本人に直接「ありがとうございます」とお礼を伝えた。その後、地域の産業や食文化、ランドセルの中身、学校生活について質問し合う形で進行。気仙沼の児童らが体育の時間に行っていることの例として長縄跳びを披露してみせると、アチェ側から大きな拍手が起きた。

最後は、阪神・淡路大震災後に作られた歌「しあわせ運べるように」を合唱。1 番を気仙沼の児童、2 番をアチェの児童、3 番を一緒に歌い上げ、心を一つに寄せ合った。同曲は 2018 年に東京・恵比寿で開かれた「インドネシア日本国交樹立 60 周年記念コンサート」で、気仙沼小学校の児童が合唱を披露しているゆかりの曲だった。

約 1 時間半の交流を終え、気仙沼側から「（めったに）体験できないことが体験できて楽しかった」「インドネシアの人たちと交流できて良かった」、アチェ側から「日本の友達と会えて良かった」「日本の学校の様子が分かって楽しかった」と感想を伝え合った。通信を切る前に、一段と大きな声で「Terima kasih（ありがとう）、Sampai jumpa（またね）」と互いに呼び掛けた。担任教諭が「前に

出てきていいよ」と伝え、それまで行儀良くしていた児童らは身を乗り出して手を振り続けた。

児童の一人は「インドネシアの子たちは初対面でも元気に大きな声で、友達のように接してくれた」と言い、国際交流においては積極性が大事だと感じた様子だった。千葉清人校長は「こうした機会を通して、子どもたちには世界に目を向けていってもらいたい。気仙沼で働くインドネシアの方々も多いので、親近感を持ってもらうきっかけにもなったと思う。気仙沼とインドネシアとの絆をより力強いものにしてもらいたい」と目を細めた。



市民と技能実習生が互いの国の料理を手作り

テーブル囲んで話は弾み母国を思い出す参加者も

【調査ホストタウン】

宮城県 気仙沼市

【イベント開催日】

2020/2/23

【相手国・地

域】 インドネシ

ア

【イベント参加者】

広報を通して知った市民と市内の企業で働くインドネシア人技能実習生合わせて
20人ほど

【競技】

【調査場所】

気仙沼市魚市場 クッキングスタジオ

【調査日】

2020/02/23

【補足情報】

気仙沼市魚市場クッキングスタジオで 2020 年 2 月 23 日、日本人とインドネシア人が料理作りを通して交流した。市の広報を通して知った市民と、市内の企業で働くインドネシア人技能実習生、合わせて 20 人ほどが参加し、焼きそばに似た麺料理「ミーゴレン」、甘辛いたれの焼き鳥「サテアヤム」のほか、大根とゆずの酢の物、おにぎり、気仙沼産ワカメを使ったわかめスープを一緒に作った。

参加者は 6 つのグループに分かれ、インドネシアと気仙沼市のつながりについて書かれた資料とレシピに目を通し、それぞれ自己紹介をしてスタート。材料を刻んだり、炒めたり、まぜたり、役割を分担して共同作業を行った。終始和やかな雰囲気、日本人がインドネシア人に ミーゴレンやサテアヤムの作り方を確かめたり、おにぎりの握り方を教えたりと、互いの食文化を伝え合う姿も見られた。

2 時間ほどで全ての調理が完了し、出来上がった料理が長テーブルに並べられた。ビュッフェ形式で一人一人皿に取って、グループごとにテーブルを囲んで試食。各グループとも上手に作れた様子で、「おいしい」と口々に言い合っていた。グループによって見た目や味も多少異なり、ほかのグループのものを試してみる参加者もいた。

夫と共に参加した 70 代女性は「主人が漁船の元乗組員でインドネシアにもよく行っていて、久しぶりにインドネシアの方と交流したいというので参加した。皆さん料理も日本語も上手。すてきな娘さんや好青年で、本当に楽しかった」と笑顔を見せた。同じく夫婦で参加した 40 代男性は「町でインドネシアの方を見掛けることは多くても、なかなか話し掛ける機会はなかった。料理を作りながらだと自然に話ができて、彼女たちの笑い声に誘われて楽しく調理できた」と振り返る。

インドネシア人の 20 代女性は「日本の料理を勉強できてよかった。インドネシアの料理は調味料が違うのでちょっと味は違うがおいしかった」、20 代男性は「久しぶりにミーゴレンとサテアヤムを食べて、インドネシアのことを思った。

ホームシックになっていたが、今日はお母さんと一緒に過ごしているようでうれしかった」と話した。

インドネシアから気仙沼へは、東日本大震災からの災害復興資金として約 1 億 6,000 万円の寄付が送られ、地震の被害により建て替えが必要になった気仙沼図書館の建設費に活用された。館内の児童図書エリアは、支援を行った当時の大統領の名を取って「ユドヨノ友好こども館」と名付けられ、インドネシアからの復興支援の象徴となっている。館の蔵書にはインドネシア語で書かれた本や資料も多く、会の最後には市から施設の説明と利用の呼び掛けがあった。



北都銀行バドミントン部、タイで現地チームと合同合宿

東京大会本番に向けたミーティングも

【調査ホストタウン】

秋田県・大館市・仙北市・美郷町

【イベント開催日】

2019/5/10

【相手国・地

域】タイ

【イベント参加者】

【競技】

バドミントン

【調査場所】

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

タイ・バドミントンナショナルチームと北都銀行（本店＝秋田県秋田市）バドミントンチームが 2019 年 5 月 10 日から 13 日にバンコク市内で行った合同合宿に、東京オリンピック・パラリンピックで同国のホストタウンを務める美郷町と秋田県の担当者ら 3 人が帯同し、同国担当者らと大会本番へ向けたミーティングを行った。

ミーティングでは、美郷町で同年 8 月に開催予定だったタイ・バドミントンナショナルチーム事前合宿へ向けたスケジュール調整や、国内で開催される国際大会へのサポート体制、選手と町民の交流事業などについて話し合われた。

美郷町は、バドミントン世界選手権女子ダブルスで 2 連覇を果たした永原和可那選手と松本麻佑選手が所属するなど、国内トップクラスの強豪選手を擁する同行バドミントン部と長年の交流があり、07 年に県内で開かれた「第 62 回国民体育大会・秋田わか杉国体」では美郷総合体育館「リリオス」がバドミントン会場として使用された。

同行バドミントン部が、バドミントンの強豪国として知られる同国と交流が深いことや、国体を通してバドミントンが広く町民に親しまれていることなど、同町の練習環境が高く評価されたこともあり、16 年 1 月に同町はタイを相手国とするホストタウンに登録された。同年 8 月には、同町と秋田県、タイ・バドミントン協会、秋田県バドミントン協会の 4 者が、相互の交流キャンプに関する基本合意書も締結した。

タイ・ナショナルチームが 17 年に同町で初めての合宿を行った際には、同行バドミントン部の選手と共に、地元中学校バドミントン部の選手を指導した。18 年 7 月に町民ら有志が立ち上げたタイ王国ファンクラブ「プーアン」の会員数は 138 人（2020 年 2 月現在）を数え、同国選手が出場するバドミントンの国際大会の応援に駆け付けたり、合宿の運営サポートに当たったりしている。また、19 年 2 月には、松田知己町長と町民らファンクラブ会員ら 17 人が同国を訪れ、バドミントンのみならず、教育や文化など、町を挙げた交流事業に取り組む。



タイのバドミントンチームが美郷町で強化合宿

秋田犬との触れ合いも SNS 通じ町の魅力発進に貢献

【調査ホストタウン】

秋田県・大館市・仙北市・美郷町

【イベント開催日】

2019/8/19

【相手国・地

域】タイ

【イベント参加者】

児童 53 人（技術指導）ほか

【競技】

バドミントン

【調査場所】

美郷総合体育館「リリオス」

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

東京オリンピックに向けたタイのバドミントン・ナショナルチームの強化合宿が2019年8月19日から22日にかけて、美郷町的美郷総合体育館「リリオス」で行われた。

リリオスは、07年に開催された「第62回国民体育大会・秋田わか杉国体」のバドミントン会場として建設された体育館で、バドミントンのシャトルが見やすいように設計された壁の色や照明、高い天井など競技に最適の設計になっている。また、同町は16年1月、タイを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、その以前から交流のあったタイのバドミントン・ナショナルチームの合宿受け入れを進めてきた。ホストタウン登録前の15年4月にタイのU-17（17歳以下）女子代表チームが同町で合宿したのを皮切りに、17年から毎年、同国ナショナルチームが同町で強化合宿を行っている。

今回は、合宿直前の8月13～18日に秋田市内で行われた国際大会「ヨネックス秋田マスタース2019バドミントン選手権大会」に出場した同国ナショナルチームの男子選手6人と女子選手1人、コーチ2人の計9人が美郷町を訪れた。ここに、バドミントン世界選手権女子ダブルスで2連覇を果たした永原和可那選手と松本麻佑選手らが所属する実業団の強豪・北都銀行（本店＝秋田県秋田市）バドミントン部の選手7人と、山陰合同銀行（本店＝島根県）の選手4人も合流し、4日間の強化合宿を行った。

同20日には、同国と両行の選手が、地元のバドミントンスポーツ少年団に所属する小学1年～6年の児童53人に技術指導を行い、ラケットの持ち方やレシーブを受ける際のフォームなど、基礎の大切さなどを中心に伝えたほか、ミニゲームも実施した。参加した児童からは「タイの選手とプレーできて楽しかった」「選手のスマッシュはとても速かった」「Tシャツにサインをもらった」など、世界トップクラスの選手との交流に感激した様子の声が多く聞かれた。

練習の合間、「美郷魅力発信プログラム」と銘打ち、同町担当者らがタイの選手を案内。環境省の名水百選にも選ばれる「六郷湧水群」を見学するなど町内を散策して回ったほか、町指定文化財の坂本東嶽邸で郷土料理を提供した。

美郷町教育委員会でスポーツ振興を担当する高橋一久さんは「選手の皆さんは、町内にある松や杉の並木、秋田犬との触れ合いなどを楽しんでもらったようで、当町での体験を SNS などに掲載いただいた」と、選手による町の魅力の発信にも期待を寄せている。



タイのボッチャチーム、大館市で事前キャンプ

エキシビションマッチに熱い声援、交流試合も

【調査ホストタウン】

秋田県・大館市・仙北市・美郷町

【イベント開催日】

2019/9/28

【相手国・地

域】タイ

【イベント参加者】

市民約 150 人

【競技】

パラ陸上、ボッチャ

【調査場所】

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

パラリンピックの陸上競技とボッチャのタイ・ナショナルチームが 2019 年 9 月から 10 月にかけて、東京パラリンピック競技大会へ向けた事前キャンプを大館市で行った。

9 月 25 日に同市を訪れたのは、パラ陸上選手 12 人、ボッチャ選手 7 人、コーチや同協会関係者を合わせた計 37 人。長根山陸上競技場（大館市字東台）と屋内総合体育施設タクミアリーナ（同市上代野）を主な練習場に 10 月 5 日までの 11 日間、合宿トレーニングに励んだ。

9 月 28 日には、ボッチャのタイと日本の両代表チームが、タクミアリーナを会場にエキシビジョンマッチを開催。16 年にブラジル・リオデジャネイロで開かれた前回パラリンピック決勝でも対戦した両チームが熱戦を繰り広げ、一投ごとに戦況が変わるハイレベルな試合展開に、会場に集まった約 150 人の市民は熱心に声援と拍手を送った。そのほか、両チームは県内で活動するボッチャチームとの交流試合も行った。

観戦した男性は「世界最高レベルの試合を地元で観戦できるとは。パラリンピックでの両チームの活躍が楽しみ」と感激した様子だった。試合後には、同国パラ陸上チームが日常のトレーニングに取り入れるボディーメンテナンスを来場者と一緒に行ったり、来場者とリレーゲームに興じたりするなど、終日、和やかなムードの中で市民と交流を深めた。

キャンプでは練習の合間、タイの選手らは市担当者の案内を受けて市内を散策した。同市発祥の「秋田犬」に触れたり、神社境内の秋田杉の大木を撮影してインスタグラムなどに投稿したりするなど、リラックスした様子を見せた。

大館市は 18 年 12 月にタイを相手国とするホストタウンに登録。それに先立つ同年 10 月 24 日、「タイ脳性麻痺スポーツ協会」と事前キャンプに関する覚書を締結した。今回の合宿期間中、JR 大館駅舎内にボッチャの体験コートの特設した

ほか、合宿に先立つ同年 8 月 25 日にはボッチャを含む同大会正式種目の体験会や、県内在住のタイ人会のメンバーが同国の文化を紹介するブースを設けたりするイベントを開き、スポーツのみならず、教育や経済活動など幅広い分野で同国との交流を図ってきた。

市教育委員会スポーツ振興課の工藤史尚さんは「まちなかですれ違う市民からあいさつされるなどしたタイの選手団の皆さんからは『まるで家に帰って来たようでうれしい』との声も聞かれた。タイ関係者との交流を通じて、市民の障害者スポーツと『共生社会』への関心が高まりつつある。パラリンピック本番では、タイのチームが好成績を収められるよう市民一丸となって応援したい」と意気込みを見せた。



「ボールゲームフェスタ」開催を計画

新型コロナ感染拡大防止で中止に

【調査ホストタウン】

山形県 鶴岡市

【イベント開催日】

2020/3/15

【相手国・地域】

ドイツ、モルドバ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

小真木原総合体育館（予定）

【調査日】

2020/03/15

【補足情報】

ホストタウンとしてドイツのボッチャ競技、モルドバのパラ柔道の選手を受け入れることとしている山形県鶴岡市は、2020年3月7日に予定していた

「SOMPO ボールゲームフェスタ in 鶴岡」の開催を、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

同イベントは日本トップリーグ連携機構が主体となり、東京オリンピック・パラリンピックイヤーにオリンピックやトップアスリートを招へいし、子どもたちにさまざまな種目を同時に体験できるプログラムの実践を通して機運を醸成することを目的としている。特に、幼児期以上の子どもたちにボールゲームの素晴らしさを伝えるとともに、身体を動かす楽しさを体験しながら基本的な技術の習得や技術力をアップする機会を設け、次世代の子どもたちのスポーツライフを支援することを目指していた。

鶴岡市にある慶応義塾大学先端生命科学研究所と、イベントのメインスポンサーである SONPO ホールディングスの損害保険ジャパン日本興亜が、先端科学技術を活用して社会課題の解決を図り、地域・社会への貢献に寄与することを目的とした包括連携協定を締結していた。そこから、同研究所経由で同イベントの紹介が鶴岡市にあり、イベント開催につながった。

鶴岡市は、キッズチャレンジで体験を行うサッカー・バレーボール・バスケットボール・ラグビーの各協会に協力を依頼し、講師の派遣を取り付けた。特にラグビーは、今までメジャーではなかったが、昨年のラグビー・ワールドカップの盛り上がりを受け特に期待していた。参加者もほぼ定員に達するところだった。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、主催団体等と開催可否判断について国の動向・方針を注視。そうした中、2月26日の首相会見での、「この1～2週間が感染拡大防止に極めて重要であること、また、多数の方が集まるような全国的なスポーツ・文化イベント等については大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後2週間は、中止、延期または規模縮小等の対応を」との要請や、27日には、「小中高等学校・特別支援学校の一斉休校を要請する」旨としたメッセージがあり、主催団体等とも協議し中止の最終判断をした。

※本表は概算値です。なお、この欄に記入する場合は、必ず「その他」欄に「本表に記入した事項と重複する事項がある」と記載する必要があります。なお、この欄に記入した事項は、必ずしも追加したものではありません。

「あすチャレ Academy!」開催を計画

新型コロナ感染拡大防止で中止に

【調査ホストタウン】

山形県 鶴岡市

【イベント開催日】

2020/3/8

【相手国・地域】

ドイツ、モルドバ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

小真木原総合体育館（予定）

【調査日】

2020/03/15

【補足情報】

ホストタウンとしてドイツのボッチャ競技、モルドバのパラ柔道の選手を受け入れる山形県鶴岡市は、2020年3月8日に予定していた「あすチャレ Academy!」の開催を、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

「あすチャレ Academy!」は、日本財団パラリンピックサポートセンターが主催する、障害者のリアルを当事者講師から聞き、学び、共に考える研修プログラム。鶴岡市は、共生社会実現関連事業を推進していく「共生社会ホストタウン」に19年10月11日付で登録されたことから、市民の共生に関する意識を高めるとともに、障害者への理解・知識を深めることでユニバーサルデザインのまちづくりにつなげていくことを目的に、この企画の実施を決めた。

参加募集は、市内全高等学校や障害者福祉団体を中心に一般向けに行い、30人以上が参加予定だった。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、主催団体等と開催可否判断について国の動向・方針を注視。そうした中、2月26日の首相会見で、「多数の方が集まるような全国的なスポーツ・文化イベント等については大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後2週間は、中止、延期または規模縮小等の対応を」との要請を受け、主催団体等とも協議の上、中止の最終判断を下した。

鶴岡市のオリンピック・パラリンピック・ホストタウン推進室の三浦巧さんは「これまでも、ドイツやモルドバの代表の皆さんと市民が交流を重ねてきた。そうした中で、オリンピック・パラリンピックに向けての機運が高まってきたところだったので、状況を注視しながら、この盛り上がったオリンピックへの機運を持続できるように頑張っていきたい」と話す。

あすチャレ！Academyの開催

～差別がないまちづくりを進めるための研修会～

いよいよ東京パラリンピック競技大会開催まで前半年となりました。福岡市では、大倉造りかけとして、障がいがある方ではない方も、共に活躍できる社会、共生社会実現に向けて活動を推進しております。

あすチャレ！Academyではパラリンピックやバラスポーツを題材に障がい者の“リアル”を当事者側面から知る、学び、一緒に考えます。

障がいについて知ることで、考えること・気づくことができるようになり、行動できるようになる。障がいがある人もない人も、思いやり、支えあい、違いを受け入れて、よりよい社会をつくるための場！夢を踏み出すチャンスです。地域の力、意識の力、学生の方など、多くの方々に参加を呼びかけております！

日 時 2020年 3月8日（日）10：00～12：00

会 場 小浜本郷総合体育館 大会棟3階

会 費 無料

講 師 特 委 員 氏（はやし ひでき）

文芸春秋による文藝の紹介や下の階の911号館開け、社会福祉法人に入社した会社でパラアスリートが活躍している、パラアスリートが活躍している会社、障がい者35年、障がい者75年の両方の経験を話します。

主 催 公益財団法人 日本財団パラリンピックサポートセンター、福岡市、福岡市障害者委員会、福岡市スポーツタウン推進委員会

申込 先 来チャレ！Academyで検索（<http://www.parasports-japan.academy/>）

申込方法 2月20日（水）まで電話またはメールで申込してください

お名前（ふりがな）	年 齢	応募の必要事項の欄に	備 考
氏 名	お名前	2020年 申込期間を空欄にしてください	

お問い合わせ・申込先 福岡市パラリンピックサポートセンター 本会事務局
TEL 25-8131 FAX 25-8134

パラリンピアン杉内周作さんが講演

共生社会を児童に分かりやすく紹介

【調査ホストタウン】

山形県 鶴岡市

【イベント開催日】

2020/2/14

【相手国・地域】

ドイツ、モルドバ

【イベント参加者】

朝暘第三小学校の 6 年生 103 人

【競技】

【調査場所】

鶴岡市朝暘第三小学校

【調査日】

2020/02/14

【補足情報】

鶴岡市は 2020 年 2 月 14 日、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業の一環として、市立朝暘第三小学校で日本人パラリンピアンによる講演会を開催した。アテネパラリンピック水泳 400 メートルリレーで銅メダルを獲得した杉内周作さんが、「『自ら作る共生社会』～みんなが生きやすい環境をめざし～」と題し、同小の 6 年生 103 人に対し、共生社会とはどういうものなのかを自分の体験を基に分かりやすく話した。

同市は、16 年 6 月にドイツ、同 12 月にモルドバを相手国とするホストタウンに登録された。ドイツはボッチャ、モルドバはパラ柔道の合宿誘致を進めるなど、パラ競技を中心とした交流を当初から目指し、19 年 10 月には共生社会ホストタウンに追加登録されている。

この日講演した杉内さんは、25 歳の時に網膜色素変性症という視野が狭くなる障害が明らかになった。この障害は、視力を完全に失う可能性も高く、将来に対する希望を失った時期もあったが、今を明るく生きるためにパラリンピックを目指したという。「目標を達成するには、諦めず、本気で思い込むことが大事」と話した。また、共生社会を実現するためには、「みんなが生きやすい環境にするには、自ら周りを作らなければならない。そのためには、常に感謝を忘れず、周りの人との共通点を探し、想像力を持とう」と集まった児童に呼び掛け た。

話を聞いた 6 年生の菅原大聖君は「これから中学生になるとたくさんの人と出会う。その時に違いを認め合いながら生活していきたい」との感想を話した。

鶴岡市ホストタウン推進室長三浦三成さんは「オリンピック・パラリンピックをきっかけに心のバリアフリー、心の共生というものをレガシーとして残していきたい」と話す。



ブルガリア新体操チーム「ROSE CAMP」を実施へ

公開演技会やパレードも

【調査ホストタウン】

山形県 村山市

【イベント開催日】

2020/1/23

【相手国・地域】

ブルガリア共和国

【イベント参加者】

【競技】

新体操

【調査場所】

村山市農村環境改善センター

【調査日】

2020/01/23

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックに向け、村山市のホストタウン対象国ブルガリアの新体操ナショナルチームが行う「ROSE CAMP（ローズキャンプ）」の開催委員会（会長＝志布隆夫市長）が2020年1月23日、村山市農村環境改善センターで開かれた。会の冒頭、志布市長よりブルガリア代表が団体と個人2人の出場権を獲得したことが発表された。

同キャンプは2017年から行われ、4回目となる今年は五輪の競技期間を含む7月15日～8月15日の日程で行われる。会では期間中、トレーニングのほか公開演技会や凱旋パレードを行うことを決定した。

選手団は7月16日に同市に入り、30日まで滞在。期間中、トレーニングのほか歓迎レセプション、公開演技会を行った後、2次キャンプ地に移動する。8月7日～9日に行われる五輪新体操個人・団体に出場してから、10日に再び同市に入りJR村山駅から甕葉プラザまでの約400メートルをパレードし、12日に同市を離れる。

市は大会期間中、競技に合わせて市民の観戦ツアーやパブリックビューイングを企画し、観戦ツアーでは市民が寄せ書きしたブルガリア国旗を掲げる予定。東京・江東区の武蔵野大有明キャンパスにはホストタウンハウス「村山市×ブルガリア」を開設する。

志布市長は「今までの3回のキャンプもうまくいった、今回も成功させて選手の皆さんに良い成績を残してほしいと思う。ブルガリアの新体操は村山市に根付いてきた。感謝を伝え、今後も交流を深め新体操の村山市といわれるようになっていきたい」と話した。



ブルガリア新体操チームのキャンプが切手に

日本郵便と村山市がタッグ、観光発展の一助に

【調査ホストタウン】

山形県 村山市

【イベント開催日】

2019/12/25

【相手国・地

域】ブルガリア

【イベント参加者】

【競技】

新体操

【調査場所】

村山市役所

【調査日】

2020/01/21

【補足情報】

日本郵便東北支社は東京五輪・パラリンピックのホストタウン事業を記念し、村山市のオリジナルフレーム切手を製作した。村山市役所で 2019 年 12 月 25 日、日本郵便と村山市の関係者およそ 20 人が参加して贈呈式が行われた。村山市は 16 年 12 月、ブルガリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、17 年から同国の新体操ナショナルチームの事前合宿を受け入れているほか、ブルガリア民族合唱団の招へい等を通じて、市民がブルガリア文化に触れる機会を増やすといった交流事業を進めている。

今回のオリジナルフレーム切手の制作もホストタウン交流事業の一環で企画された。フレームは、ブルガリア新体操チームの市内での事前キャンプや公開演技会、村山市内の観光地の他、ブルガリアの「バラの谷」と村山市の「東沢バラ公園」などブルガリアと村山市をつなぐ象徴でもあるバラの写真など 10 種類。ブルガリアの「バラの谷」の写真はブルガリアの人気写真家ディミトラ・レフテロヴァさんが撮影した。

同支社の二階堂明浩経営管理本部長が「観光発展の一助となるようにしたい」とし、志布隆夫市長も「市とブルガリアの魅力を発信する切手になった」と話した。

フレーム切手は 84 円切手 10 枚で構成し、A4 サイズの台紙に収める。500 セット限定で 1 セット 1330 円で販売する。市内の全郵便局で扱うほか、日本郵便のウェブサイトでも注文を受け付ける。



新年祝賀会で「東京五輪音頭 2020」披露

地元舞踊団体、新年の席を盛り上げる

【調査ホストタウン】

山形県 村山市

【イベント開催日】

2020/1/6

【相手国・地域】

【イベント参加者】

市内の企業や団体、官公庁から約 250 人

【競技】

【調査場所】

甕葉プラザ

【調査日】

2020/01/06

【補足情報】

2020年1月6日に開かれた村山市新年祝賀会で、東京五輪・パラリンピックの年を盛り上げていこうと市内舞踊団体が「東京五輪音頭 2020」を披露し、新年の席を盛り上げた。村山市は16年12月、ブルガリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、市を挙げてオリンピック・パラリンピックの機運醸成に取り組んでいる。

この日集まったのは、市内の企業や団体、官公庁から約250人。会では、志布隆夫市長、大山正弘市議会議長のあいさつの後、三味線民謡・正徳会による唄と演奏、日本舞踊「若二三会（わかふみかい）」と「民舞楽友会（みんぶがくゆうかい）」の踊りで「東京五輪音頭 2020」が披露された。

参加者からは、「初めて『東京五輪音頭 2020』の踊りを見た。思っていたより現代風のアレンジがうまくできていて、リズムカルで明るく洗練されていると感じた」「昭和の『東京五輪音頭』が元になっていると聞いていたが、新しい時代、令和の五輪音頭にふさわしい踊り。軽快なダンス風の振りもあるので、小さい子どもや若い人たちにも受け入れられると思う。次の世代に永く残ってほしい」など多くの感想が聞かれた。

踊りを披露した日本舞踊若二三会の師匠、若柳二三睦（わかやぎふみちか）さんは「人生で2度目の東京オリンピック。以前は遠い場所の出来事のようにだったが、今回はとても身近に感じている。オリンピックを盛り上げる力になりたい」と語った。また、弟子の若柳里二三（さとふみ）さん、若柳二三貴（ふみたか）さんは「ホストタウン事業や山形出身選手（太田渉子選手など）の活躍もあり、オリンピック・パラリンピックが楽しみ。オリンピック音頭を通じて選手を応援したい。聖火リレーで披露するための練習会も開くので、たくさんの人と一緒に踊りたい」と話していた。



視覚障害のある女子柔道選手が母校で講演

ハンディがありながら前向きに取り組む姿勢に生徒ら共感

【調査ホストタウン】

福島県 いわき市

【イベント開催日】

2019/11/7

【相手国・地域】

サモア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

いわき市立平第四小学校、いわき市立平第一中学校

【調査日】

2020/03/17

【補足情報】

画像は全て、半谷静香オフィシャルブログ Powered by Ameba 講演「平第四小学校・平第一中学校」より引用。

<https://ameblo.jp/hangai-shizuka/entry-12543505075.html>

エイベックス使用許可済。

福島県いわき市出身のパラリンピック選手、半谷静香（はんがい・しずか）さん（視覚障害者柔道 48 キロ級／エイベックス所属）が 2019 年 11 月 7 日、自身の母校である、いわき市立平第四小学校といわき市立平第一中学校で講演を行った。いわき市は 16 年 6 月、サモアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。市民に向けた機運醸成の試みのひとつとして、地元出身のパラリンピアンである半谷さんの講演が企画された。

講演会は、平第一中学校校長で、半谷選手が中学校に通っていた時の恩師でもあった西内英理（にしうち・ひでまさ）さんが主導して実現した。西内さんは前年、いわき市で行われた半谷選手のトークショーに参加。地元出身の教え子が、果敢に世界を目指していることに心を打たれ、現在在籍中の児童・生徒たちにもぜひ半谷選手の話聞いてほしいと企画した。

半谷選手が訪れたのは、いわき市内の母校、平第四小学校と平第一中学校。平第四小学校では 5～6 年生が、平第一中学校では全校生徒が参加した。

午前中に訪れた平第四小学校は、先の台風 19 号とその翌週の大雨で大きな被害を受けた地域にあり、児童の多くが床上浸水の被害を受けるなどしたが、当日は笑顔で半谷選手を出迎え、歓迎した。体育館で行われた講演会では、半谷選手の小学校時代の思い出をはじめとするトークから、児童からの質問コーナー、6 年生の児童代表によるお礼の言葉で締めくくられた。児童からは、「メダルの色はどうやって分かる？」という質問や、「自分たちと同じ学校出身の人が、ハンディを持ちながらも前向きに取り組む姿勢がすごい。自分たちも前向きに取り組みたい」という声が聞かれた。

午後には、中学時代の母校である平第一中学校の体育館で講演した。全校生徒 535 人が参加。1 時間にわたる講演の中で、半谷選手から壁にぶつかりながらも試行錯誤した経験が語られた後、質問コーナーへ。「目が悪くて損したと思うことはあるか？」から「料理はしますか？」まで幅広い質問が活発に飛び交った。企画した西本校長は「生徒たちから、地元出身という身近な立場である半谷選手

が、辛さ、厳しさを乗り越えて世界のトップを目指す姿に心を打たれたという声を聞き、うれしい」と話した。

半谷選手は「水害の被害を受けた地元の子どもたちのために自分ができることをトーク時間に詰め込んだ」とし、「子どもたちからの素直な質問で、自分も考え直す機会を持てた」と笑顔を見せた。



いわき FC パークでパラスポーツ体験イベント

来場者 1000 人が体験・トークを通じて理解深める

【調査ホストタウン】

福島県 いわき市

【イベント開催日】

2019/11/10

【相手国・地域】

サモア

【イベント参加者】

約 1000 人

【競技】

【調査場所】

いわき FC パーク（社会人サッカーチーム「いわき FC」の商業施設併設型クラブハウス）

【調査日】

2020/03/17

【補足情報】

東京パラリンピック開催まで 300 日となった 2019 年 11 月 10 日、いわき市の「いわき FC パーク」で「オリンピック・パラリンピックを体験！ふくしまフェスティバル in いわき」が開催された。約 1000 人の来場者がパラスポーツを体験したり、パラリンピック出場を目指す選手たちのトークショーに参加したりして、パラリンピックへの理解を深めた。イベントは福島県の主催で行われた。

19 年 4 月、いわき市に活動拠点を移した日本パラサイクリング連盟といわき市、「いわき FC パーク」を運営するいわきスポーツクラブが「スポーツを通じた共生のまちづくりに関する連携協定」を締結し、障害者スポーツの普及を通じた共生社会の促進などに取り組んでいる。同イベントは、そのいわき FC パークを会場として、いわき市や日本パラサイクリング連盟と連携し、東京パラリンピックの機運を盛り上げることを目的に開催された。

会場のパラリンピック競技体験コーナーでは、パラサイクリング（ハンドサイクル）やボッチャ、ブラインドサッカーなどが行われ、参加者がパラスポーツを実際に体験し、理解を深めることができるようにしたほか、パラリンピック聖火リレーのトーチも展示し、実際に手にする親子の姿も見られた。

トークショーには、ソフトボールのオリンピックメダリスト高山樹里さんと東京パラリンピック出場を目指すパラテコンドーの伊藤力さんが登壇。いわき市出身の芸人・あかつさんによるお笑いステージも会場を盛り上げた。



ホストタウン相手国サモアと多彩な交流

新型コロナウイルス感染拡大防止で交流プロジェクト中止に

【調査ホストタウン】

福島県 いわき市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

サモア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/17

【補足情報】

福島県いわき市と同市のホストタウン相手国であるサモアはこれまで、市内の高校生を同国へ派遣し現地の高校生との文化交流する事業や、2018年5月の第8回太平洋・島サミットの開催時期に合わせ、同国の高校生を招へいし、市内の高校生と7人制ラグビー競技によるスポーツ交流等を実施するなど、さまざまな交流事業を実施してきた。ラグビー・ワールドカップ 2019 では、同国ラグビー代表チームが同市で事前キャンプを行い、多くの市民と交流した。

20年2月18日からは、太平洋島しょ国ホストタウン青年プロジェクトを活用した交流を行い、同国とのこれまでの友情や信頼関係を大切にしながら、同市の国際化や文化・スポーツの進展につながるよう友好関係を深めていくとともに、東京オリンピック・パラリンピックに向けた機運醸成につなげていく予定だった。

同事業は19年11月、内閣官房オリパラ事務局からの「ホストタウン太平洋島しょ国青年プロジェクト」の参画公募により立ち上げを検討。同年12月に最初の企画提案書を提出し、その後、受入先との調整により事業の具体案が見えたことから、20年1月に改めて企画提案書を提出し、受入者調整などを進めることになっていた。

今回、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため同事業が中止になったことに関し、同市文化スポーツ室スポーツ振興課東京オリンピック・パラリンピック担当の原野紀伸（としのぶ）主査は「ホストタウンサミット発表を含めて注目が集まることを期待していたが、同時期に当市の一大イベントであるサンシャインマラソンも中止したことから、新型コロナウイルス影響による活動の中止は仕方ない判断と思われる」と話す。

「オリンピックデー・フェスタ」開催

村民 118 人がオリンピックと交流

【調査ホストタウン】

福島県 大玉村

【イベント開催日】

2020/2/16

【相手国・地域】

ペルー

【イベント参加者】

村民 118 人

【競技】

【調査場所】

大玉村民体育館

【調査日】

2020/02/16

【補足情報】

「オリンピックデー・フェスタ in 大玉」が 2020 年 2 月 16 日、大玉村の大玉村民体育館で開催された。「オリンピックデー・フェスタ」は、日本オリンピック委員会が東日本大震災の復興支援の一環として 11 年から被災 3 県を中心に開催している。大玉村では初開催ということもあり、村民 118 人が参加しオリンピックと交流した。また、大玉村は 19 年 4 月、ペルーを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、同国との交流活動を進める一方、村民を対象にした機運醸成事業として日本人オリンピック・パラリンピアンとの交流事業も展開しており、「オリンピックデー・フェスタ」は、その関連イベントにも位置付けられている

「オリンピックデー・フェスタ in 大玉」に参加したのは小野寺志保さん（サッカー）、大山加奈さん（バレーボール）、齋藤信治さん（バレーボール）、田中琴乃さん（体操・新体操）、杉本美香さん（柔道）、馬場智子さん（ソフトボール）、中村真衣さん（水泳）の 7 人。オリンピックが村民とハイタッチを交わしながらの入場で開会式が始まり、一気に盛り上がりを見せた。大山さんは「皆さんに会えるのを楽しみにしていた。たくさん話し掛けてほしい。スポーツは見たり応援したりするのも楽しみの一つ。笑顔いっぱいの楽しい時間を過ごしましょう」とあいさつした。

大玉村玉井小学 6 年の八木田君と鈴木君は「チームジャパンとして、チーム大玉として、今日一日全力で戦うことを誓います」と元気よく宣誓した。その後、2 歳～82 歳と幅広い世代の参加者を 5 つのチームに分け、オリンピックらがチームリーダーとなり 4 種のスポーツプログラムで競技を行った。

手つなぎ鬼では、鬼役のオリンピックらが村民を歩きながら追いかけて次々と捕まえる。大玉転がしでは 2 人ずつ大玉を転がすリレー方式で行われた。デカパン競争では、バトンの代わりに 2 人分が入る大きなパンツの着脱を手助けしながら村民と一緒に走ったほか、5 色玉入れでは、玉を全部入れたチームが勝ちという変則ルールで参加者全員が戦った。

「テレビでしか見たことのない選手と一緒に競技をした」とうれしそうに話す小学生の渡辺君は「とても楽しかった。バレーの大山選手や齋藤選手の大きさにとても驚いた」と笑顔を見せた。

競技が終わると全員で記念撮影。その後、「花は咲く」を合唱し、オリンピックに対する質問コーナーが設けられた。直接オリンピックに聞くことができた参加者からは「得意な種目は？」「身長を伸ばすためにしている事は？」「試合前に緊張するのか？」など、たくさんの質問が飛び交った。

閉会式では表彰式も行われ、同率 2 位のチームには、銀メダルが一つしか準備されていなかったことから、急きょ柔道の杉本さんが、自身が獲ったロンドンオリンピックでの銀メダルを小さな子どもに掛けるサプライズもあった。

体操・新体操の田中さんは「一生懸命にプレーし、本気になっている姿に感動した。このイベントのスローガンでもある『スポーツから生まれる、笑顔がある』の通り、たくさんの笑顔が見られてうれしかった。復興の意も込められている東京オリンピック・パラリンピックにも、ここから熱い声援を送ってほしい」とあいさつした。

村民の吉田さんは小学 5 年生の息子さんと参加。「村のお知らせでイベントを知った。体の弱い息子が、今日のイベントをととても楽しみにしていた。オリンピックから何かを感じてほしかった。」と思いを語った。小学 2 年の娘さんと参加していた常泉さんは「このような機会はなかなかないので、娘と思い切り楽しんだ」と語り、「玉入れが楽しかった」と娘さんも笑顔を見せた。

押山利一村長は「2015 年に本村とペルー共和国マチュピチュ村が友好都市協定を締結し、その後、ペルー共和国のホストタウン登録が正式に決定してから村全体が明るくなった。オリンピックイヤーでもある今年に、このようなイベントができたことを大変うれしく思い感謝している」と話す。

会場の外では、地元の有志「縁（えにし）」たちが地元野菜をたっぷり使った豚汁を振る舞った。



世界 12 カ国の子どもと県内児童がタグラグビーで交流

オリンピックの試合が行われるあづま球場で記念撮影も

【調査ホストタウン】

福島県 大玉村

【イベント開催日】

2019/8/2

【相手国・地域】

ペルー

【イベント参加者】

福島県内の小学生 184 人と関係者 73 人

【競技】

【調査場所】

あづま総合運動公園体育館

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

第 29 回世界少年野球大会交流事業として 2018 年 8 月 2 日、あづま総合運動公園体育館で福島県内の小学生が外国人の子どもたちとタグラグビーを体験するイベントが開催された。大玉村からは、スポーツ少年団の 5 年生と 4 年生の 7 人が参加し、同村の東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン相手国であるペルーの子どもたちと対戦した。なお、このイベントは当初、屋外で開催予定だったが、猛暑のため体育館に会場を移した。

この日参加したのは、福島県内の小学生 184 人と、ガーナ、スイス、オーストラリア、アルゼンチン、フランス、中国、タイ、オランダ、ラオス、アメリカ、ペルーの 12 カ国の子どもたち。

福島県文化スポーツ局長の野地誠さんのあいさつに続き、福島県体育協会の根本浩之さんからタグラグビーの競技方法などを学んだ後、各国の子どもを含めた 5 人 1 チームで 8 チームに分かれ競技を楽しんだ。大玉村からの参加者はペルーの子どもたちと対戦したものの、子どもたちは勝ち負けに関係なく、タグラグビーを楽しんだ。競技体験には郡山北工業高校ラグビー部が協力した。

競技を終えた後、東京オリンピックのソフトボールと野球の予選が開かれるあづま球場で記念撮影を行った。完成後 31 年を経過したあづま球場で、オリンピックの一部の試合が行われることが決まり、1 年 2 カ月もの間、改修工事が行われていた。完成したばかりの新しいあづま球場で、オリパラ推進室職員がガイドとなり、外野グラウンドの見学なども行った。



「おおたま夏まつり」でペルーとの交流事業

伝統舞踊披露などでペルーの魅力に触れる

【調査ホストタウン】

福島県 大玉村

【イベント開催日】

2019/8/4

【相手国・地域】

ペルー

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

毎年恒例の「おおたま夏まつり」2019年が8月4日、大玉ふれあい広場で行われた。ペルーのマチュピチュ村初代村長を務めた故野内与吉氏が同村の出身であったことが縁で、15年に同村とペルー共和国マチュピチュ村が友好都市協定を締結した。さらに同村は19年4月、ペルーを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同年の夏祭りは、ペルーとの交流を意識した内容となった。

まず、同村国内外交流協会が、ペルー共和国のホストタウンに決まったことや今後の交流事業をPRするためにブースを設けるなどして祭りを盛り上げた。さらにステージでは、ペルーのダンスチームによるマリネラ（ペルーの伝統舞踊）のショーが行われた。日本在住のペルー人から成る3チームが華やかにステージを飾り、観客からは「初めてペルーの民族舞踊を見た。華やかだった」との声が聞かれた。

交流協会ブースでは、大玉村マスコットキャラクター「たまちゃん」がペルーの国旗を持ったイラストの塗り絵に子どもたちが色を付け、その場で缶マグネットにするワークショップも開いた。参加した子どもたちは「自分のデザインの缶マグネットができてうれしい」と笑顔を見せた。このほかブースでは、ペルーのPRパネルなどを展示するなどして、村民に対してホストタウン交流事業の周知を図った。





モンゴルのウェイトリフティング選手らが事前キャンプ

地域住民との交流、日本文化体験も

【調査ホストタウン】

茨城県 行方市

【イベント開催日】

2019/8/18

【相手国・地域】

モンゴル

【イベント参加者】

常時公開練習＝市内の園児や小学生など約 1000 人が見学

【競技】

ウェイトリフティング

【調査場所】

【調査日】

2020/02/18

【補足情報】

行方市で 2019 年 8 月 18 日～9 月 2 日、モンゴルのウエイトリフティング・ナショナルチームの事前キャンプが行われた。同市は 19 年 6 月、モンゴルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されており、同国からは、17 歳～25 歳の男女選手 8 人とスタッフ 2 人の合計 10 人が来日した。一行は 16 日間にわたり市内で練習に励んだほか、地域住民との交流と日本文化体験を行った。

初日となる 18 日には、市民交流として歓迎レセプションが行われ、同事業実行委員会メンバーを中心に行方市産の食材を使った料理を振る舞ったほか、市内の小学生が浴衣やお面を身に着け地元のおはやし「西小ばやし」を披露。駐日モンゴル国特命全権大使も駆け付け、会場を盛り上げた。

選手団は翌日、同市が用意した「霞ヶ浦ふれあいランド旧レストランみずまる特設施設」でトレーニングを開始。常時公開練習を行い、市内の園児や小学生など約 1000 人が多く見学に訪れ、交流する様子が見られた。

市内にはウエイトリフティングのスクールや部活動を行う学校が無いこともあり、23 日には隣の石岡市の石岡一高のウエイトリフティング部の学生が訪問し合同練習を行った。同委員会を担当する行方市企画部企画政策課・地域経営グループ係長の荒野晃一さんは「言語の違いはあれど、世代も近いことから良い交流ができていた」と振り返る。

24 日には、茨城県ウエイトリフティング協会のプログラムの下、シルバーリハビリ体操指導士やスポーツ少年団員 50 人を対象に「ウエイトリフティング体験教室」を開催。指導に当たったモンゴルの選手は、体幹、体の使い方や体勢の維持方法、軽量のバーベルを持ち上げるサポートなどを通し、競技の普及を図った。参加した児童からは「自分のやるスポーツでも生かせそうな体のバネや使い方が分かった」と喜びの声も多く上がった。

宿泊所では、モンゴルの風土や食文化に合わせ肉を多めに用意。味付けも現地の調理方法などの調査を行い、極力「塩味」にするほか、生野菜を出さないなどの工夫も行った。日本文化体験の一環で、餅つき体験やバーベキュー体験を行った。選手たちはブランド豚「美明豚（びめいとん）」に喜び、何度もお代わりする様子も見られた。

モンゴルのウエイトリフティング選手ら老人ホームなど訪問

立浪部屋朝稽古見学で刺激を受ける選手も

【調査ホストタウン】

茨城県 行方市

【イベント開催日】

2019/8/18

【相手国・地域】

モンゴル

【イベント参加者】

【競技】

ウエイトリフティング

【調査場所】

【調査日】

2020/02/18

【補足情報】

モンゴルのウエイトリフティング・ナショナルチームの選手団が 2019 年 8 月 18 日、事前キャンプにおける交流事業の一環で市内の老人ホームを表敬訪問し、高齢者らと触れ合うとともに、日本の介護制度を学んだ。同市は 19 年 6 月、モンゴルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、同国のウエイトリフティング・ナショナルチームが同日から 9 月 2 日までの日程で事前合宿を行っていた

モンゴルでは、最後まで家族が看取る文化があることから、高齢者らと触れ合いながら選手は家族のことを思い出すなど、さまざまな感情を抱き、涙する姿もあった。文化の違いに戸惑いながらも、選手からは「なぜ家族と離れ離れになるのか」という質問なども上がった。

施設の入所者とは、車いすで 5 メートルを移動し、緩衝材などを使って作った「バーベル」を持ち上げてからゴールまで向かうレース体験も行った。普段、車いす生活を送り、あまり立ち上がることのない入所者が立ち上がり、生き生きとバーベルを持ち上がるなどして喜びを分かち合った。

その後、日本文化体験が行われ、鹿島アントラーズのホームゲーム観戦や市内神社の祭礼見学なども行った。書道体験では、それぞれが選んだ漢字や言葉を扇子にしたためた。選手からは「思ったより難しい」という場面もあったが、思いを込めて完成させた扇子を手に、うれしそうな姿を見せた。モンゴルでも有名な 68 代横綱の朝青龍関の甥（おい）・豊昇龍（ほうしょうりゅう）関が所属する立浪部屋（つくばみらい市）の朝稽古見学、県内視察、路線バス乗車体験や金魚すくい体験、ハーバリウム体験、東京オリンピック会場の外観見学など、幅広いジャンルで日本文化や茨城県への知識を深めた。立浪部屋の朝稽古の様子を見て、「同世代の豊昇龍関の頑張る姿に刺激を受けた」と話す選手もいた。

市内にある化蘇沼稻荷神社の例大祭見学では、奉納相撲や巫女（みこ）舞を見学。選手団のあいさつの時間では、東京オリンピックでの活躍を誓った。

宿泊所での朝夕の食事のほか、昼食は同市の女性団体が支援。行方市の食材を使ったカレーや管理栄養士の提案したメニューを提供した。通訳のできるスタッフ不在でも、ジェスチャーで交流を図り、次第に選手も打ち解けていった



モンゴルのウェイトリフティング選手ら 2000 人と親交

滞在 16 日間、多彩なコミュニケーション図る

【調査ホストタウン】

茨城県 行方市

【イベント開催日】

2019/8/18

【相手国・地域】

モンゴル

【イベント参加者】

2000 人（16 日間通算）

【競技】

ウェイトリフティング

【調査場所】

【調査日】

2020/02/18

【補足情報】

モンゴルのウエイトリフティング・ナショナルチーム選手らが 2019 年 8 月から 9 月にかけて行方市内で行った事前合宿で、公開練習に訪れる市民や児童クラブの子どもたちをはじめ、昼食の支援を行う地域女性団体など約 2000 人と親交した。

9 月 1 日に開かれた「フェアウェルパーティー」では、市民合唱団の歌声で滞在最後の夜を楽しんだ。選手は一人一人、事前キャンプの振り返りや同市での思い出を話したほか、東京オリンピックへの意気込みを語った。選手からは「行方市の食材の豊富さ」「日本人の時間の正確さ」への驚きの声が上がった。「行方市の皆さんに温かく受け入れてもらえてうれしかった。東京オリンピックではメダルを取りたい」と意気込む様子も見られた。

選手はモンゴル・オリンピック委員会の歌も披露。来場者は歌声に耳を傾けた。歓迎の文字が並ぶ特設ステージでは、選手と写真を撮影したいという要望が相次ぎ、選手が引っ張りだこになった。

行方市企画部企画政策課・地域経営グループ係長の荒野晃一さんは「16 日間の合宿中に、さまざまなコミュニケーションができて（選手らを）息子・娘のように感じるくらいだった。成田空港で見送った時には胸が熱くなった」と振り返る。

この事前キャンプでは、通訳としてモンゴル籍のボルド・ゾルジャルガルさんがチームに同行した。「行方市の自然や住民の温かさに感動して、ここに住みたいと思った」とボルドさん。キャンプ後の 19 年 11 月に同市に移住、地域おこし協力隊に就任した。その後、大使館とのやり取りやモンゴル国選手団対応などを担当している。

今後、事前キャンプの受け入れのほか、国内外のモンゴル国民との交流イベントの開催、JETRO や JICA との連携を通し同市の農作物の輸出などを計画。都市交流

推進やボルドさんを中心とした地域おこし協力隊による同市でのモンゴル国文化の伝達に注力するほか、国内のモンゴル国イベントへの出展、市内小学校での給食で、モンゴルの特別メニュー提供も予定している。



つくば市役所でデイカウンター除幕式

大会の感動を共有できる雰囲気づくりを

【調査ホストタウン】

茨城県 つくば市

【イベント開催日】

2019/12/19

【相手国・地域】

スイス

【イベント参加者】

つくば市職員含め約 50 人

【競技】

【調査場所】

つくば市役所

【調査日】

2019/12/19

【補足情報】

茨城県つくば市で聖火リレーが行われるまで残り 200 日となった 2019 年 12 月 19 日、残り日数を示すデイカウンターがつくば市役所に設置された。

同日 9 時から、つくば市役所 1 階でデイカウンター除幕式が行われた。除幕式で五十嵐立青市長は「この聖火リレーを一つの軸にして機運を高め、オリンピック・パラリンピック両方をしっかり盛り上げていきたい」とあいさつ。神谷大蔵市議会議員も「市民の皆さまにも、今大会を身近なものに感じられるように」「職員の皆さまには、大会の感動を共有できる雰囲気づくりをお願いしたい」と語った。

デйкаウンターのサイズは、幅 130 センチ、高さ 210 センチ。200 日後の 20 年 7 月 6 日につくば市で聖火リレーが行われるまで、残り日数がカウントダウンされる。

同市オリンピック・パラリンピック推進室室長の沼尻祐一さんは「市としてどう盛り上げていくかはこれから検討したい」と話す。聖火リレーまで残り 100 日の節目には、記念行事を予定しているという。デйкаウンターは今後、除幕式が行われた市役所 1 階の奥から、正面玄関近くの柱の手前に移動する予定。

聖火リレーは、つくばセンター広場（つくば市吾妻 1）から始まり、最終到着地は同市役所近くの研究学園駅前公園（つくば市研究学園 2）。ペDESTリアンデッキを北上し、北大通りを西へ進み、研究学園駅前公園方面に向かうルートとなっている。到着後、同公園を会場にセレブレーションが開催される。

除幕式では、来場者の先着 30 人に卓上カレンダーを進呈した。卓上カレンダーには、つくば市がスイス代表チームのホストタウンである旨が記されている。つくば市では、オリンピック・パラリンピックに際し、スイス代表チームの事前キャンプが行われる。



スイストライアスロンチームが公開練習

「昼食お手伝い」「こども記者クラブ」などの交流事業も

【調査ホストタウン】

茨城県 つくば市

【イベント開催日】

2019/8/9

【相手国・地域】

スイス

【イベント参加者】

昼食お手伝い＝小中学生 8 人、こども記者クラブ＝小中学生 7 人

【競技】

トライアスロン

【調査場所】

筑波大学陸上競技場

【調査日】

2020/03/26

【補足情報】

つくば市は 2019 年 7 月 29 日～8 月 13 日、スイスのトライアスロン代表チームを受け入れ、公開練習や交流事業などを行ったスイスチームは、同年 8 月 13 日～18 日に開催された「ITU ワールドトライアスロン オリンピッククオリフィケーションイベント（2019／東京）」出場への事前準備として、選手 5 人とコーチら 4 人が来日し、茨城県トライアスロン協会や筑波大学トライアスロン部との合同練習も行った。

つくば市は、筑波大学が設置したオリンピック教育研究機関である TIAS（つくば国際スポーツアカデミー）と、スイス・ローザンヌにあるスポーツマネジメント大学院（AISTS）と連携協定を締結した縁から、18 年 4 月にスイスオリンピック協会・筑波大学・茨城県・つくば市の 4 者により、事前キャンプの実施についての基本合意書を締結。つくば市は 19 年 2 月、スイスを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

公開練習は 8 月 11 日、筑波大学陸上競技場で実施された。選手は終始リラックスした様子で、ランニングやストレッチを行い、こども記者クラブの取材や一般からの質問にも丁寧に対応した。つくば市の担当者は「市内にバイク練習に適した場所が無く、コース取りが困難だった」と言い、同協会と同部に相談し、フラットな練習コースとして国体の自転車ロードレースコースを、ハードな練習コースとして筑波山コースを、それぞれ選定した。

市は筑波大と協議し、市民全員を対象にした公開練習のほか市内の小中学生を対象にした「昼食お手伝い」と「こども記者クラブ」の 2 つの交流事業を計画。さらに、飲食を伴うウエルカムパーティーは関係者のみのクローズで行い、計 4 つの事業を行った。

8 月 9 日に行った事前合宿関係者向けの選手団とのウエルカムパーティーでは、生田流箏曲・地唄三絃箏道音楽院大師範である鈴木洋子さんと稲垣佳代子さんが琴、佐々木徹さんは尺八の演奏を披露した。「当初は予定していなかった三味線を披露したところ、興味を持ってくれ、飛び入りで選手自ら体験した」という。

「昼食お手伝い」では同大が調理・提供する昼食の配膳お手伝いを小中学生 8 人と共に行った。参加者は選手たちに「本日のメニュー」を説明し、トライアスロンについて質問するなど会話を楽しんだ。「こども記者クラブ」では筑波大学新聞編集部の協力で、小中学生 7 人が選手の練習を取材し記事を執筆。並木中等教育学校の生徒が通訳を担当した。記事は、つくば市のホームページ内で公開した。

4つの交流事業について、市の担当者は「来日する前のメールでのやり取りでは交流事業には消極的な印象だったが、来日してから対面で話したところ、こちらから提案したことはほとんど受け入れてもらえた」と話す。「日本文化や習慣に興味を持っていた選手も多く、2週間程度の滞在で、積極的に日本語を覚えて使っていたことが印象に残っている」と振り返り、「トップレベルの選手の雰囲気をもっと市民に伝えたい」と話す。





スイス陸上女子リレーチームが事前合宿

公開練習や交流 日本文化に興味を持つ選手も

【調査ホストタウン】

茨城県 つくば市

【イベント開催日】

2019/5/3

【相手国・地域】

スイス

【イベント参加者】

【競技】

陸上競技（女子）

【調査場所】

筑波大学陸上競技場

【調査日】

2020/03/26

【補足情報】

スイス陸上女子リレーチームの合宿が 2019 年 5 月 3 日～9 日の 1 週間、筑波大学陸上競技場（つくば市天王台）で行われた。5 月 11 日・12 日に開催された「IAAF 世界リレー2019 横浜大会（IAAF World Relays YOKOHAMA 2019）」出場のための事前合宿で、選手 6 人とコーチ 2 人が来日し、公開練習や交流事業などを行った。

5月7日の公開練習では、念入りなストレッチ、器具を使ったウォーミングアップ、スタートやバトンパスの練習を行った。観客に注目されながら、和やかな雰囲気だった。チームリーダーでコーチのピーター・ハースさんは「つくば市と筑波大学にとっても感謝している。（我々にとって）素晴らしいパートナーだ」と言い、「筑波大学体育学系栄養学の皆さんが考えてくれた食事は最高だった」とコメント。練習後には市長から同市のキャラクター「フックン船長」のマスコットを贈呈し、記念撮影などを行った。

担当者は「来日前からずっとピーター・コーチと連絡を取っていた。メールでも対面でもとても気さくな方で、お互いに率直に意見を交換しながら事前合宿の調整ができた」一方、スケジュール調整について「1 週間前になっても来日日時が確定せず、変更が発生し交通機関の手配に苦慮した」こともあったと話す。

工夫した点として、事前合宿の受入れを市と共同で行う筑波大学がチームの世話役として「大学生アテンド」を手配したことを挙げる。「選手らと同年代だったので、お互いによく打ち解けていた」そうで、「合宿当初は、日本での生活に不便がないよう常に大学生アテンドが付いていたが、チームから『自分たちでできるのでアテンドは不要』と伝えられた」と話し、選手たち自身で日本生活を満喫していたことや「チームメンバーの中でも競技成績が高い選手ほど、日本文化に興味を持っていた様子」が印象的だったという。

合宿後に行われた IAAF 世界リレー横浜大会で、スイスチームは 4×400 メートルで 7 位となり、上位 12 か国に入ったため、ドーハ 2019 世界陸上競技選手権大会への出場権を獲得した。



アルゼンチン女子ハンドボールチームが事前合宿

実戦形式練習と地元小学生ハンドボールチームとの記念撮影会

【調査ホストタウン】

茨城県 境町

【イベント開催日】

2019/11/28

【相手国・地域】

アルゼンチン

【イベント参加者】

アルゼンチンハンドボール女子代表選手チーム、水海道ハンドボールクラブの小学生 19 人

【競技】

ハンドボール

【調査場所】

茨城県立水海道第二高校体育館（常総市水海道橋本町）

【調査日】

2019/11/28

【補足情報】

アルゼンチン共和国のハンドボール女子代表選手チームが 2019 年 11 月 24 日から 28 日まで、境町で合宿練習を行った。この合宿は、30 日から熊本県で開催される「2019 女子ハンドボール世界選手権大会」に向けた事前キャンプで、境町に宿泊し、周辺市町の施設で練習を実施。29 日には、茨城県立水海道第二高校（常総市水海道橋本町）の体育館でウエートトレーニングや実戦形式の練習を中心に行った。練習後、地元の小学生ハンドボールチームと記念撮影を行うなどして交流した。

境町がホストタウンとして事前キャンプを受け入れるのは初めて。境町経営企画課の担当者は「食事や生活面、スペイン語の対応など、できる限りのことをした」という。チームが訪問する先に掲げる横断幕についても、通訳に一言ずつ相談し、「Vamos Argentina」「Bienvenido Argentina」など複数を用意した。食事について、「日本人特有の気遣いが逆に不評だったこともあったが、随時対応したことで満足してもらえた」とホッとした顔を見せる。「日本人目線ではなく、海外の目線で考えることが大事だと学んだ」と言い、「来年以降の受け入れにつながれば」と期待を込める。

ハンドボールでは片手でボールを持つ際に滑らないように松ヤニを手に塗り競技を行うが、そのまま手で触れたところが汚れてしまう。そうした松ヤニの掃除や対策について、茨城県ハンドボール協会や同高ハンドボール部が協力。境町の担当者がアドバイスを受け、練習時に使う椅子やトイレのドアノブなど、至る所にラップを巻いて対応した。練習後には、体育館の床などについてしまう松ヤニの清掃を小学生ハンドボールクラブがボランティアで行った。

同チームのエドワルド・ガジャルド監督は「チームのコンディションはとてもいい」と笑顔を見せる。キャプテンのアントネラ・メナ選手は「いい練習ができた。境町で印象に残っているのは人々の親切さ」と言い、小学生との交流については、「未来のハンドボール選手が生まれてほしい」と話す。境町の担当者は「監督から、アルゼンチンと日本どちらを応援するのかと冗談交じりに言われた」と苦笑いする。

練習後、体育館清掃前には選手全員と水海道ハンドボールクラブの小学生 19 人との記念撮影の時間が持たれた。緊張し、なかなか集合しない子どもたちに「もっここっちにおいで」と選手が声を掛ける場面も。練習から見学していた同クラブ所属の飯村有里さんは「スピードやパワーがすごい」と話し、関優衣奈さんは「どうすればあんなに大きくなるのか聞いてみたい」と目を輝かせていた。

境町担当者は「今回はハンドボールといったマイナースポーツに触れるきっかけになり、国際交流という点でもまさに意味のある滞在となればうれしい。次年度も受け入れ、町民との交流の時間も増やしたい」と話す。

ホストタウン相手国アルゼンチン 茨城県庁で紹介

年表にして交流の歴史の分かりやすさにこだわり

【調査ホストタウン】

茨城県 境町

【イベント開催日】

2019/8/7

【相手国・地域】

アルゼンチン

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/25

【補足情報】

境町は 2019 年 8 月 7 日～9 月 2 日の期間中、茨城県庁 2 階の県政広報コーナーで「ホストタウン」PR 展示を行った。

県庁での展示は、東京オリンピック・パラリンピックの開催 1 年前企画として、「1 年後に迫った東京オリンピックを身近に感じてほしい」と、県オリンピック・パラリンピック課が立案して実現した。同スペースでは、茨城県で唯一のオリンピック会場となる「茨城カシマスタジアム」の競技日程の紹介、聖火リレーの概要、県内のホストタウン自治体の取り組みなどを展示。スペース内には、記念撮影ブースも設けた。

茨城県西地域に位置する境町の人口は約 2 万 4000 人。アルゼンチンとは、幕末期に米国のペリー提督に随行して来日したアルゼンチン海軍武官モンテネグロと境町出身の下総関宿藩士・野本作次郎の友情をきっかけに、1933 年から友好関係が続いている。37 年には海軍武官モンテネグロの曾孫に当たるアルトゥーロ・モンテネグロ在日臨時代理公使が建築費を援助し、同町に「モンテネグロ会館」を建設した。そうした縁から、境町は 2016 年 6 月、アルゼンチンを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

境町の展示では、2018 年 4 月に行われたアルゼンチンオリンピック委員会との「合意書締結」の様子をはじめ、「国際社会で活躍できる人材を育てていくために自国文化や異文化の理解を深める指導の充実を図る」を軸に展開する長田小学校での交流、同校児童のアルゼンチン派遣事業、外交樹立 120 年記念のイベントの様子、リオデジャネイロ五輪柔道女子 48 キロ以下級金メダリストパウラ・パレット選手と地元中学生らの交流の様子など 6 枚の写真を展示した。そのほか、アルゼンチンと境町の交流の歴史を年表にしたパネル、国旗などを用意した。

「年表にして交流の歴史の分かりやすさにこだわった」と境町企画経営課の田中裕紀さん。「年表を通して、昔から現在まで、アルゼンチンと境町の交流は脈々と受け継がれ、つながっているのだと知ってほしかった」と話す。



町民祭でホストタウン相手国を紹介

出展ブースでホストタウンを説明する小冊子配布

【調査ホストタウン】

茨城県 境町

【イベント開催日】

2019/11/3

【相手国・地

域】 アルゼンチ

ン

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

境町民祭会場

【調査日】

2020/03/25

【補足情報】

境町は 2019 年 11 月 3 日、境町商工会主催の「第 47 回境町民祭」で「アルゼンチンのホストタウン」としてブースを出展し地域住民への PR を行った。

境町の産業の振興と文化の向上及び健康の増進を目的に開かれている同イベントは今年で 47 回目。同町は、東京オリンピック・パラリンピックのアルゼンチン選手団のホストタウンを務める。

当日は、ブースに同町経営企画課の田中裕紀さんが作成した「ホストタウンについて」と題した冊子を用意。冊子では、ホストタウンの意義などを説明する「ホストタウンとは」、境町のオリンピックやアルゼンチンとの関わりをまとめた「境町の取り組みについて」、スペイン語と日本語で日常生活に欠かせないフレーズやあいさつを紹介。アルゼンチンと日本の人口や面積などの比較も掲載した。

そのほか、19 年 8 月にアルゼンチン代表の女子柔道選手・パウラ・パレット選手の応援の際に用意した「Argentina」のロゴ入りの T シャツの掲示、同月に茨城県庁の展示用に用意した「年表」や「写真」パネルも展示した。ブースには、子どもから高齢者まで老若男女が足を運んだ。アルゼンチンの国旗への寄せ書きには 100 人ほどが参加。それぞれ冊子に掲載されたスペイン語を使ったメッセージや境町のマスコットキャラ、応援メッセージなどを寄せた。完成した国旗 2 枚は、オリンピック開催時の応援に使う予定だという。

ブースに立ち寄り、パネルを鑑賞や寄せ書きを行った来場客からは「アルゼンチンの選手がうちの町に来るんだね」「選手を身近に感じる」という声があったほか、興味深く年表を見る様子も多く見られた。田中さんは「境町はアルゼンチンと 80 年以上の交流がある。ホストタウンであることを、多くの町民に知ってもらいたい」と話す。

20年3月中には、町内にあるアルゼンチンとの交流のきっかけの拠点「モンテネグロ会館」の改修工事が完了する。田中さんは「町としてもオリンピックの期間中のボランティアも募集している。この施設をアルゼンチンの情報発信の拠点として活用したい」と意気込みを見せる。



ハンガリーの競歩選手が児童と交流

児童で作る「国際ボランティア委員会」が企画

【調査ホストタウン】

栃木県・栃木市・小山市・矢板市・さくら市

【イベント開催日】

2019/12/18

【相手国・地域】

ハンガリー

【イベント参加者】

小学 5・6 年の児童 111 人

【競技】

競歩

【調査場所】

宇都宮市立陽光小学校

【調査日】

2019/12/18

【補足情報】

ハンガリーから栃木県宇都宮市を訪れている競歩選手 3 人とコーチ 2 人が 2019 年 12 月 18 日、宇都宮市立陽光小学校の 5・6 年生との交流会に臨んだ。栃木県総合制作部総合政策課の渡邊賢副士官、同課川又修市室長が同行した。栃木県は 2016 年 6 月、ハンガリーを相手国とするホストタウン登録を県として受けている。

ハンガリー2020 オリンピック陸上競技協会競歩選手団はヘレブランド・マーテさん、コヴァーチ・バーバラさん、レーチェイ・リタさん、コーチのゲルマーン・ティボルさん、ポクロヴェンスキ・ヨージェフさんの 5 人。交流会前には、2020 年のオリンピック時に選手団の事前合宿で利用予定の新グラウンド（その当時は整備中）を校長室から眺めた。

ハンガリーの国旗が飾られた体育館では、5・6 年の児童、計 111 人と交流会が開かれた。同小「国際ボランティア委員会」委員長の齋藤宝さんによる児童代表歓迎のあいさつでは「遠い道のりをお越しくださった皆さんに会えてとてもうれしい。この交流会を通してお互いのことをたくさん知りたい」と話した。マーテさんは選手団代表あいさつで、「今日は皆さんとお会いできることを楽しみにしていた」と話し、選手を紹介した。

続いてマーテさんからは競歩について、「他の競技と違うのは、いつもどちらかの足が地面に着いていなくてはならないこと。そしてついた足は伸びていなければならないところ」と説明。競歩体験ではマーテさんを真ん中に児童 10 人ほどが横に並び、コーチの合図でスタート。走り終わると児童は一人一人の選手とハイタッチした。勝って喜ぶ笑顔や、歩き方の難しさに首をひねる児童の姿が見られた。

競歩体験の後は、児童たちによる校歌の合唱が行われた。大塚雅之校長からは「学校全体で今日を心待ちにしていた。オリンピックでぜひ、また宇都宮に来てほしい」と謝辞があった。児童たちは事前に練習してきたというハンガリー語で「ありがとう」のあいさつをし、選手・コーチとハイタッチしながら退場した。

交流を終えてリタさんは「楽しい時間を過ごした。親切に迎えてくれてうれしい。ありがとうございました」とほほ笑んだ。マーテさんは「スタッフがとても親切でした」とも。

同小児童たちで運営する「国際ボランティア委員会」はこの日に向けて、当日の飾り付けの制作や、ハンガリー語でのあいさつの指導などを行ってきた。齋藤さんは交流を終えて、「とてもうれしかった。いい経験をさせてもらえた。競歩という競技があることも今回の交流を期に初めて知ったが、実際に見ると想像していたよりスピードが速かった」と笑顔で振り返った。



ハンガリー新体操チームがフェアリージャパンと公開練習

開場前から行列、2階席は満員に

【調査ホストタウン】

栃木県・栃木市・小山市・矢板市・さくら市

【イベント開催日】

2020/3/15

【相手国・地域】

ハンガリー

【イベント参加者】

【競技】

新体操

【調査場所】

白鷗大学本キャンパス内 白鷗アリーナ

【調査日】

2020/02/15

【補足情報】

ハンガリーから栃木県小山市を訪れている新体操連盟の選手・コーチ計 14 人と、新体操フェアリージャパン POLA のコーチ含む選手団 17 人が 2020 年 2 月 15 日、同市内の白鷗大学本キャンパスにある白鷗アリーナで公開合同練習を行った。会場ではハンガリーと日本が 2 面のコートに分かれて練習を行った。開場前から多くの人で列ができ、2 階の客席は満員となった。小山市は 19 年 6 月、ハンガリーを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

大久保寿夫小山市市長は合同練習開始前のあいさつで「ハンガリーのホストタウンということで市内の小・中学生に 1 月 27 日、ハンガリー料理を給食にした。こういった機会に子どもたちにも国際化を進展させていきたい」と話した。

合同練習の最後にはそれぞれのチームによる演技が披露された。演技はプログラム順に (1) フェアリージャパン団体＝ボール＝ (2) ハンガリー新体操連盟個人 コチシュ・エヴェリン＝リボン＝ (3) ハンガリー新体操連盟個人 ユハース・アンナ＝クラブ＝ (4) ハンガリー新体操連盟個人 ピグニツキ・ファッニ＝フープ＝ (5) ハンガリー新体操連盟団体＝フープ・クラブ＝ (6) フェアリージャパン団体＝フープ・クラブ＝。閉会には各国の代表がプレゼントを交換し、笑顔であいさつを交わした。

フェアリージャパンの山崎浩子強化本部長は「練習だけではなく演技を見せることができ、いい機会だった。自分たちのチームだけで練習しているのとは緊張感も違い、お互いに刺激になったと思う。選手たちはかなり緊張していたようだ」と練習を振り返った。杉本早裕吏選手は「ハンガリー選手の堂々としている姿は刺激になった。緊張感があり、課題もたくさん見つかった。人前で演技する機会を増やしていくことでもっと強くなっていくだろう」と話した。

ハンガリー新体操連盟ピグニツキ・ファッニ選手は「日本の選手の練習を見て、私たちと違う部分もあり、とてもしっかり練習してきている印象が残った。それぞれの演技の難易度も高かった」と振り返った。「会場は天井も高く、とて

も良かった。スタッフもフレンドリー。日本食も気に入っている」と小山市に滞在した印象にも触れた。

新体操部のチームメイト 7人と来場した宇都宮文星女子高校の鈴木陽菜さんは「こんなに近くで代表選手の練習を見るのは初めて。アップの仕方、練習内容や声の掛け方も参考になる」と食い入るように見学。子どもの付添いで下野市から訪れた高瀬ゆみ子さんも「こんなに間近で練習を見られる機会はなかなかない」と喜んでいた。



ハンガリーの新体操選手らが児童と交流

ハンガリー民謡合唱で歓迎 世界レベルの演技披露も

【調査ホストタウン】

栃木県・栃木市・小山市・矢板市・さくら市

【イベント開催日】

2020/2/12

【相手国・地域】

ハンガリー

【イベント参加者】

児童 743 人

【競技】

新体操

【調査場所】

小山市立小山城東小学校

【調査日】

2020/02/12

【補足情報】

ハンガリーから小山市を訪れている新体操選手 7 人とコーチ 4 人が 2020 年 2 月 12 日、同市立城東小学校の児童と交流した。同校を訪れたのは、ハンガリー新体操連盟ナショナルチームに所属するピグニツキ・ファッニさん、ユハース・アンナさん、ヴィズネル・ハンナさん、ユハース・エツマさん、コチシュ・エヴェリンさん、クラスナイ・ブランカさん、ジュライ・ブランカさんで、同校の体育館で 743 人の児童が拍手で選手団を出迎えた。ハンガリーと日本の国旗を振る児童の姿もあった。

引き続き体育館で行われた歓迎セレモニーでは、まず児童らが校歌斉唱後、この日のために一生懸命練習したというハンガリーの民謡「羊飼いだったおじいさん」を生演奏で合唱した。コーチのヴェラさんは「歓迎に感謝している。ハンガリー語は難しいのに覚えてくれてうれしい」と笑顔を見せ、児童へ拍手を送った。

その後、ピグニツキさんによるリボンと、コチシュさんによるクラブの演技が披露され、世界レベルの演技に会場は大いに盛り上がった。演技の後は体験会が行われ、児童らは選手とコーチから新体操に使う手具の扱い方を教わった。最初は緊張した面持ちで取り組んでいた児童も、上手にできると選手から拍手で褒められ、明るい笑顔を見せた。

質問コーナーでは、4 人の児童が選手団に英語で質問した。「どんな練習をするのか？」には「ウォーミングアップからエレメント（演技の採点に関する項目）の練習、音楽に合わせた練習まで 8 時間練習する」と、「目標は？」には「世界選手権やオリンピックを目指している。世界的に強い選手になりたい」と答えた。「新体操で最も好きなことは？」には「音楽に合わせる練習が好き。新しい技術を学ぶのも大好き」、「食生活で気を使っていることは？」には「健康的な食べ物しか口にしないようにしている」との答えが返された。

交流を終えてピグニツキさんは「素晴らしい体験をさせてもらった。涙が出そうほど感激した。小山の人はみんな親切で大好きになった。オリンピックの出場権獲得に向けてベストを尽くす」と話した。

司会を務めた高森仁月さんは「城東小学校にハンガリーの選手が訪問すると聞いて驚いた。実際に会えてうれしかった。選手たちは想像より柔軟で滑らかな動きだった。今日のためにハンガリーの文化を勉強した。今後も勉強したい」と話した。児童代表でありさつした塚原穂ノ香さんは「とてもきれいだった。自分にはできないような技や、滑らかな動きが素晴らしかった。みんなでハンガリーの選手を応援したい」と話した。



中学生らが新体操 W 杯に合わせウズベキスタン訪問

トップ選手と同じ床・マットで練習 食事会でも交流

【調査ホストタウン】

群馬県 高崎市

【イベント開催日】

2019/4/19

【相手国・地域】

ウズベキスタン

【イベント参加者】

中学生 6 人、新体操関係者 2 人、高崎財団関係者 2 人

【競技】

新体操

【調査場所】

高崎市役所

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

高崎市は東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン相手国、ウズベキスタン共和国との交流を図るため、2019年4月18日から7日間の日程で、高崎市内の中学生6人、新体操関係者2人、市の文化・スポーツ振興事業に取り組む公益財団法人高崎財団関係者2人をウズベキスタンに派遣した。

訪問時期はタシケントで開催される新体操ワールドカップ競技大会に合わせた。高崎市はホストタウン関連の事業の中で、特にジュニア層の交流を重視している。高崎市内には新体操のクラブがあり、ジュニア選手も多いことから、ウズベキスタン側から「ワールドカップ開催期間中なら競技も観戦できる」との誘いを受け、訪問を決めた。

訪問団一行の10人は4月18日に高崎を出発し、19日にウズベキスタンの首都タシケントに到着した。21日にはワールドカップを観戦し、夜はワールドカップに出場した選手との食事会に出席。22日には同選手たちの合同練習に参加するなど充実した時間を過ごした。

高崎財団企画誘致部事業誘致課長の細谷佳穂さんは「大会の観戦だけでなく、世界のトップ選手を近くで見るチャンスを得られたことが非常に良かった。実際、合同練習ではジュニアの選手の横で各国のトップ選手が練習をしていた。同じ床、同じマットで練習ができるチャンスはなかなかない。非常にいい交流ができた」と胸を張る。

細谷さんは「東京オリンピック・パラリンピックでは、高崎の子どもたちがウズベキスタンの選手を応援する。またウズベキスタンの子どもが日本の選手を応援するということになれば、それこそ本当の意味での交流であり、ホストタウンとしての活動の大きな成果になるだろう」と力を込める。

17年に体育館「高崎アリーナ」がオープンしたことに伴い、高崎市でさまざまな競技大会が開かれるようになった。新体操の大会も多く、「パスタの街たかさ

き」「音楽の街たかさき」に続き「新体操の街たかさき」になるのではないかと
の声もある。



ポーランドの民族合唱舞踊団が中学校を訪問

衣装を着て舞踏披露 ポーランド風の料理を含んだ給食も

【調査ホストタウン】

群馬県 高崎市

【イベント開催日】

2019/10/18

【相手国・地域】

ポーランド

【イベント参加者】

全校生徒約 400 人

【競技】

【調査場所】

高崎市立片岡中学校

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」の高崎公演に合わせ、シロンスクの団員が 2019 年 10 月 18 日、高崎市立片岡中学校を訪問し全校生徒と交流した。高崎市は 15 年にポーランドのワルシャワで開催した「高崎ものづくりフェア」を契機に同国との交流が深まり、翌 16 年 6 月に同国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

シロンスクは 1953 年、作曲家で教育者、作家でもあったスタニスワフ・ハディナ教授によって創設された。ポーランドの伝統舞踊をベースに現代文化を融合させたパフォーマンスは国際的に高い評価を得ている。今回は日本・ポーランドの国交樹立 100 周年記念日本ツアーのために来日。ツアー初日に高崎芸術劇場を選んだ。

片岡中学校訪問は、ホストタウン相手国料理の学校給食提供に伴う交流事業の一環。当日は全校生徒約 400 人が、シロンスクの団員 32 人をポーランド国旗の小旗を手に出迎えた。団員は女性も男性も背が高く美しいことから、人気女優や俳優、アイドルを迎えるような大きな歓声が上がり、会場の体育館は大騒ぎになった。

あいさつなどを交わした後、団員らは本物の衣装を着てステージに立ち合唱・舞踏を披露した。ポーランドの民族衣装は色鮮やかさが特徴で、近寄って見ると刺しゅうの繊細さやレースの美しさに目を奪われる。

その後、11 クラスに分かれて生徒と一緒にポーランド風の料理を含んだ給食を楽しんだ。メニューは「コトレト（ポーランド風とんかつ）」「サウトカ（ポーランド産ピクルスを使用したポテトサラダ）」「レチョ風トマトスープ（ポーランドの煮込み料理レチョをアレンジしたスープ）」「ソフトフランスパン」「ブルーベリージャム」などだった。

ポーランドの母国語はポーランド語だが、世界を巡る団員らは英語も話せる。そのため通訳として片岡中学校の英語教師、高崎市職員、公益法人高崎財団職員、ボランティアが各クラスに入り対応した。

見送りの際には校舎のベランダから小旗を振り、生徒は別れを惜しんだ。「アイラブユー」などと叫ぶ女子もみられ、訪問側も生徒側も心に残る体験になったようだ。

日本ツアー用に持ち込んだ衣装はおよそ 2 トンで、これに楽器やセットが加わる大移動となった。皮切りとなる高崎公演は 10 月 19 日・20 日共に満席で、舞踊団は「ボロネーズ」「マズル」「シュワ・ジェヴェチカ」「クラコゴヴィアク」などを披露し、観客の喝さいを浴びた。



ウズベキスタン文化芸術訪問団が来訪

「高崎だるま」の工房でだるまの絵付けも

【調査ホストタウン】

群馬県 高崎市

【イベント開催日】

2019/11/19

【相手国・地域】

ウズベキスタン

【イベント参加者】

高崎芸術劇場公演＝市民約 500 人

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ウズベキスタン文化芸術訪問団が 2019 年 11 月 19 日～21 日、高崎市を訪れた。訪問団はバフティヨル・サイフラエフ文化大臣、ガイラト・ファジロフ駐日大使、ウズベキスタン国立劇場「ナボイ劇場」所属のアーティスト・クラシック音楽アンサンブルメンバーなど合計 28 人だった。高崎市は 18 年 4 月、ウズベキスタンを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

文化芸術訪問団は高崎市に入る前、同じくホストタウンである京都府舞鶴市に滞在していた。舞鶴市はソビエト連邦（現ロシア）からの引き上げ船が着いたことで知られる。

第二次世界大戦後、ソビエト連邦には多くの日本人が抑留され、強制労働を強いられていた。現在のウズベキスタンの首都タシケントに建設されたナボイ劇場の工事にも日本人が従事していた。その際の日本人の勤勉さに対する現地の人の評価が高く、劇場には建築に関わった日本人を讃えるプレートも掲げられている。ウズベキスタンでは今でも「日本人のようにおなり」と諭す家庭もあるという。

芸術訪問団を迎え高崎では、バフティヨル・サイフラエフ文化大臣とガイラト・ファジロフ駐日大使らのグループ、芸術団のグループに別々のメニューを用意してもてなした。大臣と大使は「高崎アリーナ」「高崎芸術劇場」「榛名神社」を視察、芸術団は高崎名物の「高崎だるま」の工房の一つ「大門屋」でだるまの絵付けなどを楽しんだ。

文化大臣らは「高崎芸術劇場」に関心を寄せ、「榛名神社」に感銘を受けた様子だった。芸術団は「だるまの絵付け」に奮闘。大門屋の店主から「だるまの絵付けは神事であるから、工房で騒いではいけない」など、だるまに関する文化や歴史に耳を傾けた。

ウズベキスタンにはイスラム教徒がいるため、食事にも気を配った。事前にレストランなどに確認を取り、食材までもチェック。高崎財団企画誘致部事業誘致課長の細谷佳穂さんは「例えばファミリーレストランでもランチのハンバーグは合いびき、夜のハンバーグは牛肉のみなど、単純にメニューだけの確認では済まず、苦労した」と振り返る。

芸術団は 19 年 11 月 20 日、高崎芸術劇場で公演を行なった。ウズベク民謡「ドゥタール バヨ ティ」、ロシア民謡「黒い瞳の」、P.チャイコフスキー「白鳥の湖」、G.ビゼー「カルメン」など 20 曲以上に加え、「ふるさと」を披露。ホールを埋めた 500 人の市民を沸かせた。

高崎市はウズベキスタンの料理を学校給食に盛り込む際、先駆の舞鶴市の協力を得た。市では「こうしたホストタウン同士の交流も有意義」（細谷さん）と評価している。





ニカラグアなどの研修員が園児と交流

園児ら歌で歓迎、スペイン語に興味も

【調査ホストタウン】

群馬県 甘楽町

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ニカラグア

【イベント参加者】

園児 25 人

【競技】

【調査場所】

甘楽町立小幡幼稚園

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

JICA 青年研修事業で来日中のニカラグア共和国の研修員を含む中南米研修員 15 人が 2019 年 9 月 18 日、甘楽町立小幡幼稚園を訪問し園児と交流した。甘楽町は、ニカラグアに青年海外協力隊として派遣された隊員が同町で派遣前研修を受けていたことや、JICA（独立行政法人国際協力機構）を通じて来日したニカラグアの研修生が同町の農家の下で農業研修を受けたことを縁として、19 年 7 月にニカラグアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

甘楽町に拠点を置く NPO 法人「自然塾寺子屋」は、農業と村落開発をテーマとした青年海外協力隊の技術補完研修や開発途上国から来日する JICA 研修員を受け入れるほか、帰国した協力隊員の起業や就農などを支援している。中南米の国々の多くが貧富の格差、地方自治体の機能の低さ、女性や社会的弱者のエンパワメントなどの問題を抱えている。今回の研修では「地方における行政と民間企業の協働に基づく地域振興」をテーマに、農産物の加工・商品化・ブランド化などについて学ぶことになっていた。

小幡幼稚園との交流は、研修員らの「幼稚園児にも中南米を知ってもらいたい」という思いに沿って企画された。当日、小幡幼稚園では園児 25 人が歌で歓迎。ボリビア出身のマリエラ・リベラ・ロドリゲスさんがダンスを披露したり、通訳（スペイン語）を介して対話したりした。園児はスペイン語に大いに興味を示し、通訳を介しての会話ながらも通訳の介在を感じさせず、楽しんでいる様子が見受けられた。

研修員がニカラグアの国旗や地図を使って国の位置を示すと、園児も興味を持って説明を聞いていた。主催した同 NPO のメンバーは「園児は中南米研修員の懷に飛び込んで交流してくれた。子どもには国境など無く、温かく迎えてくれて良かった」と振り返った。

ニカラグア出身のマルビン・フェルナンデスさんは「甘楽町はとてもきれいで、山の景色はニカラグアと似ている。（オリンピックの）選手団は日本人の優しさや日本のふるさと感じられるこの町をととても喜ぶと思う」と話した。

甘楽町では同年 9 月 10 日、台風 15 号の影響により成田空港で足止めになった野球 U-18 ニカラグア共和国ナショナルチームの求めに応じ、成田空港までの送迎・日本滞在をサポート。こうした支援はニカラグア国内でアナウンスされており、甘楽町民を通して日本人の評価が高まっているという。



講演会「きっと好きになるニカラグア」を開催

在ニカラグア大使講演会に駐日大使も駆け付ける

【調査ホストタウン】

群馬県 甘楽町

【イベント開催日】

2019/9/2

【相手国・地域】

ニカラグア

【イベント参加者】

全校生徒約 350 人

【競技】

【調査場所】

甘楽町立甘楽中学校体育館ほか

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

甘楽町は 2019 年 9 月、同町が東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとなっているニカラグア共和国のことを町民に知ってもらおうと、同国を紹介する講演会を町内各所で開催した。

講演会の初回は 9 月 2 日で、JICA ニカラグア事務所所長の名井弘美さんを講師に迎えた。演題は「きっと好きになるニカラグア」。名井さんはこの日集まった町議会議員、教育委員会関係者、国際交流振興協会役員、町職員など約 100 人にニカラグアの魅力を訴えた。

9 月 20 日には鈴木康久在ニカラグア共和国特命全権大使を講師に迎え、甘楽町立甘楽中学校の体育館で 2 回目の講演会を開催。同中学校の生徒を中心に約 350 人が参加し、鈴木大使の話を聞いた。鈴木大使はニカラグアの自然、産業、食や祭りなどの文化を分かりやすく解説。講演の後にはニカラグア料理の試食会が開かれた。

また、この講演会にはニカラグアのロドリゴ・コロネル駐日特命全権大使も駆け付けた。コロネル大使は試食会で提供されたニカラグア料理に舌鼓を打った。料理は青年海外協力隊員としてニカラグアでの活動経験のある楊樹奈さん（埼玉県在住）が「カネルアサーダ（焼肉）」「アロス ア ラ バレンシアーナ（チキンライス）」「ガチョピント（豆ご飯）」「フリホーレスモリード（豆やタマネギのペースト）」「ワカモレ（アボカドとゆで卵のサラダ）」「プ ニュエロ（揚げドーナツ）」「トレス レチェス（ケーキ）」「カヘータ デ ココ（甘い菓子）」の 8 品を用意。町長や教職員のほか甘楽町給食センターの職員も試食した。コロネル大使は「ニカラグアよりおいしい」と、この日の料理に太鼓判を押した。給食センターの職員はその後、給食でニカラグア料理を提供した。

この両日以外にも JICA の青年研修で、ニカラグアを含む中南米の青年らが甘楽町を訪れている。9 月 11 日～28 日の研修に参加したニカラグア出身で JICA アメリカ合衆国事務所員のマルビル・フェルナンデスさんは「甘楽町はとてもきれいで、山の景色はニカラグアに似ている。選手団はふるさとを感じられるだろうし、甘楽町の人を通して日本人の優しさを感じるだろう」と話した。



成田で立ち往生の U18 ニカラグアチームを支援

「困った時は助けるのが筋」と町長が指示

【調査ホストタウン】

群馬県 甘楽町

【イベント開催日】

2019/9/8

【相手国・地域】

ニカラグア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

甘楽ふるさと館、甘楽町役場、甘楽町立甘楽中学校など

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

甘楽町は 2019 年 9 月、台風による飛行機の欠航で帰国できなくなったニカラグア共和国の野球チームを同町に受け入れ、空路復旧まで手厚くもてなした。同町は同年 7 月、ニカラグアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されたが、その交渉の過程で親しくなった同国駐日大使から急きょ受けた依頼に応え、町を挙げておもてなしに励んだ。

同年 9 月 8 日から 9 日にかけ、関東地方は台風 15 号の影響で陸も空も交通がまひした。成田空港では韓国で開催された U-18 のワールドカップに出場したニカラグア野球チームが利用する予定だった 9 日の航空便が欠航、メンバーは行き場を失った。そこで、チームの代表者がロドリゴ・コロネル駐日特命全権大使に電話で窮状を訴え、コロネル大使と中米ニカラグア大使館の職員はすぐに成田空港に向かった。

大使一行は同日午後 8 時ごろに何とか成田空港に到着したものの、周辺のホテルはすでに満杯になった。外務省や JICA に宿の確保や車の手配を求めたが断られ、途方に暮れたコロネル大使の脳裏に浮かんだのが「甘楽町」だった。

コロネル大使や秘書らは東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンの件で、甘楽町企画課長の田村昌徳さんらと顔を合わせていた。ちょうどその頃、田村さんは夕食を済ませ台風 15 号のニュースを見ていた。スマートフォンが鳴ったので出ると、コロネル大使の秘書から だった。「困ったことになった。力になってほしい」と訴える秘書に田村さんは「できる限りのことはしたい」と応じ、すぐさま町で唯一の宿泊施設「甘楽ふるさと館」の空き状況を確認。部屋を押さえると茂原荘一甘楽町長の携帯電話に連絡した。茂原町長は「困った時は助けるのが筋だ」とバスの手配を指示。10 日早朝 5 時、成田空港に向けて甘楽町からマイクロバスとワゴン車が出発した。

27 人は同日、甘楽町に到着。9 月 12 日に日本を発つぎりぎりの時間まで甘楽町に滞在した。滞在期間中、甘楽町立甘楽中学校野球部との合同練習、BC リーグ「群馬ダイヤモンドペガサス」の練習見学、歓迎夕食会などに参加し町民と交流した。

田村さんは「ホストタウンの相手国ニカラグアと甘楽町との距離が縮まるきっかけとなる出来事だった。滞在期間中、町はもちろん、子どもたちは特にいい経験になったと思う」と振り返る。

選手団長のエベル・ロペスさんは「神様が導いた縁に団員全員が感謝の気持ちを持っている。ニカラグアでも甘楽町の皆さまのことが報道され、国民に知らされている。短い期間だったが、一生忘れることのできない思い出をくれた甘楽町の皆さま、ニカラグアと甘楽町の友情に幸あれ」と話した。



ベラルーシ・トランポリンチームとの交流会開催

前橋市立高校生徒と歓談

【調査ホストタウン】

群馬県 前橋市

【イベント開催日】

2019/12/4

【相手国・地域】

ベラルーシ

【イベント参加者】

ベラルーシ＝10人（選手 8 人、コーチ 1 人、通訳 1 人）、前橋市立前橋高等学校
唯一のトランポリン選手、近藤愛海さん（1 年）を含む全校生徒

【競技】

トランポリン

【調査場所】

前橋市立前橋高等学校

【調査日】

2019/12/04

【補足情報】

ベラルーシ共和国のトランポリン競技ナショナルチームが 2019 年 12 月 4 日、前橋市立前橋高等学校で開かれた交流会に参加した。同チームは 11 月 28 日～12 月 1 日、有明体操競技場（東京都江東区）で開催された「2019 世界トランポリン競技選手権大会」（第 34 回）に出場するため来日していた。前橋訪問は同大会のリカバリーと、東京五輪出場に伴う直前キャンプ地の視察を兼ねて行われた。

前橋市では 2018 年 8 月にトランポリンのワールドカップ（W 杯）を開催するなど、トランポリン競技の振興に力を入れてきた。同年 12 月には 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた強化合宿についてベラルーシ体操協会と基本合意書を締結、前橋市をベラルーシのトランポリン・ナショナルチームの事前合宿地とすることが決まった。

交流会には 10 人（選手 8 人、コーチ 1 人、通訳 1 人）、前橋市立前橋高等学校のトランポリン選手・近藤愛海さん（1 年）を含む全校生徒が参加。選手たちは近藤さん、同校の留学経験者らと懇談し、学食での昼食をはさんで全校生徒と対面し、トランポリンの試技も披露した。

ベラルーシ選手の年齢は 18～25 歳と日本の高校生と年齢が近く、交流会でも話が弾んだ。ベラルーシの高校には制服が無いそうで、制服に興味を示した。「アニメは何を読んでいる（見ている）のか」という質問のほか、「日本食はよく食べる」「米がおいしい」などとも話した。競技会のリカバリー中のため試技は 1 人 1 回ずつと時間も短かったが、高さで美しい姿勢にどよめきが起こった。選手 8 人はいずれも五輪や世界大会、ヨーロッパ選手権などでメダルを獲得しており、通常はリカバリー中に行わない試合用の試技を披露した選手もいた。

オーストラリアでの留学経験のある前橋高校の生徒は「ロシア語なので言葉自体は分からないが、お互いに何を言おうとしているのかが分かったし、気持ちは通じた」と話した。また、同校で唯一のトランポリン選手でもある近藤さんは「（ベラルーシ選手との交流で）特別な体験ができた。今月出場する川崎大会で表彰台を目指す」と力を込めた。

群馬県体育協会トランポリン部理事長の寺門洋子さんは「群馬県のトランポリン競技選手は 30 人程度と少ないが、競技人口は 500～600 人と多い。世界トップクラスの選手とのこうしたふれ合いが、トランポリン競技に興味を持ったり競技を目指すきっかけになってほしい」と期待を込めた。

前橋市文化スポーツ観光部スポーツ課スポーツ誘致係の萩原伸一さんは「盛り上がりが予想以上だった。オリンピックの機運向上に役にも立ったのでは」と胸を張る。



南スーダンの選手と前橋の児童が交流

小学校での給食、掃除も経験

【調査ホストタウン】

群馬 前橋市

【イベント開催日】

2019/12/12

【相手国・地域】

南スーダン

【イベント参加者】

選手 4 人、前橋市立敷島小学校の児童 199 人

【競技】

陸上競技

【調査場所】

前橋市立敷島小学校

【調査日】

2019/12/12

【補足情報】

南スーダン共和国の陸上競技のナショナルチームが 2019 年 12 月 12 日、前橋市立敷島小学校の児童（199 人）と交流した。南スーダンの選手は 4 人で、2020 東京オリンピック・パラリンピック出場を目指している。南スーダンは練習施設の問題で、国内で十分な練習ができないことから、施設の整った前橋市で長期合宿を行うことになった。

前橋市に滞在期間中、いろいろな場所で市民とふれ合う機会を設けた。敷島小学校では南スーダンの選手が全校集会、レクリエーション、給食、掃除、昼休み中の遊び、5 時限目に行われた合同体育（4～6 年生）の授業に参加した。

全校集会では福田隆一教頭の「南スーダンで足りないものは何か」という問いに、児童は「ごはん」「食べもの」と答えたが、実際には「学校やトイレ、寝るところが足りない」と知らされると「えー」と一様に驚いた声を上げた。

学校そのものが不足しているくらいだから、南スーダンには給食もない。敷島小学校の当日の給食メニューは「ラーメン」。選手たちは給食というシステムに驚くとともに、慣れないはしを使ってめんをすすった。食事中も児童らとコミュニケーションを図り、皆が笑顔で交流した。

コーチのオミロク・ジョセフ・レンシオ・トビアさんは「2013 年に内戦が拡大し、国内はたいへんな状況。それから平和について考えるようになった。南スーダンでは国民同士が仲良くなるのが難しい状態にある。JICA（国際協力機構）がスポーツ大会を開いてくれた時、たくさんの人が集まりお互いを知ることができた。若い人が平和について話すことにより、彼らが大人になった時、平和になることが期待できる。スポーツ大会はスポーツ選手の発掘と、スポーツによって人々をつなげることができる大変重要なものだった。スポーツを通じて人々が一つになれる。スポーツを続けたい。一つになって応援もできる。素晴らしい」と話した。

今回の交流会の運営委員長を務めた西郷絵乃さん（6年）は「南スーダンの選手は明るくて接しやすかった。ありがとうと言われてうれしかった。内戦が続いて大変だったことを初めて知った。選手たちがスポーツをしたい気持ちが強く、すごいと思った。私の将来の夢はツアーコンダクター。南スーダンの選手とのこの交流を役立てたい。日本の食べ物、文化、群馬の焼きまんじゅうや「ぐんまちゃん」も知ってもらいたい」と話した。

同校の福田教頭は「選手と子どもたちが良い交流ができたと思う。子どもたちは一層、2020 東京オリンピック・パラリンピックを楽しみするだろう。貴重な交流会だった」と結んだ。



南スーダン選手団、小学校を訪問

琴の練習や給食、掃除体験通じ交流深める

【調査ホストタウン】

群馬県 前橋市

【イベント開催日】

2020/2/20

【相手国・地域】

南スーダン

【イベント参加者】

全校児童 69 人

【競技】

陸上競技

【調査場所】

前橋市

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

前橋市立大室小学校で 2020 年 2 月 20 日、前橋市内で長期合宿中の南スーダン共和国のオリンピック・パラリンピック陸上選手団（選手 4 人、コーチ 1 人、通訳 2 人）と同校児童が交流した。同校は全校児童 69 人と前橋市内で最も児童数が少ない小学校で、選手団を出迎えた向井道子校長は「一番小さい小学校だが、子どもたちに異文化に触れてもらいたいという願いが届き、今回の交流会が実現できて良かった」と笑顔を見せた。

南スーダンは長期にわたった内戦の影響で国内情勢が安定せず、オリンピック・パラリンピックを目指すアスリートらも練習をする環境に恵まれていない。独立行政法人国際協力機構（JICA）の呼びかけに応じた前橋市が 19 年 8 月、選手団の渡航費や宿泊費も負担した形での長期合宿受け入れを決めた。また、それに先立つ同年 2 月、前橋市は南スーダンを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

南スーダンの選手団は 19 年 11 月に来日。前橋市内の日本語学校にも通っており、大室小の児童らとの交流では「私の好きな食べものはスパゲティとそば」「豚肉とオムライス」など日本語を交えて自己紹介した。

大室小学校では日本文化を学ぶ目的で 4 年～6 年のカリキュラムに邦楽の授業を組み込んでいる。選手たちにも日本文化に触れてもらおうと 6 年生の授業に招いた。選手たちは生田流の須藤幸子さんの指導の下、「さくら」を練習し、歌いながら演奏した。選手のひとり、モリス・ルシア・ウィリアム・カルロさんは「初めて琴を弾いた。とても難しかったけれど楽しかった」と話した。

その後、選手たちは 4 年と 5 年のクラスに分かれて給食を食べた。この日のメニューはスープ、ご飯、揚げ物など。食事中、児童から「南スーダンではどんな練習をしていたのか」「南スーダンは何が有名なのか」など、南スーダンに関する質問が飛んだ。

「南スーダンでは気温が平均で 37 度、暑い時だと 47 度になるので朝早くランニングをしていた」「南スーダンは世界で一番牛が多いことで有名。牛をたくさん飼っている人が魅力のある人になる。結婚するには 500 頭の牛を飼わなければならない」などの答えに驚きの声が上がった。

給食の後は 2 年と 3 年のクラスに分かれ教室の掃除を体験。その後、校庭で全校児童と 80 メートル走、6 年生が企画したオリジナル鬼ごっこ「バナナ鬼」を楽しんだ。

児童代表の北浦実莉さん（6 年）は「一緒に走ったりして良い思い出ができた。交流会をするまで南スーダンのことは知らなかった。交流ができて、とても興味が持てた。東京オリンピック・パラリンピックで活躍する姿を楽しみにしています。頑張ってください」とエールを送ると、グエム・アブラハム・ウィリアム・カルロさん（1500 メートル）は「楽しい思い出ができた。南スーダンにもどったらみんなに話す。みんなが大きくなったら南スーダンに遊びに来てほしい」と応じた。

向井校長は「本当にいい交流会ができた。この体験をどんどん積み重ねて成長してもらいたい。オリンピック頑張ってください」締めくくった。





南スーダンと前橋を結びつけた古川教授が選手を激励

コーチ、市民らの支援に感謝 クラウドファンディングも

【調査ホストタウン】

群馬県 前橋市

【イベント開催日】

2020/2/26

【相手国・地域】

南スーダン

【イベント参加者】

【競技】

陸上競技

【調査場所】

【調査日】

2020/03/26

【補足情報】

南スーダン共和国と前橋市を結びつけた静岡県立大学国際関係学部の古川光明教授が 2020 年 2 月 26 日、南スーダン選手団（5 人）の激励と山本龍前橋市長表敬のため前橋市を訪れた。

古川教授は JICA 南スーダン事務局長として 16 年、独立後初のスポーツ大会（国民の約束の日）を立ち上げた。紛争が繰り返される南スーダンで、古川教授は「国を挙げて一つになる必要があると、日本の国体のような大会を初開催した」と振り返る。

その後 JICA 安全管理部長として、前橋市に南スーダン選手団の長期事前合宿を提案。選手団は 2019 年 11 月に来日し、前橋市が借り上げたアパート（各 1 室）で暮らし、王山運動場でトレーニングを重ねている。

古川教授は「前橋市長、桑原課長（前橋文化スポーツ観光部参事）、内田さんはじめ市民の皆さんのおかげで彼らがここに居ることができている。初のスポーツ大会に出場した選手 3 人、2 回目以降の 2 人、コーチのジョセフを前橋が受け入れてくれたことは大きな意義のあること。今回彼らに会うことができうれしい」とあいさつした。

同市で長期合宿を続けている南スーダン選手団コーチのオミロク・ジョセフ・レンシオ・トビアさんは「古川教授、前橋市長、桑原さん、内田さんそして前橋市の皆さん、メディアの皆さんに心から感謝している」と頭を下げた。アクーン・ジョセフ・アクーン・アクーン選手（400 メートル、400 メートルハードル）は「前橋の皆さんはとても親切。いつも一緒にいるドライバー、通訳ボランティアの皆さんには特に感謝している。国に帰ったら寂しくなってしまうに違いない」と話した。

桑原さんによると「彼らは非常にまじめ。時間に遅れることもない。市民の皆さんもよく応援してくれる。南スーダンの国旗を入れた車で移動している時など手を振ってくれる人が増えている」という。

長期事前合宿を受け入れるにあたり 2,000 万円を目標に始めたクラウドファンディングは現在、1,600 万円になっている。山本市長は「皆さんが応援してくれて本当にありがたい。もし余った場合は南スーダン支援のプロジェクトなどに回したい」と話した。

南スーダン選手団の練習を指導している小淵瑞樹さん（登利平アスリートクラブ）は「最近スピードが上がってきていて、僕にもついて来られるようになった。スプリントが上がっているなという感じ。ガタガタだったフォームもまあまあ体幹をキープして走れるようになった。前橋市が支援をしているのでいい環境で取り組んでいると思う。競技と同時に企業との付き合い方とか、プロのアスリートとして生きていくための勉強もできているのでは」と話す。

ブータン農業研修生との交流会

「景色がブータンとそっくり」と研修生

【調査ホストタウン】

群馬県 上野村

【イベント開催日】

2019/11/21

【相手国・地域】

ブータン

【イベント参加者】

上野村保育所園児 25 名他。NPO 法人「自然塾寺子屋」の矢島亮一理事長、森栄梨子事務局長が同行。

【競技】

【調査場所】

上野村保育所、上野村トマト・イチゴハウス、道の駅「上野」

【調査日】

2019/11/21

【補足情報】

ブータン王国から群馬県を訪れている農業研修生 2 人が 2019 年 1 月 21 日、群馬県上野村を視察し保育所で園児らと交流、農業施設などを見学した。同村は同年 10 月、東京オリンピック・パラリンピックに向け、ブータンのホストタウンに名乗りを上げ、国に登録申請を行った（2020 年 2 月に登録認定）上野村教育委員会事務局の小池啓満事務局長と甘楽郡で農業研修を担当している NPO 法人「自然塾寺子屋」の矢島亮一理事長、森栄梨子事務局長が同行した。

ブータン王国パジヨ農業研究開発センター研究員のウゲンさんとアルジュンさんは、上野村小学校で黒澤八郎村長のあいさつを受け、村紹介ビデオを鑑賞。2 人は村の印象について「風景がブータンと似ていて親近感がわく」「ブータンには紅葉がないので、赤や黄色に染まった上野村の秋の風景はとてもきれいでいい」と話した。

小学校で授業を参観した後、保育所で 2 歳～6 歳の 25 人の園児らと交流。この日のためにブータン王国の位置を地図で掲示したり、「クズサンボーラ」とゾンカ語（ブータンの国語）のあいさつを練習したりと準備してきた園児らの歓迎を受けた。2 人は、園児手作りのクッキーと折り鶴を手渡されると「心のこもったプレゼントをありがとう。ありがとうは『カジンチェ』と言います」とゾンカ語を教える場面もあった。その後、園児らの輪に混ざりゲームや手遊びにも参加、初めて経験するという「じゃんけん」では、勝っても負けても子どもたちと笑い合っていた。

昼食は園児と一緒に給食を試食。担当の保育士が「ブータンの人たちもご飯を食べるよ」と園児らに教えると「一緒だね」「同じ」と園児から声が上がった。2 人は「子どもたちが日本語でたくさん話し掛けてくれてうれしい」と終始笑顔で、ハグしたりハイタッチしたりと交流を楽しんでいた。

農業施設見学では、上野村トマト・イチゴハウス、道の駅「上野」のほか、きのこ生産施設、バイオマス発電施設を視察。自国でトマトを担当しているというアルジュンさんは「とてもためになった。初めて目にするものもあり、栽培方法を新たに知ることができた」と話した。道の駅「上野」でコンニャクイモを見る

と「日本に来るまで知らなかった。こんなに大きなものだったとは」と驚いていた。

小池事務局長は「視察で村を紹介するとともに、村の将来を担う子どもたちにブータンのことを知ってもらおうと保育所を視察地に入れた。普段から ALT の指導で外国語活動に慣れ親しんでいるせいか、どの子も積極的に交流できた」と話した。

上野村について、2 人は「自然と人の調和が取れた村、ハーモニーが見事だと思った」「今はブータンを離れているが、家に帰ってきた気持ちになった。ブータンの人たちにも『上野村はブータンと似ていて、まるで祖国にいるようだ』と伝えたい」とほほ笑んだ。

生き方学び、村の価値再発見を

ブータンで交流事業調印

【調査ホストタウン】

群馬県 上野村

【イベント開催日】

2020/2/15

【相手国・地域】

ブータン

【イベント参加者】

上野村村長、ブータン五輪委員会（BOC）ソナム・カルマ事務総長、他関係者
複数名

【競技】

【調査場所】

上野村役場

【調査日】

2020/03/03

【補足情報】

上野村の黒沢八郎村長は、2020 年 2 月 15～20 日にブータン王国を訪問し、東京五輪・パラリンピックのホストタウンとして同国と交流活動を進めていくことで正式に合意、調印式を行った。黒沢村長は帰国後、「国民総幸福量の向上を国是とするブータンの人たちの国民性や生き方を学ぶことで、われわれの村のブランド力、価値の再発見につなげたい」と、交流事業推進への意気込みを語った。

ブータンの首都ティンブーなどを訪問した村長は、現地でブータン五輪委員会（BOC）のソナム・カルマ事務総長らと会談。東京オリンピック・パラリンピックの開催時に訪日する予定のジゲル・ウゲン・ワンチュク王子殿下（BOC 会長）や出場選手・関係者を村に招待して、村民との交流イベントなどを開催するとともに、大会閉幕以降も継続的に交流事業を展開していくことなどを提案した。

ブータンについては、日本では既に埼玉県寄居町や神奈川県、小田原市、箱根町、大磯町がホストタウンとして登録され、出場選手の事前キャンプをそれぞれの自治体で行うことで準備が進んでいる。これに対して、実際の競技施設がない上野村では、「選手や関係者の方々にとってのリフレッシュを目的に滞在していただけるよう、村にお迎えしたい」（黒沢村長）として、今後、先方と日程調整を進める予定。

上野村が交流事業で特に重視しているのは、自然環境との接し方や生き方の価値観に関するブータン国民との距離感の近さだ。村長は、「村の地形や風土はブータンと非常によく似ている。暮らしの根本が似ている」と指摘。「昭和 40 年代の上野村にあったような、親子が一緒に労働の場にいる風景が、向こうではまだ当たり前に見られる」といい、交流によって「自然と共生する、家族とともに暮らす」ということの本当に大事な価値に気づき、この村で暮らす本当の幸せを感じられる人が増えてほしい」と期待を表明した。

一方で、ブータン側からは、今回の村長らとの意見交換を通じて、森林資源の活用事業や木工製造、施設農業の育成事業など、山間地という共通の地理的条件をベースにした産業振興策について、それぞれ強い関心が示されたという。村長は、「ブータンは人口 70 万人という小さな国で、出会った人同士の顔を後々まで

つなげていける」として、将来にわたり人的つながりを保っていけるような国際交流を目指す考えを示した。



木材資源のエネルギー活用に協力

ブータン関係者が来村時に事業紹介へ

【調査ホストタウン】

群馬村 上野村

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ブータン

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

上野村役場

【調査日】

2020/03/03

【補足情報】

上野村は、東京オリンピック・パラリンピックに参加するブータン王国とのホストタウン交流計画で、同村が 2011 年から取り組みを続けている木材資源のエネルギー活用事業をブータン側に紹介し、導入に向けた動きに積極的に協力、支援していく方針だ。20 年 2 月にブータンを訪問した黒沢八郎村長らとの会談で、同国側関係者が強い関心を示し、「木材のエネルギー利用を、（国として）当然プロジェクトとして取り組むべきものと受け止められた」（黒沢村長）という。

上野村とブータンとは、環境の厳しい山間地という地理的条件が共通しており、いずれも森林・木材を最も豊かで大切な資源と位置付けている。上野村では、「切った木材をどう利用していくか。その出口を考えた時、たどり着いたのがエネルギーへの活用。昔の木炭や薪作りを今の技術で蘇らせることで、一気に森林が生きてくる」（同）との観点から、林業振興を推進。ブータンも同様のアプローチを検討していて、「双方の考えが一致した」（同）格好となった。

村では 11 年 7 月から、村内に設置したペレット工場で、未利用木材を使った木質ペレット燃料を製造。農業施設や温浴・福祉施設のボイラー、家庭用ペレットストーブで燃焼利用するとともに、15 年度に稼働した木質バイオマス発電施設（出力 180 キロワット）でのガス化発電燃料にも活用しており、その電気と廃熱は「上野村きのこセンター」に供給され、生産量県内第 3 位という村のシイタケ栽培を支えている。

こうした木材燃料化への取り組みについて、黒沢村長は「エネルギーの地産地消を進めることで、電力会社に支払うお金が山の仕事に落ちて、そこに雇用が生まれる」「化石燃料を自前の燃料に置き換えることで、CO2 の排出削減にもつながる」と、地域経済振興や環境対策としての意義を強調する。そうした観点からも「ブータンの方々は、自分たちの考え方に共感してくれている」という。

ブータンは、ヒマラヤの豊かな水資源を生かした水力発電により、インドに電力を輸出して国益を得るエネルギー国でもあるが、国内的には停電が度々発生する不安定な電力事情も抱えている。そこに、木質エネルギーの供給が可能になれば、暖房への熱利用も含めて大きな補完機能が期待できる。今後、五輪閉幕後に

予定している選手・関係者の招待の機会などを通じて、村の取り組みを詳しく紹介していく計画だ。



ミャンマーの柔道学生、鶴ヶ島市役所など訪問

城西大柔道部員と合同練習も

【調査ホストタウン】

埼玉県 鶴ヶ島市

【イベント開催日】

2020/1/23

【相手国・地域】

ミャンマー

【イベント参加者】

ミャンマーの学生 4 人、城西大柔道部員 14 人＋監督 1 人

【競技】

柔道

【調査場所】

鶴ヶ島市役所、Ken の厨房、城西大学坂戸キャンパス

【調査日】

2020/01/23

【補足情報】

外務省が推進する対日理解促進交流プログラム「JENESYS2019」の一環で「スポーツ交流」をテーマにミャンマー連邦共和国から訪日している青少年らが 2020 年 1 月 23 日、鶴ヶ島市役所や坂戸市の城西大学を訪問した。鶴ヶ島市は「今泉記念ビルマ奨学会」「鶴ヶ島市国際交流協会」などのミャンマー支援を通じて、長く交流してきた歴史があり、17 年 7 月にミャンマーを相手国とした 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。また、城西大学は、ヤンゴン外国語大学との学術交流などにより、ミャンマーからの留学生の受入れを進め、鶴ヶ島市のホストタウンの取り組みにも協力している。

ミャンマー訪日団は全員柔道競技経験者で、16 歳～21 歳の男女合わせて 14 人（男性 2 人、女性 12 人）。柔道を始めて 1 年～8 年の学生で、全員が初来日だという。市の担当職員は「ホストタウン交流はミャンマー大使館や市民の皆さんの、さまざまな協力で実現している。今回は特に、スポーツ施設のある城西大学の協力のおかげで受け入れが可能になった」と話す。

午前中は市役所を訪問。市職員の説明の下、市とミャンマー交流の歴史、ホストタウン事業の取り組みなどをまとめたスライドショーを鑑賞した。学生らは真剣に画面を見つめ、時折メモを取る姿もあった。スライド中に紹介された「鶴ヶ島水かけまつり」や昨年行われた「ミャンマー選手団事前キャンプ」に話が及ぶと、自国との祭りの違いや、知っている選手についての発言があった。鑑賞後、「他の 2 カ所のホストタウンについても詳しく聞きたい」「奨学金はどのように受けることができるのか」などの質問に職員が笑顔で対応した。終盤には議会中だった齊藤芳久鶴ヶ島市長も駆け付け、記念品の授与や記念撮影などを行った。

昼食はランチ交流会として、レストラン「Ken の厨房」に移動。同市の「ミャンマーホストタウン応援店」登録店のレストランシェフたちが日本薬科大学の協力で考案したという、ミャンマーと鶴ヶ島の特産食材コラボメニューを振る舞った。学生たちからは「全部おいしい」「スープはミャンマーの味がする」「日本の米は餅みたい」などの感想が飛び交い、歓談に花が咲いた。鶴ヶ島特産の狭山茶を練り込んだパスタは「ミャンマーはパスタを食べる習慣がなく、こういうのは初めて。おいしい」と声が上がった。

午後には城西大学坂戸キャンパスへ向かい、同大柔道部の部員 4 人と合同練習に臨んだ。どの学生も積極的に日本人部員とペアを組みに行き、打ち込みや乱取り練習に励んだ。同大市川監督の直接指導も受け、特に反則技や乱取り練習時の危険行為についての説明があった。

訪日団団長の女子学生・キンメイチューさんは「日本の皆さんはとても親切でフレンドリー。ミャンマーにも遊びに来てほしい。柔道がもっと広がるように頑張りたい。将来は、講道館で先生になりたい」と語った。男子学生のニーニーアウンさんは「ミャンマーで一番強い選手になりたい」と意気込みを見せた。



ハンドボール男子日本代表キャプテンが講演

ジャンプ力とシュートの速さにどよめきも

【調査ホストタウン】

埼玉県 鶴ヶ島市

【イベント開催日】

2020/2/23

【相手国・地域】

【イベント参加者】

子ども約 50 人、保護者含む大人約 30 人

【競技】

【調査場所】

鶴ヶ島市立富士見中学校体育館

【調査日】

2020/02/23

【補足情報】

鶴ヶ島市立富士見中学校体育館で 2020 年 2 月 23 日、オリンピックハンドボール男子日本代表のキャプテン土井レミイ杏利（あんり）選手を講師に招き、「逆境を乗り越え夢をつかもう」と題した講演会が開かれた。東京オリンピック・パラリンピック推進事業として、鶴ヶ島市と市第 3 地区青少年健全育成推進協議会の共催で行われ、市内と近隣地区の小中高校生約 50 人、その保護者を含む大人約 30 人が参加した。

企画は当初、市内中学生を対象にしていたが、高校の一般入試前であることや、新型コロナウイルスなどの影響で参加者が集まりにくいことを懸念し、近隣市内の中・高校生ハンドボールチームやハンドボール未経験の小校生らにも参加を呼び掛けた。講演会の前半は土井選手の講演、後半は一緒にプレーをしたほか、質問コーナーも設けた。MC はハンドボール経験者で女優・タレントの淵上ひかるさんが務めた。

土井選手は、鶴ヶ島市と同じ東武東上線沿線の埼玉県三芳町に本拠を置く大崎電気工業ハンドボール部「OSAKI OSOL」に所属。市第 3 地区青少年健全育成推進協議会の神庭さんは「土井選手は以前、けがで挫折を経験したが見事に復活した経歴に興味を沸き、この企画が始まった。逆境を乗り越えて夢に向かって突き進む姿勢から、子どもたちが大切なことを学べるのではないかと期待した」と話す。

土井選手はフランス人の父、日本人の母の間に生まれ、8 歳からハンドボールを始めたが、大学 4 年時に膝を痛め、卒業後の引退を決断した過去を持つ。講演は「ハンドボールは自分の人生そのもの」と始まり、「努力したことはない、楽しいから夢中になっているだけ。若いうちにさまざまなことに挑戦し、夢中になれるものを見つけてほしい。努力は夢中に勝てない」「失敗をしても気にせず、堂々としていればいい。恥ずかしいのは他人の評価を気にするから。それは他人の人生を生きるのと同じ」「自分に自信を持ちたければ姿勢を正すことが大事。自信がある人は姿勢が良いように、姿勢を良くしていると自信も取り戻せる」など、ハンドボールに限らず、自信の経験から得た生き方のヒントも含めて熱弁をふるい、時にユーモアも交えて会場を沸かせた。

後半のプレーコーナーでは、自身のシュートを披露。土井選手のジャンプ力とシュートの速さにどよめきが起きた。その後、子どもたちにも順番にシュートを打たせ、手首の使い方などの具体的なアドバイスも送った。

最初は遠慮がちだった子どもたちも、土井選手のくだけた人柄に段々と積極的になっていった。質問コーナーでは「ジャンプ力をつけるにはどうすればいいか」「倒れ込んだ時、受け身のコツはあるか」「試合中に意識していることは」などのほか、「自分はテニスをしているが、失敗ばかりしている。でも、その時の乗り越え方のアドバイスがとても印象的だった」など、ハンドボール以外の感想も聞かれた。

小学 5 年生の高田さんは「最近自分に自信が持てなくなっていたけど、今日土井選手のアドバイスをもらえて、自信をつける方法がすごく参考になった」と話した。小学 6 年の宮前さんは「初めてハンドボールをして、1 回目はシュートが決まらなかった。でもアドバイスをしてもらって、2 度目はシュートが決まってうれしかった」とほほ笑んだ。





ミャンマーの陸上・柔道選手団が事前キャンプ

数々の市民交流イベント通じ親交を深める

【調査ホストタウン】

埼玉県 鶴ヶ島市

【イベント開催日】

2019/8/26

【相手国・地域】

ミャンマー

【イベント参加者】

鶴ヶ島水かけまつり＝1万 6000人

【競技】

陸上競技、柔道

【調査場所】

鶴ヶ島市市役所、城西大学・坂戸キャンパス、鶴ヶ島市立南中学校体育館ほか

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

東京オリンピック出場を目指すミャンマー連邦共和国の陸上と柔道の選手団が2019年8月26日～9月2日の8日間、鶴ヶ島市で事前キャンプを行った。陸上選手は18～33歳の4人、柔道選手は21～40歳の5人。市と連携協力をしている城西大学での合同練習のほか、数々の市民交流イベントを通じ親交を深めた。鶴ヶ島市は「今泉記念ビルマ奨学会」「鶴ヶ島市国際交流協会」などのミャンマー支援を通じて、長く交流してきた歴史があり、17年7月にミャンマーを相手国とした2020東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

来日初日の26日、選手団一行は鶴ヶ島市役所を表敬訪問し、齊藤芳久市長にあいさつした。翌27日はアルカーサル迎賓館川越で歓迎セレモニーを開催。齊藤市長をはじめ、市議会議員、今泉記念ビルマ奨学会の今泉会長、城西大学の白幡学長、ホストタウンの取り組みに協力している市民らが出席し選手団を歓迎した。

28日から31日にかけては城西大学・坂戸キャンパスのスポーツ施設を活用し、選手団・大学生・近隣の高校生らが合同練習を行った。陸上競技は総合グラウンドで、長距離走・競歩・走高跳などの競技をコーチから直接アドバイスを受けながらトレーニング。柔道は柔道場で、投げ技や寝技・乱取りなどの練習を行い、学生たちと汗を流した。他にも大学主催で、医療栄養学科の教員による「スポーツ栄養管理講座」や、同学科が考案した栄養サポートを考えた昼食の提供、歓迎交流会なども行った。

夜は各日、市民との夕食交流会を実施した。28日はレストラン「Kenの厨房」で鶴ヶ島市商工会異業種交流会メンバーと交流。「ミャンマーホストタウン応援店」のシェフらが考案したミャンマーと鶴ヶ島市の地元食材を組み合わせたオリジナルコラボ料理や、ミャンマーの民族衣装を着た子どもたちのダンスなどでもてなした。29日は日本とミャンマーの親善団体「日本ミャンマー友好協会」と交流。「ヤマニャ・アジアキッチン」で本場のミャンマー料理を振る舞い、母国の味に選手たちの笑顔がこぼれた。30日はミャンマーの支援活動に取り組む「鶴ヶ島市国際交流協会」が、和食や尺八演奏によるおもてなし、ミャンマーの民族舞踊を皆で踊るなど、さらなる親交を深めた。31日はミャンマーからの留学支援団体「今泉記念ビルマ奨学会」と交流した。今泉会長をはじめ、奨学会のメンバーで日本在住のミャンマー出身者も同席、母国語で交流できる機会となった。

31日は、市民交流の一環として南中学校体育館で「ミニ運動会」を実施。およそ50人の子どもを含む80人ほどの参加があった。各チームに分かれ、玉入れ、大縄跳び、綱引き、リフティング、フリースローなどを行った。国や言葉の壁を超えてコミュニケーションが生まれ、交流を深めることができたという。

事前キャンプの締めくくりとして9月1日、市役所の特設会場で「鶴ヶ島水かけまつり 2019」を開催した。ミャンマー伝統の水かけ祭り「ダジャン」と、鶴ヶ島伝統の「脚折雨乞」の共通点である「水」をテーマにしたコラボイベントで、当日はトゥレインタンズィン駐日ミャンマー特命全権大使夫妻が来賓として出席したほか、大使館職員や多くの市民が参加した。全体でおよそ1万6000人の参加者があった。ミニ龍蛇によるウオーターパレード、大使館チームによるダンスステージ、消防車放水などさまざまな催しが行われ、大いに盛り上がった。選手団は子どもたちと手をつなぎながら会場を回ったり、一緒にダンスを踊ったりして、放水でずぶ濡れになりながら市民と共にイベントを盛り上げた。流しそうめん体験や、たこ焼きなどの日本の屋台料理体験なども好評だったという。

陸上選手のタンタンソーさんは、鶴ヶ島市の印象について、「皆さんが自分の家族のように迎えてくれたので本当にうれしい。とてもきれいで発展している街だと思った」と答え、練習に関しては、「指導コーチの練習内容が充実していて全てが勉強になっている。今回学んだことを生かして良い結果を出したい」と意気込みを見せた。



小学校で車いすバスケットボール体験・講話

パラリピアンと交流、車いす操縦体験も

【調査ホストタウン】

埼玉県・上尾市・伊奈町

【イベント開催日】

2020/2/7

【相手国・地域】

【イベント参加者】

5年生児童 89人

【競技】

【調査場所】

伊奈町立南小学校

【調査日】

2020/02/07

【補足情報】

パラリピアンとの交流事業「車いすバスケットボールの体験・講話」が 2020 年 2 月 7 日、埼玉県伊奈町の町立南小学校（北足立郡伊奈町栄 4）で開催された。同町は 2019 年 2 月、埼玉県、上尾市とともにオーストラリアを相手国とする 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同国ナショナルチームの事前合宿受け入れや選手団との交流のほか、日本人オリンピック・パラリンピアンとの交流を進めている。

今回の催しもその一環で、子どもたちのパラリンピックへの関心醸成を目的に開催された。当日は、アテネパラリンピックの車いすバスケットボール日本代表として出場した三宅克己さん、埼玉県をホームに活動する車いすバスケットボールチーム「埼玉ライオンズ」の永田裕幸選手が来校し、5 年生児童 89 人に向け車いすバスケットボールの体験授業・講義を行った。

交通事故がきっかけで車いす生活になった三宅さんは「入院中のリハビリとしてか考えていなかった車いすバスケットボールだが、もともとサッカーやラグビーなどのスポーツをやっていたので、車いすでもスポーツができるという喜びが大きかった」と自身の車いすバスケットボールとの出会いを紹介。永田選手が車いすに乗りながら回転する様子や、車いす同士が激しくぶつかり合う様子も実演した。

車いすバスケットボール用の車いすは、指でコントロールできるほど軽量なほか、背中を反らせてプレーできるような低めの背もたれや、カーブを曲がりやすいようハの字型にセットされたタイヤなどの特徴がある。車いすの操縦体験として行われた車いすリレーでは、乗り降りの際に児童同士が車いすを支え合うなど協力する姿が見られた。

リレー後は 4 人チームに分かれて車いすバスケットボールの試合を行った。児童らはボールのパスによる連携、車いすのターンや回転を交えながらゴールを目指した。試合に参加した女子児童は「座りながらだとゴールまでボールが届かなかったり、ボールを抱えながら方向を変えたりするのが難しかったけれど、とて

も楽しかった。車いすでもできることがたくさんあるんだと勉強になった」と笑顔で振り返った。

三宅さんは「試合の勝ち負けよりも、みんなが一生懸命頑張ってくれたことがすてき。みんな一人一人好きなことが違うように、障害も一つの個性。お互いを認め合い、応援し合ってほしい」とエールを送った。小口雅雄校長は「今回のような特別授業はとても貴重な機会。児童が何事にも目標を持ち、お互いを思いやる心の大切さを感じてもらいたい」と期待を込めた。



柔道オーストラリアが強化合宿

小学校で児童と交流、給食体験も

【調査ホストタウン】

埼玉県・上尾市・伊奈町

【イベント開催日】

2020/1/18

【相手国・地域】

オーストラリア

【イベント参加者】

【競技】

柔道

【調査場所】

伊奈町立小針北小学校

【調査日】

2020/01/18

【補足情報】

オーストラリアの柔道競技統括団体「柔道オーストラリア」のカデ世代（17～15歳）選手ら 11 人が 2020 年 1 月 13 日、埼玉県伊奈町に来町し、強化合宿を行った。伊奈町は埼玉県、上尾市とともに 19 年 2 月、オーストラリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。今回の合宿はホストタウン登録以前の 18 年 11 月に県、上尾市と共に柔道オーストラリアとの間に締結した東京オリンピック・パラリンピックでの事前トレーニングキャンプ実施に関する覚書に基づき開催した。選手団は上尾市の埼玉県立武道館を練習拠点、伊奈町の県民活動総合センターを宿泊施設として 14 日間にわたり行われた。

1 月 18 日、選手らは伊奈町立小針北小学校を訪問し、同校 6 年生児童と交流した。児童は、校歌と和太鼓の演奏で選手らを歓迎。選手による柔道のデモンストレーションでは、選手同士の組み合いの迫力に驚きの声が上がった。児童からは 1 日あたりの練習時間や柔道の得意な技、オーストラリアの国の特徴、好きな食べ物など質問が上がり、選手やコーチが答えた。

選手らは各クラスでの給食も体験。ひじきごはんや鶏のから揚げなど和食中心のメニューが並び、お代わりを懸けたじゃんけんに参加する選手も見られた。クラスごとのレクリエーションや児童らが行う教室清掃にも参加し、児童から似顔絵をプレゼントされる選手もいるなど、交流を深めた。

柔道オーストラリアのチームマネジャーの木村仁さんは「今回参加した選手たちは 15～17 歳と 6 年生の皆さんと年齢が近かったこともあり、楽しく交流できたと思う。給食や教室の掃除などは、オーストラリアの学校にはない習慣。日本とオーストラリアの文化の違いを学ぶきっかけになったと思います」と振り返った。



オーストラリア柔道代表選手団、伊奈町長を表敬訪問

町のキャラクターグッズ贈呈も

【調査ホストタウン】

埼玉県・上尾市・伊奈町

【イベント開催日】

2019/8/20

【相手国・地域】

オーストラリア

【イベント参加者】

コーチやスタッフのほか女子選手 4 人、男子選手 6 人

【競技】

柔道

【調査場所】

伊奈町役場

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

柔道オーストラリア・ナショナルチームの代表選手団が 2019 年 8 月 20 日、東京オリンピック・パラリンピックで同国のホストタウンを務める伊奈町を訪れ、大島清町長を表敬した。

伊奈町は 18 年 11 月、埼玉県、上尾市と共にオーストラリアの柔道競技の統括団体「柔道オーストラリア」との間に東京オリンピック・パラリンピックへ向けた事前トレーニングキャンプの実施に関する覚書を締結。同チームの選手団は、上尾市の埼玉県立武道館を練習拠点、伊奈町の県民活動総合センターを宿泊施設として滞在していた。埼玉県が運営する施設がオリンピックの事前キャンプ拠点に指定されるのは今回が初めて。

選手らは 8 月 25 日から日本武道館で開催された「2019 世界柔道選手権東京大会」の出場に向け来日した。事前合宿として 18 日から 24 日にかけて同町に滞在し、トレーニングを行った。表敬訪問には、コーチやスタッフのほか女子選手 4 人、男子選手 6 人が出席した。チームマネジャーを務める木村仁さんによる通訳の下、選手の自己紹介や懇談が約 30 分間にわたり行われ、兄妹同士の選手は「顔がよく似ているでしょう」などとコメントし、大島町長も笑顔を見せた。

各選手には、町の特産品のバラの花束と、バラをモチーフにした町のイメージキャラクター「伊奈ローズちゃん」「伊奈ローズくん」のぬいぐるみが贈呈され、記念撮影時には同キャラクターのマスコットも登場し、選手から驚きの声も上がった。

大島町長は「伊奈町がオリンピックに向けた事前トレーニング地域になったこと、皆さんが伊奈町に来てくださったことがとてもうれしい。伊奈町で充実した練習期間を過ごしていただき、活躍してほしい」と激励した。

小学校で駐日ギリシャ大使夫人が講演

ギリシャについて分かりやすく児童にレクチャー

【調査ホストタウン】

埼玉県 三郷市

【イベント開催日】

2019/4/24

【相手国・地域】

ギリシャ

【イベント参加者】

全校児童 464 人

【競技】

【調査場所】

丹後小学校

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

埼玉県三郷市の丹後小学校で 2019 年 4 月 24 日、駐日ギリシャ大使のイオアンナ・ハリクリア・ヤナカル大使夫人が、ギリシャ共和国の文化・歴史、オリンピックの歴史などの講演を行った。

同市は 16 年 6 月にギリシャを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。17 年から市内の小・中学校でギリシャ共和国大使館員による講演や、年に 1 度「ギリシャ給食」を出すなどのホストタウン交流事業を行ってきた。今回はその一環として、丹後小学校に大使夫人を招いた。

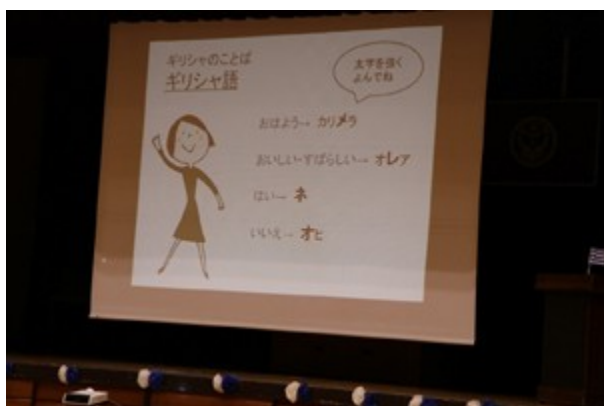
講演は体育館で行い、全校児童 464 人が参加。大使夫人は、地図や写真を用いてギリシャの位置や文化遺産などについて説明。「おはよう」「おいしい」「はい」「いいえ」などのギリシャ語や、代表的な食べ物、ギリシャ神話、オリンピックの歴史などについて話した。

講演の中で「ギリシャ国旗の青色は何を表しているか」などのクイズや、ギリシャの小学生の暮らしについてなどにも話が及んだ。企画した同市企画総務部プロジェクト推進課の児玉紗和さんは「児童たちは一つ一つの話に驚いたり感心したり、クイズにも積極的に手を挙げて参加し、興味を持って生き生きと聴いていた。質問コーナーでは、ギリシャの生活についてなど活発に質問していた」と話す。

講演後、大使夫人と木津雅晟（きづまさあき）三郷市長は児童と一緒に、教室でギリシャ料理風の給食を食べた。メニューは、エビ、タマネギなど地中海地方でとれる野菜や海産物を使った「地中海風スープ」、ヒヨコ豆をペースト状にした「フムス入りサラダ」、「ポテトとナスのムサカ」、黒パンなど。

「児童からは、おいしいとの感想が多かった。講演について大使夫人は、児童たちによる歓迎の飾り付けや、ギリシャの国旗を持って児童たちが迎えたことに感激していた。児童からの質問も多く、『かわいくて楽しかった。子どもたちと

交流ができてとても良かった。良い時間が過ごせ、楽しくて帰りたくないくらい』と話していた」と児玉さんは振り返る。



みさとシティハーフマラソン会場にギリシャブース特設

大使がメダル授与、ソウルフードでホストタウン PR

【調査ホストタウン】

埼玉県 三郷市

【イベント開催日】

2020/3/2

【相手国・地域】

ギリシャ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

セナリオハウスフィールド三郷周辺

【調査日】

2020/02/02

【補足情報】

埼玉県三郷市のセナリオハウスフィールド三郷周辺で 2020 年 2 月 2 日、三郷市体育協会主催「第 51 回みさとシティハーフマラソン大会」が行われた。会場には、ホストタウン PR 活動の一環として同市企画総務部プロジェクト推進課がギリシャブースを特設した。

同大会には、ハーフマラソン 1863 人のほか、10 キロ、3 キロを合わせ計 2919 人が出場。入賞者にはコンスタンティン・カキュシス駐日ギリシャ大使がメダルとオリーブ冠を授与した。トラック横のスペースには青色と白色のギリシャの国旗と同じ色合いのテントが並び、飲食店やスポーツグッズ販売店約 20 店と共に、4 つのギリシャ関連ブースが並び多くの客が訪れた。

ブースでは、ギリシャ共和国について国土面積や人口などの基本情報をはじめ、文化や三郷市との交流についての説明を掲示。同課の 3 人が来場者へ説明するなどの対応をした。同課の児玉紗和さんは「昨年 11 月に『2020 年東京オリンピック競技大会に係る事前キャンプの基本協定締結式』への出席と、『ジャパンウィーク』への参加のためギリシャを訪れた。その際に民芸品店で購入した、古代の戦士がかぶってかぶとを模した物やオリーブの葉の形をした冠を、よりギリシャ文化に親しんでもらうために並べた。家族連れや子どもが訪れ、かぶって撮影する人も多く、120 人ほどの対応をした」と話す。

ギリシャ製品の輸入を手掛ける企業「ケイアンドエム」は、ホットワインの無料提供やギリシャ産オリーブオイルの販売、同じく「ノスティミア」はワイン、オリーブの実、ピスタチオを販売した。レストラン「ミリュウ」は、小麦粉でできたピタパンにチキンを挟み、タマネギやトマトなどの野菜、ヨーグルトソースを使ったギリシャのソウルフードといわれる「ギロピタ」を実演販売。走り終わった参加者や、その家族らが長蛇の列を作っていた。

マラソンに参加したさいたま市在住の 40 代女性は「マラソンに参加しに来て、ギリシャのブースを見つけた。5 月に夫とギリシャに行く予定で、興味が湧いたので見に来た。ほかの大会でこのように本格的な商品が並ぶことはあまりないの

でうれしい。『ギロピタ』を食べたが、ハーブが利いていて、ヨーグルトソースも入っていておいしい」と話していた。



中学校でギリシャ語講座

ギリシャの歴史、文化についてもレクチャー

【調査ホストタウン】

埼玉県 三郷市

【イベント開催日】

2019/6/14

【相手国・地域】

ギリシャ

【イベント参加者】

2年 1組・2組の生徒合わせて 64人

【競技】

【調査場所】

彦成中学校

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

埼玉県三郷市の彦成中学校で、ギリシャ語の第一人者である共立女子大学の木戸雅子教授を特別講師として招き「ギリシャ語講座」が 2019 年 6 月、3 回にわたり行われた。三郷市は 16 年 6 月、ギリシャを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、17 年から市内の各小・中学校でギリシャ共和国大使館員による講演や、年に 1 度市内全小・中学校でギリシャ給食を出すなどのホストタウン交流事業を行ってきた。さらにギリシャに親しむため、2019 年からは言語を学ぶプログラムを行い、1 回目を彦成中学校で行った。

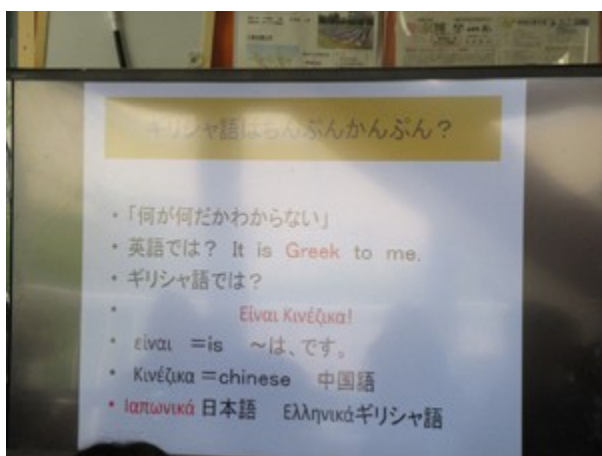
同市企画総務部プロジェクト推進課の児玉紗和さんは「これまでも交流事業を行ってきたが、言語へのアプローチをしていなかった。選手が滞在している時などに、児童・生徒が選手とあいさつを交わすなどの交流ができればと思い企画した。講師は、『日本ギリシャ協会』に紹介していただいた」と話す。

彦成中学校 2 年 1 組・2 組の生徒合わせて 64 人は、19 年 6 月 14 日、21 日、28 日、各日 1 時間、計 3 回学んだ。講座はギリシャ語のアルファベット、ギリシャ語由来の英語「school」「music」などをはじめ、ギリシャ正教や神話も交えて行われ、生徒は「こんにちは」「ありがとう」などのギリシャ語だけではなく、ギリシャの歴史、文化についても学んだ。

児玉さんは「木戸教授によると、通常ギリシャ語の講座は長い時間を掛けて行うことが多いので、今回は生徒の反応を見ながら講座を進めたとのことだったが、想定より反応が良く、少し進んだ話もできたとのこと。私が現場で見ている、生徒たちは慣れないギリシャ語に四苦八苦しながらも、積極的に発音を真似するなど興味を持って学んでいた。身近な単語で同国とつながっていると感じ、興味を深めていたようだ。来年度はほかの中学校で行う予定」と話した。

講座最終日には、ギリシャ陸上競技連盟の選手に向けたメッセージカードを作成。生徒たちは「皆さんをお迎えできることは喜びです。活躍を祈っています」など 7 つほどのギリシャ語文案の中から選び、カードに自筆した。カードにはあらかじめ桜や歌舞伎などが描かれていたが、自分で絵を描き加えた生徒もいたと

いう。カードは、後日同陸上連盟のヘッドコーチと同国在住で日本文化周知に携わる日本人に手渡された。



「ブラジルホストタウン講演会」を開催

ブラジルの多様性、文化、広大な自然、料理などを紹介

【調査ホストタウン】

埼玉県・新座市

【イベント開催日】

2019/12/21

【相手国・地域】

ブラジル

【イベント参加者】

48 人

【競技】

【調査場所】

にいざほっとふらざ

【調査日】

2019/12/21

【補足情報】

2020 東京オリンピック・パラリンピックに向け、ブラジルを相手国としたホストタウンに登録されている新座市は 2019 年 12 月 21 日、市内で「ブラジルホストタウン講演会」を開催した。同市は、東京オリンピック、パラリンピックで射撃競技の会場となるが、ホストタウンとしてブラジルオリンピック選手団の事前トレーニングの受け入れも実施することから、「地域の人々にブラジルについて知ってもらい、来年の受け入れを楽しんでもらいたい」と、総合政策部オリンピック・パラリンピック推進室が同イベントを企画した。

講演会は、「ブラジル紹介」「ブラジリアンユーススクールゲームズ 2019 報告会」「世界で愛されるチョコレート-ブラジル共和国編」の 3 部構成で行い、48 人が参加した。

19 年 4 月から同市の国際交流員として活動するグスタヴォ・ラモスさんは、流ちょうな日本語でユーモアを交えながらブラジルの多様性や、文化、広大な自然、料理などを紹介。ミニポルトガル語講座では参加者も声を出し簡単なあいさつなどを学んだ。

ブラジル全 27 州から若者が参加するスポーツイベント「ブラジリアンユーススクールゲームズ 2019」が同年 11 月 27 日～29 日に同国ブルメナウで行われ、同国オリンピック委員会の招待で県内から参加した中学生 2 人、高校生 2 人が登壇。「日本とは異なる練習法に少し驚いた」「SNS のアカウントを交換し今でも交流している」など感想や現地の様子を報告。男女混合 4×50 メートルメドレーリレーで銅メダル獲得した中学 2 年の梅原みこさんは「言葉など心配だったが、ネット翻訳や分かりやすい英語で話しかけてくれてコミュニケーションを取り、とても楽しかった」と振り返り、高校 2 年の余田開さんは「よくしてもらったので、来年は僕たちがお迎えする番」と意欲を見せた。

ブラジル産カカオを使ったチョコを生産販売する明治は、チョコと通じたブラジルとのつながりを紹介、チョコレートの試食を行った。

さいたま市から参加した橘千佳子さんは「今までイメージしていたブラジルとは違う、ヨーロッパやアフリカの影響を受けた文化や生活を知ることができ、行ってみたくなった」、春日部市の藤江恵子さんは「中高生が遠い国まで行って、いろいろな体験をしてきたという報告に感動した。遠くても親しみやすい国という印象」とブラジルに思いを寄せた。

同施設 3 階のギャラリーでは「ブラジル写真展」も開催。新座市立第二中学校の生徒によるブラジル紹介、県内のホストタウンの紹介、ブラジルの楽器の展示などを行っていた。

同推進室室長の増田順子さんは「熱心に聞いていただき、ブラジルについての知識が深まったと思う。市民の皆さん一人一人がブラジルに興味を持ってもらえるよう発信していきたい」と話した。





中学生がブラジルで開催のスポーツイベントに参加

ホストタウンの縁でブラジルのオリンピック協会が招待

【調査ホストタウン】

埼玉県・新座市

【イベント開催日】

2019/11/27

【相手国・地域】

ブラジル

【イベント参加者】

市立第五中学校 2年の梅原みこさんと並木琉空さん、立教新座高校 2年の余田開さん、大澤創さんの 4人

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/07

【補足情報】

新座市の中高生 4 人が、ブラジルのブルメナウで 2019 年 11 月 27 日から 3 日間開催されたスポーツイベント「ブラジリアンユーススクールゲームズ 2019」に参加した。

ブラジリアンユーススクールゲームズはスポーツ振興や交流促進を目的に、ブラジル全 27 州から約 6000 人の若者が集まり開催されるスポーツイベント。日本のインターハイに相当する大会だという。

東京オリンピック、パラリンピックで「射撃」競技の会場となっている新座市は、市内にある立教学院がブラジルオリンピック選手団の事前トレーニングを受け入れることから、同国の「ホストタウン」としても登録されている。

ホストタウンの縁で同国のオリンピック協会に招待された同市の市立第五中学校 2 年の梅原みこさんと並木琉空さん、立教新座高校 2 年の余田開さん、大澤創さん、同じく同国のホストタウンとなっている神奈川県相模原市、東京都大田区・中央区からの中学生と合わせ計 10 人の選手が同大会に参加した。

梅原さんが第 3 泳者でバタフライを務めた男女混合 4×50 メートルメドレーリレーで、銅メダルを獲得したほか、男子 50 メートル自由形、100 メートル自由形、200 メートル個人メドレーで相模原市の伊勢空翔（たかと）さんが金メダルを獲得。女子 50 メートル平泳ぎ、女子 100 メートル平泳ぎで中央区の熊谷奈津季（なつき）さんが金メダルを獲得するなど、それぞれ力を発揮し見事な結果を収めた。



柔道メダリスト山口香さん講師に人権問題講演会

五輪や柔道で女性に門戸が開かれてきた歴史などを紹介

【調査ホストタウン】

埼玉県・新座市

【イベント開催日】

2019/12/7

【相手国・地域】

ブラジル

【イベント参加者】

102 人

【競技】

【調査場所】

ふるさと新座館ホール

【調査日】

2020/02/07

【補足情報】

柔道メダリストで筑波大学教授の山口香さんが講師を務めた人権問題講演会が2019年12月7日、ふるさと新座館ホールで開催された。

「全ての人々の人権が真に尊重される社会」の実現を目指し、広く地域住民を対象に人権問題に対する理解と認識を深めることを目的に、12月の人権週間に合わせて開く同講演会。1998年から開催し、2019年で22回目となる。

新座市は東京オリンピック・パラリンピックで「射撃」競技の会場となり、市内にある立教学院でブラジルオリンピック選手団の事前トレーニングを受け入れるほか、同国のホストタウンとしても登録されている。そのため、18年の人権問題講演会はアスリートの方としてトライアスロンにも挑戦している弁護士の菊地幸夫さんを講師に招待。菊地さんは「出会いの人生から学んだこと」をテーマに講演した。

19年は、柔道メダリストである山口さんを招き、「強さは優しさ 柔道から学んだこと」をテーマに講演し、102人の来場者が熱心に聴講した。1964年生まれの山口さんが小学1年生の時に柔道を始め、第1回全日本女子体重別選手権大会において最年少で優勝したのを皮切りに、まだ女子で柔道に取り組む人が少なかった時代から女子柔道をけん引。88年のソウルオリンピックでは銅メダルを獲得している。

山口さんはユーモアを交えながら、柔道界やオリンピックにおいて女性に門戸が開かれてきた歴史やスポーツにおける他国の文化の尊重の慣習などスライドを交えながら話し、スポーツのみならず「性別・障害の有無・年齢などに関係なく、やりたいことに挑戦できる世の中であってほしい」と期待を込めた。「ホスト国・ホストタウンとして外国の方に声を掛ける勇気を持とう」とも呼び掛けた。

同市教育委員会生涯学習スポーツ課の飯田英子さんは「山口さんの話は楽しく分かりやすく、参加者の皆さんにも、人権問題は遠い話ではなく生活に密着しているものだと感じていただけたのではないかと話す。

山口さんの講演に先立ち、市内の小中学生から募集した「人権標語」の表彰も行われ、受賞した生徒・児童が表彰状を受け取った。



小学校給食にスリランカ料理

カボチャカレーや紅茶で煮たゆで卵などに舌鼓

【調査ホストタウン】

千葉県 山武市

【イベント開催日】

2020/1/24

【相手国・地域】

スリランカ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

山武市立大平小学校

【調査日】

2020/01/24

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックに向けて、山武市内の小学校では毎月 1 回、世界各国の料理を小学校給食に取り入れる「オリパラ給食」が行われている。市内小学校 13 校ではこれまで、オランダ、カナダ、フランスなどの料理が登場した。山武市は 2016 年 1 月、スリランカを相手国とした東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

山武市立大平小学校でも学校給食期間が始まった 20 年 1 月 24 日、全校児童がスリランカにちなんだ献立の給食を味わった。給食は、スリランカスパイスが入ったカボチャカレー、スリランカの名産品である紅茶で煮たゆで卵など 4 種類。

配膳が開始されると、児童は興味深そうにカレーが入った鍋をのぞいていた。カボチャカレーを食べた 6 年生の女兒は「いつものカレーより甘くておいしい」と話していた。紅茶で味付けされたゆで卵も、児童らは残すことなく完食。普段の給食とは少し違う味付けながら、お代わりをする児童も現れるなど評判は上々だった。

学校給食期間に合わせ、27 日は栃木県の郷土食、28 日は山武市産のニンジンを使ったメニューが出された。児童は旬の食材や地元の材料を食べることで、食事マナーや栄養と健康について学んでいる。

同小学校はオリンピック・パラリンピック推進指定校であり、給食以外にも英語教育の一環として年 2 回、異文化理解講座を行うなど、多様な国や地域への理解推進を図っている。

山武市では、14 年からスリランカ選手団の事前合宿受け入れを行っている。山武市ではオリンピック・パラリンピック戦略推進室を設置。過去にはスリランカ国の訪日 JICA 研修員を招き、山武市の文化や歴史に触れる交流事業を実施した。

山武市の民間 NGO である「S.N.E.C.C（スリランカ日本教育文化センター）」は、スリランカから来日した学生と市内青年を交えたカレー作りのイベント（2019 年 7 月）を行うなど国際交流を深めている。

今後は中・高・一般の吹奏楽団による、スリランカをはじめとした、各国の国歌の演奏会を開くほか、オリンピック競技大会終了後にはスリランカ選手団を招き、田んぼアートイベントを行う予定。

スリランカの行政官らが訪問、異文化体験通じ交流

箸作り・弓道・書道などで日本の伝統文化に触れる

【調査ホストタウン】

千葉県 山武市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

スリランカ

【イベント参加者】

研修中のスリランカ政府の行政官 3 人と、JICA スリランカ事務局の現地採用職員 1 人

【競技】

【調査場所】

山武市役所

【調査日】

2020/03/13

【補足情報】

JICA 筑波で研修中のスリランカ人 4 人が 2019 年 11 月 3、4 の両日、山武市を訪れ、城西国際大学祭の視察、各種体験活動、ホームステイを通じた友好・交流を行った。参加したのは JICA 筑波で研修中のスリランカ政府の行政官 3 人と、JICA スリランカ事務局の現地採用職員 1 人で、いずれも 30～40 代。山武市は 16 年 1 月、スリランカを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、スリランカの青少年の招へいやスリランカ公用語のシンハラ語教室の開催など交流事業を展開している。

3 日は城西国際大学東金キャンパスを視察。同大のスリランカ人学生による研究発表を見学した後、研修員はそれぞれの研究分野である農業、子育て、教育について、大学生らと話した。

その後、一行は「さんぶの森交流センターあららぎ館」に移動し、箸作りを体験。千葉の国産材である山武杉をカンナで削り箸作りに取り組んだ。夕食は日本食を堪能。生魚を食べる機会がない研修員は戸惑いながらも、サーモンや天ぷらを楽しんだ。

4 日は、過去に弓道の全国大会出場を果たしている松尾高校で弓道体験に臨んだ。研修生 4 人は実際にはかまを着て弓道に挑戦。的当てに苦戦する研修員を生徒がサポートした。弓道体験では、生徒と研修員が英語やジェスチャーを使って交流を図った。

昼食後、一行は山武市役所で書道を体験。山武市職員に教わりながら、研修生は「日本」「細蘭（せいろん）」と書いた。

滞在中、国際交流やスリランカに理解のあるホームステイ先へ宿泊した。ホームステイ先では、研修員がスパイスの利いたスリランカオムレツを作るなど、ホストファミリーとの食事を楽しんだほか、空いた時間を利用して、本須賀海岸で日本の海を視察した。

2 日間にわたる交流事業を通じ、参加した研修員は「日本人は規律正しい人が多い」「スリランカと日本はおもてなしの姿勢が似ている」と振り返った。これに対して市総務部東京オリンピック・戦略推進室の伊藤佐智穂さんは「日本に対しての気付きがあったということは、相互理解の目的を果たしたように思う。今後のホストタウンの取り組みにもプラスに働くのでは」と期待を込める。



スリランカからスポーツ研修生らを招へい

研修生ら地元中高の授業に参加 生徒と交流

【調査ホストタウン】

千葉県 山武市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

スリランカ

【イベント参加者】

スポーツで優秀な成績を収めている研修生 2 人（16 歳の女子＝高飛び競技者と 17 歳の男子＝800 メートル競技者）と随行員 1 人

【競技】

【調査場所】

山武市役所

【調査日】

2020/03/13

【補足情報】

山武市は東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業を通じて青少年の友好と相互理解を促進するため、2019年10月10日から17日にかけて、ホストタウン相手国であるスリランカからスポーツで優秀な成績を収めている研修生2人と随行員1人を招へいした。研修生は16歳の女子（走り高跳び競技者）と17歳の男子（陸上800メートル競技者）。山武市は16年1月、スリランカを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、スリランカの青少年の招へいやスリランカ公用語のシンハラ語教室の開催など交流事業を展開している。

10日の到着後、まず日本での生活についてオリエンテーションを実施。国外に出た経験のない研修生に対し、トイレの使い方などを教えた。その後、山武市役所内を見学し市長を表敬訪問し、初日はホテルに宿泊した。

翌11日は山武郡市環境衛生組合を視察。ゴミ処理について説明を受けた。その後、千葉県立松尾高校へ向かい、5・6限の授業に参加。市教育委員会教育部生涯学習課の花澤日奈多さんは「研修員と生徒らが英語で交流していたのが印象的だった」と振り返る。

その後、宿泊先のホストファミリーと合流。滞在中は過去にスリランカとニュージーランド派遣事業に参加したことのある家庭2組の家に宿泊した。

12日～14日は山武市内を中心に観光した。台風19号の影響により予定していた施設には行けなかったが、代わりに折り紙体験や成東総合運動公園で競技練習する機会が設けられた。研修生は「運動場が整備されていて驚いた」と話し、運動を楽しんだ。14日はホストファミリーと成田市を観光した。

15日には成東東中学校で授業に参加。同校では、スリランカ青年のため特別プログラムが組まれた。生徒はスリランカ人の訪問を喜んだ様子で、体育や図工の授業を通じて研修生と交流を図った。同校担当者は「生徒が身振りや手振り、学

習した英語を使って進んで研修生と交流したことが良かった」「研修生を迎えるに当たり、おもてなしの心、思いやりの心を育てることができた」と話す。

16日は東京に行き、スリランカ航空とスリランカ大使館を訪問し都内を見学。
17日、成田空港からスリランカに帰国した。

山武市ではホストタウン登録以前の14年から、スリランカとの青少年相互交流事業に取り組んでいる。スリランカでの連続爆破事件により、19年の市からスリランカへの派遣事業は中止になった。そのため、招聘事業では「日本の同世代の子どもと交流してほしい」という思いから、中高生との交流機会を多く設けた。





米国選手・コーチ招き陸上クリニック

小中学校の児童生徒対象に実践的指導 質疑応答も

【調査ホストタウン】

千葉県 佐倉市・成田市・印西市

【イベント開催日】

2020/1/26

【相手国・地域】

米国

【イベント参加者】

小学生 124 人、 中学生 106 人

【競技】

陸上競技

【調査場所】

中台運動公園陸上競技場

【調査日】

2020/01/26

【補足情報】

成田市の中台運動公園陸上競技場で 2020 年 1 月 26 日、米国を相手国としたホストタウン交流事業の一環として、米国男子短距離・ハードルアシスタントコーチコーチのダリル・ウッドソンコーチとトップアスリートであるブライス・ロビンソン選手を招いて「陸上クリニック」が開催された。当日は小泉一成成田市長も出席した。

午前中は小学生を対象とした陸上教室を実施。市内の小学校を通じて募集を行い、124 人の応募があった。気温が低い中、早朝に降った雨の影響もあり、屋外グラウンドではなく、室内のウォーミングアップトラックを使って指導が行われた。ラジオ体操で始まり、ベンチを使った腿上げから、ボールを使った運動、後ろ向きランニングなどで、バランスをコントロールする動作、全身の筋肉を使う運動が行われた。最後に幾つかのチームに分かれタッチリレーが行われた。途中、ダリルコーチや ブライス選手も一緒に走り大いに盛り上がった。閉講式では質疑応答の時間を設け、その後、参加者を代表して児童からお礼の言葉を伝え、最後は全員で記念写真を撮った。

午後は、中学校の陸上部の生徒を対象とした陸上クリニックを開催した。市内の中学校だけではなく、連名でホストタウンに登録されている佐倉市や印西市の中学校からも参加があった。米国を相手国とした「復興ありがとうホストタウン」に登録されている岩手県大船渡市の生徒男女各 1 人も参加し、計 106 人の生徒がコーチらの指導を受けた。

陸上部に所属する生徒を対象としていたことから、クリニックの内容は小学生の部よりも専門的に行われ、ミニハードルなどの道具を使ったスポーツの基本動作につながるトレーニングが行われた。トレーニングの最後には、クリニックの総仕上げとして 20 年の東京オリンピックから正式に採用されるミックスリレーが行われた。

閉講式では小学生の部と同様に質疑応答の時間を設け、参加者の代表者が英語のスピーチで感謝の言葉を伝え、最後に記念撮影を行った。ウッドソンコーチと

ロビンソン選手は記念撮影終了後もたくさんの生徒に囲まれ、写真撮影やサインの求めに応じるなど、最後まで交流を楽しんだ。

米国空軍太平洋音楽隊員がサックス四重奏披露

スポーツだけではなく「音楽」でも交流

【調査ホストタウン】

千葉県 佐倉市・成田市・印西市

【イベント開催日】

2020/2/20

【相手国・地域】

米国

【イベント参加者】

約300人

【競技】

【調査場所】

成田市役所大会議室

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

成田市役所で 2020 年 2 月 20 日、米国を相手国としたホストタウン交流事業の一環として、米国空軍太平洋音楽隊の隊員で結成された「サックス・カルテット」によるサックス四重奏が披露された。同市では、スポーツだけではなく「音楽」という文化での交流を図ろうと毎月 1 回「ふれあいコンサート」を開いているが、今回は米国大使館の後援も得て、米空軍音楽隊の参加を得ることができた。

会場となった市役所の大会議室には、用意した椅子の数を優に超える約 300 人の来場があり、立ち見も出るほどの人気で、集まった観客は昼のひとときを音楽隊の演奏に酔いしれた。

観客からは「二度と巡り合えない、いい時を過ごさせていただいた」「素晴らしい演奏に酔いしれた。いつまでもずーっと聴いていたい音色だった」「大変聴き応えがあり良かった。美しいメロディーをありがとう」「たった 4 人なのに迫力があり、技術力の高さに感服した。サックスの魅力を満喫させていただいた」「命の洗濯ができた」「演奏を聴いて涙が出てきた。また明日から頑張っていけそう」など好評な声が聞かれた。演奏会後には観客と一緒に写真撮影するなどして、交流も図られた。





「アイルランドを知る」講演会開催

共生社会先進国の取り組みなどを紹介

【調査ホストタウン】

千葉県 成田市

【イベント開催日】

2020/2/22

【相手国・地域】

アイルランド

【イベント参加者】

定員 100 人を大幅に超える 160 人近く

【競技】

【調査場所】

成田市役所大会議室

【調査日】

2020/02/22

【補足情報】

成田市は 2020 年 2 月 22 日、東京パラリンピックにおいてアイルランドチームの事前キャンプの受け入れが正式に決定したことを記念し、市役所大会議室で講演会「スポーツを通じた共生社会講演会～共生社会先進国アイルランドを知ろう！～」を開催した。

講演は 2 部構成で、第 1 部の前半では 19 年にアイルランド大使館の副代表に着任したピーター・ニアリーさんからアイルランドの風土や歴史、そして文化・観光についての紹介があり、パラリンピックへの参加が予想される競技、馬術、カヤック、ヨットやボクシングについての説明もあった。

後半では、成田市スポーツ振興課オリンピック・パラリンピック推進室の安部健太郎さんが、成田市とアイルランドとの間でこれまでに実施した視察や交流イベント、アイルランドの共生社会の取り組みについて説明した。

続く第 2 部では、日本のパラスポーツ界をけん引し、数多くのメダリストを育ててきたパラノルディックスキー日本チーム GM の荒井 秀樹さんが、パラスポーツの魅力、選手のプロフィールも含め、東京大会本番に向けてパラリンピックをより身近に感じられるテーマの講演を行った。

定員 100 人を大幅に超える 160 人近くの参加があり、講演を熱心に聞く姿が印象的だった。質疑応答も活発に行われ、参加者のアイルランドやパラスポーツへの高い関心がうかがえた。



「スクラムフェス」でサウジアラビアを PR

ホストタウン決定受け文化・魅力を発信

【調査ホストタウン】

東京都 調布市

【イベント開催日】

2019/11/1

【相手国・地域】

サウジアラビア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

調布市は、2019年9月から11月に開催された「調布スクラムフェスティバル vol.6」に、市が東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンになっているサウジアラビア王国の紹介ブースを出展した。同フェスティバルは、9月から11月の週末など15日間にわたって開催されたが、サウジアラビア王国の紹介ブースは11月1、2の両日、トリエ京王調布 B 館横通路に設置された。

同フェスティバルは、ラグビー・ワールドカップ 2019 日本大会に合わせて調布市の魅力を発信し、市民に触れる機会・参加する機会の場の提供とイベントを通して街の回遊性の向上、訪日外国人や市内外の来場者との交流の促進を目的に実施された。調布市は16年1月、サウジアラビアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されたが、19年11月1日は市内の東京スタジアムでニュージーランド対ウェールズの3位決定戦が行われたため、多くの人出を見込んで、ホストタウンのPR活動を行うことにした。

同ブースでは、「神の恵みの果実」とコーランに書かれている栄養価の高い果実「デーツ」の試食や、日本語の名前をアラビア文字で書く「アラビア文字体験」、自然由来の染料を使ったボディアート「ヘナタトゥー」体験などのほか、砂漠でのキャンプで使うテントを張り、砂嵐で飛ばされないような重さのあるソファなど実際にテント内で使う家具も併せて展示した。

当日、サウジアラビア大使館文化部と留学生がブースを担当。民族衣装を着た留学生らが呼び込みをするなどして会場を盛り上げ、多くの人が気軽に楽しむ様子が見られた。ブースでのイベントに参加した20代の女性は「日本ではなかなか味わえないサウジアラビア産のデーツは干し柿のように甘く、味も濃くておいしかった。高級なのでなかなか口にできず、試食はうれしかった。ヘナタトゥーは、とてもきれいな模様で気分が上がった。1〜2週間ほどで消えるということなので、この間はサウジアラビアのことを思いながら過ごしたい」と話していた。

イベントを主催する調布市生活文化スポーツ部文化生涯学習課の内田祥代さんは「屋外での大きなイベントでサウジアラビア王国のPRができたことをうれしく思う。留学生らが場を盛り上げ、人々との交流を丁寧に行ったことで、多くの方

に楽しんでもらえた素晴らしいイベントになった。今後もホストタウンとして、サウジアラビアのことを知ってもらうために文化や魅力を広く発信していきたい」と話す。



「サウジアラビア文化展」を開催

民族衣装の展示や家庭料理の試食も

【調査ホストタウン】

東京都 調布市

【イベント開催日】

2020/1/30

【相手国・地域】

サウジアラビア

【イベント参加者】

900 人以上

【競技】

【調査場所】

調布市文化会館たづくり

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

調布市は 2020 年 1 月 30 日～2 月 3 日、市文化会館たづくりで「サウジアラビア文化展」を開催した。同市は 16 年 1 月、サウジアラビアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、このイベントもホストタウン交流事業の一環として行われた。

同市とサウジアラビアとの交流は、02 年の日韓 FIFA ワールドカップでサウジアラビア代表チームのキャンプ地が調布になったことに始まった。その後、同チームの誘致に向けて組織された実行委員会のメンバーを中心に「調布市サウディアラビア友好会」が設立され、現在は在日サウジアラビア人との「サウディアラビアンフットサル国際親善カップ」や調布の子どもたち向けに「アラブ イスラーム学院体験学習会」などを実施している。

文化展では 2 月 2 日、サウジアラビアと調布市の相互交流のさらなる発展を祈念したセレモニーを実施。サウジアラビア王国大使館文化部文化アタッシェ Dr.アリ・アルアナジさん、サウジアラビア王国大使館駐在武官 Col.サーミー・アルトゥエイジリさん、サウジアラビア王国大使館文化部文化アタッシェ・アシスタントガーリー・アルモハンマドさん、荒井芳則調布副市長の 4 人によるテープカットが行われた。

同館のギャラリーでは同国の民芸品や伝統的なテントなどを展示し、留学生が案内した。アラビア語で自分の名前を書く体験ができるブース出展や民族衣装を着ての記念撮影、自然由来の染料を使ったボディーペイント「ヘナタトゥー」体験なども行われた。

同国の家庭料理「カブサ」（鶏肉をのせた炊き込みご飯）の調理体験も用意し、講演会終了後に料理を来場者全員に配布。食べきれないくらいの量の料理を出すのが同国流のおもてなしで、当初は試食程度の予定だったが、一人一人に 1 人前の量のカブサが提供された。スパイスが利いているが子どもでも食べられる味で、「おいしい」との声が場内で飛び交った。

イベントを担当した調布市の山田敦子さんは「多くの企画を一度に行ったので大変だったが、900人以上の方に来場いただき、サウジアラビアの魅力が伝わる、とても充実した良い催しとなった。東京2020大会も調布市は同国のホストタウンに決定したので、今後も交流を深め魅力を伝えていきたい」と話す。



市民向け「アラビア語講座」を開催

ホストタウンとしてサウジアラビア歓迎準備で

【調査ホストタウン】

東京都 調布市

【イベント開催日】

2019/7/24

【相手国・地域】

サウジアラビア

【イベント参加者】

午前（語学講座）＝小学生から 60 代まで幅広い世代の約 15 人、午後（文化講座）＝約20 人

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

調布市は 2019 年 7 月 24 日～8 月 1 日、市文化会館たづくりでアラビア語講座を開催した。同市がサウジアラビアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されていることから、ホストタウン交流事業の一環として実施した。

同市とサウジアラビア王国の関係は 02 年のサッカー・ワールドカップで調布市が同国代表選手のキャンプ地となったことに始まる。以来、在日のサウジアラビア人との「サウディアラビアンフットサル国際親善カップ」や調布の子どもたち向けに「アラブ イスラーム学院体験学習会」を開くなどして交流を深めてきた。

同講座は全 5 回のコースで、募集人員は約 30 人。小学生から 60 代まで幅広い世代が参加した。語学講座に参加した小学 4 年生の男児は「文字を横向きに右から左に書いたりするのが楽しかった。もっと学びたい」と話す。

このほか、同国との交流事業として「アラブ イスラーム学院体験学習会」も 19 年 7 月 20 日、調布市サウディアラビア友好会と共催で開催。今年で 17 回目となる同学習会は 60 人の定員を超える応募がある人気イベントで、市内小中学生が同学院（港区）を訪問した。同国の伝統的な生活道具の紹介、国や文化・アラビア語についての学習、伝統的な料理であるカブサやデーツの食事会などが行われた。

学習会に参加した小学生児童は「スパイシーチャーハンみたいな料理（カブサ）がおいしかった」「アラビア語は難しかったけど面白かった。自分の名前を書いてもらって、こんな字なんだなと思い、アラビアの文字を書きたいと思った」「サウジアラビアの人々がおもてなしや礼儀を大切にしていることを知り、日本と似ているなと感じた」などと感想を口にした。

アラビア語講座や学習会を担当した同市の山田敦子さんは「19 年度は、この学習会が一連のサウジアラビアとの交流事業の中で年度の最初となる企画となっ

た。これをきっかけに、その後の関連イベントに参加していただいた方も多く、サウジアラビアへの関心や交流をより深めてもらう良い機会となった。今後も、より多くの方に興味をもっていただけるような企画を行っていきたい」と話す。



オランダのパラアスリート招き「Game Changer プロジェクト」

障害者へのスポーツ導入の大切さについて講演

【調査ホストタウン】

東京都 江戸川区

【イベント開催日】

2019/11/20

【相手国・地域】

オランダ

【イベント参加者】

【競技】

パラ陸上競技

【調査場所】

平井小学校、総合体育館

【調査日】

2020/03/24

【補足情報】

江戸川区は 2019 年 11 月 20 日、区内で「Game Changer Project 2019 Autumn」を行った。「Game Changer プロジェクト」は、同区とオランダのオリンピック委員会・スポーツ連合が協力して行う事業で、オランダからパラアスリートや指導者を受け入れ区民との交流機会を作っている。今回は、パラアスリートのゲルト・ヤン・スケップ選手（短距離走）とパラリンピックスポーツエキスパートのヘレーン・ムースさん、オランダスポーツ連合の職員 2 人が、「2019 Autumn」に参加するため同区を訪れた。

江戸川区は 17 年 7 月、オランダを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された後、19 年 5 月に共生社会実現に向けた取り組みを実施する「共生社会ホストタウン」に追加登録され、同年 10 月には先導的・先進的なユニバーサルデザインの街づくりと心のバリアフリーに取り組む自治体として内閣官房から「先導的共生社会ホストタウン」に認定されている。

「Game Changer Project 2019 Autumn」で、スケップ選手らは午前中に区立平井小学校を訪問。会場には駐日オランダ大使も現れ、ゲルト選手や児童らと一緒にサッカーに興じる場面も見られた。車いす競技については、パラリンピックスポーツエキスパートのヘレーンさんが乗り方などを指導。ゲルト選手も児童と一緒に競技用車いすの乗り方を学んだ。ゲルト選手は子どもたちに伝えたいことがあったという。それは、「Never ever give up」というメッセージ。脳性まひを経験し、アスリートとして活動できないほど悪化した経験をしながらも復帰を果たしたゲルト選手だからこそ込められる思いがあった。話が終わった後、ゲルト選手の前にはサインを求める列ができた。

平井小でのイベントを終え、次は「障害者のスポーツに関する相談窓口」の現地研修に向かった。江戸川区は、区内 7 カ所のスポーツ施設にスポーツに関する相談窓口「スポーツコンシェルジュ」を設置している。ここには、区が独自に養成した「障害者スポーツ指導員」を複数配置し、外部機関との連携を図りながら障害者が自分に合ったスポーツが探せるような環境づくりを進めている。オランダにも同様の窓口があり、障害者をスポーツにいざなう存在となっている。当日はゲルト選手が障害者として、ヘレーンさんが付き添い役として「障害を持つ人が水泳をやりたいと思っている」という設定で窓口を訪れるシミュレーションを実施した。

最後は、総合体育館で理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を対象とした研修会を実施。江戸川区に在住・在勤の約 50 人が参加した。実際に職業として障害者に関わる人たちに向けて、障害者へのスポーツ導入の大切さや技術的な内容をヘレーンさんが講演した。講演では、日本とオランダの最大の違いとして、日本は障害がある人にスポーツをやってもらおうという考えが乏しく、そういった施設も少ないという点を指摘した。さらに、日本ではスポーツは余暇活動・趣味と捉えられがちで、やってもやらなくても構わないが、オランダでは社会参加のために「やるべきもの」として捉えられていることを説明。そうすることで、健常者と障害者の共生社会が実現すると語った。

後半はゲルト選手とサッカーをしたり、競技用車いすに乗ったりするなどの時間を設けた。研修会を終え、参加者からは「障害を持つ方にスポーツを勧めたい」という声が多く上がった。一日を終えてゲルト選手は「初めて訪れた日本で温かく迎えてくれてうれしかった」と述べ、江戸川区がオランダから学びながら新しいことを導入していることに対して喜びを表した。





オランダのパラ・メダリスト候補らが訪問

専門学校生に体験踏まえた授業 陸上教室で交流も

【調査ホストタウン】

東京都 江戸川区

【イベント開催日】

2019/7/3

【相手国・地域】

オランダ

【イベント参加者】

特別授業＝東京メディカル・スポーツ専門学校の学生 40 人、車いすアスリート陸上教室

＝10 人程度、知的障害者バスケットボールクラブとの交流＝25 人

【競技】

パラ陸上競技

【調査場所】

【調査日】

2020/03/24

【補足情報】

江戸川区に 2019 年 7 月 3 日、オランダからパラリンピックのメダリスト候補として名高いパラアスリートのマルレーネ・ヴァン・ガンセウインケル選手（短距離走・走り幅跳び）と同国オリンピック委員会・スポーツ連合の職員 2 人、ライデン大学アジアセンターの研究者 1 人が訪れた。江戸川区は 17 年 7 月、オランダを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された後、19 年 5 月に共生社会実現に向けた取り組みを実施する「共生社会ホストタウン」に追加登録され、同年 10 月には先導的・先進的なユニバーサルデザインの街づくりと心のバリアフリーに取り組む自治体として内閣官房から「先導的共生社会ホストタウン」に認定されている。

江戸川区は都内でも唯一の障害者スポーツ専管組織を持つ自治体。この組織が中心となり、オランダのパラアスリートたちと交流を行う「**Game Changer** プロジェクト」の一環として今回の取り組みが企画された。このプロジェクト名は、「物事を大きく変えたい」という目的の下、オランダ側が名付けた。

朝 7 時に区役所に集合した彼らはまず、東京メディカル・スポーツ専門学校の学生 40 人を対象に特別授業を実施した。集まった学生は理学療法士を目指しており、将来は障害を持つ人たちと触れ合う立場になる。

前半はマルレーネ選手が、左足が義足である自身の半生を語ったり、障害を持つ者がスポーツをやることについて当事者として解説したりと、「障害を持つアスリート」について話した。後半はグラウンドに出て、学生と一緒に体を動かしたり、実際に競技のデモンストレーションを行ったりした。その様子を見て学生たちは強く影響を受けた様子で、「障害を持つ人は弱いというイメージを持っていたが、圧倒的に強いパフォーマンスを目の当たりにして、スポーツの持つ価値を感じることができた」「障害者だから家にいたらいいい、ではなく、外に出てスポーツをすることは社会参加にもつながるのでは」などの声が寄せられた。

次にマルレーネ選手たちが向かったのは清新第二中学校。昼時に到着するスケジュールだったため、学校では特別にオランダ料理の給食を用意していた。給食を食べながら生徒たちがぎこちない英語で話し掛け、コミュニケーションを深め

た。これらの「おもてなし」に選手や職員も喜びの表情を見せた。グラウンドには競技用の義足や車いすが用意され、生徒たちは専門家の指導を仰ぎながらブラインドマラソンなどのパラスポーツを実際に体験した。

中学校を後にした一行は、区内で活動している「車いすアスリート陸上教室」に参加。当日は 10 人程度の障害を持つ小学生から高校生までが集まった。マルレーネ選手は子どもたちと一緒に 100 メートルを疾走。実際のパラアスリートを目の当たりにした子どもは「自分もマルレーネ選手みたいなアスリートになりたい」と話していた。

最後は「知的障害者バスケットボールクラブ」と交流した。このクラブは競技のレベルも高く、この日は 20 代を中心に 25 人程度が参加した。「メダリストが来た」と喜びながらバスケットボールを共に楽しみ、最後には「パラリンピックではオランダも応援するね」と選手たちに声を掛ける様子も見られた。

この日全ての行程が終わったのは 21 時。ハードなスケジュールだったが、マルレーネ選手は「さまざまな若い人たち、特に車いすの子どもたちと交流できて良かった。これからアスリートとして成長して、パラリンピックに出場してくれたらうれしい」と語った。





「共生社会」テーマに区職員研修会

共生社会の実現を本気で目指す区の思い新たに

【調査ホストタウン】

東京都 江戸川区

【イベント開催日】

2019/7/2

【相手国・地域】

オランダ

【イベント参加者】

200 人

【競技】

【調査場所】

江戸川区役所

【調査日】

2020/03/24

【補足情報】

江戸川区は 2019 年 7 月 2 日、区の職員を対象に「共生社会」をテーマにした研修会を開いた。年代や国籍、障害のある人など多様性に富んだ 3 人の女性を講師に迎え、200 人の職員が参加した。江戸川区は 17 年 7 月、オランダを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された後、19 年 5 月に共生社会実現に向けた取り組みを実施する「共生社会ホストタウン」に追加登録され、同年 10 月には先導的・先進的なユニバーサルデザインの街づくりと心のバリアフリーに取り組む自治体として内閣官房から「先導的共生社会ホストタウン」に認定されている。

始めに登壇したのは上智大学の学生団体「Go Beyond」代表の山本華菜子さん。100 人以上の団体を束ね、大学からの補助も得ながら活動している。山本さんは大学から平昌オリンピック・パラリンピックにボランティアとして派遣され、パラリンピックの持つ意味や「共生社会」について自分なりに何かできることをしたいと思い団体を立ち上げた。講演では団体立ち上げの経緯や、現在通っている理工学部で競技用の義足の研究開発をしていることを説明、今後は「大学院に進んで障害を持つ人たちの役に立ちたい」と話した。

2 人目の登壇者は、オランダ人弁護士のタミーク・ファンフーレンさん。人権問題を専門にしているタミークさんは、ダウン症である弟と一緒にスポーツがしたいと思い、障害の有無にかかわらずスポーツを楽しめるクラブを設立。その活動の中で、「共生社会」をつくるために自分ができることは何かを考えた際に到達したのが、法律家への道だった。講演では、そうした自身の体験を踏まえた上で、オランダの「共生社会」について語った。

最後の登壇者は、江戸川区生まれで江戸川区育ちのパラアスリートの辻内彩野さん（水泳）。東京パラリンピックの出場も間違いないといわれており、区が全力で応援している。元は健常者で水泳をやっていた辻内さんはインターハイにも出場するほどの選手だった。ところが、徐々に視力が低下する病気になってしまったため、水泳とは距離を置いていた。友人のパラアスリートとその件について話すと「パラ水泳をやってみては？」というアドバイスを受け、チャレンジした。今では日本記録を 8 つも持つまでになった。講演では、辻内さんらしい、明るいポジティブな人柄が垣間見える形でパラ水泳の魅力について説明した。

職員は真剣な面持ちで 3 人の話に耳を傾けた。共生社会の実現に向け、若い人たちがこれだけ頑張っているという姿に影響を受けたという人も少なくなかったという。

江戸川区では 20 年 4 月に組織改正を行い、地域共生を全庁で推進する係を創設する。「共生社会を目指して江戸川区は本気を出していく」という区長の思いが形となった。そのきっかけは、こうしたオランダとの関係が大きく作用している。都内の 62 の市区町村の中で唯一障害者スポーツに関する専門組織がある自治体として、これまで以上に共生社会の実現を本気で目指していくという決意は固い。



「目黒シティラン」 ゲストランナーにケニア出身選手

区内の小学校で交流学習 でかけっこ、給食も

【調査ホストタウン】

東京都 目黒区

【イベント開催日】

2019/11/24

【相手国・地域】

ケニア

【イベント参加者】

【競技】

マラソン

【調査場所】

目黒区立緑ヶ丘小学校ほか

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

目黒区は 2019 年 11 月 24 日、マラソン大会「第 4 回目黒シティラン」を開催し、同区が東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン相手国としているケニア共和国出身のマラソン選手をゲストランナーに迎えた。ケニア出身のゲストランナーは、札幌学院大学駅伝部所属の留学生ローレンス・グレさん、埼玉医科大学アスリートクラブ女子駅伝部所属のマーシャ・ヴェロニカさんの 2 人。

グレさんは現在、出雲駅伝や全日本大学生駅伝などに出場する有力選手として活躍し、目黒シティランには 17 年の第 2 回から参加。ヴェロニカさんは、新潟県代表として全国高校駅伝大会に出場した新潟産業大附属高等学校時代の第 3 回（18 年）から参加しており、今季は実業団チーム 1 年目を迎える社会人ランナーとして参加した。

第 4 回目黒シティランは開会式の後、一般参加ランナーが部門・グループごとに時間差でスタートした。ゲストランナー 2 人は参加者を応援する形で、所々でランナーに混じって伸びやかな走りを披露。大会終了後の表彰式では、ほかのゲストらと登壇し、日本語で自己紹介や目黒区のホストタウンの取り組みなどを説明した。

シティランの翌 11 月 25 日には、目黒区立緑ヶ丘小学校でホストタウン交流学習が行われ、引き続きグレさんとヴェロニカさんを招いて 1 年生から 6 年生まで全校児童が授業に参加した。

授業は、1～3 年生が参加する「1 部」（3 時間目）、4～6 年生「2 部」（4 時間目）の 2 部構成で、いずれも校庭で行われた。ヴェロニカさんは初参加だが、グレさんが同校を訪れるのは今回で 3 回目。2 年生以上の児童たちは顔見知りで、「ジャンボ！（スワヒリ語で「こんにちわ」）とあいさつし、初回と比べると各段に日本語がうまくなったグレさんと会話を楽しむ姿も見られた。

各部とも 2 人への質問コーナーでスタート。「1 日の練習でどれくらい走りますか?」「好きなものは何ですか?」などの質問が次々と挙がり、「練習はきつくないですか?」と聞かれたヴェロニカさんは「きついことがあっても、楽しく考えることで困難は乗り越えられる」と、児童たちに温かいメッセージを送った。

ランニングタイムでは、各学年から選ばれた代表児童 4～5 人との駆けっこ直接対決を行い、その後は全員と楽しく校庭を周回した。足には少々自信のあった高学年児童も、2 人のスピードには全く追いつけず、「自分たちも練習を頑張りたい」と決意を新たにしようだった。

授業終了後、2 人は 4 年生の教室を訪ね、児童と一緒に給食を食べて交流を楽しんだ。前回（2018 年）の交流学习では、ケニア共和国の郷土料理を取り入れた給食メニューだったが、今回は和食。おにぎりなどを食べながら、その作り方を児童が 2 人に説明する姿も見られた。



中学生向けランニング教室をケニア人留学生が指導

タスキの受け渡し方法のコツも伝授

【調査ホストタウン】

東京都 目黒区

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ケニア

【イベント参加者】

【競技】

マラソン

【調査場所】

駒沢オリンピック公園

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

目黒区は 2019 年 11 月から 20 年 1 月まで、区内の中学生を対象にしたランニング教室を駒沢オリンピック公園で開催した。この教室は 20 年 2 月に予定されていた「第 11 回中学生『東京駅伝』」に出場する目黒区代表選手約 40 人を集めたもので、ケニア人留学生ブヌカ・ジェームズ・ナディワさんが指導に当たった。目黒区は 17 年 12 月、ケニアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

ランニング教室で講師を務めたナディワさんは、駿河台大学 2 年生で、同大駅伝部に所属する。同大は、20 年 1 月の「第 96 回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）」の出場権を懸けた予選会で、前年の 18 位から 12 位へと順位を上げ、本戦出場（10 位まで）が狙える位置まで来ている有力校。その中で、ナディワさんはチームを引っ張る存在となっている。

教室の企画・運営を担当した目黒区文化・スポーツ部文化・交流課交流推進係の小山菜さんによれば、ケニアは世界的な長距離ランナーを数多く生んでいることから、「どの大学でも留学生ランナーは有力選手。教室を開催する 11、12 月は箱根駅伝を控えた時期と重なり、中学生の指導を依頼できる選手を調整するのは難しかった」と振り返る。ナディワさんも国内大学屈指のランナーだが、「駿河大が箱根駅伝の本戦出場を逃した」ことから今回指導が実現したという。

計 6 回開いた教室では、ナディワさんのほか、同大駅伝部の徳本一善監督、同部所属の日本人選手も講師として参加した。1 回目（19 年 11 月 23 日実施）は参加者全員のタイム計測を行った後、ナディワさんがペースメーカーとして先導する形で一緒にコースを周回。併せて、ナディワさんが実際に行っているトレーニング方法などを伝授した。

駅伝部の練習もあることから、ナディワさんは全ての回に参加・指導することはできなかったが、最終日となる 6 回目（1 月 25 日実施）では、駅伝で使われるタスキの受け渡し方法のコツなど、より実践的な指導も行った。

小山さんは「初回練習では、ナディワさんも生徒たちも互いに緊張している様子だったが、最終練習では随分と打ち解けている様子だった」と言い、「ナディワさんのようなトップランナーと間近で練習する機会はそうないことで、一緒に走ることによって『すごくタイムがアップした』『（機会があれば）もっと指導してほしい』という声も聞かれた」と話す。

練習後に行われた壮行会で、ナディワさんは「（本番では）それぞれの目標タイムに近づけてほしい。お互い切磋琢磨（せつさたくま）して頑張りましょう」と中学生ランナーを激励した。



ホストタウン相手国・ケニアをパネルで紹介

ゲーム・映像・フライヤーなども使い関心喚起

【調査ホストタウン】

東京都 目黒区

【イベント開催日】

2020/2/2

【相手国・地域】

ケニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

めぐろパーシモンホール・小ホール

【調査日】

2020/02/02

【補足情報】

目黒区は 2020 年 2 月 2 日、区内で開催された「第 15 回 MIFA 国際交流フェスティバル」に「ホストタウン事業パネル展」を出展した。「MIFA 国際交流フェスティバル」は、地域で暮らす外国人と交流を図る体験型イベントで目黒区国際交流協会の主催で開かれた。同区は、区内に駐日ケニア大使館がある縁などから 17 年 12 月、ケニアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、区民にホストタウン相手国のことを知ってもらおうと、このパネル展を企画した。

「MIFA 国際交流フェスティバル」は、区内の大使館関係者をはじめ、国際協力・交流団体、教育機関などから約 30 カ国の人々が参加し、ボランティアらによって企画・運営されている。同区が出展した体育館会場には、国際協力・交流団体らによる展示・雑貨販売ブース、卓球・ボッチャ体験会、ALT（外国語指導助手）と遊べるコーナーなどが用意され、さまざまな国籍出身者や幅広い年齢層の来場者の姿が見られた。

同区によるブースでは「ケニア共和国について楽しく知ってもらおう」と、同区オリンピック・パラリンピック推進課とコラボレーションした「ボッチャ」を使ったゲームを用意。最初に地図や映像でケニアの場所を確認し、次にフロアに広げられた地図上のケニアの場所を目がけてボッチャを投げる仕掛けになっていた。参加者からは「初めてケニア共和国の場所が分かった」「ボッチャも体験でき、ケニア以外のアフリカの国々の場所も分かって楽しかった」と好評だった。参加者にはバッジも進呈し、「オリンピックのボランティアに参加予定なのでバッジを着けて参加したい」との声も聞かれた。

このほか、ケニア共和国を紹介する映像やホストタウン事業を紹介するフライヤーも用意。フライヤーには、ケニアの野生動物・キリンが作れる「アニマル折り紙」を印刷するなど、子どもの好奇心を引き立てる工夫も見られた。

ホストタウン事業のパネル展示では、目黒区がケニアのホストタウンになった背景や、これまでのホストタウン交流事業の取り組みを写真付きで紹介。区内に

ある同国大使館は、MIFA 国際交流フェスティバルに毎年参加するなど地域との交流に積極的だったことが、ホストタウン事業に取り組む決め手になったという。

目黒区文化スポーツ部文化交流課交流推進係の小山栞さんは「最初は目黒区民にケニア共和国を覚えてもらうことから始まり、スポーツや文化交流などを重ねて本事業が認知されてきたところ」と話す。さらに、「(ケニア選手団の) 事前キャンプ地は目黒区ではないため、他の自治体と比べると地味な活動になってしまいう部分はある。その分、草の根交流で区民と近い交流ができるかと思う」と言い、「今までやってきた事業を生かしてパブリックビューイングなどで応援していきたい。オリパラはあくまで通過点、それ以降もケニアの皆さんと交流していきたい」と意気込んでいた。



池袋でセントルシアを知るセミナー&料理教室

セントルシア出身区民が講演

【調査ホストタウン】

東京都 豊島区

【イベント開催日】

2020/1/18

【相手国・地域】

セントルシア

【イベント参加者】

参加者＝女性 16 人、男性 4 人

【競技】

【調査場所】

みらい館大明 調理室

【調査日】

2020/01/18

【補足情報】

豊島区は 2020 年 1 月 18 日、みらい館大明（豊島区池袋）の調理室で「豊島区『ホストタウン』交流事業～セントルシアを知るセミナー＆料理教室！～」を開催した。みらい館大明は閉校になった「豊島区立大明小学校」の跡施設を NPO が管理運営している施設で、教室、体育館、調理室などの学校施設を貸し出している。

豊島区は、東京オリンピック・パラリンピックに向け、セントルシアとバングラデシュ人民共和国のホストタウンに登録されている。今回はセントルシアを理解するための交流事業第 1 弾として豊島区在住のセントルシア人・青木マーガレットさん（愛称＝マギーさん）を講師に迎え、国や文化について解説するセミナーとセントルシア家庭料理の教室、懇親会を行った。

当日は、民族衣装で登場したマギーさんによるセントルシアについての解説でスタート。カリブ海と大西洋の間に位置する島国で東京 23 区とほぼ同じ面積であることや、東京 2020 大会には、陸上競技 2 人、水泳、セーリング各 1 人の 4 種目に参加する予定であることなどについて語ったほか、日本で暮らす中で驚いたこと、うれしかったこと、大変だったこと、希望することなどについてのトークも展開した。

会場には、マギーさんの私物でセントルシアの楽器やスポーツ用具、装飾品、写真などを展示するブースも設置。イベントの進行では夫の青木孝さんがサポートしたほか、ボランティアスタッフとして、地域の人たちが多く参加した。

セミナーの後は、セントルシア家庭料理の料理教室へ移行。メニューは、セントルシアで家族や集会で振る舞われるシチュー「ブイヨン」、セントルシアの国民的料理だという「ミックスプレート」、レモネードなどで、セントルシアのビールやスパイスラムも振る舞われた。

参加者の女性は「普段セントルシア料理を作らないので、いい機会だった。作るのが難しい場面もあったがおいしく作れて良かった。またチャレンジしてみたい」と感想を述べた。

食事タイムでは、マギーさんがテーブルを回り参加者と会話を楽しむ様子が見られた。「パーティーのように楽しく大家族ができたみたいで、セントルシアの感じがした。それぞれのチームでちゃんと料理ができ、メニューの味も見た目も完璧だった」と笑顔で話した。

主催した豊島区文化商工部 学習・スポーツ課の東澤強さんは「セントルシアを理解してもらうための交流事業を区民向けに開きたいと企画した。もっと大規模なものをやるべきなのかもしれないが、とりあえずの先駆けとしては良かったのでは。今後もセントルシアとの交流の機会を作っていきたい」と話した。





バングラデシュ人とクリケット体験&親善試合

区の若手職員が参加、交流深め今後につなげる

【調査ホストタウン】

東京都 豊島区

【イベント開催日】

2019/10/27

【相手国・地域】

バングラデシュ

【イベント参加者】

30～40 人のバングラデシュ人と約 15 人の若手豊島区職員

【競技】

【調査場所】

埼玉県川口市芝園団地グラウンド

【調査日】

2020/02/18

【補足情報】

豊島区は 2019 年 10 月 27 日、「ホストタウン交流イベント～バングラデシュの人たちとクリケット体験&親善試合～」を開催した。同区はバングラデシュとセントルシアを相手国として東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されており、今回バングラデシュを理解し交流していくための第一歩として、イベントを開催した。

このイベントは、埼玉県川口市の UR 芝園団地を会場に、バングラデシュで親しまれているスポーツ「クリケット」の親善試合やランチでの交流が行われた。参加者は 30～40 人のバングラデシュ人と約 15 人の若手豊島区職員。「まずは職員がクリケットを知りバングラデシュの人たちと交流を深めることで、今後区民に向けたバングラデシュとの交流イベントを開く際に役立つと考え企画した」と豊島区担当者は話した。

当日は、集合時間の 1 時間以上前から参加者のバングラデシュ人が集まり練習を始めていた。国内には、クリケットをできる場所がほとんどなく、皆で集まり久しぶりに行うクリケットだったことや、豊島区の人たちと交流が楽しみだったのが理由だという。

バングラデシュでは年齢に関係なく、クリケットは皆が当たり前のようにやっている競技で、誰が投げてても打っても上手だった。対する豊島区側は初心者のため、バングラデシュ側が用意したクリケット解説の冊子を読み競技に挑んだという。「バングラデシュの人たちはみんな明るく、聞いたことに対してとても丁寧に答えてくれるなど、すごく気さくな雰囲気でした」と担当者は話していた。

試合後は、バングラデシュの参加者たちが作って持ってきた弁当でのランチタイム。「これおいしい」と出された弁当の中身は、カレーの味付けをしたチキン入りのピラフのような食べ物で、最後に記念撮影をしイベントは終了した。

豊島区は今後、東京オリンピック・パラリンピック競技大会前に、バングラデシュの選手や大臣を招いてのレセプションや、ホストタウンとしてのおもてなしを予定している。大会後、選手が帰国する前に豊島区民と選手との交流会も検討しているという。「アーチェリーの強い選手がいるので、もしメダルを取ったらお披露目もしてほしい。試技や指導など、区民とも交流していただきたい」と担当者は話していた。



小学校で「セントルシア」を知る授業

地元在住のセントルシア人が遊びを交え紹介

【調査ホストタウン】

東京都 豊島区

【イベント開催日】

2019/12/10

【相手国・地域】

セントルシア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

豊島区立仰高小学校

【調査日】

2020/2/18

【補足情報】

豊島区は 2019 年 12 月 10 日、「世界ともだちプロジェクトの授業（セントルシア）」を開催した。同区は 18 年 10 月にバングラデシュを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、19 年 4 月にセントルシアを相手国として追加登録されている。「世界ともだちプロジェクト」は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会に参加予定の国・地域を幅広く学び、国際交流に発展させる取り組みで、今回はセントルシアを理解するための交流事業として、以前から同プロジェクトの一環でセントルシアについて勉強していた豊島区立仰高小学校の児童を対象に行われた。

今回のイベントは、豊島区在住のセントルシア人・青木マーガレットさん（愛称：マギーさん）が講師で、以前からマギーさんとタッグを組み、セントルシアのイベントなどを行っていたという NPO 法人「シニアボランティア経験を活かす会」の野口烝治さんが協力した。授業 は、児童に向けたマギーさんの自己紹介でスタート。生徒たちによる歓迎の「東京よさこい」の後には、セントルシアの人々・食べ物・学校の様子などを紹介した。セントルシアの遊び、チャイニーズスキップ（ゴム飛び）なども行い授業は終了した。

豊島区の担当者・深野祐加さんは「マギーさん自身も同じ年齢ぐらいのお子さんがいるので、子どもの心をつかむのが上手だった。生徒の方から『これは何？これは何？』と積極的に寄っていく様子が見られた」と振り返る。マギーさんと子どもが対決し盛り上がったというチャイニーズスキップは、マギーさんが道具を学校に進呈したため、今では休み時間などに児童らがチャイニーズスキップをして盛り上がっているという。

後日、マギーさんに宛てた児童からの手紙が届いた。「楽しかった」「もっとセントルシアを知りたい」「将来行ってみたい」などの感想が書かれており、「手紙を読むとセントルシアの文化・食べ物・遊びなど、心に残る授業ができたのだなと感じる」と深野さんは話した。今後、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の前に選手団のレセプションを予定。ホストタウン応援観戦ツアーやライブサイト、子どもたちと選手たちの交流なども検討しているという。



ルーマニアから市民団が来訪

武蔵野市民もルーマニア語であいさつ

【調査ホストタウン】

東京都 武蔵野市

【イベント開催日】

2020/1/26

【相手国・地域】

ルーマニア

【イベント参加者】

市民団＝選考で選ばれた「日本武蔵野センター」（ブラショフ市）の学生 3 人、
ブラショフ市公募で選ばれた社会人 1 人、通訳 1 人の計 5 人

【競技】

【調査場所】

武蔵野総合体育館

【調査日】

2020/01/26

【補足情報】

ルーマニア・ブラショフ市から、武蔵野市の「東京 2020 大会半年前イベント」を目的に訪れている市民団が 2020 年 1 月 26 日、武蔵野総合体育館で行われた「Sports for ALL 陸上」に参加し、ブースを設けて市民ら来場者と交流した。武蔵野市は 1992 年から続いているブラショフ市との交流をベースに、ルーマニアを相手国とする 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに立候補し、2016 年 1 月に登録されている。

このイベントは、武蔵野市のほか市教育委員会、東京 2020 大会等武蔵野市実行委員会が共催し、会場ではジュニアかけっこ教室、亜細亜大学陸上競技部によるランニング講座のほか、車いすレーサー、スポーツ義足、ブラインドマラソンなどの体験会、リオオリンピック出場者らによるゲストトークが行われた。

ブラショフ市民団は「日本武蔵野センター」（ブラショフ市に 1998 年に設立）の学生、ミルナさん、ラウールさん、ルアナさんの 3 人と、同市公募で選ばれた社会人のスザナさん、通訳フロインさんの 5 人。ブースではルーマニア語で「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」を記載したプリントを配布し、市民団は訪れた人たちとルーマニア語であいさつし合い、ブラショフ市の街並みが写ったポストカードにサインをして手渡した。

イベントを訪れた小学生とその父親は「ルーマニア語は聞いたことがなく、会話をしたのも今日が初めてだった。上手にムルツメスク（ありがとう）と言えて良かった」と話した。50 代の女性は「ルーマニアの方が着ている民族衣装がすてきだった」と話す。

ミルナさんは持参した民族衣装について「曾祖母が手作りした、100 年近く前のものを持って来た。最近では結婚式や祭りの日など着る機会は少ないが、地方によって形や刺しゅうが異なるなど、ルーマニアの手作り文化にも興味を持ってもらいたい」と話す。

武蔵野市でこのイベントを担当する大杉由加利さんは「市民団は来日後、ホストファミリーと都内を観光したり、今後市内小学校を訪れ、ルーマニアにはない給食を試食したりするなど予定している。ホストタウンとして設けている『サポーター制度』も、今年に入ってオリパラへの関心の高まりとともに希望者が増えている。イベントなどをきっかけにホストタウンとしての認知度を高めていくと同時に、今回の市民団のように若い人たちが積極的に文化交流を行い、活動を未来へつなげていきたい」と期待を込める。



ルーマニアの市民団、吉祥寺で自国紹介

ルーマニア人アーティストによるワークショップも

【調査ホストタウン】

東京都 武蔵村山市

【イベント開催日】

2020/1/26

【相手国・地域】

ルーマニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

東急百貨店吉祥寺店北側広場

【調査日】

2020/01/26

【補足情報】

ルーマニア・ブラショフ市から、武蔵野市の「東京 2020 大会半年前イベント」を目的に訪れている市民団が 2020 年 1 月 26 日、東急百貨店吉祥寺店の北側広場にブースを設け、ルーマニアの紹介とホストタウン PR を行った。

武蔵野市が主催する同イベントに参加したのは、ブラショフ市にある「日本武蔵野センター」で日本語や日本文化を学ぶ高校生から大学院生までの 3 人と、ブラショフ市の公募で選ばれた社会人 1 人で、同日午前中に武蔵野総合体育館で行われた「Sports for ALL 陸上」へも参加した。

パネル展示のほか「パラアスリート応援チャリティーバザー」と題し、市民団らが自ら持ってきた民芸品などを並べ販売した。アニメなどをきっかけに日本文化に興味を持ち 10 歳から日本語を習っている高校 2 年生のルアナさんは、ルーマニアの女性たちが手作りした「編みぐるみ」などの雑貨を手し、通行者へ「チャリティーバザーやっています」と日本語で声掛けした。

テーブルに並んだチャームに紅白のひもが付いた「マルティショール」は日本ではなじみが薄く、質問する来訪客に大学院生のラウルさんは、「ルーマニアでは春を祝う 3 月 1 日に、男性から女性に贈る習慣がある」と説明した。

武蔵野市交流事業担当の大杉由加利さんは「2017 年に市政施行 70 周年と友好交流 25 周年を記念し、ブラショフ市の交響楽団を招聘（しょうへい）して総勢 260 人による第九演奏会を行った。翌年、同合唱団参加メンバーを中心に 29 人の武蔵野市民団がブラショフ市を訪れ文化交流を行った際、同様のバザーを行い好評だった」と振り返る。今回のバザーの売り上げはルーマニアのパラアスリートを応援するために同市が行う募金の一部として活用する。

併せて、ルーマニア人アーティストのアンドレア・アレクサンドラ・ペテルフィさんを招いた「T シャツデザインワークショップ」も行った。アンドレアさん

は1月6日から2月29日まで武蔵野市に滞在し、地域内をリサーチしながらコミュニティセンターなどで作品を制作している。



滞在制作していたルーマニア人作家の作品を展示

歩いて感じた武蔵野の街を表現、トークショーも

【調査ホストタウン】

東京都 武蔵野市

【イベント開催日】

2020/1/24

【相手国・地域】

ルーマニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

武蔵野プレイス ギャラリー

【調査日】

2020/01/24

【補足情報】

武蔵野市は 2020 年 2 月 21 日から 25 日まで、同市境南町の武蔵野プレイス内ギャラリーでルーマニアの現代アーティスト、アンドレア・アレクサンドラ・ペテルフィさんが同市滞在中に制作した作品を集めた「ホストタウンムサシノ滞在制作 完成作品展示」を開催した。同市は 16 年 1 月、ルーマニアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されているが、その活動の一環としてアンドレアさんを招聘（しょうへい）、今年 1 月 6 日から 2 月 29 日までの約 2 カ月間、武蔵野市に滞在しながら制作を行ってもらった。2 月 24 日にはアンドレアさん本人が「ルーマニアで作る」と題したトークショー（成果発表会）に登壇し、制作過程などについて話した。一連のイベントの企画はアーティストを紹介するギャラリースペースなどを展開する Art Center Ongoing が手掛けた。

トークショーに登場したアンドレアさんは、市内で撮影した写真を見せながら「13 歳で写真を撮り始めた。現在はオランダの大学で勉強しながら、ヨーロッパのさまざまな都市に数カ月ずつ滞在し風景を撮りためているが、常に共通するのはどこか懐かしさ、親しみを感じる場所を撮り続けていること」と話す。「今回は、車や自転車、工事現場の建物や木など、カバーで覆われたものが印象的だった。グラフィックデザインの仕事では、余白のスペースを生かすことで周りのディテールが引き立つが、街なかにそうした余白スペースが埋め込まれているように感じた。建物など日本の伝統的な文化とテクノロジーの革新的な世界が、街の中で交ざっている様子も美しいと感じた」とも語った。

会場内に展示した「Patterns」は、写真を印刷したトレーシングペーパーにブロックとガラス、結束バンドを組み合わせた立体作品を数点配置したもので、アンドレアさんは「表からも裏からも見てもらえるよう、また記憶の中にある風景のような手触りを表現しつつ、武蔵野市を歩いて感じた街を小さなスケールで再構築した」と説明した。

また、トークショーには、昨年夏にルーマニアの首都ブカレストを訪れ、現地アーティストのリサーチと制作を行い、今回アンドレアさんと同時展示を行った作家の和田昌宏さんと、ゲストとして日本とルーマニア、2 つの母国を持つ美術家・スクリプカリウ落合安奈さんも参加。それぞれが感じるルーマニアの現在進行形のアートについてセッションを重ねた。

「人がどう街と向き合い暮らしているか、自然がどう都市の中で生き延びているかに興味がある。常に『イメージ』としての言語を念頭に制作を続けたい」とアンドレアさん。今後はオランダの大学に戻り勉強を続けるほか、4月にロサンゼルスで開催されるブックフェアへの出展を予定する。



元日本代表・落合真理さんがバレーボール教室

イタリアチーム誘致、競技に親しんでもらうことを目的に

【調査ホストタウン】

東京都 板橋区

【イベント開催日】

2019/7/21

【相手国・地域】

イタリア

【イベント参加者】

区内在住・在学の小学生約 100 人

【競技】

バレーボール

【調査場所】

板橋区立小豆沢体育館

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

板橋区は 2019 年 7 月 21 日、区立小豆沢体育館で、子どもたちにバレーボール競技に親しんでもらうこととイタリアバレーボールチーム応援機運の醸成を目的として、元女子日本代表で区出身の落合真理さんをメイン講師に招き、小学生を対象としたバレーボール教室を開催した。

板橋区と北イタリアのボローニャ市（エミリア・ロマーニャ州）は、1981 年から板橋区立美術館で毎年開催している「イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」が交流のきっかけとなり、2004 年には「いたばしボローニャ子ども絵本館」を開設、05 年 7 月には友好都市交流協定を結ぶなど、深く交流を続けている。

板橋区は 18 年 5 月、東京オリンピック・パラリンピックに向け、イタリアオリンピック委員会と協定を締結。開催期間前と期間中、イタリアバレーボールチームの選手たちは中央区晴海の選手村から板橋区に移動し、区立小豆沢体育館を練習施設として使用する。

今回、イタリアバレーボールチーム誘致記念事業の一環として開いた「バレーボール教室」では、区内在住・在学の小学生約 100 人が朝 9 時 30 分、保護者らと一緒に区立小豆沢体育館に集合した。事前の参加者募集で「初心者歓迎」をうたっていたこともあり、小学 1～2 年生の参加が約半数を占めていたという。

学年やバレーボール経験の有無でグループ分けされた児童らは、落合さんと東京ヴェルディバレーボールチームの選手らによる指導の下、基本動作であるオーバーハンドパスやアンダーハンドパス、ネットを使つてのスパイクやサーブの打ち方を教わった後、チームに分かれて練習試合も行った。バレーボール初体験の児童も多くいたが、チームの皆で声を掛けながら協力し合い、約 1 時間半、汗を流した。

板橋区の小田健司オリンピック・パラリンピック推進担当課長は「初めてバレーボールを体験する子どもも多かったが、楽しく体験できたので今後もバレーボ

ールを続けてみたい、といった声も多く聞かれた。バレーボール競技に興味をもってもらうきっかけ作りができたように思う」とほほ笑む。



イタリアバレーボールチーム応援 PR 展示

特設テントで PR 映像上映 応援熱高める工夫凝らす

【調査ホストタウン】

東京都 板橋区

【イベント開催日】

2020/1/14

【相手国・地域】

イタリア

【イベント参加者】

【競技】

バレーボール

【調査場所】

板橋区役所イベントスクエア

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

板橋区は区役所本庁舎 1 階のイベントスクエアで 2020 年 1 月 14 日～1 月 24 日の 10 日間、イタリアバレーボールチーム応援イベント「Volare! ITALIA ～2020 年夏 いたばしにやってくる～」を実施した。

板橋区は東京オリンピックへの出場を決めたイタリアバレーボールチームに区立小豆沢体育館を練習施設として提供することとしており、19 年 7 月には、イタリアバレーボールチーム応援の機運醸成を目的として、小学生を対象にしたバレーボール教室を開催した。また、主に練習期間中に必要とする会場運営・会場誘導などの補助を行う「板橋区イタリアバレーボールチーム応援ボランティア」を募集するなど準備を整えてきた。そうした流れの中で、既にこれらのホストタウン交流事業に参加した人だけでなく、イタリアバレーボールチーム誘致について一人でも多くの人々に関心を持ってもらい、応援の機運を醸成するため、年明けのタイミングで区役所内での応援イベントを計画したという。

今回の展示では、イタリア代表のシンボルカラー「アズーリ」の青い特設テントを区役所 1 階中央のイベントスクエアに設置し、テント内の大型モニターで「2020 年 板橋から世界を獲りに行く」「小豆沢からイタリアバレーボールチームが頂点を目指す」などの力強いタイトルと共に、イタリアの街並みやイタリアバレーボールチームの試合写真などで構成した PR 映像を流し、イタリアバレーボールチームへの興味喚起と応援熱が高まるよう工夫を凝らした。

オリンピックやバレーボール競技、イタリアバレーボールチームの選手への関心を促す狙いで、バレーボールの基礎知識や競技の開催日程をはじめ、「バレーボールの見どころ」「イタリアバレーボールチーム紹介、過去の戦績」や「バレーボールクイズ」など、バラエティーに富んだパネルを展示。ホストタウン誘致記念グッズとして制作していた「バッグ型クリアファイル」に東京 2020 大会パンフレットや関連資料を封入し、自由に手に取って持ち帰れるようテント内のテーブル上に並べた。

グッズは 5 万点を作成し、19 年 9 月から区内の公立小・中学校で配布したほか、区立体育館などの区立施設や、ほかの区主催イベント開催時にも積極的に配布し、広く PR を図ったという。

小田健司オリンピック・パラリンピック推進担当課長は「イタリアバレーボールチーム誘致について、いかに多くの方々に周知を図ることができるかという点に重点を置き、スポーツ関連イベントだけでなく、むしろスポーツにあまり関心のない方が集まるようなイベントでも積極的に PR 活動を行った」と話す。



伊バレーボールチーム応援ボランティア養成講座

心構えなどについて座学やグループワーク

【調査ホストタウン】

東京都 板橋区

【イベント開催日】

2020/2/16

【相手国・地域】

イタリア

【イベント参加者】

第 1 回=39 人、第 2 回=39 人（以上 2/16）、第 3 回=34 人（2/17）、第 4 回（2/27）・第 5 回（2/29）=新型コロナ感染拡大防止のため開催中止

【競技】

バレーボール

【調査場所】

板橋区役所

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

板橋区は 2020 年 2 月 16 日・17 日の 2 日間、板橋区役所南館 2 階の人材教育センターで「板橋区イタリアバレーボールチーム応援ボランティア養成講座」（3 回）を開催した。

同講座は、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、区立小豆沢体育館を練習施設として使うイタリアバレーボールチームをサポートする「板橋区イタリアバレーボールチーム応援ボランティア」を養成する目的で開いた。ボランティアは、区のホームページやポスターの掲示、チラシの配布などを通じて 19 年 7 月 24 日に募集を始めた。

募集要項には、応募対象を区内在住・在学・在勤いずれかの 18 歳以上（2020 年 4 月 1 日時点）で、夏の暑い中でも活動できる体力があり、日本語による意思疎通が可能で、区の指定する養成講座や説明会に参加でき、原則 3 日以上活動できることを明記。活動内容として「イタリアバレーボールチーム練習期間中に必要とする会場運営・会場誘導などの補助」「応援イベントなどへの参加および協力」「区報や区のウェブサイトを使用する写真などの撮影や記事作成の補助」を挙げるほか、「イタリアバレーボールチームの通訳」についても併記して、日常会話程度の英語（英検 2 級以上または TOEIC600 点以上）またはイタリア語（実用イタリア語検定試験 3 級以上、イタリア政府公認イタリア語検定試験 B1 以上）での会話ができる人を募った。19 年 12 月 14 日に募集を締め切り、300 人を超える応募があった。

ボランティア養成講座では、前半にいたばし総合ボランティアセンターの柳澤俊助さんが講師となり、ボランティアとしての心構えなどについて座学を行い、後半ではグループワークや意見交換などを行った。

2 月 27 日と 29 日にも養成講座を、4 月と 5 月にはイタリア文化に関する講座を開催予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点と東京 2020 大会延期の発表を受け中止を決めた。ボランティアの本格的な活動期間については現在、調整をしている。



エリトリア・ミャンマーの留学生が園児と交流

園児が留学生を取り合うほほ笑ましい姿も

【調査ホストタウン】

神奈川県・小田原市・箱根町・大磯町

【イベント開催日】

2020/1/30

【相手国・地域】

エリトリア、ミャンマー

【イベント参加者】

湯本幼稚園、宮城野保育園、箱根幼稚園の 5 歳児 22 人

【競技】

【調査場所】

箱根町立湯本幼稚園

【調査日】

2020/01/30

【補足情報】

エリトリアとミャンマー連邦共和国から横浜市の星槎高校に留学している高校生 6 人が 2020 年 1 月 30 日、箱根町立湯本幼稚園で開催された「5 歳児交流ミニ運動会」に参加して親交を深めた。箱根町は 16 年 1 月、エリトリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同年 12 月にブータン、18 年 8 月にミャンマーのホストタウンとして追加登録されている。

当日参加したのは、エリトリアから日本に留学、陸上選手を目指しているメルハウィ・ゼレセラシエ・ケラティさん、ナトナエル・トゥウェルデブルハン・テスファガブルさん、ダイモン・ベルハネ・テスファイさんと、ミャンマーから留学し、空手を学んでいるスー・ミヤント・ミヤント・ナインさん、テッド・ヤミン・ウーさん、カウン・カン・ウーさん。

「ミニ運動会」に参加したのは湯本幼稚園のほか、宮城野保育園、箱根幼稚園の 5 歳児 22 人。園児に 6 人が紹介されると拍手と声援が起き一気に会場が和み、園児が留学生を取り合うほほ笑ましい姿も見られた。ミニ運動会のプログラムは、始まりの会、準備体操「きらきら体操」、縄跳び、リレー、ドッジボール、終わりの体操、お昼ご飯、終わりの会の 8 プログラム。

縄跳びが初体験の留学生もあり、声援する園児たちとともに笑いがあふれた。紅白に分かれて行われたリレーでは、負けまいと本気で走る留学生の姿に盛り上がりを見せ、園児も懸命な走りで接戦となった。

競技が終わった後の昼食では、弁当を持参する幼児と給食を食べる幼児と一緒に食事。留学生が食べることのできない食材を避けたメニューが提供された。

湯本幼稚園の小山千恵美園長は「園児が留学生にすぐになじんでくれたのには驚いた。すっかりお友達になっていた。とても良い経験になったと思う」。宮城野保育園の高緑早苗園長は「何よりも私たちが楽しかった。こうした交流の大切

さを園児から教わった」。箱根幼稚園の土屋あつみ園長は「今日が初対面とは思えないほど親しくなれた。とても良い機会だった」と、それぞれ交流活動の大切さを挙げた。

交流プロジェクトを推進した箱根町の湯浅誠さんは「園児たちにも両学生にも良い機会だったと思う。こうした活動の大切さを、身をもって体験できた。私たちにも有意義な活動だった。良い機会を与えていただいた。今後もこうした活動を推進していきたい」と意欲を見せた。



事前キャンプ誘致推進で市町村連携

民間企業や教育機関ともタッグ、推進に大きな力

【調査ホストタウン】

神奈川県・小田原市・箱根町・大磯町

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ブータン、エリトリア、ミャンマー

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/25

【補足情報】

神奈川県は県内市町村と連携し、東京オリンピック・パラリンピックに対応する「神奈川 2020 事前キャンプ誘致等委員会」を立ち上げ、2015 年より事前キャンプの誘致活動を推進し、現在までに 10 市 3 町が 15 カ国と 21 件の「事前キャンプに関する協定等」を締結している。

締結市町村は、横浜市、川崎市、相模原市、平塚市、鎌倉市、逗子市、厚木市、横須賀市、藤沢市、小田原市、箱根町、大磯町、葉山町。締結国は、英国、カナダ、フランス、オーストラリア、スペイン、ニュージーランド、イスラエル、ポルトガル、エリトリア、リトアニア、ブータン、ミャンマー、ブラジル、モルディブ、エルサルバドルで、各市町村が重層的に協力して、事前キャンプ誘致だけでなく、さまざまなホストタウン交流活動を展開している。

神奈川県の特徴は、市町村と連携を組む民間企業や教育機関、団体などがホストタウン活動の推進に大きな力を発揮している点だ。星槎グループ、慶応義塾大学、大同生命保険、ヒルトン小田原リゾート&スパ、リビエラが、持ち前の得意分野で協力し事前活動の推進で大きな役割を担っている。

横浜市の星槎グループは 20 年以上も独自の視点で海外交流活動を続けてきた経緯があり、人脈や経験をフルに活用してホストタウン交流事業を推進している。ブータン、エリトリア、ミャンマーの 3 カ国については、各国との信頼関係が確立されており、相互で分かり合うことが多くスムーズに交流環境が整った。神奈川県、小田原市、箱根町、大磯町と星槎グループが連携して「SKY Project（スカイプロジェクト）」を立ち上げ、各国との交流等の実施に取り組んでいる。運営は「SKY プロジェクトに係わる実行委員会」が担当している。

さらに、横浜市、川崎市と慶應義塾大学が協力し、英国代表を支援するサイト「GO GB」を 2018 年に開設。日本語サイトだけでなく、英文サイトも同時運用し、海外に向けてもホストタウン活動の情報発信をしている。神奈川県スポーツ局オリンピック・パラリンピック課主任主事の温泉川譲二さんは「参加する民間企業や教育機関、団体との連携が、いずれも成功した取り組みになっている。必ず良いおもてなしができるはず」と自信を見せる。



星槎グループ、ホストタウン交流事業を積極推進

留学システムなど、これまでに培った人脈と経験生かす

【調査ホストタウン】

神奈川県・小田原市・箱根町・大磯町

【イベント開催日】

【相手国・地域】

エリトリア、ブータン、ミャンマー

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/01/30

【補足情報】

大学、高等学校、中学校、幼児教育施設などを展開する星槎グループが、神奈川県ホストタウン交流事業に積極的に関わっている。神奈川県・小田原市・箱根町・大磯町は 16 年 1 月にエリトリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同年 12 月にブータン、18 年 8 月にはミャンマーのホストタウンに追加登録されたが、星槎グループはエリトリア、ブータン、ミャンマーとは以前から独自の交流を続けており、その実績を生かしてホストタウン事業に取り組んでいる。

星槎グループは、1972 年に横浜市内で開業した学習塾「鶴ヶ峰セミナー」（現・ツルセミ）に始まるが、早くから海外支援にも力を入れ、95 年には「横浜・ブータン王国友好協会」設立。その後、エリトリア、ミャンマーから星槎高校に留学するシステムを確立した。星槎グループのホストタウン活動の窓口は、2010 年に設立された一般財団法人「世界こども財団」が担当。星槎グループは市町村と連携して、15 年にエリトリア、17 年にブータン、18 年にミャンマーと事前キャンプに関する締結を行っている。

「世界こども財団」の石井洋祐さんは「留学生や訪日したスポーツ選手の受け入れを続けていく中で、相互理解や支援活動の大切さを学ぶことができた。現在も創業者・宮澤保夫を中心にしてプロジェクトを推進している。ホストタウン交流事業もその一つで、相手国を理解し、日本のことも理解してもらう大切な活動だ」と話す。

石井さんは「交流事業を継続すると地域の方々の理解が得られ、相手国への親しみを持つようになっていくのがうれしい。相互に知り合うきっかけ作りとなっている。それがホストタウン交流事業の持つ大切な効果になっている」としている。現在までいくつかのイベントを実施してきたが、いずれも好評で次の開催を望む声も出ており、市町村でもその効果を注視している。



「北マケドニアを知ろう」を開催

事前視察の臨時代理大使、海岸を見て故郷のビーチ思い出す

【調査ホストタウン】

神奈川県 茅ヶ崎市

【イベント開催日】

2019/5/20

【相手国・地域】

北マケドニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

茅ヶ崎市は 2019 年 5 月 20 日、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン記念イベント「マザー・テレサの国 北マケドニア共和国を知ろう」を市役所分庁舎コミュニティホールで行った。また、「茅ヶ崎 2020 実行委員会」を同日立ち上げ、会長には茅ヶ崎市体育協会の石田会長が就任した。

同市は 16 年度から神奈川県と連携しながら東京オリンピック・パラリンピックの事前キャンプ誘致に取り組んでいた。18 年 5 月に県知事宛てに駐日マケドニア共和国大使館より「県下の自治体とホストタウンを締結したい」という手紙が届いたことをきっかけに話が進んだ。大使館は以前から交流のあったいくつかの都道府県に手紙を送ったが、選手の事前キャンプなどのことを考え、都内からの交通の便の良さとスポーツ施設の素晴らしさから茅ヶ崎市を候補にしたという。なお、マケドニア共和国は 19 年 2 月、国名を「北マケドニア共和国」に改称、同年 4 月に茅ヶ崎市は北マケドニア共和国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

19 年 2 月 13、14 の両日、アナ・デレバン・ブラジェスカ北マケドニア臨時代理大使が同市を訪問し、市長と面会したほか、文化施設やスポーツ施設、茅ヶ崎海岸などを視察した。北マケドニアは海のない国だが、臨時代理大使は海岸を見て故郷のオフリド湖のビーチを思い出したという。

ホストタウン登録後、北マケドニアを市民に紹介する企画として、大使館側から首都スコピエが生誕地というマザー・テレサの企画展やマケドニア伝統料理教室、名産品であるマケドニアワインの試飲会などの提案があり、登録記念イベントでは大使館所蔵のマザー・テレサの写真や資料のパネル 24 枚を展示した。

その他、臨時代理大使より同国の地理、観光名所、料理、特産品であるワインや日本とのつながりについての紹介とマケドニア人チェロ奏者ペレ・ヨヴァノフさんによる演奏があり、応募で集まった市民 121 人が熱心に耳を傾けた。

同イベントでは両国の記念品交換も行われた。北マケドニア共和国からは職人のイリヤ・ブラゼスキさんが梅の木から作った伝統楽器の笛カヴァルが佐藤市長

に、茅ヶ崎市からは「平成 30 年度かながわの名産 100 選」にも選ばれ、烏帽子（えぼし）岩とサーファーが描かれた「湘南七宝焼」が臨時代理大使に贈られた。

マザー・テレサ展は好評で、同年 5 月以降、市役所本庁舎 1 階市民ふれあいプラザ、イオン茅ヶ崎中央店 1 階、同市美術館、ハマミーナ（茅ヶ崎市南西部複合施設）2 階で順次開催された。来場者がノートに記入した感想には「人物は知っていたが人生を知ることができた。今後の市の取り組みが楽しみ」「日本と北マケドニアも応援します」などの書き込みがあり、献身的なマザー・テレサの活動に涙する人もいた。

担当の市文化生涯学習部男女共同参画課の城田さんは「担当するまでどのような国か分からなかったが、マザー・テレサは多くの人になじみがあり、北マケドニアに関心を持ってもらうにはとてもよかったと思う。今後は学校などにもマザー・テレサの資料提供をしていきたい」と話す。





北マケドニア臨時代理大使が来訪

大使館・友好協会の協力で各種イベント開催

【調査ホストタウン】

神奈川県 茅ヶ崎市

【イベント開催日】

2019/6/3

【相手国・地域】

北マケドニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

茅ヶ崎市役所

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

新たに着任した北マケドニアのストイチェ・リストフ臨時代理大使が 2019 年 6 月 3 日、茅ヶ崎市を訪れ市長と面会し、柳島スポーツ公園やハマミーナ（茅ヶ崎市南西部複合施設）2 階で開催中の「マザー・テレサ展」などを見学した。同施設では居合わせた市民とも気軽に会話を交わし、「天気良ければ富士山が眺められる」と説明されると、見られなかったことを残念がった。茅ヶ崎市は同年 4 月、北マケドニア共和国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

同市のホストタウン交流事業は、同年 8 月 3 日にはハマミーナで北マケドニアについての知識普及などを目的とした「まなびフェスタ」を開催、同年 12 月 17 日には男女共同参画推進センターいこりあでマケドニア料理教室を行い、いずれも日本マケドニア友好協会（東京都千代田区）が講師を派遣した。

北マケドニアとの交流事業を中心となってサポートしている同協会事務局の栗田裕理さんは「野菜を中心とした素朴な味付けが日本人の皆さんの口にも合う。初めての料理だけれど懐かしいという感想を頂いた」と喜ぶ。8 月のフェスタでは同国出身のクリスティアン・ラスコフスキさんも手伝い、郷土料理「タフチェグラフチェ」や「ミルクライス」などを参加者と作った。

「魅力実感！つくって食べよう北マケドニア共和国料理」と題して 12 月に行われた料理教室には 27 人が参加。大使館のエグゼクティブ・アシスタント石川真理香さんが同国を紹介した後、「マケドニアムサカ」「ショプスカサラダ」「ヨーグルトチーズケーキ」を作り、「アイバル」「マケドニアコーヒー」「ロクム」なども試食した。マケドニア料理を提供している市内のレストラン「Bruny」（幸町）のシェフも参加し、交流を深めた。

このほか、同年 10 月 5 日に市民文化会館で行われた「市民文化祭」開会式には、イヴァン・カランフィロフスキー臨時代理大使がゲストとして参加。茶道の師範が呈茶でもてなし、茅ヶ崎の民話「河童徳利」など紙芝居 3 作品を披露した。文化団体協議会の長谷川由美事務局長が「マケドニアの童話を来年は紙芝居にして上演してみたい」と伝え、臨時代理大使は「いいね」と応えた。

臨時代理大使が市民文化祭から帰る際、市内在住の高橋信義さんがヒノキを井形に組んで作った高さ 50 センチほどのあんどんをプレゼント。高橋さんは「私の作ったあんどんをご覧になって気に入られたようだったので差し上げたいと申し出た」と話す。プレゼントされたあんどんはその後、大使館に飾られている。

市が開催するイベントには、駐日大使館と日本マケドニア友好協会の会員による協力体制の下、ワークショップや料理教室、展示紹介などが頻繁に開かれている。その開催告知や事後報告は駐日大使館と友好協会のフェイスブックに掲載され、交流が深まっていく様子が見える。



ホストタウン周知でピンバッチ製作

市内飲食店で「北マケドニアフェア」も

【調査ホストタウン】

神奈川県 茅ヶ崎市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

北マケドニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

茅ヶ崎市役所

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

茅ヶ崎市は 2019 年 9 月、北マケドニア共和国と日本両国の国旗をあしらったピンバッジを 3000 個作成した。同市は、同年 4 月、北マケドニア共和国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されているが、茅ヶ崎 2020 実行委員会のメンバーで、市生涯学習課の城田さんは「ピンバッジは人気だが、ホストタウン登録のことをまだ知らない市民が多い。（19 年）11 月 20 日に開催した『茅ヶ崎レインボーフェスティバル』は多くの家族連れが訪れ、知ってもらえる機会の一つになった」と話す。

神奈川県立茅ヶ崎里山公園で行われた茅ヶ崎レインボーフェスティバルでは、3 団体が北マケドニア共和国の紹介ブースを出展。日本マケドニア友好協会は同国のワインの販売（利用者数 250 人）、コーヒーとハーブティーの販売（同 100 人）を行った。北マケドニア共和国大使館のエグゼクティブ・アシスタント石川真理香さんは、友好協会のブースで同国の説明を丁寧に行い、「マルティンキ」（北マケドニアのお守り）の作り方を教えた。4 回行ったワークショップには 39 人が参加。北マケドニアにまつわるクイズを準備し、答えた子ども（参加者 200 人）に ホストタウンのロゴ入りの風船をプレゼント、ピンバッジも 48 個配布した。

ステージでは、豊ヶ丘バルカンダンスサークル（東京都）のメンバー13 人が民族衣装を着て、マケドニアのフォークダンスを踊って披露。約 100 人が見て楽しんだ。

一方、19 年 12 月からパラリンピックが閉会する 20 年 9 月 6 日までの期間、市内の飲食店を中心に「北マケドニアフェア」が開催される。日本では流通量の少ないマケドニアワインとマケドニア料理を市内で味わってもらい、茅ヶ崎から北マケドニアのオリンピックを応援しようという企画で、計 14 店舗が参加する。JR 茅ヶ崎駅ビル並びの書店「長谷川書店」ではレジの横に北マケドニアコーナーを設け、同国出身のマザー・テレサの紹介パネルや著作本、同国関連書籍などを置いている。書店員は「もっといろいろ集めたいが、なかなか大変」と話す。

20 年 1 月 10 日、14 日～16 日には市役所本庁舎 1 階ふれいあいプラザで「第 20 回カナガワビエンナーレ国際児童画展」を開催。北マケドニア共和国の児童 3 人の作品も並べた。また、同市の広報紙では同年 1 月から毎月 1 回、北マケドニア共和国大使館のエグゼクティブ・アシスタント石川さんが同国の旬の情報を伝えるコーナーを展開。歩道から本庁舎入口をつなぐ通路の展示スペースには同国の紹介スペースを設け、3 月は「春の訪れを祝う 3 月の祭り」として、アクセサリとして身に着けたり、木の枝に飾ったりする赤と白の毛糸のお守り「マルティンキ」を装飾した。

3 月以降、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策の一環で、イベント中止が続いているが、「お茶会などは時期を見て開催したい」と担当の文化生涯学習課、加藤さんは話す。

大使館エグゼクティブ・アシスタント石川さんは「臨時代理大使と訪問する度に、おもてなしの心で迎えていただいている。今後、北マケドニアのビトラと茅ヶ崎の小学生の文通などの企画も予定している。文化的な交流は進んでいるが、今後はオリンピック出場選手も決まってくるので、スポーツを通しての交流もしていきたい」と期待を込める。





保土ヶ谷公会堂でブルガリア民族音楽演奏

伝統的弦楽器「ガドゥルカ」の音色に酔いしれる

【調査ホストタウン】

神奈川県 横浜市

【イベント開催日】

2019/12/5

【相手国・地域】

ブルガリア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

保土ヶ谷公会堂

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ブルガリア民族音楽演奏グループ「Balkan（バルカン）」のライブ演奏が 2019 年 12 月 5 日、横浜市保土ケ谷区の保土ケ谷公会堂で行われた。保土ケ谷区はブルガリア共和国の首都・ソフィア市とパートナー都市協定を結んでいることから、同国の文化を区民に伝えることを目的に開催された。このイベントは区が主催し、地域の住民団体などが舞踊、唄、ダンスや楽器演奏などを披露する「第 32 回保土ケ谷区民芸能祭」の一環で、バルカンはゲストとして出演し、7 拍子、9 拍子、11 拍子などの変わった拍子が特徴の民族音楽 5 曲を披露した。

バルカンは、ブルガリアの伝統的な弦楽器「ガドゥルカ」奏者のヨルダン・クラシミノフ・マルコフさんらが 07 年に立ち上げた音楽ユニット。約 100 人の観客は、力強く、味わいのあるブルガリア音楽に酔いしれた。

本国ブルガリアのトップミュージシャンと共に活動していたマルコフさんは 06 年の来日以来、紀元前の時代からさまざまな民族が入り混じり、起伏ある風土で豊かな文化を築いてきた東欧の文化を伝える活動を続けている。

マルコフさんは「長く受け継がれてきたブルガリアやバルカン地方の伝統文化の魅力を多くの人に届けたいと、国際交流のイベントなどの機会を通じて活動している。音楽に触れることで、紀元前からの歴史がある東方の国や都市に関心を持っていただくきっかけになってほしい」と期待を込める。

バルカン半島地域に伝わる弦楽器「タンブーラ」奏者でライブの MC を務めた石坂史朗さんは、「ヨーロッパとアジアの文化が混ざり、考古学的に 5000 年前からの歴史があるブルガリア。舞踊や器楽演奏はとても盛ん。音楽は踊りと深くかかわっている曲が多く、哀愁があるメロディーで、いろいろなリズムがある」と演奏した楽曲を紹介した。

保土ケ谷区は 08 年 3 月、区制 80 周年を記念しブルガリア共和国の首都ソフィア市とパートナー都市協定を締結。ブルガリアの文化講座、料理教室、ブルガリ

アンボイスやピアノの演奏会、ホームステイの受け入れなど、さまざまな交流活動を図ってきた。

16年9月には、パートナー都市交流を記念して星川中央公園にブルガリア名産で「バラの女王」と呼ばれるダマスクローズを植樹した。植えられたバラはソフィア市と保土ケ谷区の友好の象徴として親しまれている。



英コベントリー市のヤングアンバサダーと交流

東京オリンピック使用施設でスポーツ体験

【調査ホストタウン】

神奈川県 横浜市

【イベント開催日】

2019/11/19

【相手国・地域】

英国

【イベント参加者】

コベントリー市ヤングアンバサダー10人、横浜市内の小学生、中学生、高校生ら
約 50人

【競技】

【調査場所】

横浜市内

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

横浜市は 2019 年 11 月 19 日、英国コベントリー市から来日中の子どもボランティア「ヤングアンバサダーズ」10 人と地元の子どもたちの交流会を行った。横浜市は 16 年 1 月に英国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。18 年 8 月には、英国代表チームの事前合宿受け入れで協力体制を築いている川崎市、慶應義塾大学とともに、英国代表を応援するサイト「GOGB」を開設し、さまざまな情報を発信してきた。この日の交流会は、横浜市側が持ち掛けたものではなく、「GOGB」のサイトを見たコベントリー市から申し込みがあって実現した。

交流会ではまず、東京オリンピック・パラリンピックで野球・ソフトボールの試合会場となる市営横浜スタジアムに集合し、ソフトボール女子日本代表チームと市立立野小学校 6 年生の児童を交えたふれあいフェスティバルが行われた。ソフトボール女子日本代表チームの選手による実技指導が行われたが、英国ではソフトボールがほとんど普及していないことから、コベントリー市の子どもたちに基本的なルールと用具の使い方を説明した。その後、コベントリー市の子どもたちが順番にバッターボックスに立ち、日本代表選手と「対戦」する機会もあったが、子供たちはピッチャーの投げるボールのスピードに度肝を抜かれていた。

その後、立野小学校の児童らと 4 チームに分かれ、日本の小学校の運動会の定番種目「玉入れ」に挑戦した。ルールが簡単なこともあって、コベントリー市の子どもたちも楽しんで参加することができた。なお、このイベントには市立横浜商業高等学校の国際学科やスポーツマネジメント学科など 10 人の生徒が語学ボランティアとして参加し、コベントリー市の子どもとペアになって、通訳に当たった。

ふれあいフェスティバルは午前中で終了し、コベントリー市の子どもたちは昼食もかねて「新横浜ラーメン博物館」に向かった。ここでは、市立篠原中学校生徒 6 人と大綱中学校生徒 3 人が加わり、昼食と博物館の見学をサポートした。コベントリー市の子どもたちは、ラーメン博物館の中を十分に見回った上で店舗を決め、おなかを満たした。

午後は、東京オリンピック・パラリンピックでサッカーの競技会場となる横浜国際総合競技場の施設見学が行われた。この会場は 19 年のラグビー・ワールドカップ決勝で英国チームが戦った場所のため、英国でも知られており、コベントリー市の子どもたちも大興奮で施設内を見て回った。

このイベントを担当した横浜市オリンピック・パラリンピック推進課の名矢明日香さんは、「『GOGGB』のサイトは日本語だけでなく英語版のページもあり、そこを見たコベントリー市の担当者から直接申し入れがあった。『GOGGB』を通じた情報発信が新しい交流につながり、サイト構築の意義が再確認できたイベントになった」と総括している。



ボツワナと横浜・都筑の小学生が絵で交流

児童ら、描いた作品が海を渡り感動

【調査ホストタウン】

神奈川県 横浜市

【イベント開催日】

2020/2/4

【相手国・地域】

ボツワナ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

JICA 横浜、都筑多文化・青少年交流プラザ（つづきマイプラザ）

【調査日】

2020/03/26

【補足情報】

ボツワナ共和国と横浜市都筑区の小学生がそれぞれ描いた児童画を紹介する「第 6 回都筑・ボツワナ交流児童画展」が 2020 年 2 月 4 日～3 月 1 日、JICA 横浜（横浜市中区）で開催された。横浜市は 16 年 1 月、英国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、その後、さらに 5 か国のホストタウンとして追加登録された。ボツワナのホストタウンには 18 年 8 月に登録されている。

ボツワナと都筑区の交流の始まりは、08 年の「第 4 回アフリカ開発会議」で行われた取り組み「一駅一国」運動と「一校一国」運動がきっかけとなった。この二つの運動では、都筑区内にある市営地下鉄駅「センター南駅」と横浜市立茅ヶ崎小学校（都筑区）がボツワナを担当し、国際理解教室やボツワナ大使の地域イベントへの参加、駅構内での民族楽器演奏など、互いの文化を学び合う活動が盛り上がった。

14 年度からは毎年、「都筑・ボツワナ交流児童画展」を企画。茅ヶ崎小 3 年生とボツワナの首都ハボロネにあるベン・テマ小学校 3 年生の児童が参加して、それぞれが描いた作品を両国で展示している。

6 回目となった今回は、茅ヶ崎小 122 点、ベン・テマ小 84 点を展示。まず茅ヶ崎小の作品がボツワナに送られ、その後、ベン・テマ小の作品と合わせて送り返されてきた。

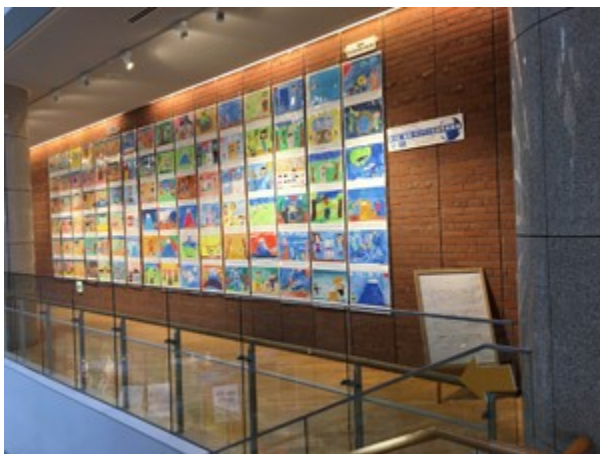
作品のテーマは「伝えたいこと」。茅ヶ崎小の作品は、日常の様子やプールで泳いでいる絵、日本を象徴する富士山が描かれたものが多かった。一方ベン・テマ小の作品は、自然や家族を描くものが多い。

茅ヶ崎小には 19 年、シコロイ駐日ボツワナ大使が訪れ、ボツワナの文化や日常について紹介していたことから、子どもたちはボツワナに親しみを持つようになった。

っていた。自分の描いた絵が海を渡り、そしてまた戻ってくることにも大きな感動があったという。

作品は JICA 横浜での展示に先立ち、19 年末には都筑区役所でも紹介し、延べ 3 万人の来場者を数えた。来場者からは「ぜひこの取り組みを長く続けてほしい」「毎年楽しみにしている」などの声が聞かれた。

主催する都筑多文化・青少年交流プラザ（つづきマイプラザ）林田育美館長は「この取り組みを始めた時は思っていた以上に大変で、1 回開催できれば十分だと思うほどだった。しかしこの展示に感動する大人や思いを共感してくれた大使館など、各所のキーパーソンとの出会いによって、ここまで続けられている。今後の夢は『子どもたちの交流』で、ボツワナの子どもたちにぜひ横浜に来てもらいたい」と抱負を話す。





「クロアチアカップ・サッカーフェス」開催

2002 年 W 杯を機に始まり今回で 17 回目

【調査ホストタウン】

新潟県 十日町市

【イベント開催日】

2019/9/22

【相手国・地域】

クロアチア

【イベント参加者】

6 カテゴリー21 チーム

【競技】

サッカー

【調査場所】

【調査日】

2020/03/10

【補足情報】

十日町市は 2019 年 9 月 22 日、「第 17 回クロアチアカップ・サッカーフェスティバル」を同市の屋外スポーツ施設「当間多目的グラウンド（クロアチアピッチ）」で開催した。同市は 02 年のサッカー・ワールドカップ日韓大会でクロアチアチームの事前キャンプ地となったことを契機に、同国との交流を開始。16 年 1 月にはクロアチアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、クロアチアカップもホストタウン交流活動の一環に位置付けている。

19 年度のクロアチアカップ・サッカーフェスティバルには、8 歳以下、10 歳以下、12 歳以下、39 歳以下、40 歳以上、ミックス（20 歳以上かつ女性 2 人以上を含む）の全 6 カテゴリー 21 チームが参加し、ミニサッカー大会やサッカー講習会などで汗を流した。会場に設けたクロアチア PR ブースではビール、ワイン、ラキア（蒸留酒）、チーズ、調味料、オリジナルグッズなどのクロアチアの物産品を提供したほか、十日町市が行っているクロアチアとの交流事業の紹介コーナーも設けた。

同フェスティバルは、クロアチアサッカー協会からクリスタルカップの贈呈を受けているほか、日頃から同国との仲介など多岐にわたる協力・支援を同国大使館から受けていることもあり、当日はドラジェン・フラスティッチ駐日クロアチア共和国大使も来市し同大会を視察。大使館職員や大使の実子も大会に参加した。

大使はフェスティバルに参加した子どもたちに向け、「どこの国もあなたたちのような子どもたちが未来を創っていく。十日町市とクロアチアが築いた友好関係を未来にも引き継いでいってほしい」と両国の関係についての思いを述べたほか、「今回のような交流活動を通してクロアチアのことをもっと知ってほしい。皆さんにもいつかクロアチアを訪れてもらい、クロアチアの良いところを知ってもらいたい」と呼び掛けた。

この事業を担当する十日町市教育委員会事務局の樋口毅さんは今後のサッカー関連の招致活動について、「東京オリンピックへの招致はクロアチアの予選敗退のためかなわなかったが、招致活動は今後も機会を捉えて取り組んでいきたい」と話す。



各種イベントでクロアチアを PR

クロアチアグッズの開発・販売にも注力

【調査ホストタウン】

新潟県 十日町市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

クロアチア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

十日町市は 2019 年度、クロアチアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業として、「十日町きものまつり」でのクロアチア PR ブース（5 月 3 日）、柔道・空手・テコンドー選手団事前合宿受け入れ（8 月～9 月）、クロアチア映画「Life is a Trumpet（人生はトランペット）」上映会（9 月 10 日）、「第 17 回クロアチアカップ・サッカーフェスティバル」（同 22 日）、クロアチアに親しむ学校授業、クロアチア家庭料理講習会、学校給食でのクロアチアメニュー採用（以上、同 30 日）などの取り組みを行った。

また、17 年からはクロアチア出身でグラフィックデザイナーのスヴェン・ビエランさんを国際交流員（CIR）として市に招き、グッズデザインなどを依頼。ネクタイ、ピンバッジ、キーホルダー、ステッカーなど、クロアチアグッズの開発・販売にも力を入れてきた。

この事業を担当する市教育委員会事務局の樋口毅さんは「現在実施中の各推進事業は参加者や来場者からも多くの好評を頂いており、回数を重ねることにより地域に定着してきていると実感している。特に（19 年）9 月にイオンモール新潟南で開催された県内ホストタウン PR 活動においては、この事業を十日町市外にも広く PR できた有意義な場となった」と手応えを語る。

クロアチアグッズの制作については、「企画・制作にあたって写真などにおける著作権の問題に苦慮している」と苦労をにじませる一方で、「テストイベントの事前キャンプで宿舎や練習会場に配置したクロアチアをイメージしたラベルデザインのペットボトル清涼飲料水は、来市したクロアチア選手団から大変好評だった」と振り返る。また、今後は T シャツやステッカー等のオリジナルグッズ制作を計画しているという。



クロアチアの柔道・空手・テコンドー選手団来訪

東京五輪テストイベントに合わせた事前合宿で

【調査ホストタウン】

新潟県 十日町市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

クロアチア

【イベント参加者】

【競技】

柔道、空手、テコンドー、陸上、射撃、自転車

【調査場所】

十日町市なかさとアリーナ

【調査日】

2020/03/09

【補足情報】

クロアチアの柔道・空手・テコンドー選手団が 2019 年 8 月から 9 月にかけて、東京オリンピック・パラリンピックのテストイベントに合わせた事前合宿に参加するため、十日町市を訪れた。

同市が今回受け入れ対象としたのは、柔道・空手・テコンドーの 3 競技。柔道は 8 月 21 日～26 日、同市の「なかさとアリーナ」の柔道場に計 8 人（監督等 3 人、選手 5 人）を、空手は 8 月 29 日～9 月 5 日、同施設の剣道・空手道場に計 12 人（監督 1 人、選手 11 人）を、テコンドーは 9 月 7 日～11 日、同施設の剣道場・空手道場に計 13 人（チームリーダー等 4 人、選手 9 人）をそれぞれ受け入れ、事前合宿を行った。選手団の人選は同国各種目の連盟が行った。

選手団は各々の競技の事前合宿で練習に打ち込む一方、同市内の学校を訪問。地元小・中・高校生や一般競技者などを含む地元各競技団体らが参加する指導会へ参加したり、名勝地・観光・文化施設を訪問したりして、歴史・文化の体験や市民との交流も行った。

この事業を担当する市教育委員会事務局の樋口毅さんは今回の事前合宿について、「初めて事前キャンプを受け入れる 3 競技だったが、本番を想定した充実した内容で受け入れることができた。東京オリンピック選考も兼ねたテストイベントに出場するクロアチア選手団の事前キャンプ受け入れを無事に成功できたことは、クロアチアと当市双方において大きな成果となった」と総括した。

今後の課題については、「事前キャンプは大会前の選手にとって重要な時期に行われる。体重制限の必要な種目に属する選手もいる中、特に飲食を伴う交流をはじめとした交流活動全体の組み立てについて、さらなる改善が必要と感じた」と話す。

この事業における今後の取り組みとして同市は、クロアチア選手団 6 種目（柔道、空手、テコンドー、陸上、射撃、自転車）の受け入れを予定しているほか、

クロアチアゆかりのアーティストによるコンサートイベントやクロアチア映画の上映会、クロアチア選手の活躍を観覧できるパブリックビューイングの実施などを予定している。



ロシア・沿海地方空手道連盟訪問団が市長を表敬

副市長らが歓迎、手拭いなど贈る

【調査ホストタウン】

新潟県 新潟市

【イベント開催日】

2019/12/13

【相手国・地域】

ロシア

【イベント参加者】

訪問団 14 人

【競技】

空手

【調査場所】

新潟市役所 3 階 秘書課第 2 会議室

【調査日】

2019/12/13

【補足情報】

ロシア連邦から新潟県新潟市に訪れている「ロシア・沿海地方空手道連盟」の訪問団が 2019 年 12 月 13 日、新潟市役所を訪れ、荒井仁志新潟市副市長を表敬訪問した。今回の交流は日ロ間の青年交流を推進する「日露青年交流センター事業」の一環で、新潟市とその姉妹都市であるロシアのウラジオストク市・ハバロフスク市などとの間で行われた。新潟市はロシアのハバロフスク、ウラジオストク、ビロビジャンの 3 都市と姉妹都市提携を締結しており、古くから経済、文化、スポーツ、観光、環境や教育などの分野で交流を続けてきた。これまでの交流や、平昌冬季オリンピック競技大会でのフィギュアスケート事前合宿の受け入れを契機に 18 年 11 月、全ロシア新体操連盟と事前合宿に関する協定を締結。同年 12 月にロシアを相手国とする 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

ロシアで空手を学ぶ 12 歳～47 歳の男女 14 人から成る訪問団の団長で空手 4 段のキレエフ・ドミトリーさんは、「新潟の皆さんの温かい歓迎に感謝します。今回の交流で空手の本場・日本で行われている指導方法をよく観察し、私たちがロシアで教えている空手が日本の空手と同じものなのかどうかを確認したい。この交流が刺激となり、私たちの空手がもう一歩上の段階に成長するきっかけにしたい」と話した。

新潟市からは荒井副市長をはじめ、新潟市空手道連盟会長・樋口修次さん、新潟市文化スポーツ部部長・中野力さん、新潟市観光国際交流部長・上村洋さん、新潟市文化スポーツ部スポーツ振興課長・武藤正明さんらが出席。荒井副市長は「皆さんの訪問を歓迎する。稽古に励みながら、新潟の米・野菜・魚といった豊かな食文化や風光明媚（めいび）な海・山・田園風景も楽しんでほしい」と呼び掛けた。

その後、荒井副市長、樋口さんと選手団との間で活発な意見交換が行われ、副市長からは新潟とロシアの気候の違いや新潟の印象に関する質問が、選手団からは日本で行われる稽古の頻度や時間、参加者の男女比、学校教育と空手の結びつきなどについての質問があった。

意見交換の後、閉会前には記念撮影と記念品の交換が行われ、選手団側からは盾が、新潟市側からはオリジナル手拭いなどが贈られた。



ロシア・沿海地方空手道連盟訪問団と意見交流

林空手日本代表監督、組み手の実践披露も

【調査ホストタウン】

新潟県 新潟市

【イベント開催日】

2019/12/16

【相手国・地域】

ロシア

【イベント参加者】

【競技】

空手

【調査場所】

新潟市役所 6階 執行部控室

【調査日】

2019/12/16

【補足情報】

日ロ間の青年交流を推進する「日露青年交流センター事業」の一環として、新潟市とその姉妹都市であるロシアのウラジオストク市・ハバロフスク市などとの間で行われた空手交流に参加している「ロシア・沿海地方空手道連盟」の訪問団は2019年12月16日、新潟市役所で行われた空手の意見交換会に参加した。新潟市はロシアのハバロフスク、ウラジオストク、ビロビジャンの3都市と姉妹都市提携を締結しており、18年12月にロシアを相手国とする2020東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

19年12月15日に自然公園「福島潟」や展望台「Befco ばかうけ展望室」といった市内観光施設を視察した訪問団は16日、空手日本代表の監督で新潟市職員でもある林晃さんとの意見交換会に参加。林さんは世界大会を2度制した経験から、世界大会での対戦の模様、空手を通じた自分自身との向き合い方、対戦相手との間合いの取り方、緊張した場面で実力を発揮するためのリラックス法などを伝えたほか、市職員を対戦相手に見立て、実戦に役立つ組手のテクニックを身振り手振りを交えながら臨場感たっぷりに披露した。

意見交換会に参加した選手団の14歳の男性は「世界大会で活躍した林さんの強さと実績が印象に残った。林さんから教わったリラックス法を試し、もっと技術を磨いて大会で金メダルを取り、父と母に誇りに思ってもらえるような空手家になりたい」と感想の言葉を口にした。

意見交換会を終えた林さんは「私は空手を通じて『良いことも悪いことも、貴重な機会として自身の向上につなげる』という精神と、両親や周囲の人といった、自分を支えてくれる人たちへの感謝の思いを学んだ。この学びは空手だけでなく、仕事や人生にも通じる。今日の出会を通して、この精神がロシアの皆さんに伝わっていればうれしい」と振り返った。



小学校で空手交流

訪問団メンバーと児童らが共に汗流す

【調査ホストタウン】

新潟県 新潟市

【イベント開催日】

2019/12/16

【相手国・地域】

ロシア

【イベント参加者】

【競技】

空手

【調査場所】

南万代小学校体育館

【調査日】

2019/12/16

【補足情報】

日ロ間の青年交流を推進する「日露青年交流センター事業」の一環として、新潟市とその姉妹都市であるロシアのウラジオストク市・ハバロフスク市等との間で行われた空手交流に参加している「ロシア・沿海地方空手道連盟」の訪問団は2019年12月16日、新潟市中央区にある南万代小学校体育館で行われた空手交流会に参加した。新潟市はロシアのハバロフスク、ウラジオストク、ビロビジャンの3都市と姉妹都市提携を締結しており、18年12月にロシアを相手国とする2020東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

ホストの新潟市からは「新潟県空手道連盟」に所属する小・中学生と指導者4人が参加。訪問団と地元メンバーは互いに入り混じり、ランニング、形稽古、ステップワークトレーニング、試合形式の練習などをこなし、約2時間にわたって汗を流した。

指導に当たった新潟県空手道連盟理事・佐々木慎一さんは訪問団の練習ぶりに対し、「日本の空手から何かを学ぼうという真摯な姿勢が一人一人から感じられた。日本での稽古を通して、周りの仲間や相手を思う『礼』の気持ちを学び、今後の各々の空手道に生かしてほしい」と思いを語った。

ロシアと日本の稽古の違いを終始真剣な表情で眺めていた選手団長のドミトリーさんは「日本の武道の象徴である空手を本場・日本で学ぶことができうれしい」「稽古内容は（ロシアと）似ているが、指導者を複数人置く日本の稽古形式は私たちのものとは大きく異なり参考になった。練習がより活発に、質の高いものになりそう」と感想を語った。日本の子どもたちについては、「明るく、頑張り屋さんで、教えられたことを早く理解する賢さを備えている」と評価した。

訪問団は17日・18日にも新潟市内で空手交流を行い、19日まで滞在した。



ニュージーランド・トランポリンチームと交流会

市ジュニア選手に技術指導も

【調査ホストタウン】

石川県・小松市

【イベント開催日】

2019/11/23

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

ニュージーランド・トランポリンチームの選手（＝リオデジャネイロ五輪 7 位）のディラン・シュミット氏、マデリーン・デビットソン氏、同チームのコーチなど全 6 名、小松市トランポリン協会ジュニア選手 20 人。

【競技】

トランポリン

【調査場所】

小松市総合体育館

【調査日】

2019/11/23

【補足情報】

ニュージーランド・トランポリンチームと小松市ジュニア・トランポリン選手との交流会が 2019 年 11 月 23 日、小松総合体育館（小松市下牧町）のアリーナで開催された。主催は石川県と小松市。石川県と小松市は 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向け、8 カ国(ニュージーランド、ブラジル、英国、フランス、カナダ、モザンビーク、ノルウェー、スロベニア)のホストタウンとして登録されている。

同月 28 日から東京で開催される世界選手権に出場するニュージーランド代表のトランポリンチームが、20～23 日の日程で同市で合宿を実施することから、これに合わせて交流会が企画された。

当日の出席者は、ニュージーランド・トランポリンチームのメンバーでリオデジャネイロ五輪 7 位のディラン・シュミットさん、マデリーン・デビットソンさんのほか、コーチなど全 6 人、小松市側は同市トランポリン協会ジュニア選手 20 人が参加した。

交流会では、小松市のジュニア選手（男女 5 人ずつ）による跳躍披露、ニュージーランドチームの選手・コーチから跳躍披露した選手へのアドバイス、両チーム間での質問コーナー、ニュージーランドチームの選手によるサイン会、参加者全員での記念撮影などが行われた。

質問コーナーでは「好きな食べ物」について、ディランさんはピザ、マデリーンさんはチョコレートと答えたが、コーチ陣からは「実際にはサラダを多く食べている」との答えがあった。

「訪れた観光地」では、紅葉がきれいな「那谷（なた）寺」や「ゆのくにの森」を訪れたとの回答があった。「落ち着いて演技するために実施していること」について、ディランさんは

「耳の裏を触るなど、毎回同じルーティーンを行う」、マデリーンさんは「頭の中で演技を想像しながら、3回深呼吸をする」と話すと、小松市のジュニア選手は熱心な様子で聞いていた。ジュニア女子選手は「質問するのは恥ずかしかったが、大会で落ち着いて演技する方法を聞けて良かった。参考にしたい」と話していた。

サイン会や記念撮影には小松市ジュニア選手の保護者も参加。選手の父親の一人は「未来のメダリストとの交流はとても貴重。応援していきたい」と話していた。

ホストタウン交流事業を担当する、小松市にぎわい交流部スポーツ育成課長の池上裕子さんは「世界規模の大会に挑む選手の姿を地域のジュニア選手たちに見せることで、さらに当市のスポーツの発展につながれば。他にもカヌー選手の受け入れも行っているなので、楽しみにしていただきたい」と話した。

通訳ボランティア対象にスキルアップ講座

外国語で地域の魅力を伝えよう

【調査ホストタウン】

石川県・小松市

【イベント開催日】

2019/6/18

【相手国・地域】

英国、カナダ、ニュージーランド、フランス、ブラジル、モザンビーク、ノルウェー、スロベニア

【イベント参加者】

通訳ボランティアに応募した市民約 90 人

【競技】

【調査場所】

小松市役所

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

小松市は、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業の一環として、2019年6～12月に市民を対象とした通訳ボランティアスキルアップ講座を開催した。同市は、市内に文部科学省から認定を受けたカヌー競技のナショナルトレーニングセンターがある関係で、カヌー競技を中心としたホストタウン交流事業を展開しており、17年7月にニュージーランドを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、その後、19年8月までにブラジル、英国、フランス、カナダ、モザンビーク、ノルウェー、スロベニアを追加登録。各国の事前合宿受け入れの計画も進んでいることから、それに伴う交流イベント等で通訳ボランティアの働きに期待している。

通訳ボランティア自体は18年度から養成を始めていたが、19年度はスキルアップ講座を夏と冬の2回実施。いずれも対象の言語は英語で、市役所に勤務する外国人の国際交流員が講師となって座学4回と実地研修1回をセットで行った。なお、講座は無料ではなく、参加者は受講料として1回当たり500円を負担する。

6月から7月に開催された夏の講習では、「（英語を）話すこと」と「（日本語から英語に）通訳すること」の技術向上を目的に、市内の温泉や寺社などの観光名所の案内のほか、茶道を体験する外国人に英語で説明することを想定した講座を習得した後、市内の観光名所・那谷寺で実践トレーニングを行った。また、11～12月の冬の口座では小松市を含む加賀地域の（1）食文化（2）自然（3）歌舞伎（4）石文化と九谷焼をテーマに座学で学び、実践トレーニングは、小松市の「町衆文化」の魅力を紹介する施設「曳山交流館みよっさ」で、外国人観光客を案内する想定で行った。

受講者数は、夏の講座が58人、冬が36人に上った。市観光文化課の担当者は、「受講料を払ってまで学ぼうという意欲があるだけに、参加者はいずれも積極的で、2020東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けたイベントや交流事業で活躍してくださることを期待している」と話している。



オリパラ給食のレシピ公開

ホストタウン相手国の郷土料理を家庭でも

【調査ホストタウン】

石川県・小松市

【イベント開催日】

2020/2/7

【相手国・地域】

英国、カナダ、ニュージーランド、フランス、ブラジル、モザンビーク、ノルウェー、スロベニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

小松市内

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

小松市は 2020 年 2 月、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業の一環として、ホストタウン相手国の郷土料理のレシピをホームページ上で公開した。同市は市内に文部科学省から認定を受けたカヌー競技のナショナルトレーニングセンターがある関係で、カヌー競技を中心としたホストタウン交流事業を展開しており、17 年 7 月にニュージーランドを相手国とするホストタウンに登録、その後、19 年 8 月までにブラジル、英国、フランス、カナダ、モザンビーク、ノルウェー、スロベニアを追加登録。各国の事前合宿受け入れの計画も進んでいることから、市民に相手国への親しみを持ってもらおうと、家庭でも手軽に作れるメニューを選んでレシピを公開した。

同市では 19 年度、ホストタウン相手国の郷土料理を市内の小中学校等で提供する「オリパラ給食」を実施したが、いずれも好評だった。また、オリパラ給食に合わせ、各国の文化や風俗を紹介したり、給食のメニューに使われている食材や調理法から各国の人々の生活を学んだりする時間も設けられた。公開されたレシピも、オリパラ給食で提供したメニューをベースにしている。

ホームページ上で公開したのは、英国の「シェパードパイ」「イギリス_スコッチブロス」「フィッシュ&チップス」、カナダの「サーモンのカナダ風オーブン焼き」「トマトの野菜スープ」「モンティクリスト」、ニュージーランドの「クマラスープ」「ホワイトベイト・フリッター」、ブラジルのフェジョーダ」「パステウ」、フランスの「ポムケーキ」「ラタトゥイユ風スープ」「サーモンのきのこベシャメルソース」、モザンビークの「モザンビーク風カレー」「モザンビークスパゲティ」の 15 品目。メニューは、日本人の口に合うことに加え、市内で手に入る材料で作れるものを選定した。

各メニューはのページには、材料、作り方、完成した料理の写真を示すとともに、それぞれの料理の名前の意味やどんな食べ方がおいしいかなどの説明も付記している。レシピは市内の保育園やこども園等の栄養士向けに作成されているが、小さな子どものいる家庭でも作りやすいように、作業過程の中で子どもにお手伝いさせることができるポイントも紹介した。



オ リ パ ラ

給 食 メ ニ ュ シ ョ ン

シェパーズパイ

イギリス

【材料】(子ども 4人分)

合挽き肉 ... 80g	サラダ油 ... 小さじ1	じゃがいも 大 ... 1個
たまねぎ(みじん切) ... 1/2個分	★塩・こしょう ... 少々	★水 ... 80ml
人参(みじん切) ... 1/5本分	★ケチャップ ... 大さじ1	★コンソメ ... 中2粒(1/2)
トマト缶(ダイス) ... 200g	★コンソメ ... 小さじ1	とろけるチーズ ... 適量

【作り方】

- ① ★を合わせラップをかけ600wで1分程加熱する。
- ② じゃがいもは茹でてつぶし、①をを少しずつ加え、水べらなどで混ぜ合わせる。
- ③ フライパンに油を熱してひき肉炒め、色が変わったら玉ねぎと人参を加え、火が通ったらトマト缶と★の調味料を入れ、水分がほぼなくなるまで煮込む。
- ④ 耐熱容器に③を入れその上に②を平らに伸ばしながら入れ、チーズをかける。
- ⑤ 220℃に予熱したオーブンで約15～20分ほど、オーブントースターの場合は約5～10分、焦げ目がついたら出来上がり！

★一緒にじゃがいもをつぶしたり、チーズをかけた後、小さなお子様から出来ます。

イギリスの代表的な料理のひとつです。ミートソースにマッシュポテトを組み合わせた子どもたちにも食べやすいメニューです。

わくわくオアシスビック 10 こまごま製作委員会 監修

PR イベント「スロベニア・ウィーク」開催

学校給食に現地料理の献立も

【調査ホストタウン】

福井県 福井市

【イベント開催日】

2019/10/12

【相手国・地域】

スロベニア

【イベント参加者】

フェニックス・プラザ＝親子連れや年配の夫婦など約 400 人

【競技】

【調査場所】

フェニックス・プラザ、ハピテラス

【調査日】

2020/03/25

【補足情報】

福井市は 2019 年 10 月、同市のホストタウン交流事業の取り組みを市民に紹介するイベント「スロベニア・ウィーク」を開催した。そば文化や特産品のスイセンなど同市との共通点があるホストタウン相手国、スロベニアに関心を持ってもらおうと福井市が企画。音楽や食などの分野でさまざまな取り組みを展開していた。

同市内にある複合施設「フェニックス・プラザ」では 10 月 12 日、ジャズ・バイオリニスト牧山純子さんによるコンサート「愛（LOVE）あふれる国 スロベニア」が開催された。16 年、スロベニア独立 25 周年記念コンサートにゲスト出演するなど同国との交流を深めている牧山さん。インターネットで活動を知った市の担当者がイベント出演を打診し、約 1 年かけて準備を進めた。

イベントは、トークショーを挟んだ 2 部構成のコンサートのプログラムで展開した。牧山さんは耳なじみのあるジャズのスタンダードナンバーや、同国の風景を「大地」「水」「空」「風」の構成で作曲した「スロベニア組曲」などを演奏した。

トークショーでは、牧山さんとホストタウン誘致の交渉に当たった福井市の西行茂副市長が登壇し、時折ユーモアを交えながら現地の魅力を語り合った。今回初めて福井を訪れた牧山さんは「今回のご縁をきっかけに、（活動拠点の）東京でも福井のプロモーションのお手伝いしたい」と話した。

当日は台風の影響で荒れた天候だったが、市政広報などで開催を知ったという親子連れや年配の夫婦など約 400 人が訪れた。来場者は「トークショーを聞いて実際にスロベニアに行ってみたくなった」「福井での（スロベニア選手団の）キャンプ実施が決まったら、ぜひおもてなししたい」と満足した様子だった。

食関連では 10 月 14 日、福井駅西の屋根付き広場「ハピテラス」で行われたイベント「ワイン福井」で現地のワインを紹介した。大阪市内にあるスロベニアワ

イン輸入元の協力を得て、白ブドウを使い赤ワインの醸造法で作る「オレンジワイン」などを陳列するブースを設けた。「最近スロベニアワインが気になっている」とブースを訪れた来場者もいるなど関心の高さがうかがわれた。

学校給食では「スロベニアの食文化を紹介」と題したメニューも提供された。福井市出身者で在スロベニア日本大使館の公邸料理人を務めたシェフが監修し、カツレツの「リュブリャナ風シュニッツェル」、パスタ入りスープの「ユーハ」などを市内幼稚園、小・中学校などで提供した。清明小学校など給食に合わせた特別授業を行った学校もあり、児童はクイズなどを通じて現地文化への理解を深めた。



ホストタウン交流事業広報に注力

職員自らラジオ出演 認知度向上図る

【調査ホストタウン】

福井県 福井市

【イベント開催日】

2019/10/29

【相手国・地域】

スロベニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/25

【補足情報】

ホストタウン相手国であるスロベニアの認知度向上を目指し、福井市は 2019 年度、さまざまな広報活動に取り組んでいる。

市政広報「広報ふくい」2019 年 9 月 10 日号では、巻頭 4 ページを使い「ホストタウンで世界とつながろう」と題した巻頭企画を特集。事業概要、福井市と同国の共通点、現在までの取り組み、10 月上旬に市内で演奏会「愛（LOVE）あふれる国 スロベニア」を行ったジャズ・バイオリニスト牧山純子さんのインタビューなどを掲載した。

制作は、ホストタウン交流事業を進める総合政策課と執筆・編集などを担当する広報課が共同で進めた。総合政策課の担当者は「写真をふんだんに取り入れ、分かりやすい誌面となるよう心掛けた。広報課の担当職員も女性誌などを参考に、エアメールを想起させるあしらいなど キャッチーな要素を盛り込んでくれた」と振り返る。

市内の図書館 3 館では、「本を通じてスロベニアを学んでみよう」と関連書籍を集めた特設ブースを展開した。各館の職員が現地の旅行ガイドや、同国の哲学者スラボイ・ジジェクの作品などを蔵書からピックアップ。手作りデコレーションや手書き POP など添え、来館者に利用を呼び掛ける。

企業とタッグを組んだ広報活動も展開する。市内のモスバーガー2店舗では、東京大会に賛同するモスフードサービスの協力を得て、これまでの取り組みをまとめた PR シートをテーブル上に配置した。店舗側もスロベニア語の店内メニューを用意し、事前キャンプなどで来福した関係者の来店に備える。

10 月 29 日には、NHK 福井放送局のラジオ番組「情報たら福」に市職員が出演。スポーツ課と 総合政策課の職員 2 人が、これまでの取り組みや今後の予定などを紹介。放送は福井駅東の複合施設「アオッサ」1 階で行い、下校途中の高校生グループなどが足を止めて聴き入っていた。



スロベニアのタウンフレーム切手制作

現地アスリートに向けた手紙を書く授業も

【調査ホストタウン】

福井県 福井市

【イベント開催日】

2019/10/7

【相手国・地域】

スロベニア

【イベント参加者】

啓蒙小と社西小学校の児童計 185 人（予定）

【競技】

【調査場所】

啓蒙小学校、社西小学校

【調査日】

2020/03/25

【補足情報】

福井市は 2019 年 10 月 7 日、日本郵便と共同で制作した「オリジナルフレーム切手」を発表した。市が取り組むホストタウン交流事業の一環で、1 シートに 84 円切手 10 枚を組み込んだ。ホストタウン相手国であるスロベニアを応援しようというメッセージと共に、同国の概要、福井市との共通点などもあしらう。駐日スロベニア大使館の協力を得て、首都リュブリャナや世界遺産であるシュコツィアン洞窟群などの写真を切手デザインに盛り込んだ。

事業を進める総合政策課の担当者によると、「ホストタウン交流事業に合わせたフレーム切手は全国 2 例目で、消費増税後の新料金に対応した切手としては全国初」。福井県では、18 年の「福井しあわせ元気国体・障スポ」に合わせたオリジナルフレーム切手が制作・販売された経緯があり、その時のノウハウを基に同社から市に打診があったという。

同社は東京大会に向けた企画「ホストタウン相手国・地域へお手紙を送ろう」を全国展開する。福井でも 20 年 3 月 4 日、啓蒙小学校で市と共同開催し、児童が書いた手紙を同国バスケットボール連盟・パラリンピック委員会に送る予定だったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大対策に伴う一斉休校措置で開催延期となった。

市の担当者によると、当日は同小と社西小学校の児童計 185 人の参加を予定していた。福井県営体育館近くにある社西小学校は、18 年に市が行った同国バスケットボール招へい事業で同国選手と交流した経緯があり、両校による合同授業が決まったという。

市では啓蒙小学校での開催をきっかけに参加校の増加を見込む。担当者は「東京大会開催は延期になったが、ここでホストタウン交流事業が途切れるわけではない」としたうえで、「スロベニアの人たちの律儀さや情の深さなどは、福井の人の気質にも通じるところがある。交流事業にかけられる期間が延びた分、相手国の認知度向上につながる取り組みを続けていきたい」と力を込める。



元水泳選手・萩原智子さんが「小学生水泳教室」

レベルに合わせて指導、4種の泳ぎも披露

【調査ホストタウン】

山梨県 甲州市

【イベント開催日】

2020/3/24

【相手国・地域】

フランス

【イベント参加者】

小学生 32人

【競技】

【調査場所】

塩山 B&G 海洋センター

【調査日】

2020/02/24

【補足情報】

元水泳選手の萩原智子さんによる「小学生水泳教室」が 2020 年 2 月 24 日、甲州市の塩山 B&G 海洋センターで行われた。同市はワイン醸造業を通じてフランスのボヌヌ市と長く交流しており、それをきっかけに 16 年 12 月、フランスを相手国とした東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。同国ハンドボール代表チームの合宿を受け入れるとともに、日本人オリンピック・パラリンピアンによる講演会やスポーツ教室を通じ、市民の間の機運醸成を進めている。

今回の水泳教室は、甲州市 2020 東京オリンピックフランスハンドボールチーム交流事業実行委員会の主催で行われた。講師となった萩原さんは山梨県甲府市出身。シドニーオリンピックに出場し、200 メートル背泳ぎで 4 位、200 メートル個人メドレーでは 8 位入賞の記録を残した。04 年に現役を引退した後は、スポーツコメンテーターなどとして活躍している。

小学生を対象とした水泳教室は毎年実施しており、萩原さんが指導するのは 09 年以来。今回は 25 メートル以上を泳げることを条件に参加者を募集したところ、会場には小学 2 年生から 6 年生まで 32 人の小学生が集まった。

当日は地元でスイミングスクールなどを手掛けるフィッツの協力を受け、1 時間 30 分にわたって講座を展開。萩原さんは最初に個人メドレーで泳ぐ順番に合わせて、バタフライ・背泳ぎ・平泳ぎ・クロールの 4 種目の泳ぎを披露した後、子どもたちの泳ぎのレベルに合わせて班を作り、ビート板の使い方や泳ぎ方など、そのレベルに合わせた指導を行った。イベント終了後、萩原さんは子どもたちからのサインの願いにも応じるなど終始、和やかな雰囲気で開催が行われた。

あいさつに立った甲州市教育委員会の保坂一仁教育長は「スポーツする選手は笑顔と元気がないと伸びない」と話し、「努力し先生の言うことを聞いて、素晴らしいスイマーになってください」と子どもたちにエールを送った。

イベント終了に際し、萩原さんは「また会えるのを楽しみにしている」と子どもたちに伝え、「素直な子どもたちで、（指導した内容を）体現するのは難しいものだが理解力もすごいと思った」と印象を話した。「水泳もそうだが、オリンピック・パラリンピックのホストタウンということで、スポーツを積極的にやっているんだと感じた」とも述べた。



陸上教室で中学生をオリンピックが指導

基礎指導に重点、選手の恩師も駆け付け激励

【調査ホストタウン】

山梨県 甲州市

【イベント開催日】

2020/2/20

【相手国・地域】

フランス

【イベント参加者】

市内の中学生 28 人

【競技】

【調査場所】

甲州市塩山体育館

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

リオデジャネイロオリンピック代表選手の野澤啓佑さんによる中学生を対象とした陸上教室が 2020 年 2 月 20 日、甲州市の塩山体育館で行われた。。同市はワイン醸造業を通じてフランスのボヌ市と長く交流しており、それをきっかけに 16 年 12 月、フランスを相手国とした東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。同国ハンドボール代表チームの合宿を受け入れるとともに、日本人オリンピック・パラリンピアンによる講演会やスポーツ教室を通じ、市民の間の機運醸成を進めている。

今回の陸上教室は、甲州市 2020 東京オリンピックフランスハンドボールチーム交流事業実行委員会の主催で行われた。講師の野澤さんは山梨県南アルプス市出身で、16 年のリオデジャネイロオリンピックでは、400 メートルハードルの日本代表として出場。日本勢では 04 年に行われたアテネ大会での、為末大以選手以来となる準決勝進出を果たした。現在も現役選手として、ミズノトラッククラブに所属する。

当日は陸上経験者ら市内の中学生 28 人が参加し、約 2 時間にわたって教室が開かれた。野澤さんはストレッチにも時間を掛けるなど生徒らを入念に指導。尻に両手を置き、足が当たるよう気をつけながら前に進む練習や、ジャンプしながら前に進む練習など、特に走りの基礎となる部分に重点を置いた指導を行った。最後にはチーム分けをした上で、リレー対決を行った。

指導を受けた生徒は「今までしてきたこととは違う練習があり、ためになった。これから陸上をやる上で、とても大切なことを学べた。とても充実した 2 時間となった。高校でも陸上をやっていくので、今日学んだことを生かしていきたい」と話す。

会場には、野澤さんの中学時代の恩師という南アルプス市教育委員会の名取和仁さんも駆け付けた。名取さんは野澤さんについて「中学生の時は普通の陸上競技部員だったが、キャプテンをしてくれたし、チームのことを考えて、人のことでも自分のことのように悲しんだり喜んだりしてくれる選手だった」と振り返った上で、「皆さんがそれぞれの部活動や学校で練習するとき、つまらなかった

り、けんかしたりするようなときにはやりたくないはず。楽しくできればまたやってみたいと思う。楽しい部活を作ってもらいたい」とアドバイスした。

名取さんはさらに「勉強を大事にし、生活も大事にしてほしい」として、「体のフォームをしっかりすることに合わせて、心のフォームもしっかりと整えると日本を代表するような選手になれるかも知れない。そこにたどり着くまでの経験値はいろいろなところで一生生かすことができる。オリンピックに出られなくても、将来は勤め先や家族を通じて、次の世代に引き継ぐことができるので、一流の人間になってほしい」と子どもたちに発破を掛けた。

野澤さんは今回の陸上教室を「自分は山梨出身でもあるし、子どもたちにスポーツを教えることは僕にとってすごくうれしいことだった。自分にとってもプラスになる。競技に良い影響を与えていると感じる」と話し、「僕自身、中学時代に（オリンピックに教えてもらおうような）経験はなかった。自分がこのような立場になり、こういう経験は大切なんだと実感しながら催しにうかがわせていただいた。中学時代に経験できたことはすごくプラスになると思う」と、今回の体験の重要性を強調する。「僕のことも競技をやっているということで、注目してもらえたかもしれない。結果をしっかり残さなければいけない」と気合いを入れていた。





「ハンドボールクリニック」 に 70 人参加

フランスの事前合宿地でハンドボール熱高める

【調査ホストタウン】

山梨県 甲州市

【イベント開催日】

2019/12/27

【相手国・地域】

フランス

【イベント参加者】

山梨県内の小学 1 年生～4 年生 70 人

【競技】

ハンドボール

【調査場所】

甲州市塩山体育館

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

「甲州市ハンドボールクリニック Vol.4 日本リーグ凱旋（がいせん）編」が 2019 年 12 月 27 日、甲州市塩山体育館で行われた。甲州市 2020 東京オリンピック・フランスハンドボールチーム交流事業実行委員会の主催で開催された。甲州市は 16 年 12 月、フランスを相手国とした東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

以前から「ハンドボールのまち塩山」としてハンドボールが盛んなことに加え、東京オリンピックでは甲州市がフランスのハンドボールチームの事前合宿地となったことから、ハンドボール熱をより高めようと市のオリンピック機運醸成事業の一環で行った。

ハンドボールクリニックは、山梨県出身の元ハンドボール選手で、日本ハンドボール協会事業プロデューサー、市のハンドボールアンバサダーを務める水野裕矢さんがプロデュースし、これまで 3 回にわたって行われてきた。

第 1 弾は同年 7 月 26 日、水野さん自らが講師を務め、小学 1 年～4 年を対象とした教室として開催した。同年 11 月 3 日には元日本代表ゴールキーパーの橋本行弘さんを招いたほか、同 21 日には代々木第一体育館（渋谷区）で開かれた「JAPAN CUP 2019 渋谷」のフランス対ブラジル戦を観戦する「JAPAN CUP フランス応援ツアー」も行った。

第 4 弾となる今回はこれまでの集大成と位置付け、甲州市出身の日本ハンドボールリーグ所属の現役選手 4 人に加え、水野さんや大学生、社会人ボランティアが一堂に集結し、小学生を対象とした凱旋教室を開いた。当日は甲州市に限らず県内から 70 人の子どもたちが集まり、オフense、ディフェンス、ゴールキーパーなどポジションごとの練習を行うことで、直接、選手からテクニックを教わった。

イベントに携わった甲州市教育委員会の清雲敬祐さんは「甲州市は合併前の塩山市のころ、『かいじ国体』の時にハンドボールの会場となったことから、スポーツとしてハンドボールを推進している」と話す。「ここ数年は実業団に甲州市出身の選手が何人も出ている。こんな機会はなかなかない。水野さんと話をする中で、地元に戻ってくる年末年始のタイミングに合わせて、いっぺんにみんなを集めたら楽しいんじゃないかとなった」と企画の経緯を振り返る。会場では選手による迫力あるパフォーマンスでも盛り上がり、「小学生にはもったいない教室だった」とも述べた。



コスタリカを知る講演会を開催

在コスタリカ日本国大使館一等書記官が歴史や文化、日常を紹介

【調査ホストタウン】

長野県 松川町

【イベント開催日】

2019/12/18

【相手国・地域】

コスタリカ

【イベント参加者】

3 月にコスタリカを訪れる予定の地元高校生 7 人を含む約 30 人

【競技】

【調査場所】

松川町中央公民館えみりあ

【調査日】

2019/12/18

【補足情報】

コスタリカの歴史や文化、日常を知る講演会「コスタリカにおける日本文化とスポーツ交流」が 2019 年 12 月 18 日、松川町中央公民館えみりあ（長野県下伊那郡松川町元大島）で行われた。

松川町は 12 年、「生活改善」に関する JICA 研修員の受け入れをきっかけにコスタリカとの交流がスタート。16 年にホストタウンとして登録が決まった。その後、小中学校で国際交流授業を行ったり、地元の中学生・高校生を派遣したり、さまざまな分野で交流を深めている。19 年度は、4 月にスタディツアーに参加した高校生による活動報告会、8 月に料理やダンス、ボッチャ体験などができる「コスタリカ祭り」を開催。世界柔道選手権や柔道グランドスラム大阪では出場するコスタリカ選手の応援にも駆け付けた。

当日は、3 月にコスタリカを訪れる予定の地元高校生 7 人を含む約 30 人が参加した。会場後方には、コスタリカのガイドブックや写真、硬貨などを展示。コスタリカのコーヒーとチョコレートが配られ、リラックスした雰囲気の中、ホストタウン推進員で同町の地域おこし協力隊・白井瑞穂さんが「オラー！」とスペイン語であいさつした。

講師は、在コスタリカ日本国大使館一等書記官の河本秀夫さんが務めた。「皆さん、プラビダ！」という河本さんの呼び掛けに参加者が「プラビダ！」と返すと、「何かあったら今のように言えば大丈夫なので、この言葉だけは覚えておいて」と笑顔を見せた。

河本さんはスライドを用いながら、外務省の役割や、コスタリカの暮らしや環境、教育などについて紹介。「年中 25 度前後で、人類が一番過ごしやすい気温。汗をかかないので服を着替える必要がない」と快適な気候のことや、「幸福度ランキング」で何度も世界 1 位を獲得していることにも触れた。

インターネット普及率は約 72%、フェイスブック利用者は約 68%ということから、ホームページやフェイスブックでの広報活動にも力を入れていると説明。コスタリカのホームページを見たことがあるかと問い掛けると、誰も手を挙げなかったが、「松川町のことも書いているのでぜひ見てほしい」。日本文化に興味のある人も多く、茶道や書道、アニメやダンスなどの文化事業についても写真を交えて話した。

後半は、講演の内容を振り返る三択式でクイズを出題。「コスタリカの国旗の青色の意味」「コスタリカで一番高い山」などの問題に、参加者は正解だと思うものに挙手した。先に答えが出てしまったり、誰も正解者がいなかったりと、和やかに進行。自己申告で、9 問正解した 1 人と、8 問正解した 3 人には、ナマケモノのぬいぐるみやパイナップルの形の鍋敷きなどが進呈された。

その後、質疑応答が行われ、文化事業の詳細や OECD への加入についての質問が寄せられた。河本さんは「皆さんとコスタリカでお会いできるのを楽しみにしている」と講演会を締めくくった。





アテネ五輪出場・室伏由佳さんが講演

児童 500 人にチャレンジ精神呼び掛け

【調査ホストタウン】

長野県 松川町

【イベント開催日】

2019/1/29

【相手国・地域】

コスタリカ

【イベント参加者】

児童約 500 人

【競技】

【調査場所】

松川町中央小学校

【調査日】

2020/01/29

【補足情報】

長野県松川町教育委員会は 2019 年 1 月 29 日、松川町中央小学校（下伊那郡松川町元大島）で 2020 東京オリンピック・パラリンピック・ホストタウン事業講演会を開催した。講師はアテネ五輪陸上競技女子ハンマー投げ日本代表の室伏由佳さんで、「自分の身体と向き合う方法～スポーツの経験を通じて」をテーマに行われた。

室伏さんは、女子ハンマー投げの日本記録保持者。04 年アテネ五輪に日本代表として出場した。陸上競技は 12 年に現役を引退し現在は、複数の大学の客員教授や客員准教授、医科大学などで非常勤講師を務めている。

約 500 人の児童を前にした講演では、「こうして皆に会えるのを楽しみにしていた」とあいさつ。ハンマー投げについて、男子は 7.26 キロ、女子は 4 キロというハンマーの重さを、それぞれボウリングの球や、2 リットルのペットボトル 2 本と分かりやすく例えて説明した。「オリンピックで優勝する人は 80 メートル、この体育館の端から端までよりも遠くまで投げる」と話すと、児童からは驚きの声が上がった。

室伏さんは自身が競技を始めたきっかけや、競技に打ち込んだ学生時代のこと、ハンマー投げで五輪 4 大会代表となり、アジア大会を 5 連覇した父・重信さんのことなどを紹介。重信さんが出場した 1984（昭和 59）年のロサンゼルス五輪を見て、「自分もいつか出たい」と憧れを抱くようになったという。中学時代は陸上部で、三種競技で全国大会に出場。高校時代は円盤投げに転向し、高校チャンピオンにもなったが、「プレッシャーに弱く、大きな大会で結果を残せないことが続いた」と振り返った。

大学時代は、何をするにも重信さんや、兄・広治さんと一緒に取り上げられることに苦しんだという。「私自身のことを認めてほしい」と、コーチである重信さんの助言も聞き入れず、全て自分の力でやろうとしたが、成績は停滞。悩んだ末、先輩に相談したことをきっかけに、重信さんのアドバイスを聞くようになった。練習方法も見直したことで、全国大会でも優勝できるようになった。「勝つことを目標にするのではなく、プレーの目標を立てることが大事。『できそう』

と思うことを毎日少しずつ繰り返すことで、成長できる」と語った。最後に、夢をかなえるためにチャレンジしてほしいこととして、「難しいこと、苦手なことでもチャレンジしてみる」「自分で気付けないことは思い切って人に聞く、そして教えてあげる」「思い通りにならない時こそ、一つ一つ丁寧に一生懸命やってみる」の 3 つを挙げた。

その後は、低学年と高学年に分かれて実技を行った。体を使ったジャンケンや、ストレッチのほか、2 人組で背中合わせになり、腕を組んで座ったり立ったりしてその速さを競った。室伏さんが「できた人？」と聞くと、児童は元気に手を上げて応えた。



「コスタリカへお手紙を送ろう！」を実施

はがきに選手やチームへの応援メッセージを

【調査ホストタウン】

長野県 松川町

【イベント開催日】

2020/1/22

【相手国・地域】

コスタリカ

【イベント参加者】

合わせて計 450 人の児童・生徒

【競技】

【調査場所】

松川町中央小学校、松川北小学校、松川中学校

【調査日】

2020/01/22

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン相手国・コスタリカの選手やチームに応援メッセージを送る「コスタリカへお手紙を送ろう！」が 2020 年 1 月 22 日、松川町中央小学校 1 年生 3 クラスで行われた。

1 時間目は、手紙を出すホストタウンのことを学ぶ時間。ホストタウン推進員で同町の地域おこし協力隊・白井瑞穂さんが、コスタリカの概要や文化について説明した。ナマケモノやウミガメなど、コスタリカに生息する動物の写真を見せると、歓声を上げて喜ぶ児童もいた。コスタリカのオリンピック・パラリンピックの選手も紹介し、「皆のメッセージが選手の力になる」と呼び掛けた。

2 時間目は、それぞれが色鉛筆やクレヨンを使って手紙を書いた。周囲の友達の様子を見たり、先生に分からないことを聞いたりしながら、競技をしている選手の姿やメダル、国旗などをはがきに描いた。「金メダルをとれるようにがんばってください」というメッセージや、学習したスペイン語で「頑張れ」を意味する「Pura vida！（プラビダ）」とエールを送る児童もいた。練習がうまく書けたら、続けて清書に取り組んだ。

できた児童は手紙を黒板に貼り、お互いに何を書いたのかを見比べた。手紙は、地元の高校生が選手に届けると聞き、「選手に見てもらえるのがうれしい」「私もコスタリカへ行きたい」という声も上がった。

この取り組みは、日本郵便の「ホストタウン相手国・地域へお手紙を送ろう」事業により実施した。同校の 1～4 年生のほか、松川北小学校の 4～6 年生、松川中学校の 2 年 1 組でも行い、合わせて約 450 人が参加した。中学校では、英語事業の一環として英文で作成した。松川町のことを紹介する文や「いつか訪れてほしい」と添えた手紙もあった。白井さんは「中学生はネイティブの先生も一緒に、英文が正しいか質問したりしながら進めた。学年が上がるごとに落ち着いた雰囲気にはなるが、それぞれ楽しみながら書くことができたと思う」と話す。

手紙は 3 月下旬に予定されているコスタリカ・スタディツアーで、参加する高校生が現地オリンピック委員会や選手へ直接渡す。その際に、子どもたちへのお礼の動画を撮影し、4 月に報告を行うという。「コスタリカ選手を応援する機運につながったと思う。今後の交流にもつながれば」と白井さんは話す。



「デンマーク親善フェア」開催

市民一体となって歓迎ムード創出

【調査ホストタウン】

長野県 長野市

【イベント開催日】

2019/7/8

【相手国・地域】

デンマーク

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

長野市役所

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

長野市は 2019 年 7 月、東京オリンピック・パラリンピックで同市がホストタウンを務めるデンマークのことを広く知ってもらうことを目的に、同月から 5 カ月の日程で「デンマーク親善フェア」を実施すると発表した。

同フェアは、ホストタウン相手国であるデンマーク王国の文化や食などを周知することで、デンマークの水泳選手や大使館関係者などを歓迎するムードを、市民一体となって創出するのが目的。さらに親睦を深めるとともに、子どもたちが国際的な視点を持って多様な人々とコミュニケーションを図る機会を提供することを目指す。

同フェアは 5 カ月間を予定し、主に 5 つのプロジェクトで構成することを計画していた。デンマーク競泳チームの事前合宿（7 月 8 日～17 日）のほか、10 月～12 月にはさまざまなイベントを展開。「市民交流プロジェクト」は、事前合宿に合わせて選手を市内の小中学校に招いて交流する「一校一国運動」。「産業振興プロジェクト」では農業や産業の分野でフェアを企画し、市内で採れたリンゴを使ったデンマークの郷土料理・エーブルグロッドやデニッシュなど食文化の紹介や産業についての発信に力を入れる。「食文化紹介プロジェクト」では学校給食でデンマーク食を提供し、「文化芸術プロジェクト」では、デンマークで著名なアーティスト「ドリーマーズ・サーカス」の公演などを開催。「デンマーク紹介プロジェクト」は、長野駅から善光寺まで約 1.8 キロにわたる並木をイルミネーションで彩る「善光寺表参道イルミネーション」に合わせてブースを設け PR することになっていた。

加藤久雄長野市長は 19 年 7 月 9 日の記者会見で、「フェアを通じて市民がデンマーク王国の理解し、親善を深めたい」と期待を寄せていた。会見には、マーティン・ミケルセン駐日デンマーク大使館・副館長兼公使参事官や親善フェアのロゴマークを制作した「岡学園トータルデザインアカデミー」（長野市中御所岡田町）デザインビジネス科グラフィックデザインコース 2 年の塩入彩絵さん、デンマークの人気キャラクターでクマの「ラスムスクルンプ」も参加した。



デンマーク競泳選手と児童が交流

土俵入り実演や「霧の川中島」の踊り披露も

【調査ホストタウン】

長野県 長野市

【イベント開催日】

2019/7/10

【相手国・地域】

デンマーク

【イベント参加者】

4 年生児童約 100 人

【競技】

競泳

【調査場所】

長野市立川中島小学校体育館

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

長野市は 2019 年 7 月 10 日、市立川中島小学校の体育館で、市内で合宿中のデンマーク競泳チームの選手と同校児童との交流会を行った。長野市は 18 年 2 月、デンマークを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。同年の水泳ワールドカップ東京で同国の競泳ナショナルチームが事前合宿を行ったが、今回は、19 年 7 月 12 日から韓国・光州で開催される世界水泳の事前合宿で、デンマーク競泳チームが同市を訪れていた。

交流会には、4 年生児童約 100 人が参加した。鍵盤ハーモニカで演奏するデンマーク国家が流れる中、選手 10 人とコーチ 6 人が両国の国旗が掲げられた体育館に入場。デンマークの人気キャラクター「ラスムスクルンプ」も児童らと一緒に手旗を振って拍手で迎えた。選手らが一人ずつ自己紹介した後、代表の児童がステージに上がり、スライドショーを使って学校を紹介。相撲大会の説明では、化粧まわしを着けて横綱の土俵入りを実演し、白い扇子を手に運動会などで行われる地域独自の踊り「霧の川中島」も披露した。

レクリエーションでは、英語でじゃんけんをして負けた人が勝った人の後ろに回って肩に手をついていく「じゃんけん列車」を行った。大柄な選手の後ろにつき、背負ってもらった児童の姿もあった。

その後、通訳を通して児童と選手が質疑応答を行った。「1 日にどのくらい泳いでいるのか」という児童からの質問には、選手側が 1 日のスケジュールを説明。「水泳が速くなるにはどうしたらいいか？」という質問には「一生懸命練習をしてください」と答えた。

最後は、団長役の児童に合わせて三三七拍子で選手らにエールを送り、折り紙で作った金メダルを渡した。クラスごとに記念撮影の後、選手らは児童一人一人とハイタッチを交わして退場した。

交流会は、7月8日に始まったデンマーク競泳チームの事前合宿に合わせて企画。昨年に続き2回目の開催となった。練習が休みの日だったこともあり、選手らも終始リラックスした様子で交流を楽しんだ。児童らも「一緒に遊べて楽しかった」「選手が皆、大きくてびっくりした」などと笑顔で振り返った。



デンマーク競泳ナショナルチームによる水泳教室

選手の泳ぎを中高生に披露 コーチの指導も

【調査ホストタウン】

長野県 長野市

【イベント開催日】

2019/7/13

【相手国・地域】

デンマーク

【イベント参加者】

県水泳連盟が選出した中高校生を中心としたジュニアスイマー20人

【競技】

競泳

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

デンマーク競泳ナショナルチームによる水泳教室「スイムクリニック」が 2019 年 7 月 13 日、長野運動公園総合運動場総合市民プール（アクアウィング）で行われた。長野市は 18 年 2 月、デンマークを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。同年の水泳ワールドカップ東京で同国の競泳ナショナルチームが事前合宿を行ったが、今回は、韓国・光州で開催される世界水泳の事前合宿で、デンマーク競泳チームが同市を訪れていた。水泳教室は昨年が続いて 2 回目の開催。チームは 8 日から合宿を行っており、その合間に地域との交流を兼ねて開いた。

当日は、デンマーク競泳ナショナルチームのコーチ 4 人が参加。県強化選手をはじめ、県水泳連盟が選出した中高校生を中心としたジュニアスイマー 20 人が指導を受けた。

水泳教室はまず、1 時間ほど練習を見学。リオデジャネイロオリンピック女子 50 メートル自由形・金メダリストのパーニル・ブルメ選手や、女子 200 メートル平泳ぎ・世界記録保持者のリッケ・メラー・ペデルセン選手、リオデジャネイロオリンピック男子 200 メートルバタフライ 6 位のビクトル・B・ブロマー選手らの泳ぎや練習の様子を熱心に見つめた。

その後、泳法ごとのグループに分かれて約 1 時間、コーチが指導。実際に泳ぐ姿を見せながら、フォームの修正や、練習方法についてアドバイスした。オリンピックの基準にプールの温度を合わせていたため 25 度ほどで低く、最初は寒そうにしていた生徒もいたが、徐々に慣れてくると普段の調子で泳げるようになった。通訳もいたが、ときには直接コーチから厳しい声が上がるなど、熱が入り、なかなかプールから上がれない生徒もいた。

指導が終わった後、19 年 5 月の「ジャパンオープン 2019」で長水路日本高校新記録を樹立した地球環境高（佐久市）3 年・近江ハリーさんと、デンマークの選手がタイムを競った。近江さんは力強い泳ぎで、選手にあとわずかのところまで迫る場面もあり、盛り上がった。最後は皆で記念撮影を行い、バッグやタオルにサインをもらう生徒の姿も見られた。



スリランカに陸上指導者派遣

スリランカ競技力向上支援の一環で

【調査ホストタウン】

岐阜県 羽島市

【イベント開催日】

2019/12/17

【相手国・地域】

スリランカ

【イベント参加者】

ナショナルチームのコーチを含む計 30 人のスリランカ人指導者

【競技】

陸上競技

【調査場所】

スリランカ民主社会主義共和国コロンボ／Sports Ministry Play Ground

【調査日】

2020/01/08

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックでスリランカのホストタウンを務める羽島市は 2019 年 12 月 17 日から同 22 日、同国のスポーツ競技力向上のために岐阜陸上競技協会名誉副会長の小倉新司さんらをスリランカへ派遣した。現地では陸上競技指導者トレーニングプログラムを実施し、ナショナルチームのコーチを含む計 30 人のスリランカ人指導者が参加した。

羽島市とスリランカの交流は 15 年以上前にさかのぼる。市民が中心となり、使わなくなった鍵盤ハーモニカや、役目を終えた消防自動車、救急自動車をスリランカに寄贈するボランティア活動を 2002 年から続けてきた。この交流が評価され、2017 年 7 月にスリランカのホストタウンとして認定。翌 2018 年には同国スポーツ大臣と、2019 年にはスリランカオリンピック組織委員会と東京五輪・パラリンピックに向けた合意書を締結し、東京オリンピック後に同市で行うスポーツ交流事業へのスリランカ選手団の参加やスリランカのスポーツ競技力向上を支援する内容が盛り込まれた。

競技力向上支援の一環で行われた今回の陸上指導者派遣は 2 回目。昨年に引き続き指導を担当する小倉さんは、走り幅跳び、4×100 メートルリレーの代表としてメキシコオリンピックに出場。走り幅跳びでは 4 度の日本選手権優勝を誇る選手で、岐阜県内の高校や大学で長年指導してきた豊富な経験を持つ。

18 日には短距離（100 メートル、200 メートル）とリレー、19 日は走り幅跳びと三段跳びのトレーニングプログラムを実施。両日共、午前中は昨年の参加者から出た質問を踏まえた内容の講義、午後からはスポーツ省に隣接する同国スポーツ省グラウンドで実技指導を行った。日本が誇るリレーのバトンパスや走り幅跳びの助走や踏切などを小倉さんが自ら実践して見せる と、参加者は日本の高い技術を吸収しようと食い入るように見つめ、次々と質問をぶつけていた。

参加した女性指導者は「練習の目的を理解できたので、今後は『この練習はこういうことに効果があるんだよ』と選手にうまく伝えることができる」と収穫を口にした。

小倉さんが指導する上で最も大切にしているのは「見る目」。その重要性を伝えるため、参加者を「トレーニングを行う組」「見る組」の 2 つのグループに分け、「今のトレーニングでは、どこを見ていたのか」を話し合い、見る目を養う時間も設けた。

小倉さんは「参加した指導者たちは日頃から行っている指導のレベルが高く、さらにレベルアップを図りたいと非常に熱心だった。スリランカには高い素質を持った原石がたくさんいる。競技環境を整え、正しい指導を行えば、さらに伸びていくはず」と言い、今後の活躍に期待を込める。

滞在中、政府関係機関を訪問。スリランカオリンピック組織委員会や在スリランカ大使館を訪れ、今後の継続的な交流についての意見交換なども行った。





ホストタウン相手国・スリランカ応援の機運醸成

ブース出展でセイロンティー試飲やサリー試着など

【調査ホストタウン】

岐阜県 羽島市

【イベント開催日】

2019/11/9

【相手国・地域】

スリランカ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/26

【補足情報】

羽島市は 2019 年 11 月 9、10 の両日に開催された「ぎふ羽島 駅前フェス」に、にホストタウン実行委員会ブースを出展し、同市のホストタウン相手国であるスリランカの文化を身近に感じられるイベントを展開した。ブースでは、世界 2 位の生産量を誇るスリランカの紅茶「セイロンティー」を無料提供するとともに、同国の民族衣装サリーの着付け体験を行った。

羽島市では、市民団体が中心となって消防自動車や救急車をスリランカに贈る交流事業を 10 年以上にわたって続けてきたことから、17 年 7 月に同国のホストタウンに登録された。19 年の駅前フェスでは、2 日間で約 950 杯のセイロンティーを提供し、約 30 人がサリーを試着。20 種類ほどのサリーから好きなデザインを選び、市の助成職員に着付けしてもらった後、用意された「スリランカ」「サリー着てみた」などのフォトプロップスを手に撮影を楽しむ姿が見られた。サリーを着用した市民からは「色がきれい」などの声が聞かれ、スリランカの文化を肌で感じていた。

イベントの開催に合わせて、スリランカ大使館のロシャン公使が同市を訪問。駅前フェス初日の 9 日にメインステージに登壇し、集まった市民にあいさつした。その後、岐阜市在住のスリランカ人、カンカーニゲ・サチンさんが同国の魅力や羽島市との交流の歴史を紹介。多くの市民が関心を向けた。

羽島市では、ホストタウン登録後、市内の小学校 4 年生、中学校 1 年生を対象に、スリランカ出身で岐阜市在住の英語講師、カンカーニゲ・エランガさんによる「国際理解を深める授業」も実施してきた。この授業では、写真や動画を使い、スリランカの食文化（カレー、紅茶など）をはじめ、国旗に込められた意味や、面積、人口、気候、世界遺産、学校の制度について学習しており、子どもたちのスリランカへの興味醸成や国際理解に一役買った。



スリランカの五輪組織委事務局長が来訪

交流事業や支援事業で市長と合意

【調査ホストタウン】

岐阜県 羽島市

【イベント開催日】

2019/8/23

【相手国・地域】

スリランカ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

羽島市役所、羽島市立桑原学園、防災ステーション、FUKUJU スポーツパーク、柔剣道場

【調査日】

2020/03/26

【補足情報】

スリランカオリンピック組織委員会のマクセル・デ・シルバ事務局長とチャンダナ・リヤネージ秘書官が 2019 年 8 月 23 日、羽島市役所を訪問し松井聡市長と会談した。同市では、市民団体が中心となって消防自動車や救急車をスリランカに贈る交流事業を 10 年以上にわたって続けてきたことから、17 年 7 月に同国のホストタウンに登録された。

会談は終始和やかなムードで進行。マクセル事務局長は羽島市のこれまでの支援に感謝を示すとともに東京オリンピック終了後に出場選手団の同市訪問を約束。スリランカ選手と羽島市内の小中学生がスポーツを通じた交流事業を同市内で行うことや、スリランカのスポーツ競技力向上のためにできる限り支援することについて協議し、合意書を締結した。

20 年 2 月 20 日には、スリランカオリンピック組織委のスレシュ・スブラマニウム会長が同市を訪問。オリンピック後の交流事業についての具体的な内容やスケジュールを協議した。スリランカ選手団を招いたホスピタリティーパーティーや小中学生との日本文化体験とスポーツ交流、市内名所への観光案内などを実施することで大筋合意を得た。

スレシュ会長は翌 21 日、英語教育に力を入れている小中一貫の義務教育学校「羽島市立桑原学園」を訪れ、9 年生（中学 3 年生）の英語の交流授業に参加した。13 人の生徒は羽島市や学校の魅力を英語で紹介。会長への質疑応答の時間には「スリランカで人気のスポーツは？」「東京五輪に出場する選手を教えてください」など積極的に質問し、スリランカへの理解を深めた。授業後は一緒に給食を囲み、さらに交流を図った。

さらにスレシュ会長は 22 日、テコンドーの NTC 競技別強化拠点「防災ステーション」や、野球場、テニスコートのある「FUKUJU スポーツパーク」、「柔剣道場」など市内のスポーツ施設を視察した。テニスの競技経験を持つスレシュ会長は、テニスコートやジムを利用する市民の姿を見て、「こうした施設は市内にどれくらいあるのか？」「市民は自由に利用できるのか？」などの質問を重ね、熱心に耳を傾けていた。

滞在を終えたスレシュ会長は「短い滞在だったが、羽島市の素晴らしいおもてなしに感謝する。私にとって忘れられない経験となった。滞在中は常にフレンドシップを感じることができた。これは東京オリンピック以降も見据えた将来に向けたプロジェクトになる」と継続的な交流に期待を込めた。



「浜松アスリートフェスティバル」に北澤豪さんら

ボッチャ、ブラインドサッカー体験通じパラスポーツを身近に

【調査ホストタウン】

静岡県 浜松市

【イベント開催日】

2019/11/3

【相手国・地域】

ブラジル

【イベント参加者】

親子連れを中心に約 1000 人

【競技】

【調査場所】

浜松ギャラリーモールソラモ

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

浜松市は 2019 年 11 月 3 日、浜松市ギャラリーモールソラモで「浜松アスリートフェスティバル 2019」を開催した。同市は 16 年 6 月、ブラジルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。このイベントは市民に東京パラリンピックで行われる競技を知ってもらうことやパラリンピックに向けて士気を高め盛り上げてほしいという目的で開催し、当日は親子連れを中心に約 1000 人が来場した。

本田技研工業サッカー部に在籍していたこともあり、浜松にゆかりがあることから、スペシャルゲストとして元サッカー日本代表の北澤豪さんを招待。北澤さんは一般社団法人日本障がい者サッカー連盟の会長も務めており、ブラインドサッカー（5 人制サッカー）の魅力を巧みなトークで紹介した。ブラインドサッカーは音の出るボールを使い、音と声だけでコミュニケーションを取って行うのが特徴。「ボールが見えていると思えるほど巧みにボールを操る姿に衝撃を受けた」と北澤さん。静岡初のブラインドサッカーチーム「FC コレチーボ静岡」の選手も参加し、実演と体験会を開催。アイマスクをして参加した人からは「ドリブルするだけでも、やってみたら思った以上に難しかった」という声が上がった。

また、陸上のカーリングとも呼ばれる「ボッチャ」の実演・体験会も行われた。「浜松ボッチャ倶楽部 COOL」所属で、第 20 回日本選手権大会 B3 クラスベスト 8 入りを果たした北澤和寿さんと、同チーム所属で、アジアユースパラ競技大会 BC2 クラスベスト 4 の伊藤彩水さんが参加。ボッチャとは、ジャックボールと呼ばれる白い目標球に、赤と青のボールをいかに近づけるかを競う競技で、競技方法や魅力を紹介するとともに実演も行った。「初めてボッチャを見た」といった声も聞かれ、小さな子どもでもできることから、親子で体験をする人もいた。

そのほか、試作部品や金型、治工具の設計製作などを行う市内の部品メーカー「橋本エンジニアリング」が開発した超軽量の車いすを展示。乗りやすさと軽さを追求し、さらに剛性がある同社の車いすは、車いすテニスの選手も実際に使っている。乗車を体験した児童からは「軽くてびっくりした。これなら選手も動きやすい」と驚きの声が聞かれた。

浜松市スポーツ振興課主任でブラジルホストタウン推進グループの一島弘明さんは「ボッチャやブラインドサッカーの実演や体験会を通じ、パラスポーツを身近に感じてもらえた。パラリンピックにも興味を持ってもらえれば」と期待を込める。



ブラジルのオリパラ選手団が事前交流合宿

2018 年受け入れ時の課題をブラッシュアップ

【調査ホストタウン】

静岡県 浜松市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ブラジル

【イベント参加者】

【競技】

車いすマラソン、パラ柔道、柔道、パラトライアスロン、ゴールボール

【調査場所】

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

ブラジル連邦共和国のオリンピック・パラリンピック選手団が 2019 年 7 月から 11 月にかけて、浜松市内で東京オリンピック・パラリンピックに向けた事前の交流合宿を行った。

市内の工場で働く日系ブラジル人が多く住んでいる背景もあり、ブラジルとの交流が盛んな浜松市は、16 年 6 月にブラジルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。17 年 6 月には COB（ブラジルオリンピック委員会）と、同年 8 月に CPB（ブラジルパラリンピック委員会）と覚書を締結し、18 年 7 月にはパラリンピックの全競技の合宿受け入れが決まった。

浜松市は、国籍や障害、性別などを問わず豊かな暮らしができるよう、UD（ユニバーサルデザイン）や心のバリアフリーへの取り組みを積極的に行ってきたことから、先導的共生社会ホストタウンに認定。他自治体の手本となる取り組みを目指し、積極的にパラリンピック選手団の受け入れも行う。

パラリンピック選手団の受け入れに先立ち、大分車いすマラソンに参加するブラジル選手の直前合宿を 18 年 11 月に実施。選手の体重管理のため、スポーツドリンクだけではなく、水の確保が重要であることや、レース用の車いすが思った以上に大きく、輸送の際、急きょトラックを手配した等の課題が浮上。これらをブラッシュアップし、19 年 7 月からの合宿に生かした。ほかにも、本国での環境に少しでも近づくよう、ホテルや給食事業者、ブラジル本国の料理店の元料理長などが集まり、料理研究会も開いている。

7 月 21 日～27 日には雄踏総合体育館でブラジルパラリンピック柔道選手団が、8 月 14 日～29 日と 11 月 17 日～20 日にはブラジルオリンピック柔道選手団が、それぞれ合宿を実施。7 月は 11 人、8 月は 54 人、11 月は 21 人が、それぞれ参加した。静岡県警や柔道クラブ、市内の高校生などが練習相手として参加し、1100 人を超える市民との交流があった。

8月9日～15日には、三ヶ日青年の家などでパラトライアスロン選手団（3人）が合宿を実施。北区三ヶ日町の「おもてなし実行委員会」が中心となり、町全体で選手団をサポートした。歓迎会や行動練習の警備で約 280 人の市民との交流も見られた。ほかにも、浜松学院大学などで 9月 21 日～26 日、ブラジルゴールボール女子選手団（9 人）が合宿を行った。

最終的なオリンピック受け入れ競技は 7 競技で最大 162 人、パラリンピック受け入れ競技は 19 競技で最大 397 人を予定する。ブラジルパラリンピック選手団のサポートをするサポートボランティア「**Torcida BRASIL**（トルシーダブラジル）」1000 人を募集したところ 1500 人を超える応募があった。

浜松市スポーツ振興課主任でブラジルホストタウン推進グループの一島弘明さんは「パラアスリートには大いなる力があり、私たちに夢や希望、感動を与えてくれる。今回のサポートボランティアなどを通じ、障害を持つ人に対する理解不足や勝手な思い込みを取り除いてくれるものと考ええる。この取り組みは共生社会の進化に向け、大きなステップになると確信している」と話す。





ホストタウンとしての取り組みを巡回展示で紹介

市内 12 カ所にパネルやモニター設置

【調査ホストタウン】

静岡県 浜松市

【イベント開催日】

2019/5/27

【相手国・地域】

ブラジル

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/10

【補足情報】

浜松市は、東京オリンピック・パラリンピックに向け、ブラジルホストタウンに関する取り組みの展示物を作成。浜松市がブラジルのホストタウンであることへの認知向上や、ホストタウンとしてどのような取り組みを行っているのかを知ってもらうことを目的に、2019年5月27日から、市内各所に展示ブース設け、巡回展示を行った。

展示ブースの中央には、浜松市が東京オリンピック・パラリンピックでブラジル代表のホストタウンであることを提示した大きなパネルを配置。ブラジルオリンピック委員会のジャガーをモチーフにしたキャラクター「ジンガ」の絵が描かれている。中央左にはモニターを設置し、CPB（ブラジル・パラリンピック委員会）のミザエル・コンハード会長のインタビュー動画を流している。ほかに4枚のポスターを掲示。浜松市の取り組みと今後の予定や、ゴールボールや水泳、陸上、5人制サッカー、カヌーなど、パラリンピック各種競技の選手受入れ計画図、車いすマラソン選手団交流合宿の様子や、オリンピック柔道選手団交流合宿の様子を掲載したポスターを掲出している。

展示ブースを設置したのは、雄踏総合体育館（西区）や The GATE HAMAMATSU（中区）などの市の施設、静岡文化芸術大学、静岡大学浜松キャンパスなどの大学、ショッピングモールのイオン志都呂店や市野店など、市民や学生が集う場所をメインに全12カ所。12月末からは、浜松市総合水泳場「ToBiO（トビオ）」（西区）で展示を行っており、20年3月末まで公開を予定している。同施設内では、立ち止まって見る施設利用者や展示ブース前に置かれた椅子に座って展示物を見る人も見受けられる。「この展示を見て初めてブラジルのホストタウンだということを知った」という市民もいた。

浜松市スポーツ振興課主任でブラジルホストタウン推進グループの一島弘明さんは「たくさんの市民に見てもらえるよう、多くの人を訪れる場所を選んで展示を巡回している。この展示を見て市民の皆さんに、ブラジルのホストタウンとして行っている浜松市の取り組みを知ってもらいたい」と話す



台北でポスター展、静岡の児童生徒が制作

商業複合施設 MAJI スクエアで

【調査ホストタウン】

静岡県 静岡市

【イベント開催日】

2019/12/14

【相手国・地域】

台湾

【イベント参加者】

大川小中学校児童・生徒（男 5、女 8 10 代）

静岡市副市長、台湾陸上協会理事長、日本台湾友好議員連盟代表（男 3 60 代） 台湾陸上選手（男 6、女 1 20～30 代）

【競技】

陸上競技

【調査場所】

MAJI スクエア

【調査日】

2019/12/14

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックに向け、台湾のホストタウンとして登録されている静岡市では、2017年から同市の小中学生が台湾陸上代表をテーマとしたポスターの制作活動を進めている。2019年12月、その活動で制作したポスターを展示する「ホストタウン魅力発信ポスター展」が台北市と静岡市で同時に開催され、12月14日に台北会場で行われたオープニングセレモニーに静岡市立大川小中学校の児童・生徒13人と同市の関係者が参加した。

ポスター制作プロジェクトを推進する静岡市観光交流文化局スポーツ交流課スポーツツーリズム推進係の望月さんによると、台北市でのポスター展は今回で2回目。前回は台北駅地下街で行ったが、交通拠点であるため足を止めてくれる市民が少なかった。そこで今回は家族連れでにぎわう花博公園内にある商業複合施設MAJIスクエアに場所を変え、展示会を行うこととなった。今年は公募により選ばれた静岡市立大川小中学校生徒がポスター制作を行うこととなり、生徒らは今年の夏に台湾陸上代表選手に取材を行い、選手たちも「体操のお兄さん」として生徒たちと交流を深めていた。

セレモニーはMAJIスクエア内に特設ステージを設置して行われ、台湾側からは中華民国陸上協会理事長葉政彦さん、秘書長王景成さん、副秘書長陳鴻雁さん、総監督孫念祖さん、静岡市でトレーニングを行った台湾代表陸上選手7人(陳傑選手、黃士峰選手、楊俊瀚選手、向俊賢選手、余嘉軒選手、楊隆翔選手、林家瑩選手)が、日本側からは、静岡市副市長小長谷重之さん、静岡市議会日台友好議員連盟代表鈴木和彦さん、静岡陸上競技協会会長北澤晴樹さん、大川小中学校の児童・生徒13人らが参加した。

小長谷副市長はスピーチで、「小中学生の目線で見た台湾選手の印象や、静岡の魅力を、ポスターを通して台湾の皆さんに伝え、このようなイベントを通して友好関係を深めていきたい」と話した。静岡市議会日台友好議員連盟代表の鈴木議員は「(このイベントの)翌日に開催される台北マラソンにも静岡から優秀な選手がたくさん参加する。子どもたちが日本と台湾の架け橋になってほしい」と期待を込めた。

セレモニーでは、ステージ上で生徒らがそれぞれ写真や地図を使って、静岡市の三保の松原から見える富士山の絶景や、桜エビやまぐろの水産物、ミカンやイチゴ、お茶の農作物、歴史的背景のある建物など静岡市の魅力を台湾の市民にアピールした。その後のポスター贈呈式では、各選手の前に担当した生徒らが並び、取材や交流を通して感じたことをポスターに表現したと発表した。

台湾代表の余嘉軒選手は「静岡は景色も良く設備もいい、このように恵まれた条件でまた合宿を行いたい」と話した。

大川小中学校生徒会長海野大地くんは「先生がこのプロジェクトに応募した。大川小中学校が選ばれたと聞いた時には、初めての海外交流ということもあり不安でいっぱいだった。しかし、夏からポスター制作に取り掛かり、半年の期間を費やしたが、アスリートとの交流の機会を与えてもらい、普通ではできない体験をさせてもらえて、今は応募してくれた先生に感謝の気持ちでいっぱい」と笑顔で語った。





台湾陸上代表チームが強化合宿

交流プログラム多彩に展開

【調査ホストタウン】

静岡県 静岡市

【イベント開催日】

2019/8/16

【相手国・地域】

台湾

【イベント参加者】

ミニ台湾まつり＝市民約 300 人

【競技】

陸上競技

【調査場所】

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

2019年 8月 16日から 9月 17日まで、台湾陸上代表チームの選手 22人とコーチ、スタッフ 23人の計 45人が静岡県静岡市で、東京オリンピックに向けた強化合宿を行った。

静岡マラソンと台北マラソンで、それぞれ選手を招待するスポーツ交流が土壌となり、16年 6月に台湾のホストタウンとなった同市。今回の台湾オリンピック陸上チームの合宿開催期間には、特に「子どもたちが海外を意識するきっかけにしたい」との思いから、多くの交流会が計画・実施された。

8月 24日には、静岡市役所静岡庁舎前の「葵スクエア」で「ミニ台湾まつり」を開催し、子どもから大人まで約 300人の市民が集まった。じゃんけん大会やビンゴ大会などで選手と市民が交流したほか、陸上競技をより知ってもらうために、「砲丸」「やり」などの陸上競技用の道具を展示した。市民からは「台湾を身近に感じた」「台湾のことを知るきっかけにもなった」との声が聞かれた。

台湾選手に日本の文化を知ってほしいと、9月 3日には鈴木学園中央調理製菓専門学校静岡校で「クッキング交流」を実施した。台湾選手 10人と同校の生徒 24人が参加し、ワサビ漬けやカツオの佃煮など静岡の地の食材を使ったおにぎりや豚汁を作った。「台湾では米を素手で握る感覚がなく、選手たちは戸惑ったようだ。しかし、同年代同士の交流でもあり、すぐに打ち解け、楽しみながら調理をしていた」と同市スポーツ交流課スポーツツーリズム推進係の横須賀直亮さんは話す。

市立大川小中学校の児童生徒は、台湾選手を応援するためのポスターを制作した。9月 4日には、子どもたちが直接選手取材した。言葉が通じない中、取材をすることで、子どもたちにとっては国際感覚を高める勉強になった。取材を受けた台湾選手たちは、戸惑いながらもうれしいようで、モチベーションアップにつながったという。その後、9月 15日には選手団が大川小中学校の地区運動会に参加。パン食い競争や玉入れなどの競技で交流した。12月 14日には、ポスターを制作した児童生徒 13人が台湾に出向き、完成したポスターを選手に贈呈した。

9月に行われた学校訪問では、小学校や高校など市内5校を選手団が訪れた。9日は服織（はとり）西小学校の全校児童86人、10日は葵小学校の特別支援学級の児童38人、11日は東海大学付属静岡翔洋高校1年生の1クラス30人、12日は常葉大学教育学部付属橘小学校の5年生55人、13日は広野こども園の年長14人が参加し、それぞれ歓迎セレモニーやリレーなどが行われた。また、選手が子どもたちに腕の振り方や足の上げ方など、早く走るコツを教える場面もあった。ほかにも、県内の大学生が市内の観光コースを考え選手団を案内する「静岡おまち散策交流会」も行われた。

これらの交流会を通じ、「参加した市民や子どもたちは、選手を身近に感じられ、台湾のことを知ることができたと感じている。オリンピックの成功はもちろんだが、今後も台湾と長く交流していくことが一番の目的」と横須賀さんは話す。





陸上競技を行う高校生を相互受け入れ

市内外の高校生 200 人、台湾選手との交流楽しむ

【調査ホストタウン】

静岡県 静岡市

【イベント開催日】

2019/10/11

【相手国・地域】

台湾

【イベント参加者】

市内外の高校生 200 人

【競技】

陸上競技

【調査場所】

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

台湾と静岡市は 2019 年 10 月から 11 月にかけて、青少年交流事業（高校生の相互派遣）として陸上競技を行う高校生の相互受け入れを行った。

「未来を担う高校生に国際感覚を育てるチャンスを与えたい」と台湾陸上協会からの提案を受け、相互受け入れが実現した。同年 10 月 11 日～15 日、静岡市に台湾選手団（高校生 18 人、コーチ 7 人）が訪問。それを受け、10 月 13 日には、西ヶ谷総合運動場で、静岡市と静岡市陸上競技協会が主催し「静岡市・台湾交流陸上大会」が開催された。市内外から約 200 人の高校生が参加し、台湾選手と共に交流を楽しんだ。大会終了後は、台湾に派遣が決まっていた静岡選手団が台湾選手団との食事会に参加。台湾の選手からは「日本に来たことで見聞が広がった」「日本の街がきれいだった」「次は迎える側なので歓迎したい」などの声が聞かれた。

同年 11 月 6 日～10 日、静岡選手団（高校生 20 人、コーチ 4 人）が、台湾の花蓮県を訪問した。8 日には、花蓮県立陸上競技場で行われた日本のインターハイに当たる「全国高校選手権」に参加。エキシビションマッチながら、台湾選手に交じってレースを行った。ほかにも、台湾の文化を知るきっかけにしたいと、神社や民俗資料館などを訪問した。派遣を終えた選手からは「自分たちが外国人という立場になることで言葉の壁を感じた」「台湾でははちまきを巻かないのを見て文化の違いを感じた」「異国に来て心細いという感覚が良く分かった。オリンピックでは海外から来た人たちに積極的に手を差し伸べたい」などの声が聞かれた。

同市スポーツ交流課スポーツツーリズム推進係の横須賀直亮さんは「青少年交流事業が行われたことで、静岡で大きな大会を開くきっかけにもなった。これらの交流を通じて、子どもたちもさまざまな経験ができたと同時に、台湾をより身近に感じられたと思う」と話す。



シンガポール卓球チームが事前合宿

地元中学校訪れ給食で日本食楽しむ 座談会も

【調査ホストタウン】

静岡県 島田市

【イベント開催日】

2019/6/16

【相手国・地域】

シンガポール

【イベント参加者】

ローズアリーナ卓球交流＝子ども約 100 人、川根中学校＝生徒約 90 人

【競技】

卓球

【調査場所】

ローズアリーナ、川根中学校

【調査日】

2020/02/07

【補足情報】

シンガポール共和国の卓球ナショナルチームの女子選手 10 人とスタッフ 5 人が 2019 年 6 月 16 日～30 日、静岡県島田市を訪問し、東京オリンピックに向けて第 1 回事前合宿を行った。島田市は 17 年 12 月、シンガポールを相手国とした 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、18 年 6 月には同国卓球協会と事前合宿受け入れに関する覚書を締結した。

シンガポールチームの練習場所は、スポーツ合宿で卓球選手を多く受け入れてきた市内のローズアリーナ。6 月 17 日～29 日の間、日曜を除き毎日練習が行われた。練習パートナーとして、駒澤大学男子、法政大学男子、静岡学園高校男子、デンソー女子の卓球部員が参加。練習の様子は一般公開され、多くの市民が訪れて、世界レベルの卓球のプレーを楽しんだ。ほかにも、子どもたちが選手とふれ合う時間を持てるよう、合宿中にいくつかのイベントも開かれた。

島田市を代表する花がバラであることから、シンガポールチームの選手らは合宿の記念として 6 月 20 日に「島田市ばらの丘公園」でバラを植樹。オリンピックにちなんで「聖火」という品種のバラ 8 本を植えた。スタッフや子どもたちと一緒に選手らもスコップを持ち、バラの苗に土をかけ、すくすくと育つようお願いを込めた。

同 22 日の 14 時～17 時には、同アリーナで小中高生との卓球交流を開催した。島田市を中心に、近隣の学校に呼び掛け、卓球をしている児童・生徒約 100 人が参加、世界で活躍する選手と実際に打ち合うという貴重な経験を積んだ。参加者からは「オリンピックが近づいていることを実感した」「レベルの高さに驚いた」という声も聞かれた。

同 26 日には、シンガポールの選手とスタッフの全員が市立川根中学校を訪問。約 90 人の生徒と一緒に給食を味わった。給食を食べながら生徒と選手が話す時間もあり、生徒らは「自分の英語がどのくらい通用するのか」という思いで選手と会話した。

5 時限目には体育館に全校生徒が集まり、選手が卓球の技を披露したほか、実際に数名の生徒とラリー形式でボールを打ち合った卓球を行った。生徒らからは「ボールが早い」「テレビで見るより迫力がある」などと驚きの声が多く聞かれた。最後は、生徒からの質疑応答を座談会形式で実施。「1 日の練習時間はどのくらいか」「なぜ卓球を始めたのか」などの質問以外に、「回転の掛け方を教えてほしい」といった技術的な質問も出た。

別の合宿候補地があったこともあり、合宿前は 20 年 7 月に行う最終合宿地をどこにするか迷っていたというシンガポール選手団。この合宿を通じ、設備が整っていることや、スタッフの対応に満足したことから、第 2 回合宿と最終合宿も同市で行う予定になった。



シンガポール卓球チームが中学生と交流

卓球部員に実践アドバイスも

【調査ホストタウン】

静岡県 島田市

【イベント開催日】

2020/2/19

【相手国・地域】

シンガポール

【イベント参加者】

生徒や教師約 100 人

【競技】

卓球

【調査場所】

島田市立北中学校

【調査日】

2020/02/19

【補足情報】

シンガポール共和国の卓球ナショナルチームの男子選手 3 人と女子選手 5 人、コーチやスポーツトレーナーなどスタッフ 8 人が 2020 年 2 月に来日し、東京オリンピックに向けて 2 月 12 日から 26 日まで、島田市で事前合宿を行った。同市は 17 年 7 月にモンゴルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同年 12 月にはシンガポールを相手に追加登録され、シンガポール卓球協会と事前合宿の実施について合意した。この合意に基づく合宿は 19 年 6 月に続き 2 回目。

2 月 19 日には、シンガポールの選手とスタッフの計 16 人が島田市立北中学校を訪問した。学校交流の内容は同校生徒会が中心となって考えたもので、生徒と学校給食を食べることと卓球交流が予定されていたが、新型コロナウイルスの影響を考慮し給食交流に関しては中止となった。

学校交流は同校体育館で実施。午後 1 時 15 分に選手らが入場し、約 100 人の生徒や教師に大きな拍手で迎えられた。あいさつと選手団の自己紹介の後、デモンストレーションとして選手たちが卓球の試技を披露。生徒たちからは「世界レベルの技術が素晴らしい」「ボールのスピードや回転、低さどれをとってもレベルが高すぎる」などの声が聞かれた。

その後、同校卓球部員 20 人ほどが約 20 分にわたり選手たちとボールを打ち合った。途中、選手やコーチが通訳を通じてアドバイスをしたり、手を取って教えたりする姿も見られた。終わった後の生徒からは「直接教えてもらえる貴重な経験。これからの練習に生かしたい」「幸せ。教えてもらった時の感覚が残っている」など喜びの声が多く聞かれた。最後のあいさつでは、フォン・ティエンウェイ選手が「先生や生徒たちに感謝の気持ちでいっぱい。交流会で一生懸命頑張る姿を見て、日本の卓球界が良い成績を収めていることを思い出した。生徒たちの積極的な態度が印象に残り、とても有意義な交流会だった」と締めくくった。

前回、今回と 2 回の合宿に参加しているハオ・アンリンコーチは「島田市長や市のスタッフ、ホテルの従業員など皆さんのおかげで良い環境が整っている。今回は 2 回目ということもあり、環境に慣れてきて、よりスムーズに練習ができて

いる。オリンピックでもいい成績を残したい」と話した。同じく 2 回続けて参加のユ・モンユ選手は「東京オリンピックが始まるまでに気候に慣れておきたい。この合宿で心身を強化したい」と力強く語った。

「新型コロナウイルス対策として、体温を測る、咳（せき）や鼻水等の自覚症状の確認など、選手団は 1 日 2 回の健康チェックを徹底している」と、オリンピック・パラリンピック推進室の加藤晃さん。「前回も食事の面で配慮をしたつもりだったが、選手はよりヘルシーなものを求めていることが分かった。そこで今回は、個々の嗜好（しこう）に合わせた食事を用意することを心掛けている」とも。



シンガポール卓球チームが中高生に技術指導

新型コロナウイルス感染対策で時間を短縮

【調査ホストタウン】

静岡県 島田市

【イベント開催日】

2020/2/22

【相手国・地域】

シンガポール

【イベント参加者】

10校から約 60人

【競技】

卓球

【調査場所】

島田市総合スポーツセンター ローズアリーナ メインアリーナ

【調査日】

2020/02/22

【補足情報】

島田市で事前合宿を行っているシンガポール共和国の卓球ナショナルチーム選手団が 2020 年 2 月 22 日、同市内の中高校生と卓球交流を行った。同市は 17 年 7 月にモンゴルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同年 12 月にはシンガポールを相手に追加登録され、シンガポール卓球協会と事前合宿の実施について合意した。この合意に基づく合宿は 19 年 6 月に続き 2 回目。

選手団 16 人に加え、今回はシンガポール卓球協会のエレン・リー・ソクフン会長も参加。中高生の卓球部員は、島田樟誠高校や島田工業高校、島田市立第一中学校など 10 校から約 60 人が集まった。開催場所は「島田市総合スポーツセンター ローズアリーナ」のメインアリーナ。新型コロナウイルス対策として、入場者全員に「選手と同様の健康チェックシートの記入」と「検温」を徹底した。前回の合宿の際に行った握手や選手との個別撮影は禁止し、前回の卓球交流は約 3 時間の開催だったが、今回は 1 時間半の開催にするなど情勢に配慮した形になった。

開会、選手紹介、交流内容の説明の後、シンガポール選手による技術披露が 10 分ほど行われた。生徒からは「足の動かし方や姿勢が違う」「見ていて参考になる」といった声が聞かれた。その後、選手と生徒による 5 ポイントマッチを実施。生徒からは「緊張して凡ミスもあったがサーブで点数を取れたのがうれしい」「スイングや動きに無駄がなく、勉強になった」「こうした経験はなかなかない。プロの選手との格の違いを実感した」「新たな課題も見つかったのでインターハイに向けて改善していきたい」など前向きな声が多く聞かれた。前回も参加した生徒からは「前は打ち合っただけだったが今回は試合形式でできて良かった」という声も上がった。

記念撮影では、エレン・リー・ソクフン会長の「シマダ」の掛け声で撮影。その後、生徒たちがラケットケースやノートなどにサインをもらうため長蛇の列を作った。途中、元シンガポール代表で現コーチでもあるガオ・ニン氏も参加し、サインをもらう生徒が集まった。最後の選手代表の感想では、ワン・シン・ル選手が「交流できてとてもうれしい。昨年と比べて距離が近くなった気がする。励ましとサポートに感謝して、皆さんと共に成長していきたい」と話した。

島田市文化資源活用課の太田直樹課長は「シンガポール選手団が交流に理解を示してくれており、積極的に参加してくれてとてもありがたい」と話す。オリンピック・パラリンピック推進室の加藤晃さんは「前回の交流会では選手の数に合わせて 8 台の卓球台を使ったが、選手が疲れてしまったこともあり、半分の 4 台に減らし 15 分ごとの交代制を取った。3 分ずつと時間で区切っていたのを今回はポイント制にしたことで回転も良くなり、結果生徒たちにも喜んでもらえた」と振り返った。



全小中学校で「ギリシャ給食デー」

ギリシャ大使も訪問、生徒と交流

【調査ホストタウン】

愛知県 稲沢市

【イベント開催日】

2019/6/4

【相手国・地域】

ギリシャ

【イベント参加者】

平和中学校＝343 人

【競技】

【調査場所】

稲沢市立平和中学校

【調査日】

2020/02/13

【補足情報】

稲沢市は 2019 年 6 月 4 日、市内の全小中学校でギリシャ料理を取り入れた給食を提供する「ギリシャ給食デー」を実施した。同市は 16 年 6 月にギリシャを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、今回の給食デーもホストタウン活動の一環として行われた。この日に合わせて、駐日ギリシャ共和国特命全権大使コンスタンティン・カキュシス夫妻とギリシャ大使館職員の青木恵子さんが市立平和中学校を訪問し、生徒と共に給食を味わった。

稲沢市は 1987 年、オリンピック発祥の地であるギリシャのオリンピア市と日本で唯一かつ世界で初めて姉妹都市連携を締結。以来、市内の神社で行われる奇祭「国府宮はだか祭」に 4 年に一度、駐日ギリシャ共和国特命全権大使を招待するなど、30 年以上の長きわたり友好を深めてきた。

今回の「ギリシャ給食デー」は、ホストタウンであることを広く市民に周知するために、「食という身近なところからギリシャへの関心を高めてほしい」と企画した。市長公室秘書広報課秘書友好グループの担当者は「ギリシャ料理はあまりなじみがないが、食を通してギリシャという国を感じてもらえたと思う。稲沢市とギリシャの関係をまだまだ知らない市民も多いので、『ギリシャの給食を食べてきたよ』と家庭で話をするところから、ギリシャに親しみを持ってもらうきっかけになれば」と期待する。

平和中学校では午前中、体育館でギリシャ大使館職員の青木さんが講演を行った。「ギリシャではどのような食べ物が好まれるのか」「どのような名前が多いのか」など親しみやすい切り口でギリシャの歴史や文化を紹介。「ギリシャを漢字一文字で表すと？」など時折クイズを交えた分かりやすい説明に、343 人の生徒は興味津々の様子で聞き入った。

講演後、大使夫妻は 3 年生の教室へ移動し生徒と給食を囲んだ。この日のメニューは、レモンの酸味が爽やかなギリシャの伝統的なスープ「エッグレモンスープ」や「グreekサラダ」、「トマト入りミンチカツ」、ホストタウンパートナーである明治より提供された「明治 THE GREEK YOGURT」。ギリシャで生産が盛

んなオリーブオイルやトマト、レモン、チーズを たっぷり使った料理が並んだ。
生徒たちは「おいしい、おいしい」と食べ、大使夫妻と笑顔で交流を楽しんだ。



ギリシャの舞踊団が公演

定員 500 人の会場がほぼ満席に

【調査ホストタウン】

愛知県 稲沢市

【イベント開催日】

2019/10/10

【相手国・地域】

ギリシャ

【イベント参加者】

定員 500 人の会場はほぼ満席に

【競技】

【調査場所】

名古屋文理大学文化フォーラム

【調査日】

2020/02/13

【補足情報】

日本とギリシャが修好通商航海条約を締結して 2019 年で 120 周年を迎えることを記念し、ギリシャの伝統舞踊団「リセウム・カヴァラ舞踊団」が 19 年 10 月に来日し、10 月 10 日に稲沢市文化会館で公演を行った。稲沢市は 1987 年、オリンピック発祥の地であるギリシャのオリンピア市と日本で唯一かつ世界で初めて姉妹都市連携を締結して以来、市内の神社で行われる奇祭「国府宮はだか祭」に 4 年に一度、駐日ギリシャ共和国特命全権大使を招待するなど、30 年以上の長きわたり友好を深めてきた。その縁をベースに 16 年 6 月、ギリシャを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

同舞踊団は 1945 年、ギリシャ北部の都市カヴァラで発足。国内外で多方面な活動を展開し続け、ヨーロッパ、アメリカ、アジアなどのフェスティバルで高い評価を得てきた。公演には多くの市民が関心を寄せ、定員 500 人の会場はほぼ満席になった。「事前に整理券を配った際には、ダンスサークル、愛好会などからの問い合わせも多かった」と市長公室秘書広報課秘書友好グループの担当者は話す。

18 時 30 分に開演した公演ではダンスに先立ち、駐日ギリシャ大使館の青木恵子さんがギリシャの文化や歴史などについてスライドを使いながら紹介。ギリシャへの関心が高まったところで、舞踊団の演舞がスタートした。

ダンサーたちは終始満面の笑顔で、手をつないだり肩を組んだりして、音楽に合わせて巧みにステップを踏んで円を描くように踊った。約 1 時間にわたり、さまざまなバリエーションのギリシャの伝統舞踊を披露し、観客を魅了した。

ダンサーが身にまとう衣装も見どころ。フスタネーラ（ギリシャの兵士が着用した伝統的な衣装で、プリーツの入った男性用のスカート）や、刺しゅうなどが施された色鮮やかな伝統衣装が観客の目を楽しませた。これらの衣装は全て代々受け継がれてきた貴重なものだという。

最後はダンサーの呼び掛けで観客も舞台へ上がった。コンスタンティン・カキ
ュシス駐日ギリシャ共和国特命全権大使や加藤錠司郎市長も一緒に輪になって踊
り、盛況のうちに幕を下ろした。公演後、舞踊団のメンバーは「一緒に躍れて楽
しかった」「来て良かった」と市民との交流に充実した表情を見せていた。



シンポジウム「稲沢とオリンピアと聖火リレー」 開催

オリンピアでの聖火リレーに派遣された当時の中学生も登壇

【調査ホストタウン】

愛知県 稲沢市

【イベント開催日】

2019/11/10

【相手国・地域】

ギリシャ

【イベント参加者】

学生や市民約 80 人

【競技】

【調査場所】

愛知文教女子短期大学

【調査日】

2020/02/13

【補足情報】

稲沢市は 2019 年 11 月 10 日、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業の一環として、「稲沢とオリンピアと聖火リレー！～魅力あふれるギリシャと私～」と題するシンポジウムを開催した。同市のホストタウンパートナーを務める愛知文教女子短期大学（稲沢市稲葉）の大学祭に合わせ、同大キャンパスを会場に行われ、約 80 人の学生や市民が聴講に訪れた。

オリンピックの聖火は、古代オリンピック発祥の地・オリンピア市にあるヘラ神殿跡で凹面鏡を使って太陽光を集めて採取される。採火した聖火は、約 1 週間のギリシャ国内での聖火リレーを経て、アテネ市で開催国に引き継がれる。

1987 年からオリンピア市と姉妹都市提携を結ぶ稲沢市は、長野冬季オリンピックとアテネからリオデジャネイロまでの夏季オリンピック 4 大会で、採火式後にオリンピア市を走る聖火ランナーとして市内の中学生を派遣してきた。6 大会目となる東京オリンピック・パラリンピックでもオリンピア市から招待を受けている。

約 1 時間半にわたって行われたシンポジウムでは、第 1 部として駐日ギリシャ大使館の青木恵子さんがギリシャの魅力について講義した。続く第 2 部では、加藤錠司郎稲沢市長が自らスライドを使って、稲沢市とギリシャの深い関係について語った。

最後は、リオデジャネイロオリンピックの際に聖火リレー中学生派遣事業に参加した 5 人の高校生が登壇し、クロストークで進行。司会者から応募したきっかけや実際に走った感想、現地での苦労話などを質問されると、リレーランナーたちは少し緊張しながらも、当時の貴重な経験を振り返った。2016 年当時は市議会の議長を務め、リオにも同行していた加藤市長も話に加わり、トークを盛り上げた。

シンポジウムの理解をより深めるため、ラウンジコーナーには稲沢市が所有するアトランタ、長野、アテネ、北京、ロンドン、リオデジャネイロオリンピックの歴代のトーチと、市内在住の大崎雅洋さんから借用した 1964 年の東京オリンピックとランナーの衣装を展示。多くの来場者が足を止めていた。



カナダ代表女子体操チームが来訪

東京五輪キャンプ地視察兼ね事前キャンプ

【調査ホストタウン】

三重県 四日市市

【イベント開催日】

2019/3/31

【相手国・地域】

カナダ

【イベント参加者】

交流会＝地元の子どもたちとその保護者ら約 100 人

【競技】

体操

【調査場所】

四日市市中央体育館

【調査日】

2020/02/14

【補足情報】

カナダの女子体操代表チームが 2019 年 3 月 31 日～4 月 4 日、四日市市中央体育館で事前キャンプを行った。同チームは、19 年 4 月 7 日に行われた「2019 体操ワールドカップ東京大会」に合わせてキャンプを実施。同大会で、Elsabeth Black（エリザベス・ブラック）選手が女子個人総合で銀メダルを獲得した。

同市は 16 年 10 月、カナダ体操協会と東京オリンピックに向けて日本の気候や時差に順応しコンディションを調整するための事前キャンプ実施に関する協定を締結。17 年 7 月には、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局より、カナダのホストタウンとして登録された。同チームは16年から毎年、同市を訪問している。

19 年 4 月 2 日には、カナダ体操協会 CEO で同チームコーチの Ian Moss（イアン・モス）さんや Elsabeth Black 選手らカナダ体操協会関係者 27 人が、森智広四日市市長を表敬訪問した。4 月 3 日には、中央体育館で同チームの練習を一般公開、選手との握手会や記念撮影会など市民との交流会が行われ、地元の子どもたちとその保護者ら約 100 人が参加した。同協会関係者は同市の伝統工芸品「日永（ひなが）うちわ」の絵付け体験に参加した。

地元の子どもたちは、マットの上でストレッチやバランス運動、逆立ちなど、選手たちと一緒に体を動かした。地元の体操クラブに所属する生徒からは「テレビで見ていた選手を間近で見ることができてよかった」「もっと練習してうまくなりたい」「カナダの国の選手の練習を見てとても参考になった」などの感想が寄せられた。

四日市市スポーツ・国体推進部国体推進課の職員は「カナダの体操選手を市民一丸となって応援したい。21 年開催の『三重とこわか国体・三重とこわか大会』に向けた機運醸成につながってほしい」と期待を寄せる。

今後、中央体育館は解体され、20 年 5 月には中央体育館に比べ約 1.7 倍の広さ、約 3000 人収容可能な観覧席などを設置した四日市市総合体育館が完成する。



全公立小学校で「カナダ給食の日」

サーモンフライやピースープ、メープルジャムなど

【調査ホストタウン】

三重県 四日市市

【イベント開催日】

2019/12/17

【相手国・地域】

カナダ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/14

【補足情報】

四日市市は 2019 年 12 月 17 日・18 日、全公立小学校 37 校の児童にカナダにちなんだ食材や料理を提供する「カナダ給食の日」を実施した。

同市は 16 年 10 月、カナダ体操協会と東京オリンピックに向けて日本の気候や時差に順応しコンディションを調整するための事前キャンプ実施に関する協定を締結。17 年 7 月には、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局より、カナダのホストタウンとして登録された。

「カナダ給食の日」は、東京オリンピック カナダ代表の体操チームの事前キャンプ地となっていることを受け、オリンピック・パラリンピックでカナダやカナダ体操チームをより身近に感じ、みんなで応援しようと、18 年から実施している。

「カナダ給食の日」のメニューには、サケの産地であるカナダをイメージできるように「サーモンフライ」、カナダの家庭料理として知られるエンドウ豆のスープ「ピースープ」、カナダの国旗にも描かれているカエデの葉＝メープルから「メープルジャム」などを取り入れた。

四日市市スポーツ・国体推進部国体推進課の職員は 17 日、大矢知興譲（おおやちこうじょう）小学校 4 年 3 組に出向き、給食時間に四日市市がカナダのホストタウンとなっていることや、同チームが事前キャンプを行うことなどを児童 34 人に説明した。児童からは「カナダのことを知っている」などの声が上がり、カナダや体操について理解を深めた。市の全小学校児童数は 1 万 5438 人（19 年 5 月 1 日現在）。



カナダ体操チーム応援缶バッジ製作

市のマスコット「こにゅうどうくん」をモチーフに

【調査ホストタウン】

三重県 四日市市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

カナダ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/14

【補足情報】

四日市市は 2019 年度、東京オリンピック・パラリンピックに参加するカナダを応援するため、同市のマスコットキャラクター「こにゅうどうくん」を用いた缶バッジ約 10 種類を製作した。

同市は 17 年 7 月、三重県初のホストタウンとしてカナダを相手国に登録。東京オリンピック・パラリンピックに参加するカナダと、スポーツ、文化、経済などで交流し、地域活性化につなげようとしている。カナダ応援バッジの制作もホストタウン広報活動の一環として実施した。

缶バッジは、1997 年の市制 100 周年記念に生まれた、人をびっくりさせるのが大好きな妖怪の男の子（お父さんは「大四日市まつり」の名物「大入道（おにゅうどう）」）のゆるキャラ「こにゅうどうくん」、ヘラジカやクマ、ビーバーなどカナダに生息する動物のイラストが描かれたもののほか、カナダの国旗、体操競技のあん馬をする「こにゅうどうくん」などが「CANADA&YOKKAICHI」の文字と共にデザインされている。計 1700 個を配布した。

同市は、「四日市こどもまつり」（19 年 5 月 12 日、四日市ドーム）、「くるべ古代歴史館 夏休みイベント」（19 年 8 月 7 日、9 日、くるべ古代歴史館）、「三重とこわか国体・三重とこわか大会開催 800 日前記念 みえのスポーツフォーラム 2019」（19 年 8 月 31 日、鈴鹿市民会館）、「カナダ料理教室」（19 年 11 月 21 日、なやプラザ）、「カナダ応援フェア」（19 年 11 月 23 日、24 日、ジャズドリーム長島）などのイベントで缶バッジなどを配布し PR 活動を展開した。また、四日市一番街商店街には 19 年 11 月 15 日から、「東京 2020 オリンピックカナダ体操チーム事前キャンプ開催！」の横断幕を設置。そのほか、ハンバーガーチェーン店などの店頭に掲示の協力を依頼した。

四日市市スポーツ・国体推進部国体推進課の職員は「四日市市がカナダのホストタウンであることが、じわじわと市民に知れ渡ってきている。市民一丸となって日本と共にカナダも応援し、オリンピック・パラリンピックを盛り上げたい」と話す。



スペイン ハンドボール女子代表が技術指導

青少年向けハンドボール教室

【調査ホストタウン】

滋賀県・彦根市

【イベント開催日】

2019/11/24

【相手国・地域】

スペイン

【イベント参加者】

彦根市ハンドボール協会所属の地元小学生チーム「Jr.レイカーズ」男女 60 名、彦根市翔西館高校と彦根東高校のハンドボール部男子生徒

【競技】

ハンドボール

【調査場所】

パナソニック株式会社アプライアンス社 彦根工場体育館

【調査日】

2019/11/24

【補足情報】

スペインから滋賀県彦根市に訪れている女子ハンドボールチームが、2019年11月24日、彦根市のパナソニックアプライアンス社彦根工場体育館で開催された青少年向けハンドボール教室に参加、地元の小学生や高校生と交流した。同チームは、熊本県で11月30日に開幕する「2019女子ハンドボール世界選手権大会」に向けて事前キャンプを行うために来日。この機会を生かし、交流イベントとして彦根市が企画・開催した。彦根市は2018年8月、スペインを相手国とした2020東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

午前中に行われた小学生の部には、彦根市ハンドボール協会所属の地元小学生チーム「Jr.レイカーズ」が参加。スペインチームの到着を前に、子どもたちは「こんにちは」「ありがとう」などスペイン語を練習した後、会場入りした代表選手を大きな拍手とともにスペイン国旗を振って歓迎した。

ヘッドコーチのカルロス・ビベルさんは「温かい歓迎をありがとう。今日は楽しみにしています」とあいさつ、子どもたちから彦根市キャラクター「ひこにゃん」のイラスト入りエコバッグが一人一人に手渡され、会場は和やかな雰囲気に包まれた。

男子、女子、低学年別に分かれて行われたハンドボール教室では、身振り手振りのジェスチャーを交えたにぎやかなレッスンが繰り広げられた。小学1年～6年の男女約60人が所属するレイカーズは、彦根市ハンドボール協会理事長でもある前川和三さんが立ち上げた。かつて市内の高校でハンドボール部顧問を務めていた経験から、子どもたちが楽しむことを第一とし、生涯にわたってスポーツに親しんでほしいと活動に力を入れており、この交流を楽しみにしていた。

父親の勧めで小学5年からハンドボールを始めたレイカーズのキャプテン・千嶋天梧さんは「シュートを決めるところが好き。将来はチームをまとめられる選手になりたい」とその魅力を話す。始めて半年という藤美礼さんは、初めて見る女子選手の印象を「背が高くて、やさしかった」と話し、「楽しかった」とほほ笑んだ。

交流後はスペインチームからチームジャージが贈られ、前川さんは「貴重な経験になった。これを機にますますハンドボールを広めたい。スペインチームの好成績を祈ります」とエールを送った。午後は彦根市翔西館高校と彦根東高校のハンドボール部男子生徒が交流。一緒にウォーミングアップを行った後、オフェンスの練習を中心にゲーム形式でレッスンが行われた。

主催した彦根市の市長直轄組織シティプロモーション推進課の疋田元伯課長は「海外のナショナルチームの受け入れや交流会は初めてでノウハウが無く、コミュニケーション面も心配だったが問題なく交流でき、スポーツの力は素晴らしいと感じた。選手の皆さんもお疲れの中、協力してくれてありがたかった」と喜んだ。

「スペイン・ホストタウン展」を開催

ブースでスペイン ハンドボールチームを PR

【調査ホストタウン】

滋賀県・彦根市

【イベント開催日】

2019/11/1

【相手国・地域】

スペイン

【イベント参加者】

103 人（ステージイベント）

【競技】

ハンドボール

【調査場所】

ビバシティ彦根

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

彦根市は 2019 年 11 月 1 日から 4 日まで、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン PR イベント「アミーゴス！スペイン・ホストタウン展」をビバシティ彦根（彦根市竹ヶ鼻町）で開催した。同市は 18 年 8 月、スペインを相手国としたホストタウンに登録。同年 9 月には王立スペインハンドボール連盟と東京オリンピックの事前合宿とスポーツ交流の実施に関する協定書を締結した。

このイベントでは、ホストタウン PR ブースを設置し、ハンドボール・スペイン代表の試合写真や成績、スペイン代表のユニホームを展示。スペイン代表のユニホームを着用した同市のキャラクター「ひこにゃん」のグッズを配布した。

同市シティプロモーション推進課の北村双葉さんは「彦根市は中学、高校でのハンドボールが盛んな地域。大人にも経験者も多く、『子どものころにハンドボールをしていた』と懐かしんでいる市民もいた。ヨーロッパの強豪スペイン代表のユニホームを着て写真を撮影する親子連れもいて、皆さんに楽しんでもらえて良かった」と話す。

彦根城の世界遺産登録を目指す彦根市は、1985 年に旧市街とローマ水道橋が世界遺産に登録されたスペイン・セゴビア市と交流があり、イベントではセゴビア市の紹介ブースも設けられた。ローマ水道橋、アルカサル城、大聖堂などの観光地をパネルで紹介。セゴビア市長からは「彦根城が世界遺産に登録されることを願っている」とコメントが寄せられた。

東京オリンピック・パラリンピックの PR ブースでは、大会イメージ映像やマスコットデビュー映像を上映し、大会のパンフレットを配布。マスコット「ミライトワ」と「ソメイティ」のパネルコーナーでは、多くの来場者が写真撮影を楽しんだ。

11 月 3 日に開催されたステージイベントには、合計 103 人が来場。フラメンコショーでは滋賀県立大学（彦根市八坂町）に通うスペインからの留学生が華麗な踊

りを披露した。ほかにもスペインやセゴビア市、ハンドボールのルールなどに関するクイズ大会が行われ、家族連れを中心ににぎわった。

彦根市では今後、ハンドボール・スペイン代表の事前合宿や試合のパブリックビューイングなどが予定されている。



カウントダウンイベント「しが★スポフェス」開催

ユニホーム着用の「ひこにゃん」に大きな歓声

【調査ホストタウン】

滋賀県・彦根市

【イベント開催日】

2019/11/9

【相手国・地域】

スペイン

【イベント参加者】

ストラックアウト参加者=360 人

【競技】

【調査場所】

イオンモール草津

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックのカウントダウンイベント「スポーツで滋賀を元気に！みんなでつくろう『健康しが』しが★スポフェスティバル」が 2019 年 11 月 9、10 の両日、イオンモール草津（草津市新浜町）で開催された。主催はホストタウン滋賀交流推進実行委員会。同委員会は滋賀県と東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された大津市（相手国デンマーク）、米原市（同ニュージーランド）、守山市（同トルコ）、彦根市（同スペイン）、甲賀市（同シンガポール）で構成されている。

9 日の開催記念セレモニーには滋賀県と各市のホストタウン交流事業担当者らが出席。彦根市のマスコットキャラクター「ひこにゃん」がスペイン・ハンドボールチームのユニホームを着用して登場すると大きな歓声が沸き起こった。ステージでは湖南市出身で滋賀スポーツ大使を務めるボクシング元 WBC 世界バンタム級王者の山中慎介さんによるトークショーやダブルタッチのパフォーマンス、バスケットボール 3×3 の「NINJA AIRS」によるデモンストレーションとトークショー、ご当地キャラクターとの撮影会などが行われた。

同施設内には、彦根市出身の桐生祥秀選手が 100 メートル走で出した記録「9.98 秒」にチャレンジするブース、スポーツウエルネス吹き矢やパターゴルフを体験するコーナーのほか、ホストタウン各市のブースが設置され、多くの人を楽しんだ。

ハンドボールが盛んでハンドボールの強豪国・スペインのホストタウンに登録されている彦根市は、「ハンドボールでストラックアウト」のブースを出展した。スペインやハンドボール競技の紹介、ハンドボールの初心者球と公式球の展示のほか、9 マスの的を目標けてハンドボールを投げ、縦横斜めの 1 列をそろえてビンゴを目指す「ストラックアウト」を実施。親子連れを中心に多くの人でにぎわい、9 日 150 人、10 日は 210 人がストラックアウトを体験した。ビンゴを達成した参加者には、スペイン語と日本語で「行け！スペイン」と書かれた「ひこにゃん」のラバーバンドを進呈した。

彦根市シティプロモーション推進課の北村双葉さんは「公式球を片手で持ってみようとして、大きさと硬さに驚いている子どももいた。多くの人にハンドボールを体験してもらえて良かった」と振り返った。



オーストラリア文化演奏会を開催

オーストラリア文化演奏会 他民族国家の音楽 ギターの奏

【調査ホストタウン】

京都府 京丹後市

【イベント開催日】

2020/2/15

【相手国・地域】

オーストラリア

【イベント参加者】

市民など 70 人

【競技】

【調査場所】

アグリセンター大宮

【調査日】

2020/03/06

【補足情報】

京都府京丹後市は 2020 年 2 月 15 日、市内のホールにオーストラリア出身のギタリストでありタブラ演奏者でもあるグレン・ニービスさんを招いて、「オーストラリア文化演奏会 多民族国家の音楽 ギターの奏」と題し演奏会を開催した。

この演奏会は、同市が取り組んでいる東京オリンピック・パラリンピックに向けたホストタウン事業の一環。

演奏したグレンさんは、オーストラリアのヴィクトリアン・カレッジ・オブ・アーツで即興音楽の学士号を取得。ギターの演奏指導を行いながら、オーストラリア国内だけでなく、さまざまな国でライブ活動を行っている。グレンさんが演奏したもう一つの楽器タブラはインドの伝統楽器で、太鼓の一種。正確には高音の「タブラ」と低音の「バヤン」という二種類の太鼓を組み合わせた楽器だが、演奏は難しく、「世界一難しい打楽器」と言われている。

この日は、世界各地で感染が拡大している新型コロナウイルスの影響も懸念されたが、市民ら 70 人近くが参加した。およそ 1 時間半行われた演奏会は、グレンさんのギターとタブラの演奏の合間に、オーストラリアの文化などをスライドで紹介する形で進んだ。演奏を聴いた人たちは、回収されたアンケートで「珍しい楽器の音色を聞いた」「オーストラリアを知ることができた。演奏も新鮮だった」「写真、トーク、演奏でオーストラリアに親しみが持てた」「映像メディアではなく、人からのお話しでの紹介は心が温まるものがある」などと回答し、異文化交流を楽しんだ。

同市とオーストラリアとは、ホストタウン事業の登録当初から、ジュニアチームのミニキャンプ、調査視察の受け入れなども行い、様々な交流を続けている。



トップセールスでスペイン代表の事前合宿を誘致

久美浜カヌー競技場など環境面が決め手に

【調査ホストタウン】

京都府 京丹後市

【イベント開催日】

2019/11/13

【相手国・地域】

スペイン、ポルトガル

【イベント参加者】

【競技】

カヌー

【調査場所】

京丹後市教育委員会

【調査日】

2020/03/06

【補足情報】

京都府京丹後市は 2019 年 11 月 13 日、東京オリンピック・パラリンピックに出場するスペインのカヌー代表チーム（スプリント）が事前合宿地を同市に決定したと発表した。

同市は、京都府内ではいち早くホストタウン事業に参加。市内に久美浜カヌー競技場があることから、カヌーを中心にした国際交流を目指している。ホストタウン事業では最初、地元の高校と縁がある韓国を始め、オーストラリアを相手に登録され、ミニキャンプや視察などを受け入れ、五輪前に代表チームの事前合宿を誘致するために活動していた。ところが、両国代表から事前合宿地に選ばれず、一時は「（同市で）事前合宿する代表チームはないかもしれない」（同市担当者）と落胆していた。

風向きが変わったきっかけは、18 年 10 月にスペインカヌー連盟の代表団が視察に訪れたことだった。スペイン側が久美浜カヌー競技場を見て、美しい自然環境、オリンピック会場に似た海水コースであることなどに好感触を持った。同年 12 月、スペインカヌー連盟のホセ・ペルリナ会長（当時）が視察に訪れた際には三崎政直市長が出迎え、直接アピールした。その後も同市は「スペイン代表誘致」で調整を続け、19 年 9 月には東京で開催されたオリンピックのテストイベントで来日していたスペイン代表チームに三崎市長が再びトップセールスを行った。練習に集中できる静かな環境を求めるスペイン代表に対し、三崎市長は「全面的にバックアップする」ことを約束。こうした誘致活動が実り、スペイン代表チームの事前合宿が実現した。

スペイン代表チームは、カヌー競技の盛んなヨーロッパの中でも強豪の一つで、前回のリオ大会でも金メダル 2 つ、銅メダル 1 つを獲得した。事前合宿は、オリンピック開催直前の 20 年 7 月下旬の 7 日間、久美浜湾カヌー競技場を中心に、選手とスタッフ約 15 人で行われる予定。

同市では、「スペイン代表チームの選手の皆さんが最高の結果を出せるよう、関係団体や地域と一緒に万全のサポート体制を整えるとともに、これを契機に、スペインとの交流を深めていけるよう取り組んでいく」としている。

また、スペイン代表のコーチからの紹介で、世界選手権などで合同トレーニングの実績があるポルトガル代表チームも同市で事前合宿を行うことを決めた。三崎市長は「合宿を契機に、ポルトガルとの交流を深め、互いの友好関係を築きたい」とのコメントを出した。これを機に、同市はポルトガルもホストタウンの相手国として追加登録の申請を行った。



「スペイン文化講演会」を開催

フラメンコの魅力をトップダンサーが語る

【調査ホストタウン】

京都府 京丹後市

【イベント開催日】

2019/10/3

【相手国・地域】

スペイン

【イベント参加者】

160人

【競技】

【調査場所】

アグリセンター大宮

【調査日】

2020/03/06

【補足情報】

京丹後市は 2019 年 10 月 3 日、フラメンコダンサーの SIROCO（シロコ）さんを招き、フラメンコの魅力を語る「スペイン文化講演会」を開催した。講演会は司会者との対談形式で進行し、市民ら 160 人が耳を傾けた。

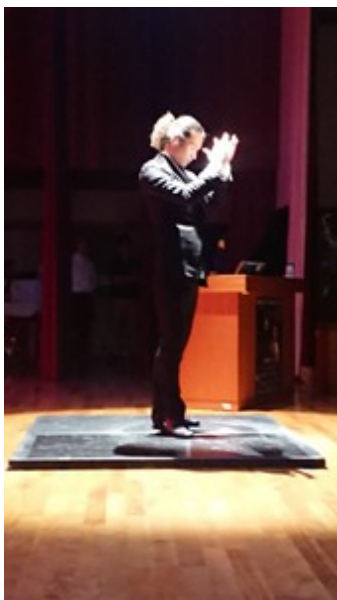
スペイン語で「熱風」を意味する言葉を芸名とする SIROCOさんは京都市出身。中学生の時にダンスに出会い、当時はストリートダンスに夢中になったという。高校卒業のころに、モダンダンスやコンテンポラリーダンスなどにも挑戦した。その後、カルロス・サウラ監督の映画「フラメンコ」を見て、当時スペインのスーパースターだったフラメンコダンサーのホアキン・コルテスに衝撃を受けたという。「とりあえず（スペインに）渡ろう」と思い、スペイン語も話せないまま留学した。最初はフラメンコの原型が生まれたという洞窟に住み、世間と断絶して練習を積んだりした。しかし、そこで盗難に遭って身の危険を感じ、洞窟生活を断念したことなど、ユニークな体験を披露した。

SIROCOさんは現在、関西を中心に活動しているが、スペインのフラメンコ界でその実力は認められている。17年にはスペイン南部のロンダで開催された国際コンクールで、日本人男性初の優勝を果たした。また、スペインのフラメンコ界を代表するファン・デ・ファン氏と共演するなど国内外を問わず幅広く活動している。

最後に司会者が「フラメンコを踊ってみせていただけないか」と頼むと、音楽なしの即興で情熱的なフラメンコを披露し、観客を沸かせた。

講演後のアンケートでは、「踊っていただけたと思わなかったのが、踊りが見られて嬉しく、感動した」「SIROCOさんが体験してこられたことを SIROCOさん自身の言葉で語られていたので、少しずつ体に入ってくるような語り口がとても良かった」「スペインに触れる機会がないので興味を持ってきました。とても良い素敵な時間でした」などと高評価だった。

同市のホストタウン相手国として、スペインは 19 年 8 月に追加登録された。また、同年 11 月にカヌー・スペイン代表チームの事前合宿が決定した。



「パラスポーツフェスタ」開催

200 人がパラスポーツを体感

【調査ホストタウン】

大阪府 池田市

【イベント開催日】

2020/1/26

【相手国・地域】

ロシア、フランス

【イベント参加者】

約 200 人

【競技】

【調査場所】

池田市立五月山体育館

【調査日】

2020/01/26

【補足情報】

大阪府池田市の五月山体育館で 2020 年 1 月 26 日、「第 4 回 池田市パラスポーツフェスタ」が開催され、大人・子ども合わせて約 200 人が「パラスポーツ」を楽しんだ。池田市は 19 年 12 月、2020 東京パラリンピックの共生社会ホストタウンとして登録された。また、東京パラリンピックに出場するフランスの車いすラグビーチームが事前キャンプ地とすることが決まっている。

池田市では生涯スポーツ、市民スポーツの振興を図る中、障害の有無にかかわらず楽しめるパラスポーツの実践に取り組んでいる。17 年からは毎年 2 月上旬に「パラスポーツフェスタ」を開催しており、今回が 4 回目。過去 3 回は池田市総合スポーツセンターで開催したが、今回はより広い五月山体育館を会場に選んだ。

同市がフランスの「車いすラグビー」チームのホストタウンとなっていることから、イベントの冒頭、車いすラグビーのデモンストレーションが行われた。競技用車いすのスピード感や、車いす同士がタックルでぶつかる様子を見た参加者からは驚きの声が上がった。

座ったままでできる準備体操を参加者全員で行った後、車いすラグビー、座ったままで行うバレーボール「シッティングバレーボール」、ボールを投げたり転がしたりして、目標球と呼ばれるボールに近づける「ボッチャ」の 3 種目をサーキット形式で楽しんだ。元阪神タイガースの八木裕さんも参加、車いすラグビーのコーナーで参加者を見守るなどした。

同市在住の中学 1 年の女子は「小 4 から車いすを使ったパラスポーツを体験していて、これまで 10 回ほど、車いすバスケットボール、車いすラグビーを経験した」と言い、慣れた手つきで競技用の車いすを操作し、車いすラグビーを楽しんでいた。同市では、小中学校を巡回してパラスポーツ体験会も開いており、今年度は小学校 2 校、中学校 2 校で行った。

同市教育委員会生涯学習推進課の武田克彦さんは「これまでで最も参加者が多く、パラスポーツの認知度が高まっていると感じる。オリンピック・パラリンピック後もパラスポーツの取り組みは続けていきたい」と話す。5月17日には5回目のパラスポーツフェスタも予定されている。



ロシア大使館付属学校に通う子どもたちと交流

民族衣装に身を包みロシア文化を紹介

【調査ホストタウン】

大阪府 池田市

【イベント開催日】

2019/4/25

【相手国・地域】

ロシア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

池田市立池田小学校

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

東京のロシア大使館付属学校に通う児童 19 人と教師 3 人が 2019 年 4 月 25 日～27 日の 2 泊 3 日の日程で大阪府池田市を訪れ、市立池田小学校などで交流した。

交流事業は、同市が東京オリンピック・パラリンピックのロシア男子バレーボールのホストタウンに登録されたことにちなんで行われた。4 月 25 日、ロシア大使館所有の大型バスで東京からやって来た一行は市役所で出迎えを受けた後、ホストファミリーの家で宿泊するなどした。19 人中、12 人の子どもたちが 2 人ずつホストファミリー 6 家族の家にホームステイし、残りの 7 人は豊中市の在大阪ロシア連邦総領事館に滞在した。

翌 26 日は、池田小学校で児童との交流イベントが行われた。3 限目と 4 限目は、ロシア大使館付属学校の児童 19 人が 6 年生の 5 クラスに分かれ、交流授業と音楽などの通常授業に参加した。交流授業では、教室に設置された電子黒板を活用し、同小の児童が池田市を紹介したり、ロシアについての質問をしたりした。

給食をはさみ、午後は体育館で池田小の 5・6 年生の児童との交流イベントを行った。民族衣装に身を包んだロシア人の子どもたちは音楽や踊りでロシア文化を紹介したほか、ロシア大使館付属学校について紹介するなどした。最後には、子どもたち全員で「ロンドン橋落ちた」に似たロシアの遊びも体験した。

ロシア人の子どもたちはその後、同市内にあるカップヌードルミュージアム大阪池田でカップヌードル作りを体験し、再びホストファミリーの家に宿泊するなどした。

最終日の 27 日には、在大阪ロシア連邦総領事館でホストファミリーらも参加して交流パーティーが行われた。ロシア人の子どもたちによる音楽と踊り、大使館アンサンブルによるコンサート、池田市を中心に活動する北摂チアリーディング

クラブ「DEARS（ディアーズ）」によるチアリーディング演技、宣真高校吹奏楽部による合奏など、両国の音楽、文化を披露し合った。最後は参加者全員が日本語で「ふるさと」を歌い、交流事業を締めくくった。

同市には、オリンピックに出場する直前のロシア男子バレーボールチームのメンバーが 20 年 7 月 17 日～21 日、滞在を予定しており、同市教育委員会生涯学習推進課の武田克彦さんはエキシビションマッチの開催を働き掛けているところだった。



「スポーツフェスタ（インドア）」開催

ロス五輪・銅メダリストの外村康二さんが準備体操指導

【調査ホストタウン】

大阪府 池田市

【イベント開催日】

2019/11/17

【相手国・地域】

ロシア、フランス

【イベント参加者】

未就学児 16 人を含む 136 人

【競技】

【調査場所】

五月山体育館

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

池田市は 2019 年 11 月 17 日、市立五月山体育館で「池田市スポーツフェスタ 2019（インドア）」を開催した。イベントは、多種目スポーツを気軽に楽しむことを目的に、市内在住・在学の小学生を対象に企画。野球、ボクシング、ダンス、アメリカンフットボール・フラッグフットボールの 4 種目を、各分野の第一人者の指導によりサーキット形式で体験するもので、未就学児 16 人を含む 136 人が参加した。

イベントの冒頭では準備運動が行われ、ロサンゼルスオリンピック体操男子銅メダリストの外村康二さんが指導した。立って行う体操だけでなく、座ったままの体操など、さまざまな体操を行った。外村さんは「子どもたちに楽しんでもらうことを一番に考えて、いつも指導している。特に準備体操はイベントの導入部分なので、無理なくおっくうだとか面倒臭いと感じることがないように、必ず変化のある運動を一つか二つ入れるようにしている」と話す。

外村さんは厳しく教えるのではなく、分かりやすくなごやかに参加者に指導する。「大人や障害のある方への指導も基本的には同じだが、個々の違いもあることから、『あまり意識せず、苦しくなったらやめていいですよ』と声を掛けながら、無理をしないよう逃げ道を作っている」と指導のポイントを説明する。

池田みどりスポーツ財団の職員としても活動する外村さんは、その後、4 種目の体験時間帯には各エリアを巡回、自らもスポーツを楽しんだ。「イベントを通じて、普段やらない、できないスポーツを経験し、『運動して楽しかった』と感じてもらい、自分に合った種目や好きなスポーツを見つけ、習慣化してもらえたらいいなと期待している」と締めくくった。

イベントを企画した同市教育委員会生涯学習推進課の武田克彦さんは「これまでの取り組みを通じて、池田市民と、ロシアやフランスのスポーツ選手とのつながりができた。オリンピック以降も、池田市のスポーツ振興に取り組んでいきたい」と話す。



「オリ・パラふれあいイベント 2019」開催

元サッカー日本代表の加地亮さん、森岡茂さんが対談

【調査ホストタウン】

大阪府 箕面市

【イベント開催日】

2019/12/14

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

「サッカーTOP アスリート対談」には小学生とその親を中心に約 150 人が参加

【競技】

【調査場所】

第二総合運動場・体育館

【調査日】

2019/12/14

【補足情報】

オリンピックやワールドカップに出場した元日本代表のアスリートを招き、子どもたちをはじめとした市民と触れ合う「オリ・パラふれあいイベント 2019 in 箕面」が 2019 年 12 月 14 日、大阪府箕面市の第二総合運動場・体育館で開催された。

箕面市は東京オリンピック・パラリンピックに向け、2017 年 7 月にニュージーランド柔道のホストタウンに登録された。これまでニュージーランドの市民を招いた伝統芸能「カパ・ハカ」のステージイベント（2018 年 10 月）や、同市に事前合宿に訪れたニュージーランドの柔道ナショナルチームとの交流イベント（2019 年 10 月）を行い、2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けた機運を高めてきた。今回のイベントはその 3 回目となる。

「サッカーTOP アスリート対談」には、小学生とその親を中心に約 150 人が参加。共にガンバ大阪の OB で、ワールドカップ・ドイツ大会に出場した加地亮さんと、アトランタ五輪出場の森岡茂さんが、「ピッチの上で国歌が流れるのを聞いた時は鳥肌が立った」（加地さん）、「チームメイトは全員、我が強かった。代表に選ばれるのはそういう選手たちだ」（森岡さん）などと、世界を舞台に戦った感想を話した。

質問コーナーでは、サッカーを習っている子どもたちが具体的な上達法を中心に質問した。「ドリブルがうまくなりたい」という質問には、加地さんが実際にボールを使いながら「自分の足の近くに常にボールを置くこと」と説明。「シュートがうまくなりたい」子どもには、小学 6 年生の時に 1 年間で 200 得点を決めたという森岡さんが「シュートを打つ前にキーパーをよく見て、キーパーのいない方に打つこと」とアドバイスした。

「ディフェンスがうまくなりたい」と質問し、加地さんから「大事なのは気持ち。絶対に負けないこと」とアドバイスをもらった箕面市の小学 3 年生の男の子は、「緊張したけど、今後のプレーに役立つと思った」と感想を話した。

イベントではその後、体育館をサッカーコートに見立て、「子どもサッカー教室」を開催。加地さんと森岡さんがリフティングやボール回し、ロングキックなどのデモンストレーションを披露した後、グループに分かれ、パス回しやミニゲームなどを行った。サッカー教室には、約 70 人の小学生が参加。男の子が多いが、女の子も数多く見受けられた。そのほか、トランポリン体験、ブラインドサッカー体験などが開催された。



ニュージーランド柔道チームと交流イベント

ニュージーランドの遊び体験や技の掛け方体感など

【調査ホストタウン】

大阪府 箕面市

【イベント開催日】

2019/10/5

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

市民約 150 人

【競技】

柔道

【調査場所】

第一総合運動場・武道館

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

箕面市は 2019 年 10 月 5 日、東京オリンピックに向け大阪府内で 2 週間にわたって合宿していたニュージーランドの柔道ナショナルチームとの交流イベントを、同市第一総合運動場・武道館で行った。同年 8 月に東京で開催された世界柔道選手権東京大会 100 キロ級に出場したジェーソン・カスター選手ら、オリンピックへの出場が見込まれる選手を含む 14 人（男性選手 6 人、女性選手 6 人、コーチ 2 人）が参加し、約 150 人の市民と交流した。

同市では、東京オリンピック・パラリンピックでニュージーランドを相手国としたホストタウンに登録されたことから、大会本番に向け機運を高める取り組みを進めている。18 年 10 月には、ニュージーランドの市民を招いて伝統芸能「カパ・ハカ」のステージイベントを開催しており、今回は 2 回目のイベントと位置付ける。

今回のイベントは、小学生を対象にニュージーランドの遊びを体験する「一緒に遊ぼう」と、全年齢を対象に柔道の技の掛け方を学ぶ「世界の柔道を体感」の 2 部構成で行った。

「一緒に遊ぼう」には、事前申し込み 29 人、当日申し込み 14 人の計 43 人の小学生が参加した。低学年と高学年に分かれ、「こおり鬼」「ハンカチ落とし」に似たニュージーランドの遊びを体験、子どもたちは飽きることなく、選手らと 1 時間楽しんだ。同市では小学 1 年生から学校で英語を学んでいることから、子どもたちが選手に英語で「好きな食べ物は何ですか？」などとコミュニケーションを取る場面も見られた。

「世界の柔道を体感」には約 60 人の市民が参加した。まず各選手がそれぞれの得意技を披露、世界の舞台で戦う選手の迫力を体験。その後、参加者が選手相手に技を掛ける体験をした。今まで柔道に触れたことがない人たちも、身近に柔道を感じることができたという。選手への質問コーナーも設け、「得意技は何ですか？」など 10 人以上の子どもたちが質問した。

武道館のロビーには、東京オリンピック・パラリンピックの PR ブースも設置。参加者が自由に写真を撮影できるようにした。桜の木に見立てたボードに、選手への応援メッセージを桜の花びらを模した紙に書いてはり付けてもらう企画も実施。合宿最終日に選手に手渡した。同市ではオリンピック後にも、実際に出場した選手を招いたイベントを実施したいと考えている。



「オリ・パラふれあいイベント 2020」は中止に

新型コロナ感染予防で開催断念

【調査ホストタウン自治体】

大阪府 箕面市

【イベント開催日】

2020/3/15

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

サントリー箕面トレーニングセンター体育館

【調査日】

2020/03/16

【補足情報】

箕面市は、2020年3月15日に開催を予定していた「オリ・パラふれあいイベント 2020 in 箕面」を中止した。このイベントは、元オリンピック日本代表選手らを招き、バレーボールやボッチャを通じ、子どもたちをはじめとした市民と触れ合う企画だったが、新型コロナウイルス感染症の広がりを受け開催を断念した。

イベントは、同市のサントリー箕面トレーニングセンター体育館を会場にする予定だった。Vリーグに所属する男子バレーボールチーム「サントリーサンバーズ」監督で、1992年のバルセロナオリンピック、2008年の北京オリンピックに出場した荻野正二さん、同チームコーチで、北京オリンピックに出場した山村宏太さん、同チーム選手の喜入祥充（きいれよしみつ）さん、鳥飼亜斗夢（とりかいあとむ）さんをゲストに迎え、市内在住・在学の小中学生を対象に「子どもバレーボール教室」を開催するほか、パラリンピック正式競技種目「ボッチャ」選手で、19年日本選手権ベスト4の吉見成生さんと一緒に、市内在住・在職・在学の年長児～大人が参加できる「ふれあいボッチャ教室」などを計画していた。

イベント実施に向け、同市担当者は19年11月ごろから準備を進め、次世代を担う子どもを主体とした企画を組み立てていた。市内中学校のバレーボール部に声を掛けるなどし、「子どもバレーボール教室」にはイベント中止を決めた2月下旬の段階で定員の半数程度が埋まっていたという。「ふれあいボッチャ教室」「ボッチャ体験コーナー」には、障害のある人にも参加してもらおうと、役所内の別部門とも連動して声掛けを行うところだった。

同市担当者の中川裕美さんは「残念ながらイベントは中止となったが、オリンピックに向けて盛り上げていきたい。早くコロナウイルスが収束してほしい」と話す。同市が東京オリンピック・パラリンピックにおけるニュージーランド柔道競技のホストタウンであることから、同市の多文化交流センターを会場に、「パブリックビューイングも開催したい」と意気込む。

ウガンダ・モンゴルの選手らが市長を表敬訪問

KIX 泉州国際マラソン出場で来日

【調査ホストタウン】

大阪府 泉佐野市

【イベント開催日】

2020/2/14

【相手国・地域】

ウガンダ、モンゴル

【イベント参加者】

【競技】

マラソン

【調査場所】

泉佐野市役所

【調査日】

2020/02/14

【補足情報】

KIX 泉州国際マラソンに出場するウガンダ共和国の選手 2 人とモンゴル国代表のコーチ 2 人、選手 6 人、友好提携都市のモンゴル国トゥブ県の選手 1 人が 2020 年 2 月 14 日、泉佐野市長を表敬訪問した。同市は 16 年 12 月にウガンダを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、17 年 7 月にはモンゴルを相手国に追加登録された。ホストタウン交流事業の一環として、KIX 泉州国際マラソンに両国から選手を招待し、市民の応援機運を高める企画を進めていた。

同マラソン大会は、泉佐野市を含む泉州地域の 9 市 4 町、「関西エアポート」「池田泉州銀行」などで構成する「泉州ツーリズムビューロー」が主催。スポーツツーリズムを通じた交流人口の増加を図り、関西国際空港の利用を促進すると共に、地域資源を生かしたスポーツの振興で泉州地域の活性化を図ることを目的に、今年で 27 回目の開催を迎えた。

泉佐野市は関西国際空港を有する市として国際都市を目指し、海外都市と積極的に友好関係を築いている。同市とウガンダ共和国は、市内のタオル業者が同国グル市産のオーガニックコットンを製品化したことをきっかけに友好交流を始め、ホストタウン登録につながった。モンゴル国とは、1997 年に市立泉佐野病院の移転時に旧病院で使っていたベッド等を寄贈したことから交流が始まり、同国トゥブ県と友好都市となったことから同国のホストタウンとなった。ウガンダ共和国のランナー受け入れ、モンゴル国代表合宿の受け入れはともに今年で 3 回目。モンゴル国トゥブ県の友好都市ランナー受け入れは今年で 7 回目となる。

表敬訪問では、千代松泉佐野市長が「大会ではたくさんの市民とふれ合い、泉佐野市の良さを知ってもらいたい。大会での活躍と滞在が有意義なものになるよう願っている。前回大会のように泉佐野勢での上位独占を期待している」とあいさつし、泉佐野市のタペストリーと記念品を一人一人に手渡し選手を激励した。

ウガンダ共和国のキベツ選手は「日本は今回で 2 回目。日本が大好き。招待いただきありがとう。大会当日はベストを尽くす」とあいさつした。

モンゴル国代表チームのオユントヤ・コーチは「モンゴルは冬場に練習ができないので、合宿を受け入れてもらえて感謝している。この合宿中も記録が伸びてきている」と笑顔を見せた。「日本の食事はおいしいし、気候も走るのにちょうど良い。今回も選手一同頑張るので、ぜひ応援をお願いします」とも語った。

選手らはあいさつ後、各国からの記念品を千代松市長に手渡した。市長らは、各選手にベストタイムや現在のコンディション、大会での目標タイムなどを尋ね、終始和やかなムードで歓談した。



「泉州国際マラソン」レセプションにウガンダ選手ら

19年総合優勝のビャムバジャブ選手も笑顔に

【調査ホストタウン】

大阪府 泉佐野市

【イベント開催日】

2020/2/15

【相手国・地域】

ウガンダ、モンゴル

【イベント参加者】

【競技】

マラソン

【調査場所】

ホテル日航関西空港

【調査日】

2020/02/15

【補足情報】

KIX 泉州国際マラソンに出場するウガンダ共和国の選手 2 人とモンゴル国代表のコーチ 2 人、選手 6 人、友好提携都市のモンゴル国トゥブ県の選手 1 人が 2020 年 2 月 15 日、泉佐野市のホテル日航関西空港で行われた「第 27 回 KIX 泉州国際マラソン 開会式・レセプション」に出席した。泉佐野市は 16 年 12 月にウガンダを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、17 年 7 月にはモンゴルを相手国に追加登録された。ホストタウン交流事業の一環として、KIX 泉州国際マラソンに両国から選手を招待し、市民の応援機運を高める企画を進めていた。

同マラソン大会は、浜寺公園（堺市西区）をスタートし、りんくう公園（泉佐野市りんくう往来北）までの 42.195 キロを走るフルマラソンの部と、同じく浜寺公園から岸和田城（岸和田市岸城町）までを走るチャレンジランの部が同時に行われる。

レセプションには姉妹・友好都市からの招待選手や協賛企業関係者らが出席。同大会を主催する「KIX 泉州ツーリズムビューロー」副理事長も務める阪口伸六高石市長の開会宣言で始まり、同理事長の永藤英機堺市長が「関西国際空港の開港をきっかけとして始まった大会。選手を応援したい気持ちでここまで大会を運営してきた。エントリーは海外から外国人ランナーが 200 人以上、国内からは 6000 人。泉州は南大阪の中でも海に近い地域で、食べ物や海、温泉など誇るものがたくさんある。選手には存分に楽しんでもらいたい」とあいさつした。

続いて、大阪ガス陸上競技部の細川勇介選手が「日本と世界を結ぶ泉州の地で令和時代初開催となる大会を最後まで駆け抜けることを誓う」と力強く宣誓。姉妹・友好都市の選手紹介では泉佐野市の招待選手であるウガンダ共和国の選手 2 人とモンゴル国代表の選手 6 人、モンゴル国トゥブ県の選手 1 人に加え、アメリカやカナダ、和歌山県田辺市などから参加の選手が壇上に上がり、高石市の姉妹都市であるアメリカ・ロミタ市のルーダ選手が代表してあいさつした。

選手らは通訳を通してあいさつの内容を聞き、泉佐野市の関係者らと歓談した。乾杯の後は巻きずしやカレーなどの食事を楽しみ、地元和太鼓クラブの演奏に耳を傾けるなど、レース前のひとときを過ごした。

前年の同大会で総合優勝したモンゴル国のビャムバジャブ選手は「昨年より早いタイムでの連覇を目指している。これまでに多くの国でマラソンをしてきたが、泉佐野市がホストタウンとなり受け入れてくれて皆さんが優しく接してくれるのでうれしい。以前に食べておいしかったラーメンを食べることも楽しみ」と笑顔で話した。



マラソン出場のモンゴル人選手らが園児と交流

園恒例の持久走に伴走、園児からエールも

【調査ホストタウン】

大阪府 泉佐野市

【イベント開催日】

2020/2/18

【相手国・地域】

モンゴル

【イベント参加者】

【競技】

マラソン

【調査場所】

末広公園グラウンド

【調査日】

2020/02/18

【補足情報】

KIX 泉州国際マラソンに出場したモンゴル国代表の選手 6 人とコーチ 2 人が 2020 年 2 月 18 日、泉佐野市の末広公園のグラウンドで同市内にある安松幼稚園の年長組園児約 70 人と交流した。泉佐野市は 16 年 12 月にウガンダを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、17 年 7 月にはモンゴルを相手国に追加登録された。ホストタウン交流事業の一環として、KIX 泉州国際マラソンに両国から選手を招待し、市民の応援機運を高める企画を進めていた。

同園は 1949 年創立の私立幼稚園で「情緒教育と最後までやり抜く力」を教育目標に掲げている。末広公園グラウンドの外周約 630 メートルを 12～13 周走る持久走は毎年恒例で、年長組園児が年に 12 回ほど公園を訪れて走っているという。

交流会では安井俊明理事長が「KIX 泉州国際マラソンにも出場したモンゴルの選手が来てくれた」とあいさつし、市自治振興課の高垣秀夫さんが 6 人の選手を紹介。ヒシグサイハン選手を「一昨日の KIX 泉州国際マラソンで、女性で優勝し、これで 3 連覇になった」と紹介すると園児と保護者らから大きな歓声と拍手が起こった。園児からはモンゴル語で「頑張れ」を意味する「ヒチューゲレ」の掛け声を交えたエールが送られた。

準備体操の後、持久走がスタート。園児らはそれぞれのペースで走り、モンゴルの選手は間隔を開けて園児らに寄り添うように走り、およそ 12 周、約 40 分間のランを楽しんだ。走りながら中は選手と手をつなぐ子や、転んでしまったところに起こしてもらおう子どもの姿も見られた。応援する保護者の中には手作りしたモンゴルと日本の国旗の手旗を振る姿も見られ、地域住民らを含む観戦者は全員がゴールするまで声援を送った。

同園教諭の松浪佐恵さんは「普段から走っているので園児らの様子はいつもと変わらないが、選手が来てくれたことでうれしそう」と子どもたちを見つめた。

会の最後には園児らが整列して歌を披露。続いて安井理事長が「オリンピックに向けて頑張る。なせば成る」と選手らを激励すると、園児らも声を合わせて「なせば成る、なさねば成らぬ何事も」と上杉鷹山の言葉でエールを送った。

KIX 泉州国際マラソンで 3 年連続の女子総合優勝を果たしたヒングサイハン選手は「子どもたちがびっくりするくらいの速さだったので、すごいと思った。それぞれに走り方があり、泣いても走る子や先頭を引っ張るような子もいて個性が見えた。モンゴルでは小さい子どもが長い距離を走ることはないので驚いた」と目を見張った。同マラソンで男子総合 2 位だったオロンバヤル選手は「マラソンは雨が降って大変だったが自己ベストを更新できたので良かった。今日も子どもたちと楽しく走れて満足」と笑顔を見せた。

会が終わると園児と選手は笑顔で抱き合ったり、握手をしたりして別れを惜しんだ。





ネパール パラリンピック水泳代表チーム、小学校を訪問

児童が選手をおもてなし、一緒に給食やゲームも

【調査ホストタウン】

兵庫県 神戸市

【イベント開催日】

2020/1/30

【相手国・地域】

ネパール

【イベント参加者】

5年生児童 58人

【競技】

パラ水泳

【調査場所】

神戸市立美賀多台小学校

【調査日】

2020/01/30

【補足情報】

ネパールから神戸市にトレーニング合宿で訪れている同国パラリンピック水泳代表チームが 2020 年 1 月 30 日、市立美賀多台小学校を訪問した。同市は 17 年 12 月、ネパールを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同国パラ水泳代表チームは 20 年 1 月 29 日から 2 月 2 日までの日程で、同市北区の総合福祉ゾーン「しあわせの村」の施設を使って合宿中だった。

同校では前年度、5 年生が総合的な学習でネパール パラリンピック水泳代表チームの選手との交流を初めて実施。2 回目となる今回は今年度の 5 年生 58 人が参加し、2 時間目から 4 時間目に合宿で来日したネパール パラリンピック水泳連盟のサロジ・シュレスタ会長をはじめ、競泳女子のバワナ・アディカリ選手（22、腕に損傷）、競泳男子のディパク・タマン選手（25、脊椎損傷・車いす使用）、ハルカ・マン・ガルティ選手（15、両腕欠損）と交流した。

ラグビー・ワールドカップで日本人観客が試合国の国歌を歌い応援したことになり、体育館に集まった児童全員がネパール国歌を斉唱して選手団を迎えた。交流会では児童が 10 グループに分かれ、それぞれが観光、気候、交通、家のつくり、祭り、食、生活、祝日、学校、スポーツについてのネパールと日本の違いを調べ、映像資料を使って発表。アニメーションなどを駆使し、英語を交えながら発表したことで、選手団も楽しそうに聞いていた。

調べきれなかったネパールの情報については選手団に質問。選手らはネパールの現状などを例にしながら児童に分かりやすく説明した。逆に生徒から神戸の印象について聞かれたディパク・タマン選手は「神戸はとてもきれいな街」と笑顔で答えた。

発表後には、全員が参加できるゲーム「じゃんけん列車」を行った。「障害のある方と遊べるように児童が考えた」と藤坂裕子校長。参加者には笑顔が見られ、終始和やかな雰囲気だった。最後に児童から選手団に寄せ書きを贈呈。1995（平成 7）年に発生した阪神・淡路大震災後に臼井真さんが神戸復興を願い作詞・作曲した楽曲「しあわせ運べるように」を、同じく地震の被災地でもあるネパールの復興を願い披露した。児童代表が「今日は僕たちのためにすてきな時

間を作ってくださいありがとうございました。パラリンピック、頑張ってください」と締めくくった。

同行した身体障害者水泳指導などの資格を持つ日本身体障がい者水泳連盟競技技術委員・酒井コーチは「身長差があるように、みんな違いはある。それがたまたま『両腕がない』『車いすである』というだけなのに、障害があると何かができないという風に考えてしまう。私たちは何かができないという引き算で考えるのではなく、何ができるかで考えて活動している。そういうポジティブさを今回のことから学んでほしい」と児童にメッセージを送った。

昼食は 5 年 1 組・2 組の教室で、選手団が児童と一緒に給食を試食。この日のメニューは、「タコ飯」「ワカサギの唐揚げ」「もち麦麺」「牛乳」で、教師から料理についての説明も行われた。バワナ・アディカリ選手は「ネパールではあまりタコを食べないので、タコ飯は少し残してしまった」と話していた。

15 年の地震による甚大な被害からの復興途上にあるネパールに対し、同じ地震被災地である神戸市が神戸市社会福祉協議会、こうべ市民福祉振興協会、日本身体障がい者水泳連盟と連携し、スポーツ分野の復興支援として事前合宿の受け入れを行い、17 年から東京パラリンピック出場に向けたサポートを行っている。





ネパール パラリンピック水泳代表チームが公開練習

日本人コーチが指導

【調査ホストタウン】

兵庫県 神戸市

【イベント開催日】

2020/2/1

【相手国・地域】

ネパール

【イベント参加者】

【競技】

パラ水泳

【調査場所】

総合福祉ゾーン「しあわせの村」

【調査日】

2020/02/01

【補足情報】

ネパールから神戸市にトレーニング合宿で訪れている同国パラリンピック水泳代表チームが 2020 年 2 月 1 日、同市北区にある総合福祉ゾーン「しあわせの村」内温水プールで公開練習を行った。同市は 17 年 12 月、ネパールを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、20 年 1 月 29 日から 2 月 2 日までの日程で同国パラ水泳代表チームの合宿を受け入れていた。

今回の合宿で来日したのは、ネパール パラリンピック水泳連盟のサロジ・シュレスタ会長をはじめ、競泳女子のバワナ・アディカリ選手（22、腕に損傷）、競泳男子のディパク・タマン選手（25、脊椎損傷・車いす使用）、ハルカ・マン・ガルティ選手（15、両腕欠損）。一行はユニバーサルデザインを取り入れた同施設に 4 泊 5 日滞在し、身体障害者水泳指導などの資格を持つ日本身体障がい者水泳連盟競技技術委員・酒井正人コーチの指導の下、プールでのトレーニングを行った。

障害状況、泳力、本国での練習環境などの把握と合宿の目的確認のため、初日に選手へヒアリングを行ったという酒井コーチ。「各選手の得意種目と希望種目を中心に長所と改善点を指摘しながら自主練習を主体とした指導を行っている」と話す。会話は主に英語で行われた。

公開練習は、朝食後から温水プール営業時間までの約 1 時間に実施。この日は兵庫県立いなみ野特別支援学校教諭の町田幸太郎さんがネパール語の通訳も兼ねてトレーニングのサポートを行った。ストレッチを中心としたドライトレーニングから始まり、持久力、瞬発力を高めるインターバルトレーニング、スタート、ターンの練習など、各自の泳法上の課題を繰り返し練習した。

酒井コーチは「飲み込みが早く、初日の練習から 3 選手とも日々タイムを縮めている。まだまだ伸びると思う」とエールを送った。

15年の地震による甚大な被害からの復興途上にあるネパールに対し、同じ地震被災地である神戸市が神戸市社会福祉協議会、こうべ市民福祉振興協会、日本身体障がい者水泳連盟と連携し、スポーツ分野の復興支援として事前合宿の受け入れを行い、17年より東京パラリンピック出場に向けたサポートを行っている。



ネパール パラ水泳代表チーム、子どもたちと交流

水泳クラブの子どもから応援メッセージ

【調査ホストタウン】

兵庫県 神戸市

【イベント開催日】

2020/2/1

【相手国・地域】

ネパール

【イベント参加者】

スイミングクラブ「フレンズクラブ」の子どもたち 17人

【競技】

パラ水泳

【調査場所】

神戸市立ポートアイランドスポーツセンター

【調査日】

2020/02/01

【補足情報】

ネパールから神戸市にトレーニング合宿で訪れているネパールパラリンピック水泳代表チームが 2020 年 2 月 1 日、神戸市立ポートアイランドスポーツセンターで地元のスイミングクラブ「フレンズクラブ」の子どもたちと交流を行った。

「フレンズクラブ」は、今回のトレーニング合宿でコーチを務める身体障害者水泳指導などの資格を持つ日本身体障がい者水泳連盟競技技術委員・酒井正人さんが 1979 年に社会教育活動の一環として設立した子ども対象の水泳サークル。人づくりを目的に、水泳を通して心身の健全な育成を目指している。原則として祝日を除く毎週土曜に同所のほか、神戸常盤アリーナ（兵庫県立文化体育館）、神戸松蔭中学校・高等学校などの室内プールで活動している。

今回の合宿で来日したネパールパラリンピック水泳連盟のサロジ・シュレスタ会長をはじめ、競泳女子のバワナ・アディカリ選手（22、腕に損傷）、競泳男子のディパク・タマン選手（25、脊椎損傷・車いす使用）、ハルカ・マン・ガルティ選手（15、両腕欠損）はこの日、観光船「ファンタジー号」での神戸港遊覧、神戸ポートタワーの見学などを行った後、午後 1 時時に同施設へ到着。練習は同サークルと合同ではなく、隣同士のレーンでそれぞれ別に行った。

この日は兵庫県立いなみ野特別支援学校・教諭の町田幸太郎さんがネパール語の通訳も兼ねてトレーニングをサポート。ストレッチを中心としたドライトレーニングから始まり、持久力、瞬発力を高めるインターバルトレーニング、スタート、ターンの練習など、各自の泳法上の課題を繰り返し練習していた。練習の最初と最後で行った記録計測では、3 選手ともタイムを更新。ハルカ・マン・ガルティ選手は 10 秒近くタイムを縮め、周囲を驚かせた。

公開練習後、2 階ロビーで同クラブの子どもたち 17 人との交流会が行われた。子どもたちの前でサロジ・シュレスタ会長をはじめ、選手たちが自己紹介し、ネパールで交わされるあいさつ「ナマステ」を子どもたちと交わした。サロジ・シュレスタ会長は「フレンズクラブの皆さんとは 2 年前にも交流させていただいた。再会でできてとてもうれしい。子どもたちが一生懸命練習している姿を見せてもらい感動した。日本の指導風景を見学できていい勉強になった」と話す。

交流の最後に同サークルから選手にサプライズでプレゼントを贈呈。同サークルが昨年 40 周年を迎えたことを記念して作られたタオルなどが贈られた。「僕たちは週 1 回、プールで練習を行い、それぞれの目標に向かって頑張っていきます。選手の皆さんもパラリンピックに向けて練習を頑張ってください。応援しています」と同サークルを代表して、男児がメッセージを送った。

15 年の地震による甚大な被害からの復興途上にあるネパールに対し、同じ地震被災地である神戸市が神戸市社会福祉協議会、こうべ市民福祉振興協会、日本身体障がい者水泳連盟と連携し、スポーツ分野の復興支援として事前合宿の受け入れを行い、17 年より東京パラリンピック出場に向けたサポートを行っている。

今回は神戸市内で 1 月 29 日～2 月 2 日、ネパールパラリンピック水泳代表チームが東京パラリンピックに向けたトレーニング合宿を行った。





ビーチバレー佐伯美香さん、中学校でオリンピック教室

バレー体験と座学で目標設定の大切さ伝える

【調査ホストタウン】

奈良市・奈良県

【イベント開催日】

2020/2/12

【相手国・地域】

オーストラリア

【イベント参加者】

奈良市立平城西中学校 2年 1組 32人

【競技】

【調査場所】

奈良市立平城西中学校

【調査日】

2020/02/12

【補足情報】

奈良市立平城西中学校で2月12日、バレーボールとビーチバレーボールのオリンピック佐伯美香さんを講師に迎え、2年1組32人を対象にした「オリンピック教室」が開かれた。奈良市は16年6月、オーストラリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同国の女子サッカー代表の事前キャンプ等の受け入れ活動を進めるとともに、日本人オリンピック・パラリンピアンを招いた講演会やスポーツ教室を通じて、市民レベルでの機運醸成を図ってきた。

同中学校でのオリンピック教室もその一環で、講師の佐伯さんは1時限目に体育館で生徒と元気なあいさつを交わした後、準備体操やバレーボールに慣れる運動をしてから、パス練習などを実施した。同校にバレーボール部が無いこともあり、生徒らは最初苦戦したが、佐伯さんのアドバイスを受け、コツをつかむことができた。

その後、5～6人のグループに分かれて円になり、ボールを落とさないようにオーバーパスやアンダーパスで2分間、パス回しの回数を競うゲームに取り組んだ。生徒は目標回数をチームで設定し、クリアするために何をすればいいか話し合いを繰り返して挑戦した。「高いパスをして次の人がつなげやすいボールを送る」「声を掛け合う」などのアイデアを出し合い徐々に回数を増やしていった。集中して取り組む様子が見られ、目標を達成するとチームに笑顔があふれた。

2時限目は教室に移動し、佐伯さんは映像資料も使いながらオリンピックとしての経験や人生で岐路に立った時の思いを生徒に伝えた。さらに、「エクセレンス」「リスペクト」「他者への敬意」といったオリンピックバリューをベースに、生徒自身の夢をかなえるために必要なことを、グループワークで考え、その内容を発表し合った。

参加した生徒からは「説明が詳しく分かりやすくて楽しかった」「目標を設定して取り組む大切さを学べた」「部活動で大きな目標は考えていたが、それを達成するために小さな目標を立てるのが必要だと気付いた」などの声が聞かれた。

見学した保護者らは「子どもたちが楽しそうに取り組んでいるのが何より良かった」「オリンピックとの触れ合いは、これからの人生において貴重な学びになる」「私たち親もオリンピックから何か学ぶものがあるのではないかと思い見学に来た」と言い、最後まで熱心に見守った。

学年副主任の尾崎太玄教諭は「いろいろな人との関わりやさまざまな経験を通じて、積極性や臨機応変に動ける力を身に付けてほしいと思い、この企画に応募した。体を思いきり動かす場面では、普段表情が少ない生徒にも笑顔が見られた」と振り返る。

佐伯さんは「どの生徒も伝えたことを一生懸命聞いて行動に移したり、真剣に取り組んだりする姿勢が見られて良かった。バレーボールの経験や技術だけではなく、全力で取り組む、助け合う、協力する、といったオリンピックバリューを伝え、生涯にわたり役立つことを期待している」と笑顔を見せた。



オーストラリア発祥のゲーム「コトロゲ」開催

14 組がチェックポイント巡りポイント競う

【調査ホストタウン】

奈良市・奈良県

【イベント開催日】

2019/12/1

【相手国・地域】

オーストラリア

【イベント参加者】

14 チーム 35 人

【競技】

【調査場所】

奈良市役所ほか

【調査日】

2020/02/26

【補足情報】

奈良市は 2019 年 12 月 1 日、奈良市ホストタウン事業の一環で、「コトロゲ 2019」を実施した。同市は 16 年 6 月、オーストラリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。同国女子サッカー代表チームの事前合宿誘致を進めてきたほか、市民を対象とした機運醸成事業も展開している。

「コトロゲ 2019」の開会式では、「『コトロゲ』とは奈良市がホストタウンを務めるオーストラリア発祥のアウトドアスポーツ『ロゲイニング』と『古都奈良』を合わせた造語」などの説明があった。ロゲイニングは地図に示されたチェックポイントを制限時間内に回って獲得ポイントを争うゲームで、今回は市役所をスタートポイントに、制限時間 4 時間の中で徒歩、バス、電車のみを使い、直線距離で約 2.5 キロ離れたゴールの「ならでんフィールド」までポイント獲得を競った。

一般公募で集まった「団体の部」7 チーム 15 人、小学生以下 1 人以上と保護者を含む「ファミリーの部」7 チーム 20 人、計 14 チーム 35 人が参加。約 7 割が県内在住で、県外の京都府宇治市、同木津川市、三重県伊勢市からの参加もあった。

当日は、難易度により異なる点数（5～100 点）を設定した 50 カ所のチェックポイントを置いた。各チェックポイントは、社寺や名所のほか、元号の令和が万葉集出典ということにちなみ、歌碑も取り入れた。

「子ども連れなのでゆっくり 10 カ所だけ回った。途中、飲食店で休憩したり、シカに餌をあげたりして楽しんだ」というチームや、満点となる 1500 点で優勝した 20 代の男女 2 人は「全ポイント制覇を目指して計画を立てた。たくさんの名所を回れて面白かった」と話すなど、それぞれのペースで楽しんだ。

各チェックポイントで参加者が写っている写真を撮り、本部にメールで送付することで得点になる。「子どもが積極的に歩き、頼もしい姿を見られた」という声や、奈良市民デーと併せて開催したことで、「ゴールで集計結果を待つ間を利用し、奈良クラブのサッカー試合も見られて良かった」という参加者の感想も聞かれた。

スタッフは「走って顔を真っ赤にして笑顔で帰ってくる皆さんの表情から、楽しい様子が伝わってきた。SNSにも投稿してくれていた」とほほ笑む。

市スポーツ振興課の阪口一志さんは「奈良市民でも行ったことがないといわれる所もチェックポイントにしたので、奈良の魅力を新たに見つけるきっかけにしてほしい」と話す。

実行委員会代表の金原薫さんは「奈良は大仏だけではなく、目立たない史跡にも1300年の歴史があることを知ってほしい。歩いたり走ったり、健康につながる楽しい競技なので広く知ってもらいたい」と話す。

表彰式では、参加賞として市の特産品やバス運賃などに交換できる「奈良市ポイント」200ポイントを付与、賞品として上位チームに県産の米・イチゴ・布巾などを贈呈した。





なでしこ「伊賀 FC くノ一」招き少女サッカー教室

選手が指導、パス回しやミニゲーム

【調査ホストタウン】

奈良市・奈良県

【イベント開催日】

2019/9/7

【相手国・地域】

オーストラリア

【イベント参加者】

公募で集まった小学校 1 年～6 年の女兒約 30 人

【競技】

女子サッカー

【調査場所】

ならでんフィールド

【調査日】

2020/03/10

【補足情報】

奈良市は 2019 年 9 月 7 日、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業の一環として市内の「ならでんフィールド」で、女子サッカーなでしこリーグ「伊賀 FC くノ一」（三重県）の選手らがコーチ役を務める「少女サッカー教室」を開いた。

同市はオーストラリアのキャンベラ市と姉妹都市提携をしていることから、16 年 6 月にオーストラリアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。女子サッカーの事前合宿誘致を進めているほか、スポーツを通じた機運醸成活動を展開している。同市にはプロの女子サッカーチームがないため、なでしこリーグ 1 部の「伊賀 FC くノ一」のホームゲームを招致し、その試合前にサッカー教室を開催した。

この日の伊賀 FC くノ一の試合は午後 2 時にキックオフ予定だったが、サッカー教室は午前 10 時～11 時に行われた。参加者は公募で、小学校 1 年～6 年の女子選手約 30 人が参加、同チームの選手 5 人が指導した。参加した女子小学生の多くは普段、少年サッカーチームで男子に混じって練習しているという。

サッカー教室は、技術レベルに合わせて 2 グループに分かれ、パス回しやミニゲームなどを 行った。奈良市スポーツ振興課の阪口一志さんは「暑い日だったので熱中症を心配したが安全に行うことができた。子どもたちは皆、終始笑顔で取り組み、選手らの手本をまねたり、アドバイスをもらったり、積極的に参加していた」と話す。保護者はスタンドから子どもたちを見守り、ビデオやカメラで記念に残す姿も見られた。

午後 2 時からの「2019 プレナスなでしこリーグ 1 部 第 11 節」の試合に先立ち、同じく公募した 22 人の子どもたちがエスコートキッズとして伊賀 FC くノ一と、対戦相手の「アルビレックス新潟レディース」の選手らと手をつなぎ笑顔で入場。全員で記念撮影するなど試合に臨む選手らを盛り上げた。

試合は、両チームとも立ち上がりから激しいボールの奪い合いが続く白熱の展開で観客は大いに沸いたが、結果は 1 対 1 の引き分けに終わった。伊賀 FC くノ一の大嶽直人監督は、暑い中、応援で盛り上げてくれた観客へ感謝を込め、「奈良の子どもたちもたくさん来てくれてありがとうございました。今日の課題克服も含めトレーニングしていくので引き続き熱い声援をお願いします」と呼び掛けた。



カナダのパラ競泳チームが合宿練習

セレモニーで地元児童らが一行を歓迎

【調査ホストタウン】

和歌山県・和歌山市

【イベント開催日】

2020/1/7

【相手国・地域】

カナダ

【イベント参加者】

選手 11 人とコーチ・スタッフ 10 人、和歌山市立和歌浦小学校、同雑賀小学校 6 年生約 80 人ほか

【競技】

パラ水泳

【調査場所】

秋葉山公園県民水泳場

【調査日】

2020/01/07

【補足情報】

東京パラリンピックに出場するカナダの競泳ナショナルチーム「スイミング・カナダ」の選手 11 人とコーチ・スタッフ 10 人が 2020 年 1 月 6 日から同 14 日の日程で、和歌山市秋葉町の秋葉山公園県民水泳場で合宿練習を実施した。同チームは事前合宿の拠点を和歌山市としており、「FINA スイミングワールドカップ 2017 東京大会」「2018 パンパシフィック水泳選手権」でも同水泳場で合宿を行っている。パラのチームが合宿練習を行うのは今回が初めて。和歌山県と和歌山市は 2016 年 6 月、カナダとオーストラリアを相手国とした 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

7 日の歓迎セレモニーには、宮崎泉和歌山県教育委員会教育長、小林弘史和歌山市副市長、尾崎要二和歌山県水泳連盟会長、和歌山市立和歌浦小学校、同雑賀小学校 6 年生約 80 人が参列し、「スイミング・カナダ」一行を温かく迎えた。

尾花正啓和歌山市長のメッセージを代読した小林副市長は「和歌山市を代表して心から歓迎申し上げる。子どもたちがトップレベルの選手を間近に感じる貴重な機会になった。1973 年に和歌山市と（カナダ・ブリティッシュコロンビア州）リッチモンド市が姉妹都市となって以来、国際交流を行ってきた。良い関係を築けていると感じている」と話した。「和歌山市には日本古来の歴史を感じられる場所がたくさんあるので、時間があればぜひ散策してほしい」とも述べた。

チームリーダーのウェイン・ロマスさんとオーレリー・リバード選手は、和歌浦小学校の中島悠太くんと雑賀小学校の坂口勇樹くんから花束と英語での激励の言葉を受け、笑顔を見せた。セレモニー後には、練習見学のために 2 階の観客席に移動する児童に選手らが声を掛けたり、ハイタッチをしたり、積極的に交流を楽しむ姿が見られた。

同水泳場での合宿について、ロマスさんは表情豊かに身振り手振りを加えながら、「この施設はとても広く、天井の木材が美しい。私は何度も訪れているが本当に素晴らしい施設。和歌山の気候はカナダより暖かく、それも合宿を行う理由の一つ」と話した。また、「チームメンバーはこれまで日本に来る機会が少なく、日本の文化、ホスピタリティを経験したことがない。東京パラリンピック

の前にそれらを体験することは最善の準備。メンバーには日本の文化や歴史、遺産を受け入れて実感してほしい」とも述べた。

前回のリオデジャネイロパラリンピックの平泳ぎ SB8 金メダリストのカタリーナ・ロクソンさんは「このプールは水もきれいで、今まで見てきたプールの中で間違いなく一番良い。設備も人も素晴らしく、良い場所」と笑顔を見せた。今後については、「最も大きな挑戦は障害者への理解を広げること。私はこれまで不遇な境遇にあったときでも、そのときのベストを尽くしてきた。今は良いトレーニングもできて楽しいので、これからも自分を高め続けていきたい。東京パラリンピックでも金メダルを獲得するのが大きな目標」と力強く話した。昨年の世界パラ水泳選手権の背泳ぎ SB9 銀メダリストのジェームズ・レロウクス選手も「障害者スポーツへの理解を広めることが私の挑戦」と真剣なまなざしで応えた。

和歌浦小学校の濱口真悠斗くんは「自分は野球をしていてスポーツが好きなので、地域がスポーツで盛り上がるのはうれしい。体が不自由なのに、すごい泳ぎをする選手を尊敬する」と笑顔を見せた。





児童がカナダ競泳チームの選手に向け手紙

外国語指導助手の協力で英語のメッセージに挑戦

【調査ホストタウン】

和歌山県・和歌山市

【イベント開催日】

2020/1/28

【相手国・地域】

カナダ

【イベント参加者】

6年生 2クラス 50人

【競技】

競泳

【調査場所】

【調査日】

2020/03/10

【補足情報】

和歌山市立和歌浦小学校の 6 年生 2 クラス 50 人が 2020 年 1 月 28 日、同市のホストタウン相手国であるカナダの競泳ナショナルチーム「スイミング・カナダ」の選手に向けて手紙を書いた。

この事業は、日本郵政がホストタウンの地方自治体とその相手国・地域との交流の一助として、子どもたちと相手国・地域の人々との間ではがきを使った手紙のやり取りを手伝うプロジェクトとして行われた。ホストタウンの地方自治体を通して、この事業に参加する学校を募集し、希望した小中学校・高校には手紙キットが届けられる。それを使って応援メッセージや歓迎の便り、お礼などを書いて日本郵政手紙授業支援事務局に送ると、一部を英訳して相手国などに送付してくれる。

同校は、1 月 7 日から 14 日まで同市秋葉町の秋葉山公園県民水泳場で合宿練習を行った「スイミング・カナダ」の歓迎セレモニーに出席。英語で激励の言葉を選手らに送り、練習を見学した。

6 年生担任の辻本雄紀教諭は「2 年前にも本校 6 年生がカナダの水球チームの応援に行った縁があり、1 月の歓迎セレモニーに出席した。子どもたちもカナダの選手に対して親しみを感じているので、すぐに事業に応募した。交流のある選手たちの国だから皆で手紙を書いて応援や感謝の気持ちを伝えようと説明した」と話す。

児童が手紙を書くにあたっては、例文とイラストを書いたプリントを用意し、1 コマ（45 分）割いて授業を行った。20 年度から外国語の授業が始まることもきっかけとなったという。同校の外国語指導助手（Assistant Language Teacher）のライアン・フィーゲルさんに協力を依頼し、児童らは英語のメッセージに挑戦した。

児童らは競泳チームの練習風景を思い出しながら、感謝の気持ちやオリンピック・パラリンピックに向けて激励のメッセージを英語で手紙に書いた。「こういう内容を伝えたいが、英語でどう書けば伝わるか」など悩んでいる様子も見られたという。手紙は仕上がり後に辻本教諭らが集め、まとめて投函した。

辻本教諭は「全員が熱心に取り組んでいたのもうれしかった。これが生きた英語学習。何事も経験して見聞きしないと記憶に残らない。この取り組みを通して子どもたちが新たな経験をできたことがありがたい」と笑顔を見せる。



オーストラリアの選手にはがき

ホストタウン相手国に応援メッセージ送る

【調査ホストタウン】

和歌山県・和歌山市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

オーストラリア

【イベント参加者】

5年生 29人

【競技】

【調査場所】

海南市立日方小学校

【調査日】

2020/03/10

【補足情報】

海南市立日方小学校の 5 年生 29 人が 2020 年 2 月、和歌山県のホストタウン相手国であるオーストラリアの選手に向けて手紙を書いた。

この事業は、日本郵政がホストタウンの地方自治体とその相手国・地域との交流の一助として、子どもたちと相手国・地域の人々との間ではがきを使った手紙のやり取りを手伝うプロジェクトとして行われた。ホストタウンの地方自治体を通して、この事業に参加する学校を募集し、希望した小中学校・高校には手紙キットが届けられる。それを使って応援メッセージや歓迎の便り、お礼などを書いて日本郵政手紙授業支援事務局に送ると、一部を英訳して相手国などに送付してくれる。

5 年生担任の矢野皓介教諭によると、同学年にはオーストラリアの長期休暇時期に日本へ帰省する子どもが定期的に通っており、これまでも同国について調べるなど親しみがあつたため応募した。

矢野教諭は「オリンピックもあるし、皆で応援して盛り上げよう」と児童らに呼び掛け、2 月には授業の合間に、はがきを書き方や企画の趣旨を説明するオリエンテーションを実施。児童らは自宅や学校の休憩時間に、はがきを書き上げた。手紙には応援メッセージのほか、日本や和歌山など地域の紹介、自分が取り組む活動などを書いた。

矢野教諭は「子どもたちはオーストラリアのことを調べたり、メッセージを書くために英語を勉強したり、私たちが想像していた以上に熱心に取り組んでくれた。取り組んで良かった」とほほ笑む。「年賀状以外のはがきを書く機会も減っているの、『御中』の使い方など、手紙のマナーやルールを教えることもできて良かった」とも話す。全員でポストに投函することも企画していたが、新型コロナウイルス感染症による一斉休校のため実施できず、教諭らが投函した。

児童らは「オリンピックでオーストラリアの選手を見つけて応援する」と盛り上がっていたという。矢野教諭は「今後もこのような機会があれば、ぜひ参加したい。子どもたちにはさまざまな経験をしてほしいので、地元企業との連携にも力を入れている」と語った。



ジャマイカの駐日大使が高校生らと交流

文化・歴史学習会で講演、レゲエ「バナナボート」も披露

【調査ホストタウン】

鳥取県・鳥取市

【イベント開催日】

2020/2/12

【相手国・地域】

ジャマイカ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

県立鳥取湖陵高校

【調査日】

2020/02/12

【補足情報】

ジャマイカのクレメント・フィリップ・リカルド・アリコック駐日大使が 2020 年 2 月 12 日、鳥取県を訪れ地元高校生らとの交流を楽しんだ。鳥取県地域振興部スポーツ課で東京オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズ 2021 を担当する加藤裕美係長らが同行した。鳥取県は、過去に世界陸上の事前合宿でジャマイカの陸上チームを受入れたことを契機に同国のウェストモアランド県と姉妹都市提携が進んでおり、16 年 1 月にジャマイカを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、鳥取市も 18 年 2 月にジャマイカのホストタウンに登録されている。

アリコック大使は、夫人のスザンヌさんを伴い来県した。県立鳥取湖陵高校の濱崎公嗣校長や同校の ALT（外国語指導助手）でジャマイカ出身のジェレミー・パーチメントさんら学校関係者と家庭学科人間環境科 1 年生 30 人の計約 40 人が拍手で出迎える中、スライドを利用した「ジャマイカ文化・歴史学習会」が開かれる図書館へ入った。

通訳を交え 1 時間にわたった学習会では、コーヒー豆の銘柄・ブルーマウンテンの産地として知られ、15 年に世界遺産へ正式登録された「ブルー・アンド・ジョン・クロウ・マウンテンズ」や同国発祥の音楽で日本国内にもファンが多いレゲエ・ミュージックなどの文化について、大使自らが壇上から生徒らに語り掛けた。

学習会が 16 世紀から 19 世紀に及んだ奴隷貿易の基地としての歴史に及び、笑顔絶やさなかった大使が厳しい表情を見せると、同国が持つ負の歴史を初めて知った生徒らが静まりかえる場面もあった。

学習会の締めくくりに大使は、同国の愛唱歌でレゲエ・ミュージックの「バナナ・ボート・ソング」を披露。同国の先住民族とアフリカ大陸出身の奴隷を先祖に持つ人々などがお互いに協力しながら国づくりに励んでいる同国の多様性に触れ、「（人間は）出身がどこであれ、同じつらさを抱え、同じ夢を持ち、そして平等な存在である」と話し、同国民が大切にしてきた自由への愛着心を生徒らへ訴え掛けた。

学習会の後は会場を調理実習室に移し、18年に同国のウェストモアランドで開かれた交流事業に派遣された同科2年生の4人が夫妻のために用意したジャマイカ料理を試食。ハバネロを利かせたトマトの冷製パスタなど合わせて3皿が振る舞われた。

ジャマイカ料理に欠かせないハバネロやトマトはいずれも、同校農業学科の農場で育てたものだった。説明に当たった4人が緊張を隠せずにいると大使夫妻は4人を自席へ招き、「おいしい」などと日本語で語り掛けた。大使が通訳を通して調理方法を詳しくたずねたり、「（トマトのパスタは）妻が大好きな料理」と喜んだり、「（ハバネロの辛味を引き立てるなら）コショウは控えめに」などとアドバイスしたりすると、生徒らもはにかんだ笑顔で来校への礼を述べていた。

料理を振る舞った2年生の宮本若奈さんと兜金綾菜さんは「喜んでもらえて良かった」と話すとともに大役を果たしてホッとした様子を見せていた。生徒らが振る舞ったジャマイカ料理は、今後來県する予定の同国選手らにも提供していくという。



ジャマイカ陸上競技連盟訪問団が来訪

日本の競技大会にも出場、高校生との交流も

【調査ホストタウン】

鳥取県・鳥取市

【イベント開催日】

2019/6/22

【相手国・地域】

ジャマイカ

【イベント参加者】

【競技】

陸上競技

【調査場所】

鳥取県立布勢総合運動公園

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ジャマイカ陸上競技連盟のウォーレン・ブレイク会長を団長とする訪問団 5 人が 2019 年 6 月 2 日、鳥取県を訪れ、布勢総合運動公園（鳥取市）で開かれた陸上競技の日本グランプリシリーズ鳥取大会「布勢スプリント 2019」に出場するとともに県内の高校生らと交流した。鳥取県は、過去に世界陸上の事前合宿でジャマイカの陸上チームを受入れたことを契機に同国のウェストモアランド県と姉妹都市提携が進んでおり、16 年 1 月にジャマイカを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

訪問団の来県は、ホストタウン交流事業の一環として実現した。同国で陸上競技に励んできた高校生を招くことで、地元との交流を深めるとともにオリンピック本番に向け、日本の気候に慣れてもらったり、日本の文化に親しんでもらったりしてほしいという願いが込められている。

訪問団として来県したのは同連盟のブレイク会長とガース・ゲイル専務理事、ジャマイカ陸上競技コーチ協会のデイビッド・ライリー会長の 3 人と高校生選手男女 2 人の合わせて 5 人。選手 2 人が同大会へ出場した。

選手 2 人は、男子がラジェ・モリスさんで女子がサシキア・スティールさん。2 人はいずれも、ジャマイカで毎年開催される 19 歳以下の陸上競技大会「チャンプス」で優秀な成績を収めたという。今回の大会では、男女別のグランプリ 100 メートル部門に出場した。

予選 1 組に出場したモリスさんの記録（男子100メートル）は、10 秒 63 と振るわず決勝進出を逃したものの、スティールさん（女子100メートル）は予選 2 組で 2 着に入る 11 秒 89 の記録を出し、決勝では予選を上回る 11 秒 82 で 5 位に入った。同大会では、国内招待選手の桐生祥秀さんとモリスさんが、同じく世古和さんとスティールさんが、それぞれ並んでの走りを披露する場面も用意され会場を沸かせた。

同大会を前に訪問団は 5 月 31 日、学校を挙げてジャマイカとの交流を進めてきた県立鳥取湖陵高校を訪問。蒸しパンを作ったり茶席での抹茶振る舞いを体験したりしたほか、吟詠剣詩舞部に所属する生徒らが着付けた和服での記念撮影も楽しんだ。6 月 1 日には、部活動での相撲が盛んなことで知られる鳥取城北高校で相撲部の稽古も見学した。

来県を振り返ってモリスさんは「桐生選手と並んで走るのはとても緊張した。相撲を生で見るのは初めてで興奮した」と話し、「世古選手が 27 歳（当時）という年齢でも第一線で活躍していることに驚き、大きな励みになった」と話すステイールさんと共に、同大会へ参加できたことを「心から感謝している」と喜び、オリンピックでの再会を誓った。



世界リレー・ジャマイカをパブリックビューイングで応援

レゲエ音楽が流れる中、ジャマイカ料理も用意

【調査ホストタウン】

鳥取県・鳥取市

【イベント開催日】

2019/5/12

【相手国・地域】

ジャマイカ

【イベント参加者】

小中学生の親子連れなど約 80 人

【競技】

陸上競技

【調査場所】

ホテルモナーク鳥取

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

陸上の世界リレー大会に出場するジャマイカの選手らを応援しようと 2019 年 5 月 12 日、鳥取市のホテルでパブリックビューイングが開かれた。同国のホストタウンになっている鳥取県の地域振興部スポーツ課が主催した。

当日は、同大会を中継するテレビ放送を大きく投影できるスクリーンを設けたホテルモナーク鳥取の大広間に、小中学生の親子連れなど約 80 人が来場。県内を中心に活動するミュージシャンのグループ「鳥取レゲエアンサンブル」が DJ ブースから届けるレゲエ音楽が流れる中、同国料理を提供するビュッフェコーナーや同国出身の ALT（外国語指導助手）で、智頭小学校（智頭町）と八頭中学校（八頭町）にそれぞれ勤務するケルシー・レイノルズさんとニコール・レッドウッドさんらが教えるストラップ作りのワークショップを楽しんだ。

ビュッフェコーナーでは、同国の料理を代表するメニューの一つで鶏肉に独特の香辛料・ジャークをまぶして焼き上げたジャークチキンなどを用意。振る舞われた皿を手にした参加者は、珍しい味わいに目を丸くしながら舌鼓を打った。ワークショップでは、同国の国旗と同じ緑と黒、黄などの配色でストラップ作りにチャレンジ。ALT の 2 人に手伝ってもらいながらできあがったストラップをうれしそうに受け取る女兒の姿などが見られた。

レースの開始が近づくと、スクリーン前に用意した観覧席に同国の国旗の小旗を手にした参加者らが次々と着席した。ジャマイカや日本の選手が映ると一斉に拍手が鳴った。審判に促されて位置に付いた選手がスタートを待つ瞬間には会場も緊張に包まれたものの、号砲とともに選手がスタートを切ると一斉に声援が沸き起こってレース展開を見守り、結果に一喜一憂するとともに選手らには惜しめない拍手を送った。

レース間の空き時間には、同国への知識を深めてもらおうと、ALT らが同国の人口や面積などを題材に出題するクイズ大会を実施した。県内で行われた合宿に参加した同国選手のプロフィールなどを同県陸上競技協会の常務理事を務める国森敬章さんが解説する時間も設けた。

一連のプログラムを収めた写真は、同国のオリンピック協会や陸上連盟に贈呈した。担当者からは「私たちは鳥取の皆さんを愛している。鳥取の皆さんが我々にしてくださることに心から感謝している」と喜びの声が届いたという。



インドのキャンプ誘致を目指しホッケー場などを整備

奥出雲町、ホッケー場改修事業

【調査ホストタウン】

島根県 奥出雲町

【イベント開催日】

2019/12/31

【相手国・地域】

インド

【イベント参加者】

【競技】

ホッケー

【調査場所】

三成公園ホッケー場

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックに向け、インドのホストタウンに登録された島根県奥出雲町は、同国ホッケーチームの事前キャンプ誘致を目指し、町営のホッケー場や練習用具の整備を行った。

奥出雲町は、1982年の島根国体（くにびき国体）でホッケー会場となり、当時は町内に一人もホッケー経験者がいない中でチームを結成し、成年女子は4位に入賞した。その後も中学生、高校生などの各チームが全国大会で活躍。町出身の選手が日本代表に選ばれ、オリンピックにも出場するなど、現在ではホッケーが「町技」として町に根付いている。

島根国体の会場となった町営の三成公園ホッケー場は、日本ホッケー協会公認の人工芝の球技場で、中学、高校の全国大会や社会人日本リーグの試合、県外チームの合宿などにも利用されている。しかし、ネットや得点掲示板など一部の付帯設備が老朽化したため、インド代表チームのキャンプ誘致に支障がでないよう、18年9月からクラウドファンディングで改修費を募った。その結果、当初目標の150万円は約1カ月で達成。ホッケー場の付帯設備の改修に加えて、室内用のホッケー用具やゴールキーパーの防具なども買い揃えた。

さらにクラウドファンディング募集期間を12月末まで延ばしたところ、最終的には目標額の3倍を超える464万2千円が集まった。これらの資金は、事前キャンプの誘致活動に利用されたほか、日本代表選手を招いたホッケー教室開催やトップレベルの海外チーム招致など、ホッケー人口の拡大や各年代の競技者の技術向上にも活用される予定だ。

町体育協会事務局の元山貴光事務局員は、「町立のホッケー場は観客席が少なく、国際試合の認定基準には満たないが、代表チーム同士の交流試合などを開催したい。購入した室内用のホッケー用具は、町内の各小学校に配備してスポーツ少年団などが利用している」と予想以上に集まった活動資金で、様々な交流活動や競技者の育成事業なども計画している。



キャンプ誘致委員会がインドを訪問

日印親善試合やジュニア交流も視野に活動

【調査ホストタウン】

島根県 奥出雲町

【イベント開催日】

2019/11/6

【相手国・地域】

インド

【イベント参加者】

奥出雲町キャンプ招致委員会とインドホッケー協会のメンバー10人

【競技】

ホッケー

【調査場所】

ニューデリーのインドホッケー協会など

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

島根県奥出雲町は、東京オリンピックで、ホッケーのインド代表チームを事前キャンプに誘致するため、2019年10月31日から11月7日まで誘致委員会のメンバーをインドに派遣した。

町キャンプ招致委員会のメンバーはまず、インド北東部のブバネーシュワルに向かい、同地で開催された東京オリンピックのホッケー最終予選を観戦した。インド代表チームが男女共に出場権を獲得したのを見届けた後、首都ニューデリーにあるインドホッケー協会を訪問。エレナ・ノーマン協会CEOに出場権獲得の祝意を伝えた上で、キャンプ誘致のプレゼンテーションを行い、前向きな反応を得た。

町キャンプ招致委員会のメンバーは、19年6月にはサンジェイ・クマール・ヴァルマ駐日インド大使、同国の女子代表チームと、それぞれ松江市と広島市で面会している。広島市で開催され、インド代表チームが出場した東京オリンピック予選には、町内の小学生40人が応援にかけつけ、インドの国旗をイメージしたサフラン色（橙）、緑、白の三色の応援棒を打ち鳴らして声援を送った。

東京オリンピックに向けて町は精力的にキャンプ誘致活動を続けてきたが、町体育協会事務局の元山貴光事務局員は、「インドホッケー協会から一旦は、キャンプ誘致に対して前向きな回答を得たが、なかなか実現は難しそうだ」と冷静に現状を分析。「今後は、東京オリンピックの応援ツアーやインドのジュニアチームとの交流イベント、日印代表チーム同士の親善試合など、キャンプ誘致以外の事業も企画していきたい」とあくまで前向きだ。「5月末にホッケー日本代表メンバーが発表される。町出身の候補選手が11人いるので、何人選ばれるか楽しみ。町出身選手が多いほど応援ツアーや観戦会も盛り上がる」と期待を寄せている。



国際交流員がインド文化を紹介するイベントを企画

学校給食でのインド料理提供も

【調査ホストタウン】

島根県 奥出雲町

【イベント開催日】

2020/2/27

【相手国・地域】

インド

【イベント参加者】

奥出雲町内の小中学生

【競技】

【調査場所】

奥出雲町内の小学校など

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

2018年8月に奥出雲町の国際交流員として採用されたインド出身のグルン・エナさん（25）は、同町のホストタウン事業に欠かせない存在となっている。インドホッケー代表チームのキャンプ誘致活動以外にも町民へインドの文化を紹介する各種イベントの企画、実行に奔走している。

20年2月27、28日の両日、町内仁多地区の小中学校7校と横田地区の小中学校5校の計12校で、ホストタウン交流事業の一環として給食にインド料理を提供した。「カーナ・カザナ（食べ物の宝）の日」と題し、町が昨年が続いて企画し、エナさんがメニューを提案した。提供したメニューは、クミンベジタブルピラフや白身魚のバジル漬け焼き、インド風トマトスープ、サブジ（インドの野菜料理）など。ターメリックやコリアンダー、クミンシードなどスパイスを使った料理は、子供たちにも大変好評だった。エナさんは「カレー以外のインド料理も子供たちに知ってほしかった。去年よりも辛さを抑えて、自分の家庭の味に近いものができた」と工夫を凝らしたメニューに自信をのぞかせた。

18年と19年の10月には恒例の奥出雲町芸術文化祭でインド映画の上映や民族衣装サリーの試着会、インド紅茶の試飲会などもエナさんが企画した。インド映画は、14年の日本アカデミー賞で優秀外国作品賞も受賞した「きっと、うまくいく」を上映。インドで大ヒットしたコメディ映画を町民と一緒に楽しんだ。

日本語が堪能なエナさんは、ホストタウン事業で駐日インド大使との面会やインドホッケー協会の訪問にも同行し、通訳を担当した。キャンプ誘致用ホームページの作成や4月に公開を予定している、フェイスブックとインスタグラムなどを活用したインドとの交流、情報発信事業でも日英の翻訳などを任されている。現在、企画を練っている段階の東京オリンピック応援ツアーやインドのジュニアチームとの交流事業などでも大いに活躍を期待されている。



ロンドン五輪メダリスト・山口舞さんが講演

「可能性へのチャレンジ」をテーマに

【調査ホストタウン】

岡山県 岡山市

【イベント開催日】

2019/12/21

【相手国・地域】

ブルガリア

【イベント参加者】

150 人（うち学生が 46 人）

【競技】

【調査場所】

公立学校共済組合岡山宿泊所「ピュアリティまきび」

【調査日】

2019/12/21

【補足情報】

ロンドンオリンピックでバレーボール女子日本代表チームのメンバーとして銅メダルを獲得した岡山シーガルズ元主将の山口舞さんが 2019 年 12 月 21 日、岡山市内で「スポーツ講演」を行った。この講演会は岡山市体育協会が主催したもので、およそ 150 人の聴衆を前に、山口さんは「可能性へのチャレンジ」をテーマに話した。

講演は、東京 2020 オリンピック・パラリンピックのホストタウン事業の一環。岡山市はブルガリア共和国のホストタウンとなっており、日本人オリンピック・パラリンピアンと市民の交流を促進し、身近に感じ大会開催機運を高めようという目的で開催された。昨年は、パラ陸上・車椅子パラリンピアンの松永仁志さんの講演を行った。

講演前には岡山市体育協会表彰式が行われた。就実高等学校ソフトテニス部など県内 7 団体、マラソン女子・天満屋の前田穂南さんなど 10 個人を表彰。その他、2019AIG 全英女子オープンゴルフ選手権大会で優勝した渋谷日向子さん、マラソングランドチャンピオンシップで第 3 位の天満屋・小原怜さんを特別表彰した。

登壇前、山口舞さんのバレーボール人生を約 10 分間のスライドで振り返った。スライドでは、2002 年岡山シーガルズへの入団から他国との遠征や交流、オリンピック出場、引退会見、その後の活動を写真と動画で伝えた。

山口舞さんは、バレーボール強豪校に進学した思いがけない理由や引退前 4 年間悩まれたけがについて、また河本昭義監督の温かい指導などについて話した。その後、会場入口で受け付けた「質問票」をボックスから一枚ずつ取り出して答えた。

質問は、バレーボールに対する姿勢や心掛けていることから、ピンチの時や苦手なことへの克服法などが続いた。岡山シーガルズでは主将を務めていたことも

あり、主将としてミスをしたチームメイトにどう接するか、やる気の出ないチームメイトにどんな言葉を掛けるかなど、会場にいた学生チームの主将からも質問があった。

山口さんは「試合も大切だが、練習の時を大切にしてほしい。練習で苦手なことを少しでも克服しようと頑張れるかどうかの心掛けが試合につながる。主将のあり方もいろいろあるので、自分にできることをやるしかない。私は言葉で伝えるのが苦手なので、態度や姿勢を見せて伝えることを一生懸命やった」と話した。

その他、ママさんバレーボールに取り組んでいる女性からの質問や、視覚障害者から「フロアバレーボールを知っていますか」などの質問にも答えた。山口さんは「目標を持ってほしい。大きなものでなくてもいいので、かなえらるかどうか分からないギリギリの目標を立て、一つ一つ近づいていけば、いずれ大きな目標に近づくことになる。小さな目標にどんどんチャレンジしてください」とメッセージを届けた。

関西高等学校ボート部のメンバーは、「自分の努力次第で、可能性を開いていけるのだと勇気が湧いた」「オリンピックに出た人は数少ない。その人たちの声を生で聞けるのは非常に貴重で、ためになった」「ピンチの時のこと、食事の内容などアスリートとしての意見が聞けて良かった」「勝つために楽な道はないとやる気が湧いてきた」などの声が聞かれた。

公演終了後は、サインや写真撮影を行い、講演では聞けなかった質問や感想を伝える学生の姿も見受けられた。



市内 12 店が限定「ブルガリアパフェ」提供

店やメニュー通してホストタウン相手国の興味喚起

【調査ホストタウン】

岡山県 岡山市

【イベント開催日】

2019/7/1

【相手国・地域】

ブルガリア

【イベント参加者】

期間中 2500 個のホストタウンリングを進呈

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

岡山市は 2019 年 7 月～10 月、ブルガリアのホストタウン事業の認知を広げるため、「ブルガリアパフェ」プロジェクトを展開した。岡山市が行うホストタウン事業を知ってもらうだけでなく、ブルガリアについても知ってもらい、東京オリンピック・パラリンピックの機運を高めることを目的としている。岡山市は、ブルガリア共和国のプロヴディフ市と 40 年以上にわたり国際友好交流都市として交流。これを縁として、16 年 12 月にブルガリア共和国を相手国としてホストタウンに登録された。

「ブルガリアパフェ」プロジェクトは、岡山商工会議所が実行員会事務局を務める「フルーツパフェの街おかやま」の 10 周年特別コラボ企画とした。岡山県内のフルーツを 1 つは必ず使うというルールの下、37 店が加盟している。そのうち 12 店が「ブルガリアパフェ」企画に参加した。

岡山市は 1972 年にプロヴディフ市と姉妹都市縁組をした。JR 岡山駅東口の桃太郎像と同じ像が同市の公園にもある。

ブルガリアは元大関・琴欧州の出身地で、バラ・ローズオイルの生産量は世界一を誇り、ヨーグルト・チーズ・ワインが特産の国。国旗は白、緑、赤の 3 色で、こうした特色を生かし、12 店は約 3 週間でパフェを考案した。

ANA クランプラザホテル岡山は、ヨーグルトクリーム、マスカットジュレ、フランボワーズジュレでブルガリア国旗の 3 色を構成し、上に数種の岡山県産ブドウをのせた「ブルガリア×岡山フュージョンパフェ」（1,263 円）を提供した。

1915 年創業の酒造メーカー「宮下酒造・酒工房独歩（どっぼ）館」は、季節の果物と餡（あん）とわらび餅、マスカルポーネなど 3 種のチーズ、ヨーグルトと麴（こうじ）など約 30 種の食材を使い「和風パフェ」（1,000 円）を提供した。

岡山中央卸売市場内にある肉バル「うどん虎（こ）」（南区市場）では、蒜山（ひるぜん）ジャージー牛のヨーグルト、マスカットのジュレの上に清水白桃を日本酒「獺祭（だっさい）」で作ったコンポート、赤い食用バラをのせた「オール岡山ブルガリアパフェ」（1,580 円）を提供した。

ブルガリアパフェの注文客には、薄い緑色のシリコン製「ホストタウンリング」を進呈。期間中、約 2,500 個のリングを提供した。1,723 人が協力したアンケート結果によれば、女性が 4 分の 3 を占め、特に 40～50 代の利用が多かった。

「ホストタウンという言葉を知っていたか？」の質問には約半数が「この企画で初めて知った」と答えた。「岡山市がキャンプ誘致に取り組んでいることを知っていたか？」の質問には 3 分の 2 が「この企画で初めて知った」と回答。「岡山市はブルガリアのホストタウンであることを知っていたか？」の質問には約 8 割が「この企画で初めて知った」と答えた。

担当者は「これまでは広報連絡や情報発信は一方的でマスコミ頼りだった。店やパフェという媒体を使っただけの情報発信は、アンケート結果から分かるようにこれまで届かなかった人に届いた。また店舗の協力、インスタ映えする商品の力を発揮できたと思う」と話す。

「ブルガリアに興味を湧かしたか？」の質問には約 8 割が「湧いた」「とても湧いた」と回答。「直前キャンプに来るブルガリア選手を認識してもらい、応援してほしい。東京オリンピック・パラリンピックにとどまらず、ブルガリアとの国際交流・文化交流が深まることを期待する。交流が深まれば、ブルガリアの人たちに岡山を知ってもらえる機会につながると思う」とも話す。



ブルガリア女子レスリングチームが強化キャンプ

ちびっこレスリング教室やろくろ・着付け体験も

【調査ホストタウン】

岡山県 岡山市

【イベント開催日】

2019/5/4

【相手国・地域】

ブルガリア

【イベント参加者】

【競技】

レスリング

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

岡山市で 2019 年 5 月 4 日～18 日、「ブルガリア女子レスリング強化キャンプ」が行われた。選手 10 人とコーチ 2 人、ブルガリア共和国レスリング連盟のヴァレンティン・ライチェフ事務総長 の計 13 人が訪れた。

岡山市は 18 年、キャンプ誘致のためブルガリアに訪問団を派遣。同国スポーツ大臣にあいさつをするとともに、キャンプ受け入れに伴う補助制度の説明を行った。岡山には IPU・環太平洋大学に女子レスリング部があり、監督の嘉戸（かど）洋さんが 1996 年のアトランタオリンピック 7 位入賞経験があることなど、練習環境の面でも受け入れが可能であることをブルガリアレスリング連盟に伝えた。

ブルガリアから日本への所要時間は約 20 時間。選手たちは時差ぼけがあり、到着後数日間はオフか軽い運動にとどめていた。5 月 7 日には IPU・環太平洋大学、関西（かんぜい）高校レスリング部のコートを使い、練習をスタート。全日本 3 位入賞の IPU・榎本美鈴さん、東京からは日本体育大学のレスリング部約 15 人も参加した。自衛隊体育学校でコーチを務めるロンドンオリンピックの金メダリストの小原日登美さんのほか、アテネ・北京・ロンドン・リオデジャネイロのオリンピック 4 大会連続金メダルを獲得し、国民栄誉賞を受賞した伊調馨さんも練習に参加した。

5 月 10 日に行われた歓迎式では、記念品、季節のフルーツ、白桃ゼリーや岡山の水「ごっくん桃太郎」などをブルガリア選手団に贈呈した。シリコン製のホストタウンリングを手渡し、全員で腕に着け記念撮影をした。その後、東京オリンピック直前キャンプの調印式では、ファイチェフ事務総長、大森雅夫岡山市長、佐藤岡山県副知事、梶川岡山県レスリング協会会長が署名。「練習会場、練習相手などレスリング競技への認識の高さと、18 年からの観光エクスカーショで日本・岡山の文化を知ってもらうことで信頼関係が構築できた」と担当者は話す。

一方、5 月 8 日は、岡山県立岡山後楽館の 1 年生 7 人と教師による書道体験を行った。選手らは好きな言葉を生徒と選び、筆の使い方などを学びながら漢字を書いた。リオデジャネイロオリンピック出場経験のあるタイベ・ユセインさんは

「友情」と書いた。「日本とブルガリアの友情を表したかった。書道よりレスリングのほうが簡単」と話した。そのほか、「愛」「勇氣」「勝」「友」「命」などが書かれた。コーチのペータル・カサボフさんからは、「名前のペータルは『石』を表す言葉。石の付く日本の代表的な名前を教えてほしい」と言われ、伝えた「石田」を気に入り、この日からペータルさんは「石田さん」と呼ばれ、ポロシャツの背中にも「石田さん」と書くほど気に入っていた。

5月12日には「ちびっこレスリング教室」が開かれた。岡山県レスリング協会の協力で、高農クラブ、岡山ジュニアレスリングクラブなど小学生30人が参加。関西高校が場所を提供し、四つん這いになって走るレースなど楽しいウォームアップを共に行った。体操の「1、2、3、4」の掛け声を、ブルガリア語で行うと聞き慣れない言葉になったが、子どもたちは楽しそうな表情を見せた。約1時間半の教室の終わりには、サインをもらったり写真を撮ったりする親睦会となった。

5月13日・17日には、18年に続き「おかやまスポーツプロモーション機構」の協力を得て、観光エクスカーションを行った。1日目は、備前市にある陶芸家のアトリエを訪れ、ろくろを体験した。湯飲み、つぼ、皿など独創的な作品がいくつもあったという。その後、カレー&カフェ「Shibabe（シバベ）」で食事を取り、1905年創業の鷹取醤油でドレッシング作りを楽しんだ。

2日目は、前年にも訪れた岡山城と岡山後樂園を訪問。岡山城内の着付けコーナーは、お殿様・お姫様の衣装を身にまとうことができる。選手・コーチ共に人気で、着物姿は日本らしさの象徴となっていることの理解につながった。写真をたくさん撮り、SNSに投稿する選手もいた。

レスリングは階級ごとの個人戦。タイベ選手は東京オリンピック出場が決まっているが、他の選手はキャンプの段階では未決定で、ミグレナ・セリシュカ選手、ミミ・フリストヴァ選手、ビリャナ・デュドヴァ選手は有力といわれている。



ホストタウン事業 PR で応援グッズ製作

T シャツ、缶バッジなどで豪女子ホッケーチーム PR

【調査ホストタウン】

岡山県 赤磐市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

【競技】

ホッケー

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

岡山県赤磐市は、ニュージーランドを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流事業として、同国代表女子ホッケーチームの応援グッズなどを製作した。

同チームの歓迎ムードを盛り上げるため、「応援サポーターTシャツ」を限定500枚で作り、1枚500円で販売した。ニュージーランド代表チームの事前キャンプ前の19年7月29日～8月2日は同市教育委員会スポーツ振興課で販売し、すぐに完売したという。同チームにも同じTシャツをプレゼントしたほか、期間中、多くの参加者がTシャツを着て訪れた。

Tシャツのデザインは、同チームカラーの黒地に、いくつかのロゴをあしらった。まず、ホッケーのスティックとニュージーランドに自生するシダ植物「シルバーファーン」をデザインした「ブラックスティックス」のロゴ。シルバーファーンは、ラグビーニュージーランド代表の「オールブラックス」のロゴマークのモチーフにもなっている。そのほか、カタカナの「ア」のモチーフにした赤磐市の市章、両国の国旗、中央には「We support New Zealand Hockey Team」と書かれている。裏面には、ホッケースティックを持った「あかいわももちゃん」が描かれている。

各種グッズは、ニュージーランド代表チーム来日までの約2カ月で開発した。ロゴマークの使用許可を取るため、ニュージーランドと何度も連絡を取り合った。3時間の時差があるうえ、ニュージーランドは17時で一切の業務が終了してしまうため、短い時間でのやり取りに苦労したという。

Tシャツと同様のデザインを使い、岡山県備前県民局と共同で製作した「団扇（うちわ）」約1000本、ティッシュ約3000個、空気を入れて応援するチアスティック約500組も製作した。

親善試合やトレーニングなどの会場となる「赤磐市熊山運動公園」には、英語と日本語の横断幕を設置した。大きさは、幅 10 メートル・高さ 2 メートル。マオリ語のあいさつ「Kia ora」の文字も入っている。運動公園周辺の沿道やグラウンド周囲には、ブルー、イエロー、ピンクの 3 色のぼりを掲げ、歓迎ムードを演出した。のぼりには、ニュージーランド国旗を持った「あかいわモモちゃん」が描かれている。

日本代表ホッケーチーム「さくらジャパン」との親善試合の日には、参加者を対象に缶バッジ作りのワークショップを行った。缶バッジの種類は 3 種類。黒地にホッケーをする女性をかたどったバッジ、T シャツと同様のデザインのバッジ、「I Love Hockey」（Love の部分は赤いハート）のバッジを制作した。

事前キャンプの期間中、幅 2 メートル・高さ 1.5 メートルの応援フラッグを用意し、観覧者、ボランティアなど多くの人で寄せ書きも行った。赤磐市滞在の最終日となった 8 月 11 日、赤磐市花火大会「夏祭りあかいわ 2019」でニュージーランド代表女子ホッケーチームに手渡された。





ニュージーランド女子ホッケーチームを市民が歓待

地元ミュージシャンや生徒・児童らが国歌斉唱も

【調査ホストタウン】

岡山県 赤磐市

【イベント開催日】

2019/8/5

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

市民約 300 人

【競技】

ホッケー

【調査場所】

赤磐市熊山運動公園グラウンド

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ニュージーランド代表女子ホッケーチームが 2019 年 8 月 5 日～11 日、東京オリンピックの事前キャンプのため、赤磐市を訪れた。8 月 5 日 10 時から、赤磐市熊山運動公園のグラウンドで歓迎会が開かれた。ニュージーランドから選手 20 人、スタッフ 7 人が出席。平日・月曜にもかかわらず約 300 人の市民が参加した。同市が製作した応援サポーターTシャツを着た参加者も多く、歓迎ムードが高まった。

選手の入場の際には、赤磐市立磐梨（いわなし）中学校・吹奏楽部が「ニュージーランド国歌」を演奏。その後、赤磐市広報大使のミュージシャン「にこいち」と生徒 12 人が「ニュージーランド国歌」を斉唱し出迎えた。「にこいち」は、同市を舞台に撮影された「種まく旅人～夢のつぎ木～」の主題歌を歌ったことから、17 年に広報大使に任命された。生徒らは英語とマオリ語のニュージーランド国歌を、この日に向けて何度も練習したという。

グラウンドの向かいにある赤磐市立磐梨小学校では、全校児童の約 80 人が歓迎のポスターを作った。歓迎会当日はグラウンドから見える場所にポスターを貼り、選手たちを喜ばせた。

記念品の贈呈式では、市民が選手一人ずつに手渡した。同市マスコットキャラクター「あかいわももちゃん」グッズや缶バッジ、応援サポーターTシャツなどを贈呈。事前に同市のウェブサイトや広報誌で募集した市民が贈呈式に参加し、中・高校ホッケー部の生徒もいた。岡山県からは、特産物の「桃」を手渡した。桃のシーズンということもあり、選手たちは会場で頬張る姿もあった。

ニュージーランド代表選手による「ホッケー教室」では、ホッケー経験のある生徒、スティックを初めて握る人など、誰でも参加できる和やかな教室となった。グループに分かれ、ドリブルや受け取り方、打ち方など約 50 分間にわたり体験、レクチャーが行われた。

赤磐市のホッケーの歴史は、1957年に県立瀬戸高校にホッケー部ができたことに始まる。2005年の第60回国民体育大会「岡山国体」開催時、熊山町にグラウンドが建設された。このグラウンドを今回、東京オリンピック仕様の芝生に張り換え、19年7月31日には選手棟も完成した。

05年の岡山国体の頃、小学生ホッケークラブチームが結成されるなど盛んになり、瀬戸中学校、磐梨中学校にもホッケー部ができた。14年には瀬戸中学校男子ホッケー部は全日本中学生ホッケー選手権大会で3位に輝いた。

歓迎会など市民を巻き込んだ熱烈的な歓迎と、63年前から同市に引き継がれたホッケーの歴史が、ニュージーランド代表女子ホッケーチームの東京オリンピック直前キャンプ誘致を大きく後押ししたようだ。





女子ホッケー、ニュージーランドと日本が親善試合

市民ボランティアらのおもてなしで和やかな雰囲気

【調査ホストタウン】

岡山県 赤磐市

【イベント開催日】

2019/8/8

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

【競技】

ホッケー

【調査場所】

赤磐市熊山運動公園

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ニュージーランド代表女子ホッケーチームと女子日本代表チーム「さくらジャパン」の親善試合が 2019 年 8 月 8、9 の両日、赤磐市で行われた。

連日 30 度を超える気温の中、国際試合と同様の形式で 1 日 1 試合、全 2 試合が行われた。審判は、日本ホッケー協会から選任され、国旗入場、同国の国歌斉唱をした。市内から募集した 36 人のエスコートキッズと共に選手はグラウンドに入った。

ニュージーランドは現在世界ランキング 6 位、日本は 13 位。ランキング上ではニュージーランドが上位だったが、結果は両試合とも日本が勝利した。ニュージーランドの選手たちは日本の暑さが厳しい様子だったという。試合終了後は、観戦者とハイタッチをして親善を深めた。

試合開始前とハーフタイム、試合終了後には、グラウンドの 6 カ所に設置されたスプリンクラーで散水を行った。試合の前後に行われた散水では、小学生を中心に水浴びをして楽しんだ。同時に、東京オリンピックと同様の芝生の感触を楽しむこともできた。

別のテントでは 3 種の缶バッジ作りを体験できるコーナーも用意。黒地にホッケーをする女性をかたどったバッジ、ニュージーランド代表女子ホッケーのチーム名「BLACK STICKS」と両国の国旗が入ったバッジ、「I LOVE HOCKEY」と書かれたバッジを用意した。

ニュージーランド代表は 8 月 5 日から市内でキャンプを行っていたが、その段階では東京オリンピックの出場権を獲得していなかった。帰国後すぐに行われるオセアニア選手権を控えていたため、到着まではスケジュール管理などピリピリした面もあったという。到着後は、市民ボランティアによる「アイスバス」の設置、ボール拾いなどのサポート、応援サポーター T シャツの着用などのおもてなしを受け、和やかな雰囲気でも過ごしているようだった。代表者の数人だけで参加

する予定だった赤磐市役所への表敬訪問には全選手が参加。トレーニング日にも、サインや写真撮影に気軽に応える姿が見受けられた。



「府中学びフェスタ」会場にパラグアイブース

ゲームやクイズでホストタウン相手国を PR

【調査ホストタウン】

広島県 福山市・尾道市・府中市・神石高原町

【イベント開催日】

2019/10/26

【相手国・地域】

パラグアイ

【イベント参加者】

2 日間で 2 万 8000 人が来場

【競技】

【調査場所】

南の丘（TTC アリーナと周辺施設）

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

「府中で熱中!! 府中に夢中!!」をテーマにした「第 9 回 府中学びフェスタ」が 2019 年 10 月 26、27 の両日、府中市の南の丘（TTC アリーナと周辺施設）で開催された。東京オリンピック・パラリンピックに出場する卓球のパラグアイ共和国選手団の直前合宿地が、府中市に決まったことから、パラグアイ共和国に関する疑問を解決するブースを TTC アリーナ前広場に設けた。同市は、福山、尾道両市、神石高原町とともに 19 年 2 月、パラグアイを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

「府中学びフェスタ」は、11 年 4 月に施行した「府中教育の日を定める条例」をきっかけに、地域社会が連携して教育の充実と発展を図ろうと、毎年 10 月の最終土曜・日曜に南の丘（TTC アリーナと周辺施設）を会場に開催しているイベント。飲食ブースも出店し、19 年の学びフェスタは 2 日間で 2 万 8000 人が来場した。

パラグアイを紹介するブースの前には、府中市の市旗とパラグアイの国旗を並べ、大判ボードにパラグアイについての情報をまとめた用紙をはり出した。食文化や風景を知ってもらおうと、在日パラグアイ大使館から写真を借りてパネルを展示したほか、国がどこにあるのかを伝えるため地図から探すゲームやブース内の展示物から答えを探すクイズも行い、来場した小中学生を中心に幅広い市民に PR した。

府中市地域振興課スポーツ・文化振興係の西奥智哉さんは「パラグアイの合宿を受け入れるということで、子どもたちに関心を持ってもらえるよう参加型のゲームを企画した」と話す。

27 日は市立第一中学校体育館で、パラリンピック種目のボッチャと車いすバスケットボール体験を行った。いずれも当日参加が可能で、あらかじめ体験内容をチラシにまとめ、市内の小中学校に配布していたこともあり、「たくさん子どもたちが来てくれた」（西奥さん）という。

車いすバスケットボールは、広島県障害者スポーツ協会から借りた車いす 5 台を使った。参加者は講師のアドバイスを受けながら、車いすに座った状態からバスケットボールをゴールに投げ入れるシューティングゲームや、車いすで走るスピード競争の 2 種類を体験した。

ボッチャはボールを 12 球用意し、グループごとに体験できるようにした。長方形のコートでは、自由に遊ぶ子どもたちや、一緒に楽しむ家族連れの姿も見られた。西奥さんは「小学生がやっても、大人がやっても楽しんで遊んでいた。こうしたイベントが障害者スポーツの普及につながってほしい」と期待を込める。



パラグアイ出身のギタリストがコンサート

4 市町のホストタウン登録受け在日大使館が主催

【調査ホストタウン】

広島県 福山市・尾道市・府中市・神石高原町

【イベント開催日】

2019/5/16

【相手国・地域】

パラグアイ

【イベント参加者】

福山市、尾道市、府中市、神石高原町の 4 市町から 412 人

【競技】

【調査場所】

広島県民文化センターふくやま

【調査日】

2020/03/17

【補足情報】

パラグアイ出身でクラシックギタリストのベルタ・ロハスさんによるコンサートが 2019 年 5 月 16 日、広島県民文化センターふくやま（福山市）で開催された。福山市と尾道市、府中市、神石高原町の備後圏域 4 市町は 19 年 2 月、パラグアイを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。このコンサートは、ホストタウン登録と日本・パラグアイ外交関係樹立 100 周年を記念して、在日パラグアイ共和国大使館が主催した。

コンサートを行ったベルタ・ロハスさんは、米国で行われるラテン・ミュージックの音楽賞「ラテン・グラミー賞」に 3 回ノミネートされたことがある実力派で、パラグアイの観光大使も務めている。

会場には、ホストタウン登録された備後圏域 4 市町から 412 人が無料招待された。各市町は事前に観覧を受け付け、福山市では 5 月 7 日から先着順で配布したが同日に定員 100 人に達した。

ホストタウン登録を受けて、福山市市民局まちづくり推進部スポーツ振興課の園尾一成さんは、「歴史的・経済的にも備後圏域と縁がある国であり、東京オリンピックに向けた直前合宿や交流を通して将来に向けた友好関係を築きたい」と話す。

約 2 時間に及ぶコンサート終了後には、ブラジルで開催された南米初となる「リオデジャネイロオリンピック 2016」の開会式でパラグアイの選手と一緒に進出した「マクドナルド オリンピックキッズ」の奥家瑚々音（おくいえ・ここね）さん（福山市在住、13 歳）がロハスさんに花束を手渡した。

来場者には出口で一人一人に、南米を代表する郷土菓子「アルファフォレス」を配った。柔らかなクッキー生地にキャラメルクリームを挟んだ菓子でココナッツパウダーを振りかけた菓子で、イベントに合わせて作った。できあがった菓子は、在日パラグアイ共和国大使館のスタッフに味を確かめてもらったという。園

尾さんは「ホストタウン登録を受けて、パラグアイについて興味を持ってもらえたらと思い配布した。どんな国なのか関心を寄せてほしい」と話す。



「福山バラ祭」にオリパラブース

ホストタウン相手国・メキシコやパラグアイを紹介

【調査ホストタウン】

広島県 福山市・尾道市・府中市・神石高原町

【イベント開催日】

2019/5/18

【相手国・地域】

メキシコ、パラグアイ

【イベント参加者】

86 万人（「福山ばら祭」参加者）

【競技】

【調査場所】

ばら公園

【調査日】

2020/03/17

【補足情報】

福山市は 2019 年 5 月 18、19 両日、バラをテーマにした福山市の大規模イベント「福山ばら祭」に東京オリンピック・パラリンピックをアピールする「オリパラブース」を出展した。同市と尾道市、府中市、神石高原町の備後圏域 4 市町は 19 年 2 月、パラグアイを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。今回の出展は、4 市町のホストタウン交流活動の紹介に加え、パラグアイとメキシコ代表チームの事前合宿受け入れなどについて市民に周知し、オリンピック・パラリンピックの成功に向けた機運醸成を目的に行った。

「福山ばら祭」は、ばら公園、緑町公園周辺をメイン会場に、毎年 5 月に開催する福山市最大のイベント。福山市内では約 100 万本のバラが咲き、86 万人が訪れた。

「オリパラブース」は、花園公園内の「国際ひろば」に、パラグアイとメキシコ両国のブースに分けて設置した。「メキシコブース」では、ちょうど市内で合宿中のメキシコ選手団を応援しようと、メキシコ合衆国の衣装を着て、応援メッセージを書いたフリップを持って撮影ができる「VIVA MEXICO（ビバ メヒコ）声を届けるプロジェクト」を企画した。参加者には、インスタントカメラで撮影した写真をその場で進呈した。19 日には、合宿中のバドミントン、フェンシング競技のメキシコ選手団がブースに来場している。

「パラグアイブース」では、パラグアイ共和国の文化や景色を紹介しようと、在日パラグアイ共和国大使館から借りた写真をパネルで展示した。福山市沼隈町（当時は沼隈郡沼隈町）は、1955 年に町ぐるみでパラグアイ共和国へ移住した歴史があり、現在でも、福山市を中心に備後圏域でパラグアイと交流がある。移民の歴史を紹介する当時の写真に説明文を添えたパネルも並べた。展示枚数は計 11 枚。同大使館のスタッフも来場し、パラグアイ共和国のパンフレットも配布した。

このほか、パラグアイの場所を世界地図から見つけるまでのスピードを競うミニゲームも企画。参加者には、南米の食文化を味わってもらおうと郷土菓子「アルファフォレス」を用意し、約 500 セットを配った。ゲーム参加者からは、「パ

ラグアイは何となく南米にあると思っていたけど、具体的な場所は初めて知った」との声も。

撥弦楽器の一種で民族楽器の「アルパ（ハープ）」演奏もメインステージで 14 時 30 分ごろから行った。ブースでも、随時、演奏を続けただけでなく、子どもたちが楽器に触れる機会も設けた。

福山市市民局まちづくり推進部スポーツ振興課の園尾一成さんは、「東京オリンピック・パラリンピックの直前合宿に向けて、第一段階であるパラグアイという国を知ってもらうことができた。直前合宿では多くの市民の方に練習を見学してもらいたい」と話す。



ベトナム バドミントン女子代表候補が強化合宿

グエン選手、小学校訪問し児童と交流

【調査ホストタウン】

山口県 下松市

【イベント開催日】

2019/9/25

【相手国・地域】

ベトナム

【イベント参加者】

豊井小学校 2年～4年の児童 24人

【競技】

バドミントン

【調査場所】

下松市役所、豊井小学校、下松市民体育館

【調査日】

2020/03/09

【補足情報】

ベトナム・バドミントン女子のオリンピック候補選手グエン・トゥイ・リン選手が 2019 年 9 月 16 日～28 日、山口県を本拠とする女子実業団バドミントンチーム「ACT SAIKYO（アクトサイキョウ）」との強化合宿を行うため、キャンプ地である下松市を訪れ、市民とのさまざまな交流イベントに参加した。下松市は 18 年 12 月、ベトナムを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

ACT SAIKYO は、国内最高峰のバドミントンリーグ「S/J リーグ」に所属するバドミントンチームで、周南市内に本店を構える西京銀行が運営。17 年に周南市に隣接した下松市と地域活性化包括連携協定を締結し、翌年からベトナム女子バドミントン選手への東京オリンピック事前キャンプ誘致活動を進め、19 年 4 月に実施が正式決定した。今回の強化合宿は、同チームが周南市に所有するバドミントン専用体育館「ACT アリーナ」を練習場所とし、同チーム所属選手が練習パートナーを務めた。

来日 2 日目の 9 月 17 日、グエン選手は國井益雄下松市長を表敬訪問し、「下松市は静かでストレスが無く、練習に集中できる環境だと思う。オリンピックの代表になり、ぜひここでキャンプをしたい」と意気込みを語った。オリンピックの開催気運を高めようと、下松市が新たに用意したオリンピックカウントダウンボードが披露され、グエン選手が開催日までの日数「311」の札入れを行った。

25 日は、徳山大学のベトナム人留学生 5 人と ACT SAIKYO の今井優歩選手らと共に下松市の豊井小学校（東豊井）を訪問。同校の 2 年～4 年の児童 24 人と交流を楽しんだ。

体育館では、重りの付いた羽根を蹴り合うベトナムの国民的スポーツ「ダーカウ」やバドミントンを体験。グエン選手と今井選手のペアチームと対戦した児童は「ラリーが少し続いて、うれしかった。あまりバドミントンはしたことはなかったが、またやってみたい」と話していた。

その後、グエン選手と留学生らは児童たちと机を並べながら給食にも参加。グエン選手は「おいしい給食を用意していただき感謝している。下松の子どもたちは元気で行儀がよくて驚いた」と話した。

グエン選手は 26 日、ACT SAIKYO の今井優歩選手、川島美南選手らと下松市民体育館で練習する末武中学校のバドミントン部を訪問し、練習を通じて女子部員 7 人らにアドバイスを送った。女子中学生は「世界大会などで活躍する選手と練習でき、とても良い経験になった」振り返った。



バドミントン日本人トップ選手が強化合宿

市民との交流イベントも実施

【調査ホストタウン】

山口県 下松市

【イベント開催日】

2019/8/18

【相手国・地域】

ベトナム

【イベント参加者】

公開練習＝市民約 200 人、講演会＝ジュニア選手ら約 100 人、バドミントン教室＝約 60 人

【競技】

バドミントン

【調査場所】

ほしらんどくだまつ

【調査日】

2020/03/09

【補足情報】

リオ五輪のバドミントン女子シングルス銅メダルの奥原希望選手と NTT 東日本バドミントン部（男女）が 2019 年 6 月 18 日～22 日、山口県下松市で強化合宿を行った。合宿期間中には練習の合間を使い、講演会やバドミントン教室を通じて市民と交流した。下松市は 18 年 12 月、ベトナムを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、ベトナムのバドミントン代表チームの合宿誘致を進めるとともに、オリンピック経験者やトップチームとの交流を通し、地域活性化や生涯スポーツの環境作りを目指している。

この合宿も下松市が誘致。奥原選手とバドミントン国内最高峰の S/J リーグに所属する NTT 東日本バドミントン部の監督や選手ら 27 人が訪れた。19 日～21 日には練習が公開され、約 200 人の市民らがその様子を見守った。

市民との交流事業としては、19 日は奥原選手による講演会が市民交流拠点施設「ほしらんど くだまつ」で行われた。奥原選手は、バドミントン愛好家や ACT BADOMINTON ACADEMY 所属のジュニア選手ら約 100 人を前に、バドミントンに取り組む姿勢や今後の目標について話した。

奥原選手はこれまでの競技人生を振り返り、「目標を立てること。自分を理解し自己分析すること。自分で判断し行動することを常に心掛け、大事にしてきた」と話し、「常に自ら判断、決めた後は努力を積み重ねる。努力の結果が成功につながり、その判断を間違いのないものにしてきた。この 3 つは、競技だけでなく人生についても言えることで、どんな結果になっても後悔のないキラキラした毎日を送ることができる」と熱く語り掛けた。

会場を訪れたジュニア選手に対して、「ただ強くなりたいではなく、課題を理解することが大事。みんなと同じメニューの練習でも、自分の課題を理解し、取り組むことで自分オリジナルの練習に変わる」と話し、「英語は大事。しっかり学んでほしい。世界ではコートを離れば、違う国の選手とコミュニケーションを取り合うことが多い」とアドバイスした。

世界ランク 3 位の奥原選手。東京オリンピックに向けて、「金メダルを目指す。今は 3 番目に近い存在（笑）。プロ転向後、スケジュールのコントロールができるようになり毎日が充実している。これからの 1 年は、これまでの 3 年と違ってレベルの高い大会が続く年になる。最近はタイトルから離れているので、まずはタイトルを取る」と力強く宣言した。

21 日には、NTT 東日本バドミントン部の監督、コーチ、地元実業団チーム ACT SAIKYO 選手によるバドミントン教室が下松市民体育館で行われ、下松市バドミントン協会に所属する愛好家やバドミントンジュニアクラブの選手ら約 60 人が参加した。



大学とタッグ組みホストタウン企画

選手との交流や地元の特長を生かしたプランを学生が提案

【調査ホストタウン】

山口県 下松市

【イベント開催日】

2019/6/15

【相手国・地域】

ベトナム

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

西京銀行本店

【調査日】

2020/03/09

【補足情報】

徳山大学の学生による下松市のホストタウンおもてなしプラン発表会が 2019 年 6 月 15 日、周南市の西京銀行本店で行われた。発表会は、西京銀行が主催する「課題解決型インターンシップ」の一環。地域課題について講師指導の下、大学生が現場で学びながら解決案を考える。2016 年に始まり、今回で 4 回目。今年は徳山大学とミズノが共催し、東京オリンピック・パラリンピックでベトナム女子バドミントンチームのホストタウンとなる下松市が進めるおもてなし事業をテーマにプラン作りが行われた。

発表会の前、6 月 1 日と 8 日にはおもてなしプラン作成に向けたワークショップが行われ、徳山大学の学生 37 人と西京銀行若手社員 5 人が参加。ミズノの原幸彦さんを講師に招き、スポーツビジネスの現状や企画の立て方などを学んだ後、5 班に分かれ「もてなす」プランを企画した。各班は、ワークショップの間にウェブ会議システムでベトナムとつないでヒアリングしたり、バドミントン選手や連携先を訪問しインタビューしたりしてプランに磨きをかけたという。

6 月 15 日の発表会では、下松市をはじめ、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンを務める山口県や防府市、岩国市など 1 県 4 市の担当者 10 人が見守る中、選手と地元小学生でベトナムの伝統的スポーツ・ダーカウを楽しむ企画やベトナム人選手に下松市の地元食材を使ったバーベキューを提供するなど、選手との交流や地元の特長を生かしたプランを提案した。

ベトナム人留学生ダン・アントゥさんが参加するチームは、下松市民とベトナム人が交流を通じて「相思相愛」になってほしいと下松の祭りへ参加し、留学生と日本人大学生と一緒にベトナム料理のフォーやベトナムコーヒーを販売することを提案した。

ダンさんは「日本の皆さんと一緒にプランを考えることがとても楽しかった。何より皆さんにベトナムのことを知ってもらえることがとてもうれしい」と笑顔で話した。

発表会に出席した岩国市のホストタウン事業の担当者は「『おもてなし』に力が入りすぎて押し付け気味になるようなことがなく、アスリート目線だったのが良かった」と話し、下松市の担当者は「発想がとても豊かで、学生らしく自分たちが楽しみながら実行できるプランが多かった。進めていきたい」と前向きな姿勢を見せる。

10月16日には、徳山大学の中嶋ゼミが制作した「ベトナムホストタウンパンフレット」の完成を國井益雄下松市長に報告した。パンフレットには、ホストタウン事業やベトナムの歴史や食文化、盛んなスポーツなどを大学生の視点で分かりやすく伝えている。5000部を印刷し、市内公民館やイベント会場で配布する。



米国との交流事業多彩に

農業体験やハロウィーンイベントに日米の参加者

【調査ホストタウン】

山口県 岩国市

【イベント開催日】

2019/6/15

【相手国・地域】

米国

【イベント参加者】

田植え体験＝56 人、スピーチコンテスト＝80 人、クリスマスツリーを飾ろう＝103 人

【競技】

【調査場所】

市民文化会館、岩国市役所多目的ホール

【調査日】

2020/03/13

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックで米国のホストタウンとなる岩国市では2019年度、農業体験やハロウィーンカーニバル、スピーチコンテストなどを通じた日米交流事業が実施された。

6月15日には、「日米親善田植え体験交流会」が行われた。岩国市と旧天尾小学校を拠点に国際交流に取り組む市民グループ「地域交流の里」が主催する同イベントで、日米の親子らを対象に、日本の食文化に対する理解を深めてもらおうと、田植えなど農業体験を通じた交流を図った。

当日は雨天にもかかわらず、日米合わせ56人が参加。初体験となる田植えに家族で参加したジェイク・ステイシーさんは「コメを育てる農家の苦労が分かった。感謝の気持ちでいっぱい」と話し、息子のエヴァンくんは「泥の中はフワフワして不思議な感じだった」と笑顔で話した。

10月6日には、市民文化会館で「ハロウィーンカーニバル」が開かれた。日本人と外国人合わせて約250人が参加し、魔女やお化け、映画やゲームのキャラクターに扮（ふん）した参加者は仮装コンテストやパンプキン彫り、ダンスなどを楽しんだ。

また、同日は市役所1階の多目的ホールにアメリカ版お化け屋敷「ホーンテッドハウス」を開設。暗闇の中、突然襲い掛かるお化けに、参加者は恐怖の悲鳴を上げていた。参加した女性は「本格的でとても怖かった。悲鳴で声が枯れてしまった」と話した。

さらに11月17日、市民文化会館で日米協会岩国が主催する「第58回日本語・英語スピーチコンテスト」が開かれ、小学1年生から大人まで日米合わせ約80人が出場した。年齢や言語で10の部門に分かれ、日本人は英語で、アメリカ

人は日本語でスピーチ。大きなジェスチャーや冗談を交えながら、将来の夢や家族への思い、趣味などを発表した。

米海兵隊岩国基地内にあるイワクニ・ミドルスクールのレイナ・ラルストンさんは「このコンテストは、みんなを応援できることが楽しい。言葉の壁があっても、日本の皆さんのスピーチは理解できた」と笑顔で話した。

11月30日、岩国市役所多目的ホールで日米交流事業「クリスマスツリーを飾ろう」が行われた。初めて開かれた同イベントには、クリスマスを日米の家族で交流しながら楽しもうと、日本人 17 世帯 51 人、アメリカ人 15 世帯 52 人の計 103 人が参加した。

会場には、クリスマスツリーのオーナメント（飾り）を作るブースを用意。参加者は 9 種類の中から好みのオーナメントを選び、日米スタッフの指導を受けながら作った。クリスマスソングを英語と日本語で合唱すると、サンタクロースが登場。子どもたちは喜びながら駆け寄った。その後、市役所ロビーに移動し、高さ 3 メートルのツリーにオーナメントを飾り付けた。





3 カ国フェンシング女子選手合同練習が中止に

新型コロナによる W 杯開催地変更に伴い

【調査ホストタウン】

山口県 岩国市

【イベント開催日】

2020/3/11

【相手国・地域】

米国

【イベント参加者】

選手やスタッフ計 46 人（予定）

【競技】

フェンシング

【調査場所】

【調査日】

2020/03/13

【補足情報】

岩国市は 2020 年 2 月 14 日、3 月 11 日から 7 日間の日程で開催を予定していた「国際フェンシング女子エペ合宿 in 岩国」の中止を決めた。同年 3 月 20 日・21 日に開催される「フェンシング女子エペワールドカップ」の開催地が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、中国・成都市からウズベキスタン・タシュケントに変更になったのに伴い、岩国での合宿に参加を予定していた国から不参加の申し出があり、合宿開催を断念した。

昨年に続き 2 回目の開催となる予定だった今回の合宿。ハンガリー・ブダペストで行われたグランプリ大会終了後、3 月 10 日に岩国市がホストタウンを務める米国をはじめ、ポーランド、ウクライナのフェンシングエペ女子代表チームが来日、翌 11 日から岩国市の愛宕スポーツコンプレックス・ロータスカルチャーセンターで合同練習を行う予定だった。途中参加の日本代表チームを合わせ選手やスタッフ計 46 人が合宿への参加を表明していた。

国際交流や東京オリンピックの機運を高めることを目的に、期間中、さまざまな交流事業も計画していた。各国選手による合同練習の様子は一般公開するほか、3 月 15 日に開催予定だった岩国国際観光ホテルでの歓迎レセプションでは、昨年好評だった上沼田神楽保存会による神楽の上演を予定していた。16 日には、岩国市のフェンシングジュニアクラブや米海兵隊岩国基地のペリースクールの子ども約 50 人が参加するフェンシング教室や、各国選手に日本文化を体験してもらおうと市内高校の書道部による書道教室などを計画していた。予定には広島県での広島原爆博物館や「おりづるタワー」の見学も含まれていた。

岩国市スポーツ推進課の望月岳人さんは「世界一流の選手の技を市民の皆さんが間近に見るチャンスを逃してしまったのでとても残念。本番となるオリンピック直前キャンプに向け、より一層、市民への周知を進めるとともに、歓迎ムードを高めていきたい」と話す。



米代表女子ソフトボールチームが事前合宿

スポーツ少年団の児童らと交流、紅白戦も

【調査ホストタウン】

山口県 岩国市

【イベント開催日】

2019/8/23

【相手国・地域】

米国

【イベント参加者】

25日～27日に行われた公開練習への来場者＝約 2000 人

【競技】

ソフトボール

【調査場所】

岩国市愛宕スポーツコンプレックス

【調査日】

2020/03/13

【補足情報】

ソフトボール女子米国代表チームが 2019 年 8 月 25 日～27 日、岩国市の愛宕スポーツコンプレックス（愛宕 SC）で事前合宿を行った。合宿は 8 月 30 日から群馬県高崎市で開催される「2019 JAPAN CUP 国際女子ソフトボール大会」の事前練習のために行われた。岩国市は 17 年 7 月、米国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、この合宿は 18 年に続き 2 回目となる。

米国代表チームは 19 年 8 月 25 日、愛宕 SC 内のロータスカルチャーセンターで市内のスポーツ少年団の児童ら 70 人と交流した。チームに分かれ、バスケットボールを使ったドリブル競争などで体を動かした後、じゃんけんや折り紙などを楽しんだ。選手たちは初めての折り紙に苦戦しながらも、児童らに教わりながら楽しそうに折り鶴を完成させていた。

愛宕 SC 内絆スタジアムで 8 月 27 日に予定されていたトヨタ自動車女子ソフトボールチーム・レッドテリアーズとのエキシビジョンマッチは、朝からの強い雨で中止となった。

ただし、同日の午後から小雨となったため、愛宕 SC 内のソフトボール場での練習や紅白戦の様子を公開した。急な予定変更だったが、市の SNS やメールで知った市民ら約 300 人が集まった。打撃練習では、選手が次々と鋭い当たりで柵越えを連発。柵の外では、グローブを持参した少年らがボールをキャッチする様子が見られた。

紅白戦では、4 回に米国代表エースのモニカ・アボット選手が登場。190 センチの長身から繰り出される力強い速球に会場からはどよめきが上がった。試合を観戦した女性は「スピードはもちろん、投げるときの声や大きなミット音など迫力がすごかった」と話し、スポーツ少年団の少年は「あんなスピードのボールを、どうやったら打てるのだろう」と驚いた様子を見せた。

延長 8 回まで行われた試合は、2 対 2 の引き分けとなった。試合後に予定されていたサイン会は雨のため中止となったが、バスに乗り込む選手らを待ち構えていたファンらの求めに、ボールや色紙へのサインや写真撮影になど快く応じていた。

8 月 28 日午後、岩国錦帯橋空港の会議室で JAPAN CUP へ出発する選手に向け壮行会が行われた。岩国市文化スポーツ担当部長の藤本浩志さんは「世界一の皆さんの紅白戦には勇気と感動を頂いた」と感謝し、20 年に予定されていた直前キャンプへ向け、市民一丸となっておもてなしを約束した。アメリカ代表コーチは「キャンプの成功は岩国市無くして実現できない。これからも一緒に金メダルを目指そう」と話した。

なお、8 月 25 日～27 日に行われた公開練習へは約 2000 人が訪れた。





ドイツ柔道代表チームが事前キャンプ

カヌー連盟、ハンドボール代表も徳島県に

【調査ホストタウン】

徳島県・那珂町

【イベント開催日】

2019/8/19

【相手国・地域】

ドイツ

【イベント参加者】

壮行会＝地元の柔道教室に通う小学生の子どもたちや地元中学校の柔道部員など
約 30 人

【競技】

柔道、パラカヌー、ハンドボール

【調査場所】

鳴門・大塚スポーツパーク ソイジョイ武道館

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

ドイツ柔道代表チームが 2019 年 8 月 19 日～26 日の 7 日間、鳴門市の鳴門・大塚スポーツパークのソイジョイ武道館で世界柔道選手権大会の事前キャンプを行った。キャンプには選手 17 人とスタッフ・コーチ 10 人が参加。選手達は軽量級と重量級の 2 組に分かれ、軽量級の選手達は 19 日、重量級の選手達は 22 日にキャンプ地に到着した。

徳島県は、第 1 次世界大戦でドイツ人捕虜を収容した「板東俘虜収容所」が当時の板東町（現在の鳴門市）にあった縁からドイツとの交流が始まり、07 年からニーダーザクセン州と友好協力協定を締結、スポーツ、経済、文化など多くの分野で交流を続けている。16 年 1 月にはドイツを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

今回の事前キャンプには、徳島県とその周辺県の警察柔道部や大学の柔道部の部員が参加し、合同での練習を行った。キャンプ地では、ドイツ代表の選手らを応援するため壮行会を県が企画した。この壮行会は選手らが大会に集中できるようにとの配慮から選手らが到着した次の日に開催。そのため、軽量級と重量級に分かれての 2 度の開催となった。壮行会には、地元の柔道教室に通う小学生の子どもたちや地元中学校の柔道部員など約 30 人が集まった。参加者はドイツ国旗に応援メッセージを寄せ書きして、応援旗を作って贈呈した。

このほか、ドイツカヌー連盟は、徳島県那賀町での東京オリンピック事前キャンプ実施を決定しており、19 年 7 月 18 日には代表コーチが来県し、トレーニング施設などの環境を確認した。徳島県では、併せてパラカヌー代表選手の事前合宿の誘致活動を行っており、ドイツパラカヌー代表選手の東京パラリンピック・テストイベントでの事前キャンプ実施が決定している。

キャンプ地となった那賀町の川口湖ダムは、那賀高校カヌー部の練習場所となっている。ここでは、ドイツカヌー代表監督が那賀高校のカヌー部員 11 人に指導するなどの交流が行われた。代表チームは徳島県の障害者交流プラザも訪れ、「さくら連」の阿波おどりを見たり、一緒に踊ったりして交流を行った。「さくら連」は、特別支援学校の生徒や OB などで構成される阿波おどりの連で、普段か

ら同施設で練習している。当日は、この連の練習日でもあったため、代表チームとの交流が実現した。

さらに、ドイツ女子ハンドボール代表が 19 年 11 月 23 日から 5 日間、鳴門市にあるアミノバリューホールで「2019 女子ハンドボール世界選手権大会」の事前キャンプを行った。キャンプには、スタッフ・コーチ 9 人と選手 17 人が参加。期間中、地元の林崎小学校の児童との交流や鳴門の観光などのプログラムも盛り込まれ、最後に東京 2020 オリンピック事前キャンプ基本協定が締結された。



「徳島ホストタウン特使」創設

ホストタウン事業を効果的に推進

【調査ホストタウン】

徳島県

【イベント開催日】

2020/2/20

【相手国・地域】

カンボジア、ドイツ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

徳島県は 2019 年、東京オリンピック・パラリンピックでのホストタウン事業を効果的に推進するため、徳島ホストタウン特使を創設した。

ホストタウン特使には、ホストタウン相手国・地域へ徳島の魅力を発信することや、その国・地域の文化や魅力を徳島県民が知る機会を作ることが期待されている。ホストタウン特使に任命されるための要件は、対象となる国・地域との交流実績が既にあり、今後もホストタウン事業の推進に貢献が期待される人や団体であることで、これまで徳島商業高校の校内模擬会社 **ComCom** と那賀高校カヌー部の 2 団体に委嘱された。

ComCom は、同校のビジネス研究部内に「人と人とをつなげて新たなビジネスを作っていきたい」という思いで設立された。13 年からカンボジア日本友好学園との交流を続け、これまでにカンボジアの特産品を活用した「共同商品開発プロジェクト」や両国の魅力を伝える活動が続けている。

那賀高校のカヌー部は、16 年から県が主催するニーダーザクセン州とのカヌー交流事業に毎年参加しており、ドイツカヌー連盟が来県した際に徳島県の魅力や取り組みを発表し、ドイツカヌー代表チームの事前キャンプ誘致に貢献していた。両校の生徒はホストタウン特使として代表チームの来県時の交流以外にも、東京でのイベントなどで徳島県のホストタウン事業の取り組みを報告するなど積極的に活動している。

徳島県は 20 年 2 月 20 日～23 日の 4 日間、カンボジアの首都プノンペンで開催された「日本カンボジア絆フェスティバル」へ参加し、徳島のホストタウン活動の取り組みへの理解を促進するための PR 事業を計画していた。このイベントは、12 年から毎年 2 月に行われている。開会式にはカンボジアの各省大臣をはじめとする VIP が数多く出席し、参加者 2 万人規模のカンボジア最大の日本文化イベントとなっている。

20年のイベントでは徳島県がブースを出展、徳島商業の生徒がカンボジア日本友好学園と共同開発した商品の販売や徳島県の紹介を予定していた。しかし、出発直前に、新型コロナウイルスの感染被害が広がっていることを理由に、生徒たちの渡航を断念した。



カンボジア・ネパールの合同強化キャンプ

地元食材を使った高校生考案メニューの振る舞いも

【調査ホストタウン】

徳島県

【イベント開催日】

2019/8/25

【相手国・地域】

カンボジア、ネパール

【イベント参加者】

【競技】

水泳、アーチェリー

【調査場所】

JA バンク蔵本公園内プール、徳島科学技術高校アーチェリー場

【調査日】

2020/03/04

【補足情報】

徳島県は 2019 年 8 月から 9 月にかけて、カンボジア水泳代表チームの強化キャンプとネパールの水泳・アーチェリー代表チームのキャンプを同時に受け入れた。カンボジア代表チームのキャンプ決定後、ネパール代表チームからも強化キャンプを行いたいとの話が持ち上がったため、合同でのキャンプを提案したところ両国代表チームの合同キャンプが実現した。

カンボジア・ネパールの水泳代表チームの合同強化キャンプは、徳島市の JA バンク蔵本公園内のプールで行われた。両国の選手たちは 19 年 9 月 1 日に行われた「第 60 回県中学生学年別選手権」にオープン参加し、地元の中学生と記録を競い合った。

水泳の代表チームと共に来県したネパールのアーチェリー代表チームは、徳島科学技術高校のアーチェリー場で強化キャンプを行った。このアーチェリー場は 19 年 8 月 30 日に落成したばかりの最新の施設で、代表チームの選手たちは、鳴門市の競技場で行われた秋季ターゲット大会に地元の高校生などと共に参加した。

キャンプ期間中、地元の高校生などを中心に両国の代表選手たちをもてなす交流の機会が設けられた。県内唯一の農業高校である城西高校では、同校の阿波藍専攻の学生が代表選手らに本藍染体験を指導した。選手らは藍染の独特の匂いに困惑する場面もあったが、染め上がりを見て満足した様子を見せていた。

8 月 25 日には食の文化交流会が行われた。当日は、城西高校と徳島商業高校の生徒が協力して、カンボジア・ネパールの代表選手達を応援するため、地元の食材を使ったオリジナルメニューの料理を考案し振る舞った。

徳島商業高校は、同校が取り組む校内模擬会社 ComCom が長年にわたりカンボジアと交流しており、カンボジアの特産品を活用した商品の共同開発などに取り組んできた経緯から、徳島ホスタウン特使に任命されていた。

このメニューには、城西高校の生徒が栽培したスダチも使われた。このスダチは、徳島県が認定する GAP 認証を受けている。GAP 認証は東京オリンピック・パラリンピックの食材提供基準の一つにもなっている。そのため、この認証を受けているスダチを栽培する城西高校と、カンボジアとの交流が深い徳島商業高校の両校が協力してメニューを考案。メニューは、選手の暑さ対策、疲労回復や精神をリラックスさせることをテーマに考えられた。



少年野球教室を開催

J A 全農 W C B F 少年野球教室

【調査ホストタウン】

香川県 高松市

【イベント開催日】

2019/12/7

【相手国・地域】

台湾

【イベント参加者】

小学生 121 名指導者 32 名

指導者講習会参加者 12 名（上記 32 名のうち）栄養学教室参加者 18 名

合計 171 名

【競技】

【調査場所】

高松市牟礼中央公園運動センターグラウンド

【調査日】

2019/12/07

【補足情報】

「JA全農 WCBF 少年野球教室」が 2019 年 12 月 7 日、高松市の牟礼中央公園運動センターグラウンドで開催された。この野球教室は、1993 年の東京での開催から毎年数回ずつ全国各地で開催され、今年で 27 年目となっている。高松市は、ホストタウン及び共生社会ホストタウンとして、市民が東京 2020 オリンピック・パラリンピックを身近に感じられるような関連イベントの実施や国内外のトップ選手との交流を推進しており、元プロ野球選手を講師とする少年野球教室は、その格好の機会となった。

138 回目となる今回の野球教室には、高松市内の 11 チームの選手と指導者が参加した。講師となったのは、日本ハムOB 西崎幸広氏、広島OB 西山秀二氏、日本ハムOB 田中幸雄氏、巨人 OB 屋鋪要氏の 4 人で、現役時代は投手、捕手、内野手、外野手として活躍したトップクラスの元プロから「投げる」「捕る」「打つ」「走る」の基本について指導を受けた。

開校式の後、選手たちは講師とともにランニングとストレッチを行い、走塁の基本を屋敷講師から教わった。選手たちはベースの踏み方やリードの取り方など、一つ一つの動作について屋敷講師からの詳細な解説に耳を傾けていた。

走塁指導の後、西崎講師による投げ方の指導が行われた。西崎講師は、選手たちにボールの握り方や正しいフォームでのキャッチボールの仕方を説明し、無理をしてけがをしないようにと選手たちに指導。選手たちは投手、捕手、内野手、外野手の各ポジションに分かれ、ポジションごとに講師からキャッチボールや守備についての指導を受けた。

午後からは、バッティングの基本を田中講師が指導。ロングティーを使ったバッティングを田中講師が披露すると、打球はフェンス近くまで飛び、参加者からは驚きの声が上がっていた。その後、選手たちはチームごとにロングティーを行い、講師からそれぞれの選手に合わせたバッティングのアドバイスを受けた。

野球教室の最後には、各講師に選ばれた投手 1 人と打者 4 人の一打席対決が行われた。講師たちが見守る中行われた真剣勝負に、周りで見えていた選手たちが大きな声援を送った。一打席対決の最後には、サプライズで田中講師がバッターとして登場。田中講師がセンターフライに打ち取られると、グラウンドにいた選手たちから、この日一番の歓声が上がった。

閉校式では、一打席対決に参加した選手とじゃんけん大会で勝ち残った 3 人の選手に講師からサインボールがプレゼントされた。サインボールを受け取った選手は笑顔で講師全員とハイタッチを交わした。

最後に西崎講師の講評で、指導者や保護者などのチーム関係者への感謝の気持ちと、選手たちがけがをせず楽しく野球を続けられるようサポートしてほしいとの要望が寄せられた。選手たちの「ありがとうございました」という大きな声のあいさつで野球教室は締めくくられた。





パラサイクリング体験会を開催

障害者らがパラ正式競技・タンデム自転車体験

【調査ホストタウン】

香川県 高松市

【イベント開催日】

2020/3/23

【相手国・地域】

台湾

【イベント参加者】

障害者とその家族 18 人、高松競輪選手会香川支部の競輪選手 12 人、ボランティア 21 人

【競技】

【調査場所】

高松競輪場

【調査日】

2020/02/23

【補足情報】

高松市の高松競輪場で 2020 年 2 月 23 日、パラサイクリング体験会が行われた。

このイベントは、東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成を目的とした、「高松スポーツ・健康感謝祭 2020」の一環で開催された。当日は視覚障害や知的障害などを持つ人とその家族が参加し、東京パラリンピックの正式競技でもあるタンデム自転車を体験した。

NPO 法人「タンデム自転車 NON ちゃん倶楽部」代表の津賀さんがタンデム自転車について説明した後、参加者たちはパイロットを務める現役の競輪選手と一緒にタンデム自転車で走り出した。

自転車のスピードを感じた喜びやペダルを漕いだ足の疲れなど初めての体験を楽しそうに家族と話す姿が見られた。視覚障害のある参加者の一人は、競輪選手の太腿に触れ、その太さに驚いていた。

その後、参加者らは競輪場のバンクを体験するためコーナー部分へ移動。バンクを実際に登り、その傾斜の大きさと高さに驚きを隠せない様子だった。ついさっき自転車で走ったコーナーに、大きな傾斜があったことを知った視覚障害の若者は「こんなに傾きのある場所を、あんなにスピードを出して走っていたと思うと怖い」と感想を語った。

バンクの傾斜を利用して全員での記念写真を撮影した後、それぞれの参加者は競輪選手のヘルメットやカラフルな勝負服を借りて、選手との撮影を楽しんだ。参加者たちは競輪にも興味を持った様子で、選手たちの説明に熱心に耳を傾けていた。

最後の閉会式では、市の担当者、香川サイクリング協会会長、競輪選手会香川支部長、NONちゃん倶楽部の代表がそれぞれ、感謝の言葉とあいさつを述べた。

閉会式が終わろうとした時、一人の参加者が前に出てきた。その参加者は知的障害者だったが、一生懸命自分の言葉でその日の感動を選手に伝え、「また来てほしい」とリクエストした。それを見た他の参加者も、次々と自分の言葉で選手たちに感謝を伝えた。選手たちは、「このような機会があればいつでも協力する」と笑顔で応え、参加者との再会を約束して体験会は終了した。

元五輪選手・池谷幸雄さん講師に親子体操教室

柔軟体操の大切さを訴える 親子のできる運動紹介

【調査ホストタウン】

香川県 高松市

【イベント開催日】

2020/2/23

【相手国・地域】

台湾

【イベント参加者】

小学生と保護者 50組 100人

【競技】

【調査場所】

高松市総合体育館

【調査日】

2020/02/23

【補足情報】

高松市総合体育館第一競技場ステージ前で 2020 年 2 月 23 日、元オリンピック選手の池谷幸雄さんを講師に迎え、親子体操教室が開催された。当日は、事前登録した小学生と保護者の 50 組 100 人が参加した。

参加者らは会場に到着すると、入り口の受付に用意された本物のオリンピックのメダルを手に取り記念撮影を楽しんだ。子どもたちはうれしそうに複数のメダルを首に掛けたり、メダルを獲得した選手のようなポーズを取ったりしていた。

開始時刻になり、ステージ上に登場した池谷さんは大きな声であいさつ。そして、大きな声を出す事の大切さについて語り始め、体操教室が始まった。

最初に「どうやって体を動かしているのか？」と問いかけた池谷さん。子どもたちと一緒に手や足でグー、チョキ、パーを作りながら、目で見、耳で聞いて、頭で考えて体を動かしていることを体感させた。「どんなスポーツでもうまくなるためには、自分の体を上手に動かすことが大事」だと語り、その日習う運動を毎日行うことで、自分の体を自分の思った通りに動かせるようになると説明。さらに、スポーツを楽しむためには、けがをしにくい体作りが大切であることも説明した。

準備運動が始まると、池谷さんは保護者に「体の柔らかさに自信があるか」と問いかけたが、自分の体が柔らかいと思っている保護者は一人もいなかった。池谷さんは改めて体の柔軟性がけがの予防に重要であることを説明、ステージから降りると子どもや親の背中を押して柔軟体操を手伝った。その後、池谷さんから親子がゲーム感覚で取り組める運動の説明を受けながら体を動かした。さらに、池谷さんは肩こりの解消や老後の健康に役立つ運動の大切さを説明した。

体操教室が終わると、参加者は家族と一緒に池谷さんとの記念撮影に臨んだ。持参した色紙や T シャツにサインをもらって喜ぶ子どもの姿も見られた。

記念撮影を終えた池谷さんは、体操教室を手伝っていた高松北中学校・高校の体操部員らを集め、感謝と今後の活躍への期待の言葉を伝えた。

マルタ大使が講演会

温暖な気候やオリーブ栽培など小豆島と共通点

【調査ホストタウン】

香川県 土庄町

【イベント開催日】

2019/12/7

【相手国・地域】

マルタ

【イベント参加者】

土庄町の町民約50人

【競技】

【調査場所】

土庄町立中央公民館

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

マルタ共和国の在外日本担当大使アンドレ・スピテリ氏が 2019 年 12 月 7 日、東京オリンピック・パラリンピックで同国のホストタウンとなっている香川県土庄町を初めて訪問し、マルタの歴史や文化などを紹介する講演を行った。同町は同年 8 月、マルタを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。温暖な気候やオリーブを特産品とすることなど共通点が多いことから、町を挙げての交流事業を進めている。

町立中央公民館で開催された講演会には、約 50 人の町民が参加し、スピテリ大使が会場に入ると、手作りのマルタ国旗の小旗を振って歓迎した。笑顔で応じたスピテリ大使は「初めて四国を訪れた。数日間の滞在だが、皆さんと触れあって、この町の文化と歴史について学びたい」と語り、講演を開始した。マルタの地理、言語、気候などについて説明し、「地中海の温暖な気候に恵まれたマルタはオリーブ栽培も盛んで、（土庄町）小豆島とよく似ている」と町民に語りかけた。世界遺産の首都ヴァレッタをはじめ、歴史的・文化的遺産なども多く、その背景にある歴史を説明した後、国民性、食事、文化、情熱的なイベントなどマルタの魅力を伝えた。

講演は英語で行われたが、日本で複数の大学に留学経験があるスピテリ大使は、現在も日本語学校に通って会話力の向上に努めている。講演の中で、天皇陛下の即位の礼に出席したことにも触れ、「素晴らしく感動的な経験だった」と語った。

講演の後半は町民との質疑応答で交流を図った。小豆島観光のボランティアガイドを行っているメンバーからは積極的に英語で質問が行われた。飲み水に関する質問、マルタの方言（マルタ語）、ホームステイや留学に関する質問など活発なやり取りが続いた。

講演を終えたスピテリ大使は「今日は十分にマルタのことを伝えることができた。マルタはいつでも皆さんを歓迎する。オリンピック期間中にマルタの選手が土庄町を訪問することが成功すると信じている」と土庄町と交流を図ることを強調した。

講演に参加した町民からは「楽しい講演会だった」「（東京）オリンピックが楽しみにになった」との声が多かった。

講演会を企画、運営した町教育委員会事務局・生涯学習課の山本将大さんは「スピテリ大使の訪問スケジュールの関係で町民に周知する期間が限られ集客に苦労したが、活発な講演会になって良かった」と語った。



マルタ大使が児童生徒と交流

土庄こども園、土庄小学校、土庄中学校を訪問

【調査ホストタウン】

香川県 土庄町

【イベント開催日】

2019/12/9

【相手国・地域】

マルタ

【イベント参加者】

土庄こども園、土庄小学校、土庄中学校の園児・児童・生徒約 9 5 0 名

【競技】

【調査場所】

土庄こども園、土庄小学校、土庄中学校

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流で土庄町を訪れているマルタ共和国の在外日本担当大使アンドレ・スピテリ氏が 2019 年 12 月 9 日、土庄こども園、土庄小学校、土庄中学校を訪問し、授業参観などで園児や児童・生徒と交流を深めた。同町は同年 8 月、マルタを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。温暖な気候やオリーブを特産品とすることなど共通点が多いことから、町を挙げての交流事業を進めている。

当日は朝から土庄こども園を訪問。0 歳児から 5 歳児まで約 160 人の園児らの各クラスを順番に見学したスピテリ大使は、いたるところで園児達に囲まれ「目の色が青いのはなぜ？」などと質問攻めに逢いながらも笑顔で応えていた。

こども園の発表会で披露する園の歌の練習も見学し園児らの元気な歌声を楽しそうに聞いていた。こども園の職員は「大使は気さくな人柄でした」と感想を述べていた。

次に訪れた土庄小学校では、1 年生から 6 年生の各クラスの授業を参観した。6 年生のクラスで児童代表から「小豆島にはたくさんのオリーブがあります」と英語で説明を受けたスピテリ大使は、マルタの場所や食べ物が美味しいことを説明。マルタの伝統料理にウサギ料理があることを伝えたと児童たちは驚いた様子だった。5 年生のクラスではスピテリ大使が「人生で初めての経験」と語った書道を経験。すずりに入った墨汁に筆をどこまでつけるのか児童に確認しながら、手本通りに水原秋桜子の俳句を書き、回りを取り囲んだ児童から拍手を受けた。筆の持ち方、筆運びなども上手で、文鎮の使い方なども教わり興味津々の様子だった。

続いて訪問した土庄中学校では 3 年生の英語授業を見学した。最初は生徒の机に座って授業を聴いていたが、途中で机を円形に並び変えて生徒全員の顔が見えるスタイルに変更し、各生徒が小豆島のいい所を英語で発表した。スピテリ大使はそれぞれの発表に感想を述べるなど一緒に授業に参加した。お昼には生徒たちと一緒に給食も食べ、隣に座った生徒会長と英語で会話をしながら食事を楽しんだ。

学校訪問を終えたスピテリ大使は「親切で情熱のある子どもたちに会えてうれしかった。日本の学校は勉強だけでなくマナーやチームワークも学べるのが素晴らしい」と話していた。

学校訪問に同行した町教育委員会事務局・生涯学習課の山本将大さんは「スピテリ大使は日本の学校教育に興味を持っており、海外の学校と違って生徒たちが自ら学校の清掃を行うことにも注目していた。実際に清掃の体験も希望されていたが時間がなく実現できなかったことが残念だった」と語っていた。



マルタ大使が観光スポットを視察

音楽フェスティバルであいさつも

【調査ホストタウン】

香川県 土庄町

【イベント開催日】

2019/12/8

【相手国・地域】

マルタ

【イベント参加者】

土庄町音楽フェスティバル＝町民など約400名

【競技】

【調査場所】

小瀬石鎚神社、宝生院、土庄町立中央公民館

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流で土庄町を訪れているマルタ共和国の在外日本担当大使アンドレ・スピテリ氏が、2019年12月7、8の両日、土庄町の観光スポットを視察し、毎年恒例で開催されている「土庄町音楽フェスティバル」で来賓として挨拶を行った。同町は同年8月、マルタを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。温暖な気候やオリーブを特産品とすることなど共通点が多いことから、町を挙げての交流事業を進めている。

スピテリ大使は、7日にホストタウン交流事業として開催した講演会後に、「世界一狭い海峡」としてギネスブックに認定された土渕海峡、日本一大きい盆栽といわれる「宝生院のシンパク」など土庄町の観光スポットを精力的に視察した。宝生院では住職から詳しい説明を受け、スピテリ大使も次々に質問を投げかけていた。

翌8日、スピテリ大使は早朝のジョギングを終えた後、小豆島の西端の山頂にある小瀬石鎚神社の「重ね岩」を視察。瀬戸内海の島々を一望することができる山頂からの絶景に、スピテリ大使は「マルタの風景と良く似ている」と語り、マルタと同じ島ならではの風景に親近感を持っているようだった。

続いて、大坂城の石垣のために小豆島で切り出されながら運搬されずに残った石を「残念石」として保存している「大坂城残石記念公園」を視察し、石に刻まれた家紋に興味を示した。午後には、今年で27回目となる「土庄町音楽フェスティバル」に来賓として参加した。コーラスやマンドリン、大正琴、太鼓などさまざまなジャンルの音楽愛好家が集まる音楽フェスティバルは、毎年約400人が訪れる。スピテリ大使は集まった来場者に「来年のオリンピック期間中にマルタの選手が土庄町を訪れますのでよろしくお願いします」と日本語で挨拶を行った。

オリンピック期間中に土庄町を訪れるマルタの選手は、学校訪問や総合型地域スポーツクラブなどでの開催されるイベントで町民との触れあいを予定している。また、中学校のESS部の部員とマルタ共和国の学生との間でメール交換を通じた交流を企画するなど地域交流にも力を入れている。



マレーシアバドミントン・シニア代表チームが合宿

国際フレンドリーマッチ in 愛媛

【調査ホストタウン】

愛媛県・松山市・砥部町

【イベント開催日】

2019/12/25

【相手国・地域】

マレーシア

【イベント参加者】

選手 34 人、高校生サポーター約 100 人、観客約 700 人

【競技】

バドミントン

【調査場所】

愛媛県武道館

【調査日】

2019/12/25

【補足情報】

マレーシアから訪れているバドミントン・シニア代表チームの選手 20 人と日本国内の実業団選手ら 14 人による「国際フレンドリーマッチ in 愛媛」が 2019 年 12 月 25 日、愛媛県武道館で行われた。愛媛県はバドミントン競技を通じてマレーシアとの交流等を行ってきた経緯から、2018 年 6 月にマレーシアを相手国とする 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、愛媛県を同国ナショナルチームの事前合宿地とすることが決定した。今回はその一環として、12 月 22 日～29 日の 8 日間、松山市と砥部町で合宿を行った。

開会式の冒頭で、2011 年から 5 年間にわたって愛媛県バドミントン協会の専属コーチとしてジュニア選手の育成などに貢献したマレーシア出身のイズワン・イブラヒム（Mohamad Izuan Bin Ibrahim）さんの急逝が伝えられた。イブラヒムさんは、今回の五輪事前合宿実現にも大きな役割を果たすなど、バドミントン強豪国・マレーシアと愛媛県の絆を深めることに尽力した。

中村時広愛媛県知事は「2011 年からの 5 年間、イブラヒムさんが愛媛のジュニアチーム育成に携わり交流を深めてくれたおかげで、近年では愛媛の高校生が四国大会で上位入賞を果たし、全国の舞台で活躍できるようにもなった。マレーシアチームの合宿は、2018 年 8 月のシニア・ジュニア合宿、2019 年 6 月のジュニア合宿に続いて 3 回目。今日のマレーシア代表チームと日本トップレベルの実業団選手の試合は、フレンドリーマッチとはいえ、相当にレベルの高いものになると思う。トップクラスの選手たちの戦いが、若い愛媛の選手たちにとって大きな刺激となり、レベルアップにつながることを期待したい」とあいさつで述べた。

マレーシアチームからは、チームリーダーを務めるジム・ジョーヒアンさんが「今回の合宿開催に、協会を代表して感謝を伝えたい」とあいさつ。「2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて全力で戦います」と意欲を見せた。

続いて行われたオープニングラリーでは、マレーシアチーム所属で、男子シングルス世界ランク 14 位のリー・ジジャ選手と、大学時代、バドミントン部に所属していた中村知事が対戦。本来ならば 1 プレーで終了するはずのオープニングラ

リーは、中村知事の「もう 1 回」のリクエストに応じて全 4 回の白熱した戦いとなり、会場を沸かせた。

マレーシア代表は、男子ダブルス・世界ランク 8 位のアーロン・チア選手、ソー・ウィーイク選手、混合ダブルス・世界ランク 8 位のゴー・スンファット選手、ライ・シェボン・ジェミー選手らがフレンドリーマッチに登場。日本チームは、日本ユニシス、トナミ運輸、丸杉、ヨネックスなどの実業団選手に加え、全国高校選抜大会四国予選で優勝した新田高校の甲斐聡一郎選手と神山新悟選手らも参加して、熱戦を繰り広げた。

会場の設営や受付、フレンドリーマッチの線審など試合のサポートは、愛媛県内でバドミントン部に所属する高校生ら約 100 人が担当した。

控えの時間に選手らの戦いを観戦していた新田高校の竹田智哉さんは「これまでもレベルの高い試合を観戦したことはあったが、今回は全く次元が違う。言葉にならない。どうしてあんな球が拾えるのか、ほとんど無意識で体が動いているとしか思えない」と、コートの間近で白熱した戦いを見据えた。

会場に詰め掛けた観客は約 700 人。試合後にはバドミントングッズが当たる抽選会や、マレーシア代表と日本選手のハイタッチ交流なども行われた。



マレーシア代表選手に「食のおもてなし」

餅つきの実演も

【調査ホストタウン】

愛媛県・松山市・砥部町

【イベント開催日】

2019/12/26

【相手国・地域】

マレーシア

【イベント参加者】

【競技】

バドミントン

【調査場所】

砥部町保健センター

【調査日】

2019/12/26

【補足情報】

愛媛県松山市と砥部町で合宿を行っているマレーシア代表バドミントンチームの選手らが休養日の 2019 年 12 月 26 日午後、砥部町保健センターで「食のおもてなし」を楽しんだ。松山市と砥部町は、愛媛県とともにマレーシアを相手国とする 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

12 月 22 日～29 日の 8 日間行われる合宿期間中、選手団は砥部町で 2 日間宿泊する。「食のおもてなし交流事業」当日の 26 日は小雨が降るあいにくの天気となったが、日本の伝統的な正月の風習を楽しんでもらおうと、砥部町保健センターの食堂に隣接して設置されたテントの中で餅つきが行われた。

テント内には、砥部中学校バドミントン部の父兄らを中心に町内の「餅つきのスペシャリスト」4 人が集結。選手らは「餅つき」の実演を見学した後、「杵（きね）つき」「合いの手」に次々と挑戦し、つきたての餅に餡（あん）を包んで頬張って笑顔を見せた。

歓迎のあいさつでは、佐川秀紀砥部町長がジャケットを脱いで、自身の名前が入ったマレーシア・ナショナルチームのユニホームを披露。「このユニホームは、2018 年 7 月に行われたマレーシア・バドミントン協会との東京五輪事前合宿に向けた基本合意書締結式の際に頂いたもの」と紹介した。「事前にわざわざ、私の名前を入れたユニホームを作ってくれていた、その心遣いが本当にうれしかった。今回の合宿では、皆さんのためにできる限りのサポートをしたい。最終日の 28 日まで十分に練習をして鋭気を養い、オリンピックでは、ぜひ素晴らしい成果を出してください」と、感謝と激励の言葉を贈った。

用意されたメニューは、つきたての餅のほか、「鳥の唐揚げ」と郷土料理の「芋炊き」など。イスラム教徒も多いマレーシアの選手らに配慮して、調理に使う肉類などは、愛媛県からハラール対応のものが届けられた。

選手らは卓上に盛られた「唐揚げ」や、丼に盛って配られる「芋炊き」に舌鼓を打ち、お代わりの声も上がるなど厨房（ちゅうぼう）の調理担当者らを喜ばせた。餅は、ぜんざいやあべかわ、のり巻きなどさまざまな食べ方が紹介され、選手らは思い思いに好みの味を見つけてつきたての餅を楽しんだ。

メニューの考案と調理に携わった地元のスポーツ栄養士、上田真知子さんは「みりんはお酒が入っていて（イスラム教徒への提供には）使えないので、みりん風調味料を使うなど配慮したが、最終的にはいつもの味に仕上げる事ができた。皆さんの口に合ったようでうれしい。餅は、のり巻きが人気で驚いた」と笑顔で話した。

砥部中学校バドミントン部の中学生らも、餅つきや配膳、会場設営などの準備に参加。その後、食堂で選手らと昼食を共にして交流を深めた。

伝統工芸品「砥部焼」の産地でもある砥部町。「食卓で使われている食器は、全てこの砥部町で作られたもの」との紹介に、選手らが手に持つ器を目の高さに持ち上げて眺める姿も見られた。選手らには町長から、来年の干支（えと）をあしらったねずみの置物と湯飲みがプレゼントされた。





マレーシア・モザンビーク事前合宿

地元の観光資源生かし交流事業

【調査ホストタウン】

愛媛県・松山市・砥部町、愛媛県・松山市・新居浜市・伊予市

【イベント開催日】

2019/6/26

【相手国・地域】

マレーシア、モザンビーク

【イベント参加者】

砥部焼絵付け体験＝選手ら 21 人とコーチ 3 人

【競技】

マレーシア＝バドミントン、モザンビーク＝陸上・空手

【調査場所】

砥部焼陶芸創作館、松山市内、ニンジニアスタジアム

【調査日】

2020/02/06

【補足情報】

松山市と砥部町でマレーシアバドミントンジュニアチームとモザンビーク陸上・空手代表選手の事前合宿が 2019 年 6 月から 8 月にかけて行われた。合宿に際し、地元の観光資源やイベントを生かしたホストタウン交流事業が企画され、両国の選手らは砥部町の伝統産業である「砥部焼」の絵付け体験や夏の恒例行事「松山まつり・野球拳踊り大会」に参加した。

「砥部焼絵付け体験」のおもてなしが行われたのは、マレーシアバドミントンジュニアチーム合宿中盤の休養日に当たる同年 6 月 26 日。選手ら 21 人とコーチ 3 人が陶芸創作館（砥部町五本松）で、愛媛県の伝統産業「砥部焼」の絵付けに挑戦した。

選手らは、素焼きの皿やマグカップ、プレートなど思い思いの品を手に取り、「呉須」と呼ばれる砥部焼特有の藍色の顔料を筆に付けて、真剣な表情で絵付けに取り組んだ。選手らが描いた作品は、日本とマレーシアの友好を示す地図と国旗や日本のアニメキャラクターのイラスト、漢字で書いた自らの名前などさまざま。絵付けした作品は、滞在中に釉薬（うわぐすり）をかけて本焼きし、滞在中の選手らにプレゼントされた。

続く 7 月 31 日～8 月 13 日にかけて行われたモザンビークの空手・陸上選手の合宿では、8 月 9 日に行われた夏の恒例行事「松山まつり・野球拳おどり」に、空手の代表選手のマリネラ・ムチャンガさんが「愛媛県庁連」の一員として参加。県職員らと同じ衣装を着用し、周囲の振り付けをまねながら笑顔で踊りの列に加わった。さらに、陸上の選手 2 人は 8 月 10 日・11 日、ニンジニアスタジアム（松山市上野町）で行われた「えひめ強化記録会」に参加した。

8 月 1 日に愛媛県知事を表敬訪問した際、「憧れの日本に来られて夢のよう。愛媛で自己ベストを出せるように頑張る」と意気込みを語っていたジェニト・ゲザネ選手は、男子 800 メートルで 1 分 52 秒 94 の記録を出して自己ベストを更新。セシリア・グアンベ選手も女子 100 メートルハードルで 14 秒 60 と、自己ベストを更新する快走を見せた。

愛媛県とモザンビークの縁は 2000 年、NPO 法人「愛媛グローバルネットワーク」が、整備済みの放置自転車やミシン、文房具などを支援物資として贈るプロジェクトを開始したことにさかのぼる。このプロジェクトは、60 年代半ばから続いたモザンビークの内戦が 1992 年に終結し、市民の手に残された武器を市民自らが回収して、平和教育と共に武装解除を進める「銃を鋤（くわ）へ」プロジェクトを支援する目的で始まった。

愛媛グローバルネットワークは松山市に対して、市内で回収された放置自転車を NGO や NPO に無償で譲渡できるよう提言。市もそれを受け入れ、これまでに計 7 回、660 台の自転車のほか、ミシンや文房具などを現地へ送ってきた。

東京オリンピック・パラリンピックに向けてモザンビークは、在モザンビーク日本国大使館を通じ、愛媛県にホストタウンとしての代表選手事前合宿受け入れを打診。モザンビークオリンピック委員会と愛媛県・松山市・新居浜市・伊予市の 4 自治体が基本合意し、今回の合宿と交流事業が実現した。

愛媛県オリパラ・マスターズ推進室の安藤泰将さんは「オリンピック・パラリンピックに向けた事前合宿はもちろん選手らのトレーニングが主な目的だが、地域の人との交流や愛媛ならではの文化的体験を楽しむことでリフレッシュし、よりよい成果につなげてもらいたい」と期待を込める。



長距離コースで自転車イベント

四万十・足摺無限大チャレンジライド

【調査ホストタウン自治体】

高知県・宿毛市

【イベント開催日】

2019/11/16

【相手国・地域】

オランダ

【イベント参加者】

「四万十・足摺無限大チャレンジライド」第1回～第7回は約600人、第8回は中止。「宿毛サイクルフェスティバル」第3回は約400人。

【競技】

自転車

【調査場所】

宿毛市総合運動公園、宿毛市役所

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

宿毛市は、オランダの自転車女子ナショナルチームのホストタウンとして、合宿を受け入れたほか、市民も楽しめる自転車イベントを積極的に開催している。2020年3月に予定していた長距離ライドのイベントは新型コロナウイルスの影響で中止となったが、市は東京五輪終了後を見据え、コースの整備などを進める方針だ。

四国の南西部に位置する宿毛市は、入り組んだ海辺の道や起伏に富む山道があり、サイクリングに適している。13年から、近隣地域を合わせた6市町村の枠組みで「四万十・足摺無限大チャレンジライド」を開催してきた。自然豊かな100キロ超のコースを楽しみながら時間内に完走しようという趣旨のイベントで、休憩ポイントでは地元の食べ物がふるまわれる。

20年3月14、15両日に予定されていた第8回大会には過去最多となる延べ676人がエントリー。全長104～150キロの3種のコースを用意していた。元ロードレースチャンピオンのオランダ人女性、イリス・スラッペンデルさんが参加して五輪に向けた機運を盛り上げるようになっていたが、新型コロナウイルス感染防止のため開催断念に追い込まれた。

イリスさんは18年3月、19年3月の直近2の大会に出場。市民との交流行事にも参加した。オランダの選手が五輪でメダルを獲得すれば、市は21年の大会に招へいしたい考えだ。

一方、宿毛市は17年11月～12月にオランダ女子チームの合宿を受け入れたことを機に、市単独のイベント「宿毛サイクルフェスティバル」を始めた。3回目となった19年11月16日には約400人が参加。海沿いと山間部の2種類のコース（距離はいずれも7キロ弱）でライドを実施したほか、幼児を対象にしたキックバイクレースや、安全な乗り方の講習を行った。

市は五輪後も自転車を生かした街づくりを進めることにしており、総合運動公園にマウンテンバイクのコースを整備する。コースの設計に当たっては、全日本シクロクロス選手権で優勝経験を持つ竹之内悠さんが監修。20年度に3キロ程度を先行整備し、近接する森林への延伸を視野に入れている。

オランダチームが合宿で走ったコースのマップを作成する構想もあり、市は今後、大学や社会人の自転車チームの合宿誘致に力を入れる。中平富宏市長は「自転車の良さは、環境、健康、経済の面から見直されており、宿毛を売り込む有効なツールになる。他ではできない体験ができる環境をつくり、差別化を図りたい」と話している。



オランダ人招き異文化交流授業

5 人が延べ 9 校で教壇に

【調査ホストタウン】

高知県・宿毛市

【イベント開催日】

2019/7/11

【相手国・地域】

オランダ

【イベント参加者】

宿毛市内の公立小中高校延べ9校の児童・生徒

【競技】

【調査場所】

宿毛市総合運動公園、宿毛市役所

【調査日】

2020/03/11

【補足情報】

宿毛市は、オランダを相手国とするホストタウン交流事業の一環で、日本語弁論大会の受賞者らを市内の学校に招き、異文化交流授業を行っている。これまでに5人のオランダ人が延べ9校で教壇に立った。

2019年度には、第32回日本語弁論大会（在オランダ日本大使館主催）で高知県が授賞する「よさこい賞」に選ばれたブラム・インダロ・メインスさんが宿毛市を来訪。19年7月11日に市立の大島小学校、宿毛小学校、平田小学校の3か所でそれぞれ交流授業に臨んだ。

ブラムさんは、オランダの自転車大国ぶりを紹介し、「人口よりも自転車の台数のほうが多い」「国王も自転車で通勤している」などと説明した。さらに、「オランダでは小学生も落第する」「運河の多い国なので、溺れないように水泳の資格を取る必要がある」といった事情を話すと、児童たちは驚いた様子で聞き入った。

ブラムさんは食文化の違いにも触れ、大晦日に日本では年越しそばを食べるが、オランダ人は「年越しドーナツ」を食べる習慣があると伝えた。また、「世界一まずい飴」と評判のあるオランダの飴を児童に配って試食。オランダ国民には愛着のある野草風味の飴だというが、日本の子供の口にはあまり合わなかったようだ。

初めて交流授業が行われたのは18年1月。第30回の弁論大会でよさこい賞を獲得したマギー・ビショップさんが県立宿毛高校で受け持った。次によさこい賞に輝いたデリシア・ヴァン・フリデリシさんは同年7月に市立片島中学校で授業を担当。さらに、19年2月には、オランダから高知県梶原町に移住した和紙職人、ロギール・アウテンボーガルトさんの授業を市立山奈小学校で行った。

自転車の元ロードレースチャンピオン、イリス・スラッペンデルさんも 19 年 3 月、片島中学校、咸陽小学校、松田川小学校の生徒・児童に交流授業を実施。ロードバイクを持ち込んで、正しい乗り方を体験してもらった。

オランダの学校には給食がなく、先生役を務めたオランダの方々にとって、日本の給食は新鮮な体験となった。また、児童らは各授業を通じ、「ガラス」「ランドセル」といったなじみのある言葉がオランダ語に由来することを学び、日蘭両国のつながりの深さを再認識できたようだ。

中平富宏市長は「外国人と接する機会が少ない場所だったが、ホストタウン事業によって市民に広い視野を持ってもらえるし、郷土愛も生まれる」と意義を強調している。





ツアー、写真でオランダ応援

市民から激励写真を募集

【調査ホストタウン】

高知県・宿毛市

【イベント開催日】

2020/7/26

【相手国・地域】

オランダ

【イベント参加者】

ツアーは宿毛市内の小学4～6年生。激励写真は広く市民一般。

【競技】

自転車

【調査場所】

宿毛市運動公園、宿毛市役所

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

宿毛市は、東京オリンピックでメダルの期待がかかる自転車の強豪オランダを市民全体で応援するため、オリンピック本番での応援ツアーを企画しているほか、市民から激励の写真を募集している。

東京オリンピックの自転車女子ロードレースは、2020年7月26日に東京都の武蔵野の森公園から静岡県富士スピードウェイまでの全長147キロのコースで行われる予定で、宿毛市からは小学校4～6年生を中心に約40人規模の応援団を静岡県に派遣する。自転車レースでは、音の出るものを使って応援するのがならわしで、宿毛市の応援団は高知県のよさこい祭りの時に踊り子が握る木製の鳴子（なるこ）を持っていくことにしている。

現地で掲げる横断幕は既に完成。オランダのシンボルカラーのオレンジ色の布地に「HUP! HOLLAND HUP!」（日本語で「行け！ オランダ 行け！」の意味）と白抜きで大きく書かれている。子供たちの応援メッセージの寄せ書きもある。

オランダ女子チームが着用するサイクルウェアも宿毛市とつながりがある。元ロードレースチャンピオンでデザイナーのイリス・スラッペンデルさんは19年3月に同市を訪れた際、地元小学生に思い思いのウェア用デザイン原画を描いてもらい、そこからインスピレーションを得て図柄を考案した。

中平富宏市長は「大事なものは人と人の縁。応援にストーリーが伴うことになる。宿毛とオランダの間にできた線を大きな帯にして後世に残していきたい」と語る。

宿毛市はまた、オレンジ色のものを身に着けてオランダ選手を励ます写真を市民から募集している。集めた写真は20ページ程度のアルバムにまとめ、チームに贈る予定だ。市の広報紙にはオランダ選手が近況を報告する欄があり、市民に親近感を持ってもらおうとしている。

このほか、宿毛市のプレミアム付商品券はオレンジ色基調のデザインで、「頑張れオランダ 金メダル!」と書かれている。市職員の名札をぶら下げるひももオレンジ色にした。

五輪閉幕後、オランダチームのコーチがしばらく日本に滞在する予定であることから、宿毛市は報告会や交流イベントを検討している。

宿毛市スポーツ振興室長の豊田直史さんは、02年のサッカー・ワールドカップでカメルーンのキャンプ地となった大分県中津江村（現日田市）の例を挙げ、「村全体で応援した中津江とカメルーンのような関係が目指すところだ」と話す。



ホストタウン相手国のドイツ文化を紹介

給食でドイツ料理紹介、ザワークラフトなど

【調査ホストタウン】

福岡県 田川市

【イベント開催日】

2020/2/12

【相手国・地域】

ドイツ

【イベント参加者】

小学 5 年生（31 人）と 6 年生（28 人）、中学生全員（87 人）

【競技】

【調査場所】

猪位金（いいかね）学園

【調査日】

2020/02/12

【補足情報】

「ドイツ文化紹介とドイツ料理給食の提供」が 2020 年 2 月 12 日、田川市立の
中小一貫校「猪位金（いいかね）学園」で行われた。同市に勤務する国際交流員
で、ドイツ・マクデブルク市出身のアネマリー・グンツェルさんがこれに合わせて
同校の児童・生徒らに現地のあいさつや地理、国際交流員としての自身の仕事
などを紹介した。

田川市は以前より、スポーツ少年団を通じた交流でドイツとなじみがあったこ
とから、同国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン
に名乗りを上げ、2016 年 6 月に登録された。グンツェルさんは事前キャンプ誘
致のために雇用された国際交流員で、2017 年の就任以降、ドイツの伝統的なラン
タン祭りや料理教室の開催などを通じて市民にドイツ文化を紹介している。

同市は 2020 年 7 月、「車いすフェンシング」ドイツ代表選手の事前キャンプ
を受け入れる。グンツェルさんは、児童・生徒らに健常者のフェンシングと違い
車輪が固定された車いすで戦う独特のルール説明も行った。

給食は、5 年生（31 人）と 6 年生（28 人）の各教室、中学生全員（87 人）が
集うランチルームで提供された。メニューはドイツ風漬物「ザワークラウト」、
野菜スープ「アイントフ」、ウインナーソーセージ、バウムクーヘンなどで、児
童・生徒らは、ザワークラウトとソーセージをパンに挟んで食べるなどの工夫を
し、普段の給食との違いを楽しんだ。

グンツェルさんは「日本では食事の前に『いただきます』と言い、ドイツでは
『おいしく召し上がれ』という意味で『グーテン・アペティート』と言います。
皆さん楽しくいただきましょう」と話し、児童・生徒らに交じって食事を楽しん
だ。

給食調理員の池田智子さんは「本来のザワークラウトは生のキャベツの酢漬け
だが、給食では生野菜を出せない。キャベツをゆでて作ったり、スープの味付け

を塩コショウで（日本人に合うように）調整したり、予算が限られる給食ならではの工夫が必要だったが、スタッフ間で検討を重ねて仕上がった」と振り返る。

また、副学園長の菊川靖子さんも「子どもたちが海外の文化に触れる貴重な機会になった」と笑顔で話す。



ドイツとの交流踏まえバリアフリー推進

キャンプ参加者の車いす利用を想定したトレーラーハウスも

【調査ホストタウン】

福岡県 田川市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ドイツ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

田川市は 2018 年 8 月、ドイツ・ハンブルグで「ドイツ車いすスポーツ連盟フェンシング部門」と、東京パラリンピックに向けた事前キャンプの実施について合意し、福岡県を加えた 3 者間で正式調印を交わした。同市は 1960 年代から「日独スポーツ少年団国際交流事業」を行い、50 年以上にわたってドイツとの交流を続けてきた実績から、16 年 6 月にドイツを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、キャンプ誘致活動を進めてきた。

キャンプ誘致活動と並行する形で、市は「パラリンピック選手はさまざまな障害などによる移動上・利用上の制約があるため、より一層の配慮が必要」（市経営企画課）と、市民の障害者への理解を求める研修事業や田川市総合体育館のバリアフリー改修も始めた。

17 年 3 月～18 年 11 月までに 3 回行われた「心のバリアフリー研修」では、「2004 アテネパラリンピック」競泳銅メダルの杉内周作さんが、自身の日常生活やパラリンピック出場経験などを、ユーモアを交えて講演したほか、富士通マーケティング戦略本部・内田奈津枝さんが、公共施設・交通インフラの整備や心のバリアフリーを推進することで共生社会を実現する政府の取り組み「ユニバーサルデザイン 2020」を紹介した。さらに、同市国際交流員のアネマリー・グンツェルさんによって、ドイツの文化も紹介された。

この研修には市職員約 110 人と市民 51 人が参加。講演の後にはアイマスクを着用し視覚障害者の体験や車いすを使った肢体不自由の体験学習も行われた。

同時期、田川市総合体育館のバリアフリー化にも着手。玄関の自動ドア化や車いすでも利用しやすい多目的トイレの整備（おむつ替えスペースや子ども用便座の設置含む）、車いすで利用できるシャワーブースなど施設内の各所を改修し、18 年 3 月に完成した。

同年 11 月～12 月には、市内小学校児童に向けた「ボッチャ」の体験教室も開催した。ボッチャは、古代ギリシャの玉投げをルーツとし、ルールは氷上のカーリングに似たパラリンピックの正式種目競技で、伊田小学校（4 年生）、大浦小学校（3 年生）、金川小学校（4 年生）の 3 校で行われた。

これらの取り組みが評価され、19 年 8 月には「先導的共生社会ホストタウン」に認定された。

「心のバリアフリー研修」は 20 年度も引き続き行い、7 月まで市職員向けと市民向けの計 2 回を予定する。また、例年開催する全小学校でのブラインドサッカー研修会や、小学生や障害者らとともにまちなかのバリアフリー点検を行ったマップの作成など、ハード・ソフト両面からバリアフリーを実践し、「障害者スポーツ推進都市『福祉のまち たがわ』の実現」を目指している。





ドイツとベラルーシの車いすフェンシング代表が合同合宿

練習の合間に園児との交流も

【調査ホストタウン】

福岡県 田川市

【イベント開催日】

2019/9/8

【相手国・地域】

ドイツ、ベラルーシ

【イベント参加者】

交流＝田川市立幼稚園の園児ら約 70 人

【競技】

車いすフェンシング

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ドイツとベラルーシの車いすフェンシング代表チームが 2019 年 9 月 8 日～15 日、田川市を訪れ「IWAS ワールドチャンピオンシップ」（韓国・慶州、9 月 17 日～23 日）に向けた大会直前の合同キャンプを行った。田川市は 16 年 6 月にドイツを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、19 年 4 月にはベラルーシを相手国として追加登録されている。

今回の合同キャンプには、ドイツチーム 6 人（男性 5 人、女性 1 人）、ベラルーシチーム 9 人（男性 3 人、女性 6 人）のほか、コーチや審判員、理学療法士も同行した。キャンプのうち 2 日間は、日本人選手の加納慎太郎さんと福田勇士（つよし）さんも加わり、合同練習を行った。

台風 15 号の影響で、選手団は当初 7 日に予定していた到着が 8 日となったが、翌 9 日には練習を開始した。14 日までの毎日、固定された車いす上の力強い上半身から繰り出される「エペ（突き）」や「サーブル（斬りと突き）」、「フルーレ」（攻撃と防御の繰り返し）など、選手らの熱気あふれる練習が繰り広げられた。

練習の合間には、田川市立幼稚園の園児ら約 70 人が会場を訪れた。マスクをかぶった園児らが、デモンストレーション用の剣で選手の胸を突くなどして交流を楽しんだ。ベラルーシの選手の中にはロシア語しか話さない選手もいたが、英語を通じて通訳を繰り返し、コミュニケーションを図った。

滞在期間中には、ベラルーシパラリンピック委員会と田川市、福岡県の 3 者間で「東京 2020 パラリンピック競技大会」の事前キャンプを田川市で行うことについての調印が交わされた。



英・車いすラグビー選手が事前キャンプ

北九州空港で歓迎セレモニー、児童と交流も

【調査ホストタウン】

福岡県 北九州市

【イベント開催日】

2019/10/8

【相手国・地域】

英国

【イベント参加者】

【競技】

車いすラグビー

【調査場所】

北九州市立若松体育館武道場ほか

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

東京パラリンピックに出場する英国の車いすラグビー代表チームが 2019 年 10 月、北九州市で第 1 回事前キャンプを行った。北九州市は同年 3 月、英国車いすラグビー連盟と合宿受け入れについての覚書を締結、同年 6 月には東京オリンピック・パラリンピックの共生社会ホストタウンに登録されている。

英国の車いすラグビー代表チームは、選手 10 人とトレーナーやスタッフら 19 人で構成され、10 月 8 日に北九州空港に降り立った。到着ロビーでは英国旗小旗を持った多くの市民らが出迎え、選手紹介やキャプテンのあいさつなどの歓迎セレモニーが行われた。

北九州市では、02 年に「世界車いすバスケットボール選手権大会（ゴールドカップ）」が開催されたことを記念して、03 年に国際的な車いすバスケットボール競技大会として「北九州 チャンピオンズカップ」を創設。車いす競技の開催を通じて「（北九州市が）バリアのないまちづくり」をするイメージ向上にもつなげていることから、「車いすラグビー」英国代表のキャンプ誘致にこぎ着けた。

英国車いすラグビー代表チームは、北九州市での練習に先駆け、松ヶ枝北小学校や西小倉小学校での学校交流や、水環境館での「ラグビー・ワールドカップ 2019」ウェールズ対フィジー戦のパブリックビューイング観戦などを通じて、市民と交流した。

チームのトレーニングは「障害者スポーツセンター アレアス」で 2 日間にわたって行い、九州栄養福祉大学の学生らが考案したメニューによる食事の提供や市民との記念撮影なども行われた。

前回「リオデジャネイロパラリンピック」で 5 位だった英国代表は、19 年 8 月のヨーロッパ選手権で優勝した強豪で、東京大会でのメダル獲得が期待される。



トランポリンのコロンビア代表選手ら事前キャンプ

トランポリン競技団体や市民らと交流

【調査ホストタウン】

福岡県 北九州市

【イベント開催日】

2019/12/2

【相手国・地域】

コロンビア

【イベント参加者】

徳力小学校 6年生約 80 人、広徳小学校 4年生約 80 人、公開練習＝市民約 150 人

【競技】

トランポリン

【調査場所】

折尾スポーツセンターほか

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

トランポリン競技コロンビア代表の選手らが 2019 年 12 月、東京オリンピックに向けた事前キャンプのために北九州市を訪れ、トランポリン競技団体や市民らと交流した。北九州市は 16 年 1 月、タイを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録され、19 年 6 月には英国とコロンビアを相手国として追加した。また、19 年 4 月にはコロンビア・オリンピック委員会との間で、合宿受け入れに関する覚書を締結している。

19 年 12 月に北九州市を来訪したのは、カティッシュ・エルナンデス選手とアンヘル・エルナンデス選手。2 人は姉弟の関係にあり、いずれもトランポリン競技南米大会で金メダルを獲得している。2 人は合宿に先立って、市立徳力小学校の 6 年生約 80 人、広徳小学校の 4 年生約 80 人と交流し、子どもたちからは「ビエンベニードス（ようこそ）」の掛け声で出迎えられた。

小学校に帯同した福岡県トランポリン協会理事長の河村和浩さんが子どもたちに、演技の出来栄えや技の難しさ、跳躍時間の長さなどで評価されるトランポリン競技の概要を説明。「子どもたちは、（選手の）飛ぶ高さや技の凄さにただ驚いてあっけにとられていた」と振り返る。折尾スポーツセンターでも市民向けの公開練習が行われ、市民約 150 人が観覧した。

河村さんは、トランポリン教室「スペースウォーク」も運営している。「トランポリン競技の普及がそれほど進んでいないコロンビアでは、2 人はフロンティアのような存在で、地元でトランポリン教室を主宰していると聞いた。子どもたちへの教え方の違いや運営手法など、お互い参考になった」と話す。

カティッシュさんとアンヘルさんはその後、着物を着て小倉城散策や「旦過市場」、皿倉山山頂などの市内視察も楽しんだ。



テコンドーの強豪・タイ代表チームが事前キャンプ

テコンドー道場との交流や小学校訪問も

【調査ホストタウン】

福岡県 北九州市

【イベント開催日】

2019/9/16

【相手国・地域】

タイ

【イベント参加者】

古前小学校全校児童＝89 人、修多羅小学校 4 年生＝24 人

【競技】

テコンドー

【調査場所】

北九州市立若松体育館武道場ほか

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

ロンドン、リオデジャネイロオリンピックでメダルを獲得したテコンドーの強豪・タイ王国の代表チームが 2019 年 9 月、事前キャンプのため北九州市を訪れ、市内テコンドー道場との交流や小学校訪問などを行った。北九州市は 16 年 1 月、タイを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

北九州市を訪れたタイ代表チームは、女子 49 キロ級世界ランク 1 位でリオデジャネイロオリンピック銅メダルに輝いたパニパク・ウォンパタナッキ選手を筆頭に、女子 53 キロ級世界ランク 4 位で 2019 年世界テコンドー選手権 4 位のパンパナ・ハンスージン選手、男子 54 キロ級世界ランク 10 位で 2017 年世界テコンドー選手権銅メダルのラムナロン・サウォキィハリ選手、元韓国代表でタイ代表のヘッドコーチを務めるチェ・ヤン・ソクさんと理学療法士らを加えた計 6 人。

北九州空港での歓迎セレモニーや、北橋健治北九州市長表敬訪問の後、「テコンドー小倉道場」を訪れ、交流練習や懇親会（9 月 18 日）、演舞披露・公開練習（同 19 日）などの交流事業を行った。同道場は世界ジュニアテコンドー選手権などに選手を派遣する実力派の道場で、韓国・釜山の道場との交流や「リトル釜山フェスタ」（山口県下関市）での演舞披露など、地元に着した活動も行っている。

道場代表の森松裕也さんは「タイ王国の選手は、韓国の一流選手とは異なる動きをする。一つ一つの動きが新鮮に感じ、テコンドー競技の奥深さを改めて知ることができた。人間性も穏やかで独特の空気感があった」と振り返る。キャンプの後半は、体育館に近い古前小学校の全校児童（89 人）や修多羅小学校の 4 年生（24 人）らへのテコンドーの説明や実技披露、児童らによる競技体験も行い交流を図った。



ルーマニア柔道チームが事前キャンプ

海岸沿いのランニングを含めみっちり練習 児童・園児らとの交流も

【調査ホストタウン】

福岡県 福津市・古賀市

【イベント開催日】

2019/11/25

【相手国・地域】

ルーマニア

【イベント参加者】

【競技】

柔道

【調査場所】

リーパスプラザこが（古賀市生涯学習センター）

【調査日】

2020/03/18

【補足情報】

ルーマニア柔道チームの事前キャンプが 2019 年 11 月 25 日～12 月 1 日、古賀市と福津市で行われた。キャンプ受け入れは 18 年 11 月、19 年 3 月、同 8 月に続き 4 回目となる。両市は 18 年 11 月、ルーマニア柔道連盟との間で東京オリンピックに向けた事前キャンプ受け入れに関する合意を締結、19 年 2 月には、同国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

ルーマニア柔道チーム一行は、19 年 11 月 22 日～24 日に行われた柔道国際大会「グランドスラム大阪 2019」に出場した後、25 日に福岡に到着した。選手 15 人と監督、コーチの一行は福岡空港到着後、国際線ターミナルに飾られている博多祇園山笠土居流の舁（か）き山「決戦大江山」展示の前で記念撮影を行った。

キャンプでは、早朝練習、トレーニングなどの自主稽古、合同練習の出稽古に日々打ち込んだ。自主稽古は古賀市武道館、福津市の福間武道館、津屋崎武道館で行ったほか、古賀市健康文化施設「クロスパルこが」でもトレーニングを積んだ。

古賀市・福津市は玄界灘沿いで海が近く、早朝練習は福間海岸で行った。選手らは海岸沿いのランニングをはじめ、足腰を鍛えるため砂浜で走り込みや、選手を 1 人、2 人と背負って走ったり、抱えて後ろ向きに歩んだりと練習を重ねた。ルーマニアでは海の近くでの練習は無いといい、海沿いを走るのは新鮮だったという。

出稽古は福岡大学柔道部と沖学園柔道部と行った。福岡大学柔道部はブルガリア柔道チームなどの受け入れ実績もあり、練習もスムーズに進んだ。

26 日は「いろどり真愛保育園」を訪問し、園児らと交流を図った。園児らは和太鼓や歌をお披露目して選手たちを歓迎。園児からの「普段何をしていますか？」という質問に選手たちは「柔道の練習をしています」「仕事をしていま

す」と答え、「お仕事は何ですか？」の質問には「国の警察官です」「軍人です」「学生です」など、それぞれ答えた。

28日は福津市立津屋崎小学校を訪問。教室を訪れた選手たちに児童らは、「ブナ・ズィア！（こんにちは！）」とルーマニア語であいさつし、ルーマニア国旗の手旗で歓迎。児童から手作りのメダルもプレゼントした。選手らは授業見学のほか、体育館で子ども山笠の山を昇（か）く練習風景を見学したり、教室で一緒に給食を体験したりした。各教室ではサインを待つ児童の長い列ができた。選手たちの帰り際には、校舎外の校門まで集まって手を振って見送る児童らの姿があった。

古賀市と福津市の担当者は「今回のキャンプでは、選手らが学校へ訪問する一方、市内で選手を見かけた子どもたちが声を掛けてくれるなど、とてもうまくいった。練習においては、選手たちは母国ではそれぞれの仕事や生活があるが、キャンプではみっちり柔道の練習に打ち込める。受け入れ側の柔道の層も厚いので、練習相手も豊富で刺激になっている。天気にも恵まれた」と振り返る。





「スポーツフェスタ」に金メダリスト谷本歩実さんら

ルーマニア柔道選手も登場、交流深めるレセプションも

【調査ホストタウン】

福岡県 福津市・古賀市

【イベント開催日】

2019/11/30

【相手国・地域】

ルーマニア

【イベント参加者】

スポーツフェスタ＝延べ 530 人

【競技】

柔道

【調査場所】

リーパスプラザこが（古賀市生涯学習センター）

【調査日】

2020/03/18

【補足情報】

福津市と古賀市は 2019 年 11 月 30 日、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流活動の一環として、「古賀・福津スポーツフェスタ 2019」と「ルーマニア国ナショナルデーin 福岡県」を共同で開催した。両市は 18 年 11 月、ルーマニア柔道連盟との間で東京オリンピックに向けた事前キャンプ受け入れに関する合意を締結、19 年 2 月には、同国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

「古賀・福津スポーツフェスタ」は、福津市のイオンモール福津ノースコートで開催。オリンピックによるトークショーや競技体験コーナー、ルーマニア柔道チームに贈る折鶴を折る企画などを行い、延べ 530 人が来場した。

当日は原崎智仁福津市長のあいさつでスタート。ステージでのトークショーでは、まずルーマニア出身で福岡県在住、体操選手としての経験もある富永フロレンティナさんがゲストで登場した。「ルーマニアを知ろう！」をテーマに、ルーマニアの紹介をはじめ、福岡に来て感じた母国との文化の違い、ルーマニア料理の紹介、ルーマニアで盛んなスポーツなどについて話をした。会場では、ルーマニアの菓子「サラミ・デ・ビスケット」300 食も試食提供した。

続いて、04 年アテネオリンピック、08 年北京大会の柔道 63 キロ級で金メダルを獲得した谷本歩実さんが、オリンピックゲストとして登場した。谷本さんは、ルーマニア柔道ナショナルチームの大石公平総監督とは、大石監督の父・大石康さんの道場で一緒に練習した縁もあり、今回ゲストとして招かれた。谷本さんは「オリンピックに学ぼう！」をテーマに、オリンピックでの経験や、スランプに陥った時の脱出方法などを話した。ルーマニアの柔道選手チームもステージに登壇し、大石監督から観客へこれまでの取り組みを話した。トークショーでは畳も用意し、ルーマニア選手と組み、谷本さんが得意技を披露する一幕もあった。

このほかステージでは、ジェイコム九州が取材した、古賀市・福津市のホストタウンとしての取り組みについて、ルーマニア柔道連盟との調印式の様子や選手たちが子どもたちと稽古する様子、ルーマニア料理を給食に取り入れた古賀市小野小学校などを VTR で紹介した。ステージ周辺イベントでは競技体験コーナーと

して、「トライ！ラグビー」「1/10 ロングパット」「競技用車いす体験」を用意し、全て体験すると記念品を進呈するスタンプラリーも行った。記念品には福岡ホストタウンステッカー、ルーマニアバッチを用意。参加者からは「ルーマニア選手の事を知ることができた」「地元がホストタウンという事をはじめて知った」などの声が上がった。古賀市と福津市の担当者は「古賀市・福津市のホストタウンの取り組みを広く周知する機会になった」と振り返る。

さらに同日夜、ルーマニア国の独立を祝うナショナルデーの記念レセプション「ルーマニア国ナショナルデー in 福岡県」を、福津市内のレストランで開催した。

福津市の和太鼓チーム「福間龍神太鼓」によるオープニングセレモニーの後、ルーマニア、日本両国国歌を斉唱。東京からタティアナ・ヨシペル駐日ルーマニア全権大使も来訪し両国の交流についてあいさつした。参加者は市民ボランティアや福岡在住ルーマニア出身者など全部で 70 人を超えた。会場では、チョルバ（スープ）などのルーマニア料理がビュッフェ形式で提供された。歓談の間には、ルーマニア、福岡それぞれの土産を用意し、抽選会も開催。ルーマニアの柔道選手らは和太鼓を体験し、「福間龍神太鼓」チームと一緒に即興演奏も披露した。選手たちは初めての和太鼓を非常に楽しんだ様子で、「和太鼓を買って帰りたい」と言うルーマニアの選手もいたという。

最後に大石監督がサポートへの感謝を述べ決意表明し、市民ボランティアから大石監督へ、津屋崎小学校児童と同日昼に行われたスポーツフェスタの参加者が折った必勝祈願の折鶴を贈った。

古賀市と福津市の担当者は「市民ボランティアの皆さんと選手たちとの距離が縮まった。ホストタウンのご縁を、ルーマニアとの今後の関係継続につなげたい」と期待を込める。



ルーマニアを紹介する市民向け講座

ルーマニア料理教室など通じ関心高まる

【調査ホストタウン】

福岡県 福津市・古賀市

【イベント開催日】

2019/6/25

【相手国・地域】

ルーマニア

【イベント参加者】

公開講座 1回＝9人 2回＝8人 3回＝12人 「GO！いく フェスタ」＝約50人

【競技】

【調査場所】

リーパスプラザこが（古賀市生涯学習センター）

【調査日】

2020/03/18

【補足情報】

ルーマニアを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている古賀、福津両市は 2019 年度、市民にホストタウン交流活動について知ってもらうための公開講座をそれぞれ実施した。

古賀市は 19 年 6 月から 3 回にわたり、コスモス市民講座「さあ 2020！オリンピックを盛り上げよう」を「リーパスプラザこが(古賀市中央公民館)で開催した。第 1 回は 6 月 25 日で、「オリンピックを学ぼう」をテーマに行った。参加者は 9 人で、スライドを使って東京オリンピック・パラリンピックについて説明したほか、古賀市・福津市のルーマニア柔道チーム事前キャンプの取り組みについて紹介した。また、オリンピックの歴史についてクイズ形式で出題も行った。

第 2 回は、「ルーマニアと交流しよう」をテーマに同年 7 月 30 日に開催した。参加者は 8 人で、福岡県在住でルーマニア出身の富永フロレンティナさんを講師に招き、ルーマニアの文化や風習、食についてスライドを交えて講話した。

第 3 回は同年 8 月 27 日、テーマは「ルーマニア料理を作ろう」だった。12 人が参加し、リーパスプラザこがの調理室で、フロレンティナさんにルーマニア料理を習った。メニューは「チョルバ・デ・ペリショアレ（肉団子のスープ）」と「サルマーレ（ロールキャベツ）」。作った料理は参加者でテーブルを囲んで食事した。参加者のアンケートでは、「ルーマニア料理を初めて食べた。和気あいあい楽しく料理できた」「ますますルーマニアが好きになった。料理も家で作ってみたい」「まだ続きがあればいいなと思った」などの感想があった。古賀市担当者は「講座を開いたことで市民の関心が高まり、市民ボランティアの増加につながった」と話す。

福津市は 20 年 2 月 1 日に開催した「GO！いく フェスタ」で、フロレンティナさんを講師に招き、公開講座「ルーマニアってどんなところ？」を実施。約 50 人の市民が参加した。フロレンティナさんはルーマニア柔道チーム来日時の通訳をしており、講座ではルーマニアやルーマニア柔道チームのこと、日本との関わりについて話をした。会場ではルーマニアの菓子「サラミ・デ・ビスケット」の試食コーナーのほか、ルーマニアの歴史や文化、柔道チームを紹介するパネルブー

スも設けた。参加者からは、「ルーマニアの事を知らなかったが関心を持てた」「ガイドブックでは分からないことが分かった」「文化の違いが面白い」などの声があった。福津市の担当者は「市民向けのルーマニア講座で市民に関心を持ってもらい、ルーマニアという国を親しんでもらう機会となった」と話した。



「ニュージーランドフェア」を開催

終了後にラグビーW杯パブリックビューイングも

【調査ホストタウン】

佐賀県・佐賀市・嬉野市

【イベント開催日】

2019/9/21

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

約 2000 人

【競技】

【調査場所】

佐賀県文化課

【調査日】

2020/02/06

【補足情報】

「2019 NEW ZEALAND FAIR（ニュージーランドフェア）」が 9 月 21 日、ショッピングモール「モラージュ佐賀」（佐賀市巨勢町牛島）1 階「モラージュプラザ」で開催された。このイベントは、佐賀県とニュージーランドのさまざまな文化を体験できる交流プログラムとして、2018 年に続き 2 回目の開催となった。

当日は、ニュージーランドのワインやラムチョップ、マヌカハニーやクッキーなどの飲食、オーガニック用品や雑貨を販売したほか、革細工のワークショップを行った。トークショーには 2 人が登壇。ニュージーランド出身で浄土宗「西光寺」（佐賀市本庄町末次）住職の作田スティーブン法道さんが「ニュージーランド文化」をテーマに、ニュージーランド発のコーヒーショップ「COFFEE SUPREME JAPAN（コーヒーシュプリームジャパン）」店主・松本浩樹さんがニュージーランド移住中のカフェカルチャーに魅了された経験から「ニュージーランドのカフェとカルチャーについて」、それぞれ話した。

ステージイベントとして、鹿島市に 1300 年前に創建されたと伝えられる治水鎮護の神社「五の宮神社」（鹿島市森）の獅子舞に続き、ハカグループによるニュージーランドの民族舞踊「ハカ」を披露。「ハカ」は、マオリ族の戦士が戦いの前に手をたたいて足を踏み鳴らし自らの力を誇示し相手を威嚇する舞踊で、現在では国賓や海外からの渡航者を歓迎する舞として披露するほか、ラグビーニュージーランド代表「オールブラックス」が国際試合前に舞う民族舞踊として知られている。

会場にはニュージーランドの風景写真の展示やニュージーランド好きが集まる団体「キオラキウイ」による情報コーナーを設け、留学情報に興味深く話を聞く参加者もいた。会場アンケートに答えた人へのプレゼントとして、ニュージーランドの最高峰「マウントクック」とミルクセーキを掛け合わせて名付けた竹下製菓（小城市小城町池の上）のアイス「ミルクック」を配布した。

このイベントは、佐賀県文化課スタッフ 3 人と運営委託業者 2 人で運営し、トークショーゲスト 2 人、ニュージーランドワイン提供スタッフ 3 人、雑貨やクッキー、ラムなどの販売ブーススタッフ 6 人、獅子舞演舞 4 人、ハカの披露 5 人が

運営に関わり、約 2000 人の来場があった。イベント終了後、同会場では「ラグビー・ワールドカップ 2019」のプール B 初戦、ニュージーランド対南アフリカ共和国戦のパブリックビューイングも行われた。

事業を担当した佐賀県文化課の執行まゆさんは「子どもたちのハカグループと楽しそうに触れ合っているのが印象的だった。ニュージーランドの文化だけでなく、日本文化の魅力を発信する文化プログラム『beyond2020』に合わせ佐賀の獅子舞披露を加えたが、初めて見たという方も多く、地元の文化を改めて知ってもらえたのは良かった」と振り返った。



音楽イベントに オランダのアーティスト招く

オランダ文化を範に音楽通じた地域交流目指す

【調査ホストタウン】

佐賀県・佐賀市・嬉野市

【イベント開催日】

2019/7/7

【相手国・地域】

オランダ

【イベント参加者】

幅広い世代の約 130 人

【競技】

【調査場所】

佐賀市立富士生涯学習センター「フォレストふじ」

【調査日】

2020/02/06

【補足情報】

「SAGA SEA 2019 古湯の響き～夏の記憶～」が 2019 年 7 月 7 日、佐賀市立富士生涯学習センター「フォレスタふじ」（佐賀市富士町古湯）で開催された。佐賀県は特産品の有田焼を通じてオランダとの交流があったことから、16 年 1 月に県がオランダを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、17 年 7 月には佐賀市も追加でホストタウン登録された。

このイベントは、オランダの文化的多様性を範とし、さまざまな国のアーティストとの交流を目指し、2016 年から 2 年間開催した音楽イベント「オランダ JAZZ in SAGA」を 2018 年から音楽交流の幅を広げた新たな事業「SAGA SEA 佐賀とオランダの『再会』が 22 世紀の文化をつくる」の一環で、1976 年からオランダで開催されている「ノース・シー・ジャズ・フェスティバル」のような、音楽を通じて地域に根付いた交流を目指すイベントとして開催された。

当日は、「EUROPEAN JAZZ TRIO（ヨーロピアン・ジャズ・トリオ）」メンバーでピアノを担当する Marc van Roon（マーク・ヴァン・ローン）さんとコントラバスを担当する Frans van der Hoeven（フランス・ファン・ダー・ホーヴェン）さんの 2 人によるコンサートが行われ、幅広い世代の約 130 人が集まった。2 人は代表曲「ブラックバード」などを披露した。また、ライブに先立ち、「さが 21 世紀県民の森」（富士町藤瀬）周辺で開いたワークショップ「聴診器と森散歩～古湯の森を聴く～」には子ども連れなど若い人を中心に約 25 人が参加。聴診器を片手に森を散策し、樹木の音に耳を澄ました。

このイベントは、福岡出身のコントラバス奏者で作曲家の松永誠剛さんを音楽ディレクターに佐賀県文化課スタッフ 3 人と「エフエム佐賀」スタッフ 2 人の計 6 人が中心となって運営した。事業担当した佐賀県文化課の島内智子さんは「2018 年 4 月にこの事業に関わる前まではオランダの音楽を知らなかった。日本になじみの薄いアーティストを招いたが、想像していたジャズと違い、新しい文化の発見にもつながったと感じた。来年度も本事業が予算化できれば、同じアーティストをまた招き、コンサートを続けたい」と話す。



「フィンランドウィーク」で伝統文化など体験

「フィンランドの文化に触れる 9 日間」テーマに

【調査ホストタウン】

佐賀県

【イベント開催日】

2019/11/23

【相手国・地域】

フィンランド

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

佐賀県立博物館ほか

【調査日】

2020/02/06

【補足情報】

佐賀県とフィンランドの伝統文化などを体験できる交流プログラム「**FINLAND WEEK**（フィンランドウイーク）」が、2019年11月23日から12月1日まで、佐賀市内の「岡田三郎助アトリエ」、映画館の「シアター・シエマ」、佐賀県立生涯学習センター「アバンセ」で開かれた。佐賀県は19年2月、フィンランドを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、このプログラムもホストタウン交流活動の一環で、「フィンランドの文化に触れる9日間」をテーマに開催された。

メイン会場の「岡田三郎助アトリエ」では、「北欧スタイルに囲まれた部屋でフィンランドを体感してもらおう」と北欧雑貨「**Fika**（フィーカ）」（福岡県筑後市）が協力し、雑貨や食器などの販売、育児パッケージの展示、写真スライドショーの上映、関連図書を展示するミニライブラリーを行った。

また、文化体験イベントとして、写真家・津田直さんが11月23日、「フィンランドの自然や文化について知ろう」と題した講演会とスライドショーを開催。ワークショップとして、11月23日・24日・30日にファブリックパネル作り、11月30日・12月1日に伝統工芸「ヒンメリ」作り、11月24日・12月1日に神埼の伝統玩具「尾崎人形」の絵付けを行った。アトリエの外ではフィンランド発祥のサウナ体験、佐賀県立博物館内の「**cafe TRES**（カフェ・トレス）」ではシナモンロールとフィンランドコーヒーの販売を行った。

「シアターシネマ」では、フィンランドの魅力を伝える映画上映とトークショーを行い、11月24日はフィンランド在住の通訳コーディネーター・こばやしあやなさんをゲストに、フィンランドのヘルシンキを舞台に3人の日本人が地元の人たちと交流する日々を描いた日本映画「かもめ食堂」を上映、12月1日はフィンランド出身で九州ルーテル学院大学准教授・坂根シルックさんをゲストに「オンネリとアンネリのふゆ」を上映した。

「アバンセ」ではフードコーディネーター・ノウシアイネンさんを講師に、カレリアンピーラッカ、サーモンのクリームスープ、ムナボイの伝統料理、シナモンロール、クリスマスパイの伝統菓子を作る料理教室が行われた。ほかに、フィン

ランド大使館の協力で、幼児の世話に必要なグッズや衣類がセットになったフィンランド発祥の育児スターターキット「ベビーパッケージ」の展示、観光庁の協力で、フィンランドのオーロラなどの風景写真やパンフレットの展示を行った。

このイベントには 9 日間で 5200 人が来場した。フィンランドをテーマにしたイベントは九州では少ないためか、「一度行ってみたい」と福岡や長崎、熊本などからの来場者もあり、特に女性が多かった。

事業担当した佐賀県文化課の執行まゆさんは「私たちからの PR 以上に反応が良く、事前の問い合わせも多かった。特に料理教室は人気だった。フィンランドとのつながりはあまりないと思っていたが、日本と考え方が近いところが多いと感じた。来年も予算確保できたら可能な限り規模を大きくして開催したい」と話す。





ベトナム陸上チームのキャンプを誘致

姉妹友好都市関係や活発な交流の歴史踏まえ実現

【調査ホストタウン】

長崎県・長崎市・佐世保市・島原市・諫早市・大村氏・壱岐市・雲仙市・南島原市・川棚町

【イベント開催日】

2019/6/23

【相手国・地域】

ベトナム

【イベント参加者】

【競技】

陸上競技

【調査場所】

長崎県立総合運動公園

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

長崎県は 2019 年度、東京オリンピックに向けたベトナム陸上ナショナルチームのトレーニングキャンプを誘致した。同県は、国内外からのスポーツ大会やスポーツ合宿を積極的に誘致することを目的に 16 年 3 月、「長崎県スポーツコミッション」を設立し、同年 6 月には長崎市、佐世保市、島原市、諫早市、大村市、壱岐市、雲仙市、南島原市、川棚町とともに、ベトナムを相手国とした東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。

長崎県は、安土桃山時代から江戸時代初期まで続いたご朱印船貿易の基地となり、貿易相手のひとつだったベトナムとの交流の歴史がある。その縁から、02 年には長崎ベトナム友好協会が設立され、県内民間企業がベトナムへの教育支援を行うなど交流が盛んに行われている。また、18 年に県はベトナム中部にあるクアンナム省と姉妹友好提携を結んだ。

東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて各国のナショナルチームが日本でのトレーニングキャンプを行う計画があったことから、長崎県スポーツ振興課と県スポーツコミッションが中心となってベトナムのチームを誘致した。16 年 4 月には、ベトナム文化スポーツ観光省スポーツ総局のチャン・ドゥック・ファン総局長ら 6 人が来日し、長崎市の小江原射撃場、長崎市民総合プール、県立総合体育館等、諫早市の諫早市中央体育館、大村市の体育文化センター「シーハットおおむら」などを視察した。

その結果、400 メートル 9 レーンのトラックと天然芝のフィールドを備え、2 万人以上を収容可能なスタジアムを備える長崎県立総合運動公園（諫早市）での陸上チームのトレーニングキャンプ開催が浮上、チームの受け入れを諫早市にも打診し、市が快諾したことからキャンプの実施が決まった。

ベトナム陸上代表チームのキャンプは、19 年 6 月 23 日～7 月 22 日に実施されたが、長崎県はオリンピック本番直前に行われるキャンプの誘致も計画しており、諫早市での実施をベトナム側に働きかけている。



ベトナム陸上チームがトレーニングキャンプ

「設備が素晴らしい」と評判も上々

【調査ホストタウン】

長崎県・長崎市・佐世保市・島原市・諫早市・大村氏・壱岐市・雲仙市・南島原市・川棚町

【イベント開催日】

2019/6/23

【相手国・地域】

ベトナム

【イベント参加者】

【競技】

陸上競技

【調査場所】

長崎県立総合運動公園

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

ベトナムの陸上ナショナルチームが 2019 年 6 月 23 日～7 月 22 日の日程で、諫早市内にある県立総合運動公園を会場に東京オリンピックに向けたトレーニングキャンプを行った。長崎県では、県のほか長崎市、佐世保市、島原市、諫早市、大村市、壱岐市、雲仙市、南島原市、川棚町がベトナムを相手国とした東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されており、今回のキャンプは県と諫早市が共同で受け入れ、トレーニングのほか県内の観光や諫早市民との交流の場も設けた。

ベトナムから来日したのは陸上短距離で五輪出場を目指すナショナルチームのメンバー。6 月 22 日に宿泊先の観光ホテル八千代（天満町）に到着したコーチ 2 人と選手 8 人は長崎県の関係者らから出迎えを受けた。

23 日午後、公園内にある陸上競技場補助競技場で歓迎セレモニーが行われ、スポーツ飲料などの差し入れ品が贈られ、チームの代表者があいさつした。記念撮影を済ませた選手らは早速トレーニングを開始。練習スケジュールは月曜～金曜の 7 時 30 分～11 時と 15 時～17 時 30 分の時間帯で設け、トラックのある陸上競技場補助競技場のほか、スタジアムに隣接するマシンなどを備えた施設などでもさまざまなトレーニングに励んだ。7 月からは役員 1 人と選手 1 人も加わり合わせて 12 人となり、19 歳～29 歳の選手 9 人（男性 2 人、女性 7 人）が練習を重ねた。

トレーニングキャンプ終了後、ベトナムの選手からは「施設の設備が素晴らしい」という声が出ていることから、「評判は上々で手応えを感じている」と笑顔を見せる諫早市スポーツ振興課の浦川晋輔さん。「五輪開催直前に行われるキャンプでも諫早を候補地に挙げてもらえればうれしい。選手らとまた再会できれば」と期待を込める。



キャンプ中のベトナム陸上選手らが日本文化を体験

浴衣姿を SNS にアップする選手も

【調査ホストタウン】

長崎県・長崎市・佐世保市・島原市・諫早市・大村氏・壱岐市・雲仙市・南島原市・川棚町

【イベント開催日】

2019/6/30

【相手国・地域】

ベトナム

【イベント参加者】

【競技】

陸上競技

【調査場所】

諫早市アスタースクエア、弓道場、天祐寺

【調査日】

2020/03/19

【補足情報】

東京オリンピック出場を目指して諫早市内でトレーニングキャンプを行っているベトナム陸上ナショナルチームの選手らに日本古来の文化に触れてもらおうと2019年6月30日、「おもてなし DAY」が開催された。

このイベントは「いさはや国際交流センター」などが企画。長崎ウエスレヤン大学でもベトナムからの留学生を多く受け入れており、2週間ほど前に同様の交流企画に参加していることから、当日は留学生4人と教員1人が案内役として選手らの異文化体験をサポートした。

諫早市内にある古民家を改装した写真スタジオ「アスタースクエア」に集合した選手ら10人は浴衣の着付けを体験。初めて目にする和服を見た選手らからは「きれい」と声が上がった。写真撮影も行われ、自らのスマートフォンで撮影した浴衣姿を早速SNSにアップして家族や友人に披露する選手の姿もあった。

浴衣に身を包んだ選手らはスタジオの近隣を散策した。その後、諫早市弓道場では市弓道協会による弓道の練習風景を見学。静寂に包まれた中、弓道協会のメンバー5人が28メートル離れた的に矢を射る姿を、息をのんで見つめていた。

次に訪れた天祐寺では、諫早天満太鼓のメンバーが軽快で力強いバチさばきと躍動感あふれる演奏を披露した。選手らもバチを握り、手ほどきを受けながら太鼓を打ち交流を深めた。諫早天満太鼓は、市内外のイベントに年40回ほど出演。大会にも出場するなど精力的な活動を行っている。

諫早市スポーツ振興課の浦川晋輔さんは「観光地を周遊するより実際に日本の文化に触れ体験してもらいたいと企画した」と話し、選手らは終始にこやかにイベントを楽しんでいたことから「諫早の和の文化の魅力を感じてもらえたのでは」と手応えを見せた。



インドネシア バドミントン協会関係者が来訪

オリンピック直前キャンプ地を事前視察、詳細協議も

【調査ホストタウン】

熊本県

【イベント開催日】

2019/7/23

【相手国・地域】

インドネシア

【イベント参加者】

【競技】

バドミントン

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

インドネシアのバドミントン代表チームが東京オリンピック直前キャンプを熊本県で行うに当たり、インドネシアバドミントン協会と熊本県庁国際スポーツ大会推進局、熊本県バドミントン協会は 2019 年 7 月 23 日～25 日、現地の視察と協議の場を設けた。

インドネシアから来県したのは、同国バドミントン協会（PBSI）幹部のアフマド・ブディハルト事務局長とバムバン・ルディアント国際担当部長、夫婦で共にバルセロナオリンピック・シングルス金メダリストであり、インドネシアの英雄であるスシ・スサンティさんとアラン・ブディクスマさんの 4 人。一行が熊本空港に到着したのが 7 月 23 日の午後 8 時だったため、実質的なスケジュールは翌日からとなり、24 日は午前 10 時から、トレーニングジム施設となる再春館製薬所体育館「サクラリーナ」を視察した。ここはコート 8 面を備えるバドミントン専用施設で、キャンプのメイン会場となる。午後からはフィットネスセンターとなる県立総合体育館と熊本テルサでトレーニングジムやプールを視察した。インドネシアからの視察は 2 回目で、一行にとってはその環境の良さを再確認する場となった。

その後、キャンプに向けた協議をザ・ニューホテル熊本で行った。会議の主な内容は、キャンプの人数や宿泊場所、練習やトレーニングの場所の確認のほか、各施設内の動線や備品などの詳細についてもチェックが行われた。その後、インドネシアバドミントン協会の 4 人は 25 日朝、熊本空港からインドネシアに帰国した。

インドネシアと日本、熊本県は以前から交流があり、その多くは個人的なつながりに端を発する。県バドミントン協会副会長で、陣内貴美子（バルセロナ）、宮村愛子・宮村亜貴子（アトランタ）、松田治子（シドニー）、前田美順（北京、ロンドン）を育てた工藤勇参さんの引率で日本ジュニア代表選手団をインドネシアに何度も派遣するなど、スポーツ分野での例は特に多かった。

18 年 11 月 9 日には、インドネシア・バリ州知事一行を迎え、国際交流促進に関する覚書（MOU＝Memorandum of Understanding）の調印を交わした。その内容

は、熊本県とバリ州との農業、観光分野における交流を深め、地域活力の向上を期待するものだった。これが現地の人々を後押しし、インドネシアと熊本県の人間関係がさらにつながっていった。インドネシアでホテル業を営む熊本県出身のスリヤワン・洋子さんは自らキーパーソンとなり、宿泊業をはじめとする観光分野、農業分野でも個人レベルからの交流が盛んで、これらが熊本県のホストタウン交流事業の原動力にもなっている。



バドミントン・ジュニア選手をインドネシアに派遣

現地開催のジュニア国際大会に出場 遺跡訪問で交流も

【調査ホストタウン】

熊本県

【イベント開催日】

2019/10/13

【相手国・地域】

インドネシア

【イベント参加者】

【競技】

バドミントン

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

熊本県と県バドミントン協会は 2019 年 10 月、インドネシアバドミントン協会の招待により熊本県のジュニア選手を現地に派遣した。出場大会は「カフィーノ スーパーリーグ ジュニア大会 2019」で、インドネシアのマゲラン市で開催された。熊本県選手団の現地での滞在に必要な費用は全てインドネシア側が負担した。台風 19 号の影響で予定より 1 日遅れの 10 月 13 日に出発、到着翌日すぐ試合というハードな行程となった。

インドネシアにとってバドミントンは国技であり、その人気は大変高い。現地の子どもたちにとって、バドミントンはインドネシアン・ドリームそのもの。頑張れば無料で育成を受けられ、将来大金をつかむことも夢ではない。これを体現するのが、子どもたちの指導者でもあるインドネシアの国民的英雄、スシ・スサンティさん。インドネシアの女子シングルスメダリストで、バルセロナで金、アトランタで銅を獲得し、最近はその半生が映画化されるほどの人物だ。

一方、熊本県のジュニア選手団の派遣に合わせ、10 月 17 日には東京オリンピック事前キャンプに関わる詳細合意書への署名が行われた。インドネシアからバドミントン協会ブディハルト事務局長、ジュニア選手団の派遣団長を務める県協会の水野理事長が署名し、ジュニア大会のメディアセンターで記者会見が行われた。

10 月 19 日には、他の海外から参加したチームと共に世界最大の仏教遺跡で世界遺産のボロブドゥール遺跡を訪問し、交流を深めた。10 月 21 日の帰国時、ジャカルタ～羽田便がエンジントラブルにより、離陸後にジャカルタに引き返すトラブルが発生し 7 時間遅れの帰国となったが、全員無事に全行程を終えることができた。

熊本県チームの大会での戦績は 4 戦 1 勝 3 敗。予選敗退という結果になったものの、4 チーム全てが何とか 1 勝をもぎ取った。熊本のジュニアはそれぞれ「大変いい経験をさせてもらった」「相手の反応速度に驚かされた」「型にはまっていた自分に気付いた」「学校の仲間に今回のことを必ず伝える」と目を輝かせたという。

水野修身理事長は「ジュニア世代で出場する国際舞台は貴重な経験になる。今後の競技力向上に生かしてほしい。東京オリンピック後も交流を続けていく」とした。



「国際スポーツイベントイヤーズ」でおもてなし機運

キャンプ地誘致活動などで得られた成果を復興につなげる

【調査ホストタウン】

熊本県

【イベント開催日】

【相手国・地域】

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

熊本県は、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流活動の一環として、2019年と2020年を「国際スポーツイベントイヤーズ」に位置付け、県全体で「おもてなし」機運を盛り上げる一方、グローバルな人材育成を進めている。同県は2016年1月にインドネシアを相手国とするホストタウンに登録されたが、同国はイスラム教徒が多いことから、特に「ハラル」に関する正しい知識と食文化に関する情報発信を目指している。

また、熊本地震からの復興事業とも関連させ、熊本県内へのキャンプ誘致活動などから得られる成果・効果を大会終了後も継続したレガシー（遺産）となるよう取り組んでいる。19年に熊本で開催された女子ハンドボール世界選手権大会とラグビー・ワールドカップには、ハンドボール約2000人、ラグビー約500人のボランティアが集結し、熊本地震を受けて復興する熊本の姿を国内外に向けてしっかり見てもらう情報発信の場となった。

一方、ラグビー・ワールドカップ2019では、フランス・トンガ、ウェールズ・ウルグアイ戦の試合が、えがお健康スタジアム（熊本県民総合運動公園陸上競技場）で行われたことから、2万8000人の観客を試合終了後2時間以内に帰ってもらうオペレーションが求められ、その対応に県、市が奔走することになった。具体的なオペレーションは、近隣の駅等で効率的に観客に移動してもらうため、定位置の通訳スタッフと自由に行動できる通訳スタッフを別々に配置した。タクシー協会に協力を仰ぎ、会場付近にタクシーを集め、外国人客の行先確認などに通訳が柔軟に対応できるようにした。海外の人を乗せることに不安を抱いていたタクシー運転手にとっても、その経験は自信になったという。

事前に進めていたホテルや店舗などへの施設内、ホームページ双方に多言語化を含め、国際スポーツイベントイヤーズのテーマのひとつとされていた「インバウンド観光の推進」も一定の成果が得られたという。

このほか、熊本での試合を経験したウェールズの政府代表事務所は、ラグビーを契機とした県内企業や団体との交流を希望したため、県が関連企業や団体との橋渡しを継続することになった。その結果、スポーツをスタートラインに、経済

も含めた国際交流を促進する第一歩を踏み出すことが可能になり、「国際スポーツイベントイヤーズ」のレガシー（遺産）につながるものとなった。



元在モンゴル大使、ありのままのモンゴルを紹介

「カラコルム建都 800 年・モンゴル展」の一環

【調査ホストタウン】

大分県 宇佐市

【イベント開催日】

2020/1/24

【相手国・地域】

モンゴル

【イベント参加者】

宇佐市民ら 46 人

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/01/24

【補足情報】

元在モンゴル日本国特命全権大使の清水武則さんの講演会が 2020 年 1 月 24 日、大分県宇佐市の大分県立歴史博物館で行われた。モンゴル民主化の時代に両国の懸け橋となった外交官が、同国の歴史、大分や日本とのつながりなどに触れ、ありのままのモンゴルを紹介した。宇佐市は 18 年 12 月、モンゴルを相手国とした 2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されている。

講演会は同館で同日に始まった「カラコルム建都 800 年・モンゴル展」の一環。「モンゴルに捧げた外交官生活 40 余年」と題し、同館講堂で 13 時 30 分から約 2 時間にわたり、聴講無料で行った。

清水さんは大分県九重町出身。別府鶴見丘高から中央大法学部を経て外務省入省後、1977（昭和 52）年にモンゴル国日本大使館に勤務した。16 年の退官までモンゴル在勤は 4 回に及び、15 年には同国の最高章に当たる「労働功労赤旗勲章」を授与された。現在は千葉工業大、中央大商学部で教授職を務める。

講演は、清水さん自身が撮影した写真を使ったスライドを交えて進められた。初めに大分モンゴル親善協会の活動や大分県知事の同国訪問、宇佐市のモンゴルホストタウン登録など 1990 年代から活発化した大分県とのつながりを説明し、「日本の県の中で最も古くから交流を進めてきた」と述べた。

チンギス・ハーン、ノモンハン事件、シベリア抑留、独立などのキーワードで歴史をたどり、社会主義国から親日国家へと変わった背景も解説。1990 年の民主化の際は「民衆デモの熱を肌で感じた」と振り返り、「真の独立と民族の自由を求めて大きな変革の嵐の中にある。今こそ日本が先頭に立ってこの国を支援すべき」と外務省に打電したエピソードを紹介した。

モンゴルの国民性は「誠実で積極的」と分析。「日本からの多額の ODA 支援への感謝を忘れることなく、阪神淡路大震災（1995 年）、東日本大震災（2011

年）、熊本・大分地震（2016 年）の際は発生直後から即座に支援を始める動きがあった」ことを明らかにした。

観光客数の指針となる、両国間の訪問数については入管統計を示して解説。来日数 2 万 9401 人（2018 年度）に対し、モンゴルへの訪問数が 2 万 990 人（同）にとどまっていることを受け、「モンゴルの人口は約 330 万人。割合からしても互いの興味の持ち方には差がある」と言及。「あの素晴らしい大平原や遊牧文化を味わってもらえるよう、日本人たちにモンゴルの魅力を宣伝していきたい」と意気込みを見せた。

会場には、宇佐市内外から 46 人が参加した。宇佐市の 60 代主婦は「2 時間があっという間だった。清水さんの話を聞いてモンゴルに行ってみたくなった」と笑顔を見せた。大分市から参加した 50 代の男性会社員は「国同士は近いのに知らないことが多かった。今後はモンゴルというワードに敏感になって、いろいろ情報を吸収していきたい」と話した。同館学芸調査課の石川優生さんは「モンゴルで尽力し、愛された清水さんを地元の大分の人に知ってもらえて良かった」と振り返った。





モンゴル代表チームの強化キャンプ中止

複雑な思いながら感染リスク考え決断

【調査ホストタウン】

大分県 宇佐市

【イベント開催日】

2020/2/24

【相手国・地域】

モンゴル

【イベント参加者】

選手 10 人と監督・コーチ 4 人（予定）

【競技】

テコンドー

【調査場所】

宇佐市役所

【調査日】

2020/02/26

【補足情報】

新型コロナウイルスによる感染の拡大を受け、大分県宇佐市は東京オリンピック・パラリンピックに向けて 2020 年 2 月 24 日から市内で予定していたモンゴルのテコンドー競技代表チームの強化キャンプを中止した。一行は韓国経由で日本入りし約 2 週間滞在する予定だったが、選手の健康や今後の交流を踏まえ、2 月上旬に宇佐市側から申し入れた。

宇佐市は 18 年 12 月、モンゴルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録。19 年 9 月 30 日に大分県、宇佐市、モンゴル国テコンドー連盟が事前キャンプ地を宇佐市とする協定を締結し、選手 10 人と監督・コーチ 4 人が宇佐市入りする予定だった。

3 月 9 日まで、宇佐市総合運動場武道場で練習を行うほか、スポーツ少年団との交流、第 13 回全日本テコンドー選手権大会（2 月 24 日、中津市）の参加、日本人選手を招いた合同練習などをスケジュールに組んでいた。キャンプ費用は 710 万円で、内訳は宇佐市が 360 万円、大分県が 350 万円を負担。モンゴル選手が五輪の参加枠を獲得した場合は、2020 年 5 月と 7 月にも実施する内容だった。

宇佐市文化・スポーツ振興課によると、今回のキャンプでは、けがをした際の応急用品やアイシング設備、飲料などを準備するほか、食事の際も果物を多く摂取するというモンゴル食も取り入れる予定だった。このほか、前回の合宿でモンゴルの選手が内臓疾患で入院した際に約 30 万円を負担した経験から、インバウンド用の保険に加入する方針を固めていた。

同課の横光浩三さんは「前回の合宿の経験を生かす形で万全の受け入れ態勢で臨んでいただけない複雑な思い」とする一方、「モンゴルを出国して、韓国の仁川空港で乗り換え日本に着いたというだけでも感染するリスクがある」と冷静に捉える。「不要不急の外出が懸念されつつある現時点で、オリンピックを目指す選手を受け入れるのは宇佐市のイメージを考えても難しい。寂しく残念だが、英断だったと振り返れるようにしたい」と話す。

宇佐市とモンゴル国との交流は 11 年の「双葉山生誕 100 周年記念事業」が契機。同市出身の「昭和の大横綱・双葉山」の偉業をたたえる施設「双葉の里」の「横綱手形コーナー」に同国出身で双葉山を尊敬する横綱・白鵬の手形を設置したことに始まる。17 年 7 月にはモンゴル選手と全日本テコンドー協会の強化指定選手による合同キャンプも開催。地域との親交を深めるなどしてきずなを強めてきた。



柳ヶ浦高校、モンゴルとの交流深める

宇佐市が交流を始めて 10 年目、生徒受け入れも

【調査ホストタウン】

大分県 宇佐市

【イベント開催日】

【相手国・地域】

モンゴル

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

学校法人吉用学園・柳ヶ浦高校

【調査日】

2020/03/10

【補足情報】

学校法人吉用学園・柳ヶ浦高校（宇佐市江須賀）は 2019 年度、モンゴルからの留学生受け入れを通じ、同国との交流を本格化させた。同校が所在する宇佐市は、昭和の大横綱「双葉山」の生誕地であることから、相撲の盛んなモンゴルとの交流を目指し、18 年 12 月にモンゴルを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。同校のモンゴルとの交流も、その流れに乗ったもので、同校は「今後も宇佐市とモンゴルの絆を強める役割を果たしていきたい」としている。

同校によると、18 年秋、同校柔道部の小倉昌昭監督と知人関係にあったモンゴル柔道ナショナルチームコーチのダバニャム・アルタンゲレルさんとの関係から交流が始まった。

日本への留学経験があるダバニャムさんはモンゴル政府でも要職にあり、自身の経験からモンゴルの教育水準を引き上げていくためにも日本語能力を持つことが重要だと主張していた。同校はそうしたダバニャムさんの考えに共感し、語学留学制度新設の道を模索。モンゴル側と話し合いを重ね、19 年 4 月から現地のミライ日本語学校で研修を受けた生徒を受け入れることを決めた。藤久保茂己事務長は「とにかくモンゴル側の熱意がすごかった。半年の間にスピーディーに、スムーズに留学の話がまとまった」と振り返る。

初年度となる 19 年度は男子 7 人が入校。韓国の留学生らとともに寮生活を送りながら、日本人生徒と一緒に授業を受けている。部活動にも積極的で 4 人がバスケットボール部、3 人が柔道部に属しているという。

留学生は宇佐市のモンゴルの「顔」としても活躍。19 年 9 月、東京オリンピックモンゴルテコンドー代表チームの宇佐強化キャンプ協定締結式に訪れたダンバダルジャー・バッチジャルガル駐日大使と宇佐市役所で交流。20 年 1 月にグリーンパークホテル宇佐で開かれたモンゴル関係者懇親会にも参加した。

学校側のモンゴルとの親交も密度を増しており、19年11月にエルディミンサン校、12月にはダラバン大と姉妹校提携を締結。20年4月からは日本語や異文化理解の授業を組み込んだインターナショナルコースを開設する。20年度は新たに男子5人と女子2人をモンゴルから受け入れるほか、香港、中国からも新たに留学生を迎え入れるという。「(留学生が)卒業までに日本語能力検定試験2級が取得できるようにサポートしたい。その後、大学進学を目指してもらいたい」と近藤健基事務次長は話す。

このほか宇佐市と連携する形で、宇佐市総合運動場の武道場で使っていた2面分の畳約100枚をモンゴルに寄付する事業にも協力。畳は現在、同校で管理しており、運送代となる寄付金約40万円を集め、20年4月中旬に船便で送るという。

20年は宇佐市がモンゴル国との交流を始めてから10年目に当たる。同校では「昨年から一気に交流が進んだ。今後も宇佐市と連絡を取り合うなどしてさまざまな関連イベントに協力していきたい」としている。

宇佐市とモンゴル国との正式交流は11年にスタート。双葉山の偉業を称える施設「双葉の里」の「横綱手形コーナー」に同国出身の横綱・白鵬の手形を設置したことに始まった。その後も「友好交流絆宣言」を取り交わしたほか、17年7月にモンゴル選手と全日本テコンドー協会の強化指定選手による合同キャンプを開催している。





サンドーム日向でソフトボール教室

トヨタ自動車女子ソフトボール部が指導

【調査ホストタウン】

宮崎県 日向市

【イベント開催日】

2019/12/14

【相手国・地域】

米国、トーゴ

【イベント参加者】

市内の小学生ソフトボール 8 チームと高校生 2 チームの約 100 人（男女比は 6 : 4）

【競技】

【調査場所】

サンドーム日向

【調査日】

2019/12/14

【補足情報】

宮崎県日向市の全天候型運動施設「サンドーム日向」で 2019 年 12 月 14 日、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン事業の一環として、同市主催のソフトボール教室が開かれた。

この教室では、愛知県豊田市に本拠のあるトヨタ自動車女子ソフトボール部の投手・江渡祐希さん、内野手・黒澤花菜さん、元捕手で現在はチームのアナリストを務める馬場今日子さんの 3 人が指導に当たった。同部は創部 72 年で、チーム名は「レッドテリアーズ」。昨シーズンは日本女子ソフトボールリーグ 1 部で優勝、これまで全日本選手権で 5 度の優勝を誇る。

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、日向市はアメリカ合衆国とトーゴ共和国のホストタウンとして登録され、サーフィンとソフトボールで交流事業を実施する。ホストタウン交流事業を担当する日向市総合政策課の松岡雅仁さんは「オリンピック・パラリンピック等経済会協議会に協力を仰ぎ、日本代表選手を招くために準備をしてきたが、急きょ代表合宿へ招集されるという事情があり、かなわなかった。ただ今回の 3 人もリーグ優勝を果たすなど、トップで活躍している。子どもたちには一流の人が持つ技術、精神力などを肌身で感じてほしい」と話す。

この日は、市内の小学生ソフトボール 8 チームと高校生 2 チームの約 100 人が集まった。開会式では十屋幸平・日向市長が「今日はトップリーグ、レッドテリアーズの皆さんと交流し、将来はトップリーグやオリンピックで活躍できるような選手になれるよう頑張ってください」とあいさつした。

ランニング、ストレッチの後、黒澤さんが打撃の基本姿勢について説明し、江渡さんの投げた球を実際に打った。飛距離の出たボールを見て、参加者から「うわー」という歓声が上がった。馬場さんから「みんな打球じゃなくて、バッティングの方を見てね」と言われ、笑いも起こった。

内・外野手、捕手、投手のポジションに分かれての守備、投げ方の指導も行われた。コーチ役の 3 人が「いいよ」「頑張れ」と声を掛け、時には手取り足取り、子どもたちを指導した。最後に投手の江渡さんと各チーム代表の打者による「一騎打ち」が行われた。緊張した様子でバッターボックスに入った選手たちは、真剣なまなざしでバットを振り、安打も出た。

小学 6 年の男子は「江渡投手からいろいろなアドバイスをもらった。江渡投手との勝負ではヒットが打ててとても気持ち良かった。中学生になる前にいい経験ができた」、小学 5 年の女子は「守備で『三角形を意識』することを知った。試合に生かしたい」、高校 1 年の女子は「黒澤選手は力を入れずに楽にバッティングしていた。とてもあこがれる。カッコいい」と話した。

黒澤さんは「レベルが高く、みんなが素直に言うことを聞いてくれたのが印象的。いつか、プレーする姿を見るのが楽しみ」、馬場さんは「質問してくれた子が多くとてもやりがいがあった。来年もまた来たい」、江渡さんは「日向市は男の子が多かったのが驚いた。投手の指導をしたが、レベルが高く、捕手が球を取れない場面もあった。指導して自分自身も学べたことがあり、とても楽しかった」と感想を口にした。





お倉ヶ浜海岸で「日向ビーチスポーツフェス」

オリンピックらが児童を指導

【調査ホストタウン】

宮崎県 日向市

【イベント開催日】

2019/6/2

【相手国・地域】

【イベント参加者】

参加者＝小学生から大人まで約 220 人 観客＝約 800 人

【競技】

【調査場所】

お倉ヶ浜海岸

【調査日】

2020/02/03

【補足情報】

宮崎・日向市のお倉ヶ浜海岸で 2019 年 6 月 2 日、2020 東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン事業の一環として「日向ビーチスポーツフェス」が開かれた。主催は日向市、日向市教育委員会など。

地域活性化に関する方針「サーフタウン日向基本構想」で「新たなビーチレジャーの展開」を模索する同市。昨年に引き続き、全長 4 キロの砂浜を持つお倉ヶ浜を活用して、小学生を対象にバレーボール、サッカー、ラグビーのビーチスポーツ体験教室が開かれた。一般向けにヨガ、サーフィン、ビーチアルティメット、ビーチテニスの体験も行われた。参加者は小学生から大人まで約 220 人に及んだ。

バレーボールは元日本代表で北京五輪出場の山本隆弘さんと V・プレミアリーグに属する「パナソニックパンサーズ」のメンバー、サッカーは元日本代表の巻誠一郎さん、加藤ともえさん、ラグビーは日本代表を輩出する社会人チーム「パナソニックワイルドナイツ」の選手が指導に当たった。

小学生はグループに分かれて順番に 3 種目全てを体験。イベント開始前に小雨が降った影響で砂浜は湿っており、どの種目も砂に足を取られることなく行うことができた。バレーボールの指導者には延岡市出身の今村貴彦さんもあり、子どもたちは低くセットされたネットを前に、スパイクやレシーブに挑戦した。サッカーはミニゲームなどで、パスやドリブルの技術を学び、ラグビーでは楕円のボールに慣れるため、列に並んで前から後ろへパスを送る練習などを行った。

ステージではアスリートによるトークショーも行われた。子どもから「どうしたらそんなに身長が高く、体を大きくすることができますか？」「競技が上手になるコツはありますか？」などの質問が飛んだ。選手らは「牛乳をたくさん飲むこと」「毎日ご飯をたくさん食べること」や「毎日コツコツ練習すること」などと答えていた。

同イベント担当の日向市観光交流課の葉上耕大朗さんは「去年は雨で屋内での実施となったが、今年は曇天の下ではあったものの、予定通りビーチで開催することができた。オリンピックや日本代表をはじめとした一流選手に大勢お越しいただき、子どもたちの刺激になったと思う。『何事にも挑戦してみよう』という気持ちを持ったり、一生懸命一つのことに取り組む姿勢を学んだりしていたように見えた。市民の皆さんにビーチの多様な使い方を知ってもらい、東京オリンピックの正式種目になったサーフィンを初体験した方もいた。海の素晴らしさ、地元の自然の豊かさにも気付いてくれたことと思う」と話す。



トーゴと「ダンス DE 国際交流」

ジャンベのリズムに乗せてレッスンも

【調査ホストタウン】

宮崎県 日向市

【イベント開催日】

2019/8/31

【相手国・地域】

トーゴ

【イベント参加者】

小学生から高齢者まで約 50 人

【競技】

【調査場所】

日向市文化交流センター

【調査日】

2020/02/03

【補足情報】

宮崎県日向市は 2019 年 8 月 31 日、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン事業の一環として、西アフリカのトーゴ共和国との交流イベント「ダンス DE 国際交流 With TOGO」を日向市文化交流センターで開いた。

日向市にある「東郷町」と「トーゴ」の語感が似ていることから、ホストタウンとなった同市。2019 年 3 月に地元小学校、中学校、高校でトーゴの音楽とダンスでの児童・生徒と交流を図ったことに続き、今回が 2 回目となる。

前回もパフォーマンスを行ったアーティストのアカクポ・コッフィ・パスカルさん、トーゴ本国にある日本友好団体の「太陽の友」代表のセナ・ロロジュジ・ダケさんが来日した。日向市で活動するアフリカンバンド「B-BROSS（ビーブロス）」とパスカルさんがダンスパフォーマンスを披露した。ダケさんがスクリーンで動画などを見せながら、西アフリカ、トーゴの文化や人々の暮らしについて話し、アフリカンダンスの歴史について説明した。

パスカルさんによるレッスンも行われ、小学生から高齢者まで参加者約 50 人がジャンベのリズムに合わせて、体全体を使ってダンスを楽しんだ。一方、日向の伝統芸能「ひょっとこ踊り」を「橘ひょっとこ踊り保存会」が披露し、参加者と共にパスカルさんもまねしながら一緒に踊った。ジャンベに興味を持った子どもたちが教えてもらいながら、実際にたたいてみる場面も見られた。

参加した 30 代の女性は「今まで見たことのないダンス、触れたことのない楽器、トーゴの方との交流があり楽しかった。直に感じられて良かった」、40 代の男性は「講演会よりこのような体験型イベントのほうが楽しいと思った」と話す。「橘ひょっとこ踊り保存会」副会長の高橋安光さんは「リズムや振りがアフリカンダンスとは違うので、ひょっとこ踊りには苦戦しているようだったが、パスカルさんのダンスのうまさには驚いた。お互いの地域に伝わる踊りで交流することができ、楽しい時間を過ごせた」と話す。

ホストタウン交流事業を担当する日向市総合政策課の松岡雅仁さんは「東郷とトーゴというだじゃれのようなところから始まったホストタウンとしての関わりだが、『アフリカの笑顔』という愛称がある国だけに、トーゴの人は明るく、フレンドリー。アフリカのダンスは激しいと感じたが、参加者が楽しそうに踊っている姿を見て、言葉の壁は簡単に越えられるということを実感した」と話した。



女子バレーボール・迫田さおりさんが講演

中学生バレー部員に向け講演と実技指導

【調査ホストタウン】

鹿児島県 鹿屋市

【イベント開催日】

2020/1/20

【相手国・地域】

タイ

【イベント参加者】

地元の中学生バレーボール部員

【競技】

バレーボール

【調査場所】

鹿屋市立体育館

【調査日】

2020/01/20

【補足情報】

鹿屋市は 2020 年 1 月 20 日、市立体育館（鹿屋市向江町）で元女子バレーボール日本代表の迫田さおりさんによる講演とバレーボール教室を開催した。2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けた同市のホストタウン事業の一環で、迫田さんは集まった地元の中학생バレーボール部員らに自身の体験を語った後、コートで実技指導に当たった。

同市は 2017 年 12 月にスロベニアを相手国とするホストタウンに登録、18 年 4 月にはタイのホストタウンとしても追加登録された。スロベニアは女子柔道、タイは女子バレーボールのナショナルチームの事前合宿を受け入れる一方、市民に異文化理解を促すプログラムを実施するとともに、日本人オリンピック・パラリンピアンとの交流事業も実施している。

迫田さんは鹿児島市出身で、日本代表としてはオリンピックのロンドン大会とリオデジャネイロ大会に出場し、特にロンドン大会では銅メダル獲得に大きく貢献した。講演では自身の中学時代を振り返り、「始めはレシーブも苦手で、仲間に迷惑をかけていた。でも仲間やコーチの支えがあったからこそ続けられた。コーチからの厳しい言葉に反発することもあったが、根気よく続けた」と当時の思い出を語った。

中学生との質疑応答では「バレーボールがうまくなるコツは？」という質問に対し、「うまくなるには練習しかない。自分一人ではできないこともあるが、（バレーボールは）チームスポーツなので仲間とのコミュニケーションを大事にしてほしい。ラリー中にはどんなことでもいいから声を出して」とアドバイスした。「ジャンプ力を高めるには？」との問いには、「まず 100 回、全力でジャンプしてみる。全力で毎回飛んでほしい。そうすれば 101 回目には 1 センチ伸びるはず」と語り、「試合前の緊張をほぐすには？」との問いには「声を出すといい。緊張した自分も楽しんで」と励ました。

鹿屋市がホストタウンを務めるタイ女子バレー代表についても、「タイ代表は何年もメンバーがあまり変わらないチーム。だからこそコミュニケーションがよく取れていて、レシーブからのコンビバレーがとてもうまい。速攻を確実にやっ

てくる」と現役時代を思い出しながら語った。併せて、東京オリンピック・パラリンピックの見方にも触れ、「選手の目を見てほしい。この選手はどんな目をしてプレーしているか。全員の名前も覚えてほしい」と呼び掛けた。



女子バレー・タイ戦パブリックビューイング

地元民らがホストタウン相手国に声援

【調査ホストタウン】

鹿児島県 鹿屋市

【イベント開催日】

2020/1/12

【相手国・地域】

タイ

【イベント参加者】

地元中学校のバレーボール部員や交流のあった地元民など約 90 人

【競技】

バレーボール

【調査場所】

鹿屋市役所別館

【調査日】

2020/01/12

【補足情報】

鹿屋市役所別館で 2020 年 1 月 12 日、東京オリンピック女子バレーボールアジア最終予選の決勝戦「タイ対韓国」のパブリックビューイングが行われた。同市は 18 年 4 月、にタイを相手国とするホストタウンに登録、タイの女子バレーボール代表チームの事前合宿受け入れに際しては、その「おもてなし役」として、歓迎レセプションでの地元高校生による和太鼓や空手の演舞、鹿屋体育大学女子バレーボール部とのエキシビションマッチ、鹿屋女子高校バレーボール部の公開練習参加などを通じて交流を深めてきた。

このアジア最終予選は、タイ代表のオリンピック初出場を懸けた試合となったため、同市は「ぜひ鹿屋から声援を送ろう」とパブリックビューイングを企画。タイ代表は世界ランキング 14 位で、「オリンピックに出場できる力は十分にある」と地元民からの声もあった。会場には、「鹿屋市は女子バレーボールタイ王国代表を全力で応援します」と日本語とタイ語の両方で書かれた黄色い横断幕を飾り、「VICTORY THAILAND」「Thailand Women's National Volleyball Team」などの文字と日本・タイ国旗があしらわれた応援グッズも配布された。

当日、会場には地元中学校のバレーボール部員や交流のあった地元民など約 90 人が応援に駆け付けた。最後のオリンピック出場枠を懸けた決勝戦は午後 8 時 30 分ごろ（日本時間）から始まり、試合中継がプロジェクターで白い壁に大きく映し出された。相手は世界ランキング 9 位の韓国。結果は、韓国の堅い守りと決定的な攻撃力がタイを圧倒し、韓国が 3 セット全てを制し（第 1 セット＝25-22、第 2 セット＝25-20、第 3 セット＝25-20）、韓国の勝利となった。

同市は「連休中で夜間にもかかわらず、多数の市民の方々が応援に来てくれた。タイ王国女子バレーボールナショナルチームのオリンピック初出場は残念ながらかなわなかったが、バレーボールのキャンプ誘致を機に始まったさまざまな分野でのタイとの交流については、市を挙げて今後も続けていきたい」とコメントしている。



タイのテレビ番組で鹿屋市の魅力を紹介

日本人ナビゲーターがとんかつ店、紅はるかなど紹介

【調査ホストタウン】

鹿児島県 鹿屋市

【イベント開催日】

2019/12/15

【相手国・地域】

タイ

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

【調査日】

2020/03/06

【補足情報】

タイのテレビ番組「SUGOI JAPAN（すごいジャパン）」で 2019 年 12 月 15 日、鹿屋（かのや）市をテーマにした回が放映された。タイで活躍する日本人俳優・佐野ひろさんがナビゲーターを務めるこの番組では、日本各地を旅しながら人気グルメや文化などをタイ語で紹介する。

鹿屋市は、タイとバレーボールを通じた交流があり、18 年 4 月にタイを相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。同市はホストタウン交流事業の一環として、鹿児島放送を通じて鹿屋市を取り上げてくれるようタイのテレビ局にオファーしたことから、放映が実現した。「タイ側から話があったわけではなく、こちらから広告料も払って招聘（しょうへい）した」と、鹿屋市ふるさと PR 課の茶円まゆみさんは話す。

この番組は、佐野さんが鹿児島市内から桜島フェリーに乗り、大隅半島へ移動するシーンで始まる。近づく桜島を見ながら、スマホで「桜島の降灰予想」を紹介。フェリーを降りた後はまず、鹿屋体育大学へと向かった。同大スポーツパフォーマンス研究センターでは、同市がホストタウンを務めるタイ王国ナショナルバレーボールチームの動作分析やサーブパフォーマンスの測定を行っている。佐野さんは「測定アリーナ」を訪れ、並ぶ多数のカメラや同センターのパンフレットを見ながら、どのようにフォームが分析されるのかを紹介した。

次に訪れたのは、ランチタイムには行列ができるほど人気の老舗とんかつレストラン「竹亭」。とんかつ定食を楽しんだ後、佐野さんは「おひげ」で有名な名物店長にインタビューした。「どのくらい店をやっているのですか？」の質問に、「29 歳からやっているのもう 50 年近く」。「おいしいとんかつを作る上で一番大事なことは？」との質問には、「まず素材。うちは鹿屋の豚だけを使う」と店長。併せて、厨房で大きな豚肉をさばく様子も伝えた。

その後、サツマイモ畑に移動し、「かのや紅（べに）はるか」を栽培する農家を訪問。収穫の様子を伝え、佐野さんは 1 株に多くの実が連なるサツマイモを持ち上げた。「このサツマイモをタイで作ることはできる？」との質問に、「火山灰が影響していることもあり、もともとの土質が違う」と、農作業する若者が答

えるシーンもあった。さらに、南橋商事が運営する「さつまいも貯蔵庫」も訪問。農家から直送されたサツマイモを一つ一つ検品する様子や倉庫を紹介した。

次に訪れたのは、18年にオープンした体験型宿泊施設「ユクサおおすみ海の学校」。同施設は120年の歴史を持つ鹿屋市立菅原小学校跡をリノベーションして運営している。かつて校庭だったフィールドで佐野さんを迎えたのは、日本料理家・食育研究家の榎本春幸（なぎ・しゅんこう）さん。「鹿児島のソウルフードといわれる『がね』を作ります」と榎本さん。揚げた姿がカニに似ていることから、鹿児島弁でカニを意味する「がね」や「がね天」と呼ばれる郷土料理で、榎本さんはサツマイモ、ニンジン、ニラ、タマネギを細切りにし、米粉、小麦粉、しょうゆ、水と混ぜ合わせ、油で揚げて佐野さんに提供した。佐野さんは熱々を口にして「うまい」と声に出し、サツマイモの甘さに驚く様子を伝えた。

番組の最後は、海に突き出た島のような岩山上（天神島）に神社が建立されている荒平天神と錦江湾が夕焼けに染まるシーンで締めくくった。

ロケ先の候補や手配をサポートした茶田さんは「ロケ先候補は、ほかにもいろいろ提案したが、最終的にとんかつ竹亭や紅ほのかが選ばれたのは、タイでもとんかつや焼き芋への人気が高まってきているためだという。南橋商事のサツマイモはタイにも出荷されている」とも。

タイでの放送前には、同国内の鹿児島県人会やタイ在住の日本人に番組を告知したという。番組はYouTubeにもアップされ、再生回数は15万回を超えている。



ジャンベが縁でホストタウン登録

ギニアとの 20 年超の交流が背景に

【調査ホストタウン】

鹿児島県 三島村

【イベント開催日】

【相手国・地域】

ギニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

三島村役場

【調査日】

2019/12/17

【補足情報】

三島村は 2016 年 6 月、ギニア共和国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録された。同村が相手国としてギニアを選んだのは、相互の交流が 20 年以上前から続いている実績があるからで、多くの村民はギニアを「親しい国」と感じている。このため、ホストタウン交流事業も全世代の村民が参加する積極的な展開で進んでいる。

ギニアとの交流は 1994 年、ジャンベ奏者であるママディ・ケイタさんが同村を訪れたことがきっかけになっている。ジャンベとは西アフリカで結婚式や祭りの時などに演奏される伝統的な打楽器で、ママディさんは地元でジャンベフォラ（ジャンベの神様）と呼ばれるだけでなく、全米音楽誌「ドラム」が選ぶ世界最優秀奏者に選ばれるほどの偉大な音楽家だった。

ママディさんは三島村に何の伝手もなかったが、「日本の小さな村の子どもたちと交流したい」という思いだけで三島村にやってきた。突然の訪問に多くの村民は驚いたが、すぐにジャンベの魅力に取りつかれた。それ以来、ママディさんは演奏旅行の途上にたびたび三島村を訪れ、三島村からも大山村長はじめ同村役場職員数名がギニアを訪問した。そして 19 年 7 月にはギニアの子供たちの来日も実現するなど、熱い交流が繰り返されている。

ギニアにも足を運んだ大山村長は「ジャンベをするようになって、村の子供たちが自然と他人を理解する心を持つようになった。ジャンベは人と人をつなげる楽器」と自慢げに話す。また、「（ジャンベの演奏は）村の町おこしとして始めたものではなかったが、今となっては（村の）存続の大きなポイントになっていると思う」と語った。

三島村でのジャンベ文化の中心となってきたジャンベスクールは現在校舎修繕工事のため、19 年度は生徒募集を停止していたが、2020 年 4 月に募集を再度開始する予定。そのほか同村内の小中学校の音楽の授業でもジャンベが取り入れられ、多くのこどもたちがジャンベに親しむ生活を送っている。

駐ギニア大使、三島村を訪問

ジャンベの演奏でおもてなし

【調査ホストタウン】

鹿児島県 三島村

【イベント開催日】

2019/12/18

【相手国・地域】

ギニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

三島小中学校ほか

【調査日】

2019/12/18

【補足情報】

松原駐ギニア日本国特命全権大使（大使）と同夫人が、2019 年 12 月 18、19 の両日、鹿児島県三島村を訪問した。同村は 16 年 6 月、ギニア共和国を相手国とする東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録されており、この訪問もホストタウン交流事業の一環として行われた。初日は三島小中学校での交流会や島内視察、島民たちによる歓迎会が催され、2 日目は小中学校の授業見学と港での見送りのジャンベ演奏など様々なプログラムが行われた。

黒島、竹島、硫黄島の 3 島からなる三島村は、人口は 364 人（19 年 12 月現在）の小さな村だが、生い茂る大名竹や島々を囲むサンゴ礁など手付かずの自然が残る。その中で、大使夫妻の訪問は硫黄島が中心となった。同村にジャンベを伝えたギニア出身の打楽器奏者ママディさんも、荒々しい硫黄岳と色とりどりの海を前に「リズムがとめどなく湧き上がってくる」と話したという。

硫黄島の港や学校で熱烈な歓迎を受けた大使夫妻は、児童らの三島村紹介に熱心に聞き入り、子供たちからの質問にも丁寧に答えた。最後には松原大使自らジャンベの演奏に参加する場面もあった。その後は島内を視察し、夜は島民との交流会に出席。ジャンベ演奏グループ「あ、ぼーら」のパフォーマンスを見学するなど島民との懇親を深めた。松原夫妻は次の日も三島小中学校を訪問し、英語の授業などを見学。帰りの船の出発の際にも多くの島民が港に駆け付け、見送りが行われた。

松原大使は「大山村長を中心に、ギニアとさらに交流を深めようという（村民の）強い意志を感じた」と、三島村とギニアの長年にわたるジャンベを通じた交流にもコメントした上で「ホストタウン事業を通してさらに文化面での交流が進んでほしい」と期待を寄せる。また、「こんなにもギニアと交流を図っている人たちがいるということをしっかり伝えていきたい」と今後への意気込みも語った。

島をあげてのホストタウン事業の中心を担う大山村長は「ジャンベを通じた交流で（ギニアから）いただいたものは非常に多い。恩返しの気持ちでとにかく選

手団を全力で応援したい」と言葉に力を込めて語った。村として今後は選手の歓迎会や、陸上競技等での応援を計画している。



ホストタウンサミットでのジャンベパフォーマンス中止

「日本のお祭りと世界の楽器のコラボレーション」を予定

【調査ホストタウン】

鹿児島県 三島村

【イベント開催日】

2020/2/22

【相手国・地域】

ギニア

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

武蔵野大学

【調査日】

2020/03/12

【補足情報】

内閣官房主催のホストタウンサミットは 2020 年 2 月 22 日に開催が予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止になった。三島村は、同サミットのステージで、ホストタウン相手国のギニアから伝えられた打楽器「ジャンベ」のパフォーマンスを披露することになっていた。当日出演予定だったのは、元三島村職員のパーカショニストの徳田健一郎さんと、東京でジャンベの練習会などを開催している NPO 法人「一期 JAM（いちごじゃむ）」のメンバー 6 名を合わせた総勢 7 名。午前と午後 2 度のステージパフォーマンスに加え、ブースにて 3 回のワークショップも実施予定だったという。

準備していたステージプログラムは、「日本のお祭りと世界の楽器のコラボレーション」。北海道のよさこいとトリニダード・トバゴの楽器「スティールパン」との合奏だった。サミットの中止でステージパフォーマンスは中止になったが、後日、都内でパフォーマンスを収録された。一方ブースでのワークショップでは、サミット参加者である自治体職員や一般の方々に ジャンベを体験してもらう予定で、会場にはジャンベを 20 台ほど持ち込んでいた。

今回のイベントの中心に立っていたジャンベパーカショニストの徳田さんは、「ジャンベフォラ（達人）」の称号をもつママディ・ケイタさんより直接指導を受けた弟子の 1 人。もともとは三島村役場の職員だったが、ママディさんと出会い、ジャンベに魅了され単身ベルギーでジャンベを学んだという異色の経歴の持ち主だ。

今後も鹿児島市内や三島村のジャンベスクールで指導を続けるという徳田さん。小学校への出張講師としての活動も引き続き行うとのことで、「ジャンベは島のみんなの楽しみ、息抜きになっているだけでなく、みんなで同じ方向を向けるようにしてくれるもの。自分の持っているジャンベへの熱量を子供たちや日本中のみなさんに伝えていきたい」と語っていた。今回のサミットが中止に終わったことについては、「一般の方に生のジャンベの音に触れてもらう良い機会だったために、非常に残念」とコメント。ただ一方で、「ホストタウン関連で今後も披露の場は多いと思う。ジャンベを日本人にもっと広めていきたい」と意気込んでいた。

「一流アスリートから学ぼう」開催

空手教室やトークなど けがをしない体づくり教室も

【調査ホストタウン】

沖縄県 沖縄市

【イベント開催日】

2019/10/14

【相手国・地域】

ニュージーランド、フランス

【イベント参加者】

子ども約 100 人

【競技】

【調査場所】

沖縄市体育館

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

沖縄市は 2019 年 10 月 14 日、東京オリンピック・パラリンピックの PR イベント「沖縄市から世界へ！一流アスリートから学ぼう」を沖縄市体育館で開催した。同市は 17 年 7 月、ニュージーランドを相手国として東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同国の空手代表選手団の事前合宿受け入れのほか、市民向けの機運醸成プログラムを展開している。このイベントもホストタウン交流活動の一環として企画され、子ども向けの空手教室やオリンピック空手日本代表候補によるトークショー、FC 琉球の小野伸二選手によるトークセッション、FC 琉球のコーチ陣による「けがをしない体づくり教室」などが行われた。

まず行われたのが日本代表候補による空手教室で、約 100 人の子どもが参加した。講師は男子空手形の全日本強化選手である喜友名諒選手、上村拓也選手、金城新選手の 3 人。このうち、喜友名選手と金城選手は沖縄市出身ということもあり、紹介の際はひときわ大きな拍手が沸き起こった。その後、講師による演武披露、礼儀と基本動作確認、形の講習、一斉演武と進み、子どもたちの元気な声が響き渡った。

講習会後は 3 選手によるトークショーを開催した。強さの秘密、ふだん気をつけていること、大切にしている姿勢などについて話した。質疑応答では、子どもが喜友名選手に「ドラゴンボールでは誰が好きですか？」と質問したのに対し、「孫悟空ですね」と答える場面もあった。

続いて行われたのが、FC 琉球の小野伸二選手によるトークセッション。サッカーを始めたきっかけについて聞かれた小野選手は「（静岡出身なので）サッカーが身近にある環境だった。一番大好きなスポーツだった」と答えた。

FC 琉球のコーチ陣による「ケガをしない体づくり教室」では、ストレッチやトレーニング法についてプロの指導を受け、子どもたちも真剣な表情で話に聞き入っていた。教室にはサンチェス選手など現役選手も飛び入り参加し、交流を楽しんだ。

会場内には「事前合宿とホストタウン国応援ブース」も開設。沖縄市ではニュージーランドの空手代表と、フランスの男子バレーボール代表が、それぞれ事前合宿を行う予定となっており、両国への理解を深めるためブースを設けた。正解するとスポンサーグッズがもらえるクイズ形式を交えた両国の紹介パネルも立てられ、親子で見入る姿も多かった。

主催した沖縄市経済文化部観光振興課の上原一輝さんは「空手の喜友名諒選手や FC 琉球のトレーナーと選手などから一流の指導を受けることで、オリンピックだけでなく、スポーツそのものに興味を持ってほしい。特に子どもたちが興味津々だったことが印象的だった。次世代を担う子どもたちが一流アスリートから学べる環境を作って、モチベーションの向上と人材育成につなげていきたい」と話した。



「東京五輪まであと 1 年」応援イベント開催

トークショーに喜友名諒選手、金メダルへの期待も

【調査ホストタウン】

沖縄県 沖縄市

【イベント開催日】

2019/9/1

【相手国名】

【イベント参加者】

幅広い世代と空手ファンなど約 150 人

【競技】

【調査場所】

ミュージックタウン音市場

【調査日】

2020/02/20

【補足情報】

沖縄市は 2019 年 9 月 1 日、東京オリンピック・パラリンピックの PR イベント「沖縄市から世界へ！応援しよう日本代表～東京 2020 オリンピック開催まであと 1 年！～」を市内のミュージックタウン音市場で開催した。同市は 17 年 7 月、ニュージーランドを相手国として東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンに登録、同国の空手代表選手団の事前合宿受け入れのほか、市民向けの機運醸成プログラムを展開している。このイベントもホストタウン交流活動の一環として企画された。

今回イベントは、主に空手をテーマにしたプログラムが中心で、会場には子どもからお年寄りまでの幅広い世代と空手ファンなどを中心に約 150 人が来場した。午前 11 時 30 分、劉衛流龍鳳会門下生による空手の演武でスタート。子ども空手家 6 人がステージ上で元気よく形を披露した。

その後、沖縄市の仲本兼明副市長があいさつ。「（東京オリンピックには）沖縄市出身の喜友名諒選手の出場が期待されている。ぜひ沖縄市出身選手の金メダルを待ち望んでいる。大会まで残り 1 年。ぜひ身近なところでオリンピックを感じていただき、市民の皆さまと共に大いに盛り上げていきたい」と話した。

続いて「東京 2020 オリンピックカウントダウンカレンダー除幕式」が行われた。壇上で仲本副市長と空手の形男子日本代表の喜友名諒選手の 2 人がひもを引き除幕を行った。これに続き、喜友名諒選手によるトークショーを開催。喜友名選手は沖縄市出身ということもあり、再度紹介されると大きな拍手と歓声で迎えられた。

喜友名選手は、空手を始めたきっかけ、世界一になるまでどういうことをしてきたかなどの質問に答えたほか、競技との向き合い方について、「人よりも練習して空手の技術を鍛えることはもちろん、人との出会いやつながりを大切にしていきたい。そして、子どもたちにもそのことを学んでほしい」と述べた。近況については、「365 日、空手ばかりやっていて、毎日練習漬け」とコメント。メダル候補であることから、20 年 8 月以降に「お土産を持って地元に戻ってきくれま

すか？」との問いに「もちろん、バナナケーキ持ってきます」と返し、会場からは笑いが巻き起こった。

トークショー終了後、聖火リレーが沖縄市を通る日付を告知する「聖火リレーメモリアル自動販売機」が、ミュージックタウン入り口付近にある三連幕下に設置される旨も発表され、大型スクリーンで紹介された。

沖縄市経済文化部観光振興課の上原一輝さんは、今回のイベントについて、「たくさんの方々に参加していただけて良かった。沖縄市には喜友名選手のようなトップアスリートがいることを、ぜひ知ってほしい。オリンピックでメダルを獲ってきていただけるのが一番。沖縄市はスポーツで盛り上がっていくんだ、というきっかけづくりになったと思う」と振り返った。



「パラスポーツ体験会」 を開催

車いすバスケット、ボッチャなどの体験を通じて理解呼び掛け

【調査ホストタウン】

沖縄県 沖縄市

【イベント開催日】

2019/11/23

【相手国・地域】

ニュージーランド

【イベント参加者】

【競技】

【調査場所】

コザ・ミュージックタウン 1階音楽広場、コザ・ゲート通り

【調査日】

2019/11/23

【補足情報】

東京パラリンピックの PR イベント「沖縄市から世界へ！パラスポーツ体験会」が 2019 年 11 月 23 日、沖縄市内のコザ・ミュージックタウンやゲート通りで行われた。同日開催された「沖縄国際カーニバル」内のプログラムの一つとして実施された。

開会式直後には、北京オリンピックとリオデジャネイロパラリンピック車いす陸上競技に出場した、地元沖縄市出身の上与那原寛和選手のトークショーを開催。車いす競技を始めたきっかけについて、上与那原選手は「2000 年にバイク事故に遭い、『もう終わったな』と思っていたとき、友人から車いす陸上チームがあるから来てみないかと誘われた。最初はリハビリになれば、くらいにしか思っていなかったが、実際に車いすで走ってみたら風の気持ちよさを感じ、競技をやってみようと思った」と振り返った。

さらに、社会のバリアフリー対応についても言及。「日本ではまだまだ足りないところを感じる。例えばトイレ。車いす用トイレがあっても、そこに行くのに荷物があって通れないこともある。他にも段差があちこちにあったり、車いす専用駐車場に健常者の方が止めていたりすることがある。外国の場合は少しでも困っていると、すぐに 4～5 人集まって何も言わずに手を貸してくれる。もし困っている障害者の人を見たら、ぜひ声掛けだけでもしてほしい。その際『大丈夫ですか？』ではなく『何かお困りですか？』など、障害者もお願いしやすい問かけをしていただければ助かる」とも。

ゲート通りでは「車いすバスケ」「ボッチャ」「車いす 25 メートル走」の体験イベントも実施。それぞれ、親子連れや若者など、幅広い世代が参加し、車いすバスケは約 25 人がフリースローを体験した。30 代女性は「3 球くらい投げただけなのに、とても疲れた。選手はこれをずっとやっていると思うとすごいと思う」と話し、20 代女性は「車いすは思ったよりコントロールしやすかった。ずっと上を向いている姿勢だったので、首が凝りそうだった」と話していた。

ボッチャは約 30 人が参加し、スタッフのレクチャーを受けて競技を楽しんだ。参加した 20 代女性は「ルールそのものは簡単だったので親しみやすかったが、い

ざやってみるとコントロールや微妙な力加減が難しく、繊細な競技だと分かった」と話した。

車いす 25 メートル走は約 50 人が参加。桑江朝千夫沖縄市長と上与那原寛和選手も途中飛び入り参加し、一対一の対決も見られた。上与那原選手は「実際に車いすに乗っていただいて、きつさを感じてほしい。ぜひたくさんの人に体験してもらいたい」と呼び掛けた。

一方の桑江市長もゴール後、息を切らしながら「地面にはいつくばる感覚だった。自分の体の重さを腕で感じた。上与那原選手は沖縄市の名誉市民でもあるので、パラリンピックでの活躍に期待している」とエールを送った。

